

武蔵国分寺跡発掘調査概報

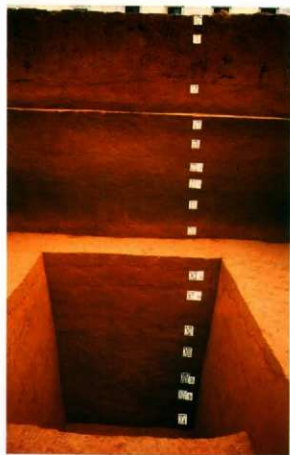
VIII

—北方地区・国際電信電話株式会社国分寺寮建設に伴う調査—

1985年3月

武蔵国分寺遺跡調査会

巻首図版



1. 先土器時代、PC区西小区
南壁土層断面（北から）



2. 縄文時代、SK300 伊部を有する土坑（南から）



3. 歴史時代、調査区（建物部分）
全景（東から）



4. 海嶽葡萄鏡（径5.95cm）

序

武蔵国分寺遺跡調査会は、武蔵国分寺の広域調査を前提に、保存計画策定の為の寺域確認調査を当面の主目的として昭和49年11月に設立され、現在に及んでおります。この間、滝口宏団長を中心とする調査団のご尽力により多大なる成果をあげ、既に「武蔵国分寺遺跡調査会年報」などによりその成果を公にしてきています。

かかる計画的調査の外に、緊急の調査というべき各種土木工事等開発に伴う事前の発掘調査に対応していき、これらが年毎に増大しており調査団の負担も相当なものがあるものと思われます。もとより、地下に眠る文化財——遺構・遺物はそのまま後世へ残し伝えることが最良ですが、公有地化などによる保存策は思うにまかせないところがあります。そこで、工事計画を事前に知らせていただくことによりまして、工事による影響部分が最小限になる様調整・指導が教育委員会によりなされ、工事着工後の発見という不測の事態を避けることができるわけでありまして、発掘調査は工事による影響範囲を主対象として実施され、記録が作成されますが、報告書として公にされることによりまして、記録保存というその責務が全うされるわけでありまして、これらについても既に「武蔵国分寺遺跡発掘調査概報」として公刊し、巻を重ねております。幸い、教育委員会の文化財保護思想の普及、啓蒙活動、ならびに地元、土地所有者の方々や開発当事者の方々の暖かいご理解、ご協力をいただきまして、順調に進捗していますことは喜びにたえません。

今次調査におきまして、長期に亘る発掘・整理におきまして、国際電信電話株式会社ならびに株式会社竹中工務店東京支店より多大なるご協力をいただきましたのをはじめ、多くの方々よりご指導・ご助言・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

本調査による成果は本文のとおりであります。本書が国分寺市域の歴史の解明に少しでも供することができますれば幸いです。広く活用されますことを願ってやみません。

昭和60年3月

調査会長 星野亮勝

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡に於いて昭和48年来実施されている調査の内、北方地区・国際電信電話株式会社国分寺寮建設に伴う調査の成果をまとめたものである。調査に係る費用は、国際電信電話株式会社並びに株式会社竹中工務店東京支店が負担した。
 2. 本跡の名称について昭和60年3月に東京都・府中市・国分寺市の関係者が協議し、「武蔵国分寺跡」と統一することとした。即ち、当調査会発足以来、寺地内については「武蔵国分寺跡」とし、周辺の集落を含めた總称として「武蔵国分寺遺跡」と呼称していた。これには、とすれば寺地内、わけても御蓋地（国指定地など）のみが遺跡（史跡）と考えられがちなことに対する配慮があった。調査会名の由来もここにある。しかるに、現況においては、周辺集落を含めて武蔵国分寺が成り立っていることの認識が定着しつつあり、2つの名称が混在する虞則事態は解消されなければならない時機に達している。そこで、御蓋地並びに寺地内外の遺構群を總称して、「武蔵国分寺跡」とすることとした次第である。なお、寺地外調査区の報告の際は、北方地区、南方地区などと副題を付けることとした。
 3. 調査地は、国分寺市西元町一丁目2448-3・5に所在し、全面積3,305.78㎡、所有者は国際電信電話株式会社である。なお、調査地は、元株式会社竹中工務店の所有にして、同社々員寮建設予定地であり、同社の委託を受けて武蔵国分寺遺跡調査会が試掘調査を昭和51年4月2日より5月29日にかけて実施した結果については武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅰとして公にしている。本書は、試掘調査により得られた出土遺物等についても併せて記述する。
 4. 調査は、武蔵国分寺遺跡調査会が委託を受けて、昭和52年9月1日より昭和54年7月16日まで数次に亘る現地調査が行われ、報告書作成作業は昭和60年3月31日まで武蔵国分寺遺跡調査会事務所で行われた。
なお、本調査は武蔵国分寺遺跡調査会の第51次調査として実施したものである。
 5. 発掘調査は、福田信夫・浅野晴樹が現場を担当し御持和夫がこれを補佐した。
 6. 本書の執筆・編集は、滝口宏・永峯光一・大川清・坂路秀一の監修のもとに、福田信夫・浅野晴樹（VI-1）、福田が加除筆）、富樫雅彦（IV）が分担した。
 7. 出土石器の石質鑑定については、大沢進氏にお願いした。
 8. 発掘調査・報告書作成の過程で次の方々の御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます（順不同、敬称略）。
- 有吉重蔵・上村昌男・広瀬昭弘・重住豊・安孫子昭二・早川泉・西脇俊郎・服部敬史・原田昌幸・新井和之
岡崎完樹・斎藤孝正・守屋雅史・川崎義雄・小田静夫・福田健司・山口辰一・雪田孝・北原実徳・金子裕之
五代吉彦・松田真一・前川 要・山中一郎・府中市遺跡調査会・恋ヶ窪遺跡調査会・日野市落川遺跡調査会
9. 発掘調査ならびに整理作業に参加、協力いただいた方は下記のとおりである。記して感謝の意を表したい（順不同、敬称略）。

発掘（6ヶ月以上の方に限定させていただいた）

小塚俊一・岩崎安三郎・杉原敏之・東郷重実・加藤深・岸本章・村井和秀・三宅一也・高橋一雅・御持和夫・高橋健司・入江涉二・土屋千年・長谷川達・高木昭則・富樫雅彦・西山和成・吉岡秀明・小泉俊己・馬場昌一・小林信一・鈴木節司・松崎伸一・土橋秀一・吉田博行・本田秀生
国際電信電話株式会社（土井孝弘・森本専二・佐藤忠雄・飯塚幸雄・土門信雄）
株式会社竹中工務店東京支店（出川宏一・高瀬春雄・松本正二）
株式会社東和植物園（高橋光夫・高橋信雄・木村伸・菊池浩治・岩崎幸雄・新藤達雄）

整 理

小林幸江・川岸みづ子・斎藤さだ子・桑名俊子・室井敏子・山口啓子・武田清江・岡ミサオ・永沢昭子・鈴木洋子・鈴木節司・小塚俊一・杉原敏之・本田秀生・馬場昌一・吉田博行

現地事務兼整理

木村伸・城所美都・横倉夏美

凡 例

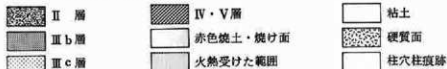
本文

- 遺構は、各遺構毎にはば発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中に於ては、「S I 195住居跡」・「S K 300土坑」の様記述した。その番号は本調査区のみで完結しない。
 SA 細跡・柱穴列 SI 住居跡・工房跡 SX 特殊遺構
 SB 獨立柱建物跡・礎石建物跡 SK 土坑・瓦溜め P 歴史時代ピット
 SD 清跡・清状遺構 SS 集石・配石 PJ 縄文時代ピット
- 瓦の部分名称については、佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」(1972『考古学雑誌』58巻2号所収)での名称によった。
- 瓦の左側端・右側端とは、狭端を上位置にした凹面での左・右を指す。ただし、狭端・広端の不明なものについては、実測図での左・右を指すものとする。
- 文字瓦の銘記方法については、大川清氏の『武蔵国分寺古瓦塚文字考』(1958)と「瓦塚」(1970『新版考古学講座』7巻所収)での分類名称によった。

図面・図版









1. 遺 構

- 遺構配置図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南26.276mに後者がある。また、僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、南北から7°08'03"それぞれ西偏する。
- 断面図表示の数字は水糸レベルで、海拔高を示す。
- スクリーントーンの指示は次のとおりである。



- 住居跡平面図において、一点鎖線は床面が堅固な範囲を示す。
- 歴史時代住居跡遺物分布図における記号は次のとおりである。▲(土師器環・埴)、△(土師器甕他)、●(須恵器環・埴)、⊕(須恵器甕)、■(灰釉陶器)、□(瓦埴類)、×(鉄・石製品)、○(未接合・未図示資料)この内、未接合未図示資料の断面への投影は幅1mに限った、なお図中の数字は遺物図面番号で、例えば「70-1」とあれば、「図面70-1」のことを指す。但し、先土器時代石器については通し番号とした。
- 縮尺は次のとおり統一したが、一部異なるものがある。
 発掘区全体図1/400、建物跡・清跡1/100、住居跡・土坑他1/50、カマド・集石他1/25

2. 遺 物

- 縄文土器において、次のスクリーントーンの指示は、胎土に繊維を混入するもの。
- 縄文石器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。
 明瞭な摩耗範囲  や不明瞭な摩耗範囲
 なお、断面図において両者を、実線と破線で表示した。
- 打製石斧、スタンプ形石器において、側縁に沿う実線は、つぶれの範囲を示す。
- 歴史時代土器類におけるスクリーントーンの指示は次のとおりである。
 須恵器・土師器  灰釉陶器  施釉範囲
 内黒土師器(器内面に表示)  緑釉陶器 (中央に表示)
- 写真図版のうち出土遺物は図面番号と対照した。(前項1-⑥参照)
- 縮尺は次のとおり統一した。

【図面】先土器時代石器1/5、縄文時代土器・石器1/3(石鏃1/1)、歴史時代土器類1/3、同瓦埴類1/4、同鉄・石製品1/2(鏃1/1)【図版】先土器時代石器1/1、縄文時代土器・石器1/2(石鏃1/1)、歴史時代土器類1/2(甕類1/3)、同瓦埴類、1/4(文字部分1/1)、同鉄・石製品1/1

本文目次

序

例言

凡例

I 調査に至る経過	1
II 調査地区の概観	7
1. 調査地区の位置・立地	7
2. 層序	9
III 発掘経過	13
IV 先土器時代の調査	19
(1) 第1文化層	
(2) 第2文化層	
(3) 第3文化層	
(4) III層出土先土器時代及び縄文時代草創期の石器	
(5) 小結	
V 縄文時代の調査	35
1. 検出遺構	35
(1) 住居跡	
(2) 配石跡・埋甕	
(3) 遺物集中地点	
(4) 集石・集石土坑	
(5) 土坑	
(6) ビット	
2. 出土遺物	52
(1) 土器・土製品	
(2) 石器	
(3) 礫	

目 次

3. 遺物包含層の発掘	83
(1) 遺物包含層と出土遺物の垂直分布	
(2) 土器の平面分布	
(3) 石器の平面分布	
(4) 礫の平面分布	
4. 小 結	90
(1) 早期の遺構と遺物について	
(2) 中期の遺構と遺物について	
(3) 多喜窪遺跡C地点の設定と遺跡の変遷	
VI 歴史時代の調査	111
1. 検出遺構	111
(1) 掘立柱建物跡	
(2) 住居跡	
(3) 溝 跡	
(4) 土 坑	
(5) 柱列跡	
(6) 道路状遺構	
(7) ビット	
2. 出土遺物	124
3. 小 結	133
(1) 出土土器について	
(2) 検出遺構について	
(3) 出土鏡について	
VII 結語にかえて	141
参考文献	143

目次

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置 (1/25000)	5
第2図	調査地区の位置 (1/5000)	6
第3図	調査地区の立地 (昭和28年) (1/10000)	7
第4図	標準層序 (1) (F T 81・82区北壁)	10
第5図	標準層序 (2) (F Q 76・77区, 先土器深掘り部分南壁)	11
第6図	調査行程及び発掘深度図	14
第7図	先土器時代, 発掘区全体図 (1/300)	20
第8図	第1文化層 (IV層) 遺物分布図	22
第9図	第1文化層 (IV層) の石器	23
第10図	第2文化層 (V層) 遺物分布図	25
第11図	第3文化層 (IX層) 遺物分布図	26
第12図	第3文化層 (IX層) の石器	27
第13図	重層出土先土器時代及び, 縄文時代草創期の石器	29
第14図	縄文時代発掘区全体図 (1/400)	36
第15図	遺物垂直分布図	85
第16図	9類 (スタンプ形石器) 掘り部長幅積と重量関係図 (完形のみ)	102
第17図	9類 (スタンプ形石器) 底面長幅積と長幅比関係図 (完形のみ)	102
第18図	歴史時代発掘区全体図 (1/400)	110

表 目 次

第1表	調査工程表	15
第2表	石器観察表	33
第3表	出土土器一覧表	53
第4表	出土石器一覧表	70
第5表	石器計測表(1)	71
第6表	石器計測表(2)	72
第7表	石器計測表(3)	73
第8表	石器計測表(4)	74
第9表	遺構内出土器一覧表	82
第10表	集石等構成要素重量別点数表	93
第11表	歴史時代出土遺物一覧(1)	126
第12表	歴史時代出土遺物一覧(2)	127

目 次

第13表 歴史時代出土遺物一覧(3).....	128
第14表 歴史時代出土遺物一覧(4).....	129
第15表 歴史時代出土遺物一覧(5).....	130
第16表 歴史時代出土遺物一覧(6).....	131
第17表 歴史時代出土遺物一覧(7).....	132
第18表 住居跡出土土器群の組成.....	134

図 面 目 次

図面 1 グリット別土器出土分布図(1) 1～7群	
図面 2 グリット別土器出土分布図(2) 1群(早期濃赤文系)	
図面 3 グリット別土器出土分布図(3) 1群7類(熊奈施文の体底部)	
図面 4 グリット別土器出土分布図(4) 1群17類(無文体底部)	
図面 5 グリット別土器出土分布図(5) 2群(早期押型文系) 3群(早期沈線文系)	
図面 6 グリット別土器出土分布図(6) 4群(早期条線文系)	
図面 7 グリット別土器出土分布図(7) 4群1類(条線施文)	
図面 8 グリット別土器出土分布図(8) 4群4類(無文・捺痕)	
図面 9 グリット別土器出土分布図(9) 5群(中期前半)	
図面10 グリット別土器出土分布図(10) 6群(中期後半)	
図面11 グリット別土器出土分布図(11) 7群(後期)	
図面12 グリット別石器出土分布図(1) 1～12類	
図面13 グリット別石器出土分布図(2) 1類(尖頭器) 2類(石鏃)	
図面14 グリット別石器出土分布図(3) 3類(局部磨製石斧・礫石斧・打製石器) 4類(磨製石斧)	
図面15 グリット別石器出土分布図(4) 5類(礫器) 6類(搔器)	
図面16 グリット別石器出土分布図(5) 7類(磨石)	
図面17 グリット別石器出土分布図(6) 8類(敲石) 9類(スタンプ形石器)	
図面18 グリット別石器出土分布図(7) 10類(石皿)	
図面19 グリット別礫出土分布図	
図面20 S I 171住居跡実測図	
図面21 S S 2 配石, S S 3 集石実測図	
図面22 S S 4・5 集石実測図	
図面23 S S 6・7 集石実測図	
図面24 S S 8・9 集石実測図	
図面25 S S 10・11 集石実測図	
図面26 S S 12 集石, S K 293・294・296・325・326土坑実測図	

目 次

- 図面27 S K295・298・299・300・301・341土坑実測図
- 図面28 S K297・302・323土坑実測図
- 図面29 S K324・327・342・343・344・379土坑、P J—6、実測図
- 図面30 FO～FQ・68～70区遺物集中地点実測図
- 図面31 S I 171住居跡、SS 2配石跡出土石器
- 図面32 SS 2配石跡、SS 4・6・7・8・9・11・12集石、S K297・300・324土坑、P 5—327・573出土石器
- 図面33 FO～FQ・68～70区遺物集中地点出土石器
- 図面34 遺構外出土石器(1) 1群(早期畿糸文系) 1類～6類
- 図面35 遺構外出土石器(2) 1群(早期畿糸文系) 7類 a～c
- 図面36 遺構外出土石器(3) 1群(早期畿糸文系) 7類 c～12類 a
- 図面37 遺構外出土石器(4) 1群(早期畿糸文系) 12類 b～17類
- 図面38 遺構外出土石器(5) 1群(早期畿糸文系) 17類, 2群, 3群, 4群 1類～2類 a
- 図面39 遺構外出土石器(6) 4群(早期条痕文系) 2類 a～4類 b
- 図面40 遺構外出土石器(7) 4群(早期条痕文系) 4類 b～f
- 図面41 遺構外出土石器(B) 5群(中期前半)
- 図面42 遺構外出土石器(9) 6群(中期後半) 1・2類
- 図面43 遺構外出土石器(10) 6群(中期後半) 4～8類
- 図面44 遺構外出土石器(11) 7群(後期) 1～2類 b
- 図面45 遺構外出土石器(12) 7群(後期) 2類 c～4類 c
- 図面46 S I 171住居跡、SS 2配石跡出土石器
- 図面47 SS 2配石跡、SS 6・7・8・9・11集石出土石器
- 図面48 SS 11集石、S K298・300土坑、FO～FQ・68～70区遺物集中地点出土石器
- 図面49 遺構外出土石器(1) 2類(石鏃), 3類(局部磨製石斧, 礮石斧, 打製石斧)
- 図面50 遺構外出土石器(2) 3類(打製石斧), 4類(磨製石斧), 5類(礮器)
- 図面51 遺構外出土石器(3) 5類(礮器), 6類(搔器), 7類(磨石)
- 図面52 遺構外出土石器(4) 7類(磨石), 8類(礮石), 9類(スタンプ形石器)
- 図面53 遺構外出土石器(5) 9類(スタンプ形石器)
- 図面54 遺構外出土石器(6) 9類(スタンプ形石器)
- 図面55 遺構外出土石器(7) 10類(石皿)
- 図面56 遺構外出土石器(8) 10類(石皿), 11類 a(礮石)
- 図面57 S B47・48掘立柱建物跡実測図
- 図面58 S B49・50掘立柱建物跡実測図
- 図面59 S I 147住居跡実測図

目 次

- 図面60 S I 147住居跡実測図
図面61 S I 147・148住居跡実測図
図面62 S I 148住居跡実測図
図面63 S I 148・152住居跡実測図
図面64 S I 152住居跡実測図
図面65 S I 195住居跡実測図
図面66 S D57・58溝跡, S K247~251土坑実測図
図面67 S K252・268~273・281~284土坑実測図
図面68 S K378・380土坑, S A 5柱列跡, S X 6道路状遺構
図面69 S I 147住居跡出土遺物
図面70 S I 148住居跡出土遺物
図面71 S I 152住居跡出土遺物
図面72 S I 195住居跡出土遺物(1)
図面73 S I 195住居跡出土遺物(2)
図面74 S D57溝跡, S K251土坑, S X 6道路状遺構, P-365・403・863出土遺物
図面75 遺構外出土遺物(1)
図面76 遺構外出土遺物(2)

付 図 目 次

- 付図1 縄文時代 全体図(1/150)
付図2 歴史時代 全体図(1/150)

図 版 目 次

- 巻首図版 1 先土器時代中央地区西側南壁土層断面(北から)
2 縄文時代S K 300 戸部を有する土坑(南から)
3 歴史時代調査区(建物部分)全景(東から)
4 海獣電音鏡 径5.95cm

図版1 調査地区遊景他

1. 調査地区遊景(西方市立四小屋上から)
2. 発掘着手時状況(東から)
3. 土層断面(F T81・82区北壁, 上よりI a, I b, II, III a, III b, III c層)

図版2 発掘状況

1. 建物部分, 表土排土, 遺構検出(南から)
2. 建物部分, 歴史時代住居跡(S I 147)発掘(北から)
3. 建物部分, 縄文時代遺物包含層発掘(南から)
4. 建物部分, 縄文時代遺構(S K300)発掘(西から)

目 次

5. 建物部分, 先土器時代発掘 (西から)
6. 道路部分, 草かり (南から)
7. 道路部分, 歴史時代住居跡遺物実測 (北から)
8. 浄化槽部分, 縄文時代遺物包含層発掘 (北から)
- 図版 3 先土器時代調査区
1. 建物部分全景 (西から)
2. 浄化槽部分全景 (南から)
3. 建物部分, 中央地区西側南壁土層断面 (北から)
- 図版 4 先土器時代石器集中地点
1. 第1文化層 尖頭器出土状態 (北から)
2. 第2文化層 全景 (南から)
3. 第3文化層 全景 (南から)
- 図版 5 先土器時代炭化物集中地点
1. PC区 C-5 (北から)
2. PW区 C-1 (北から)
3. PW区 C-9, C-10 (手前) (北から)
4. PW区 C-10断面 (南から)
5. PE区 C-18 (西から)
6. PS区 C-30 (東から)
- 図版 6 先土器時代, 縄文時代草創期石器
- 図版 7 縄文時代調査区全景
(IV層上面建物部分)
1. 西側地区 (南から)
2. 中央地区 (南から)
3. 東側地区 (南から)
- 図版 8 縄文時代調査区全景 (IV層上面)
1. 道路部分 (北から)
2. 道路部分 (南から)
3. 浄化槽部分 (東から)
- 図版 9 縄文時代遺物包含層
1. FI~FK・69~71区, SS 8・9周辺 (東から)
2. FS~FK・78~80区 (6群石器集中地点) (東から)
3. GA~GI・88・89区 (道路部分南半) (南から)
- 図版10 SI 171住居跡
1. 全景 (北から)
2. 全景 (西から)
3. 遺物出土状態 (北から)
- 図版11 SS 2配石跡
1. 全景 (西から)
2. 埋蔵1, 全景 (東から)
3. 埋蔵1, 断面
4. 打製石斧集中部分 (西から)
5. 南半部分 (東から)

目 次

図版12 埋蔵，遺物集中地点

1. 埋蔵2，全景（北から）
2. 埋蔵2，全景（東から）
3. FO~FQ・68~70区遺物集中地点（西から）
4. FO~FQ・68~70区遺物集中地点（北から）

図版13 SS3~5集石

1. SS3~5全景（東から，右からSS3・4・5）
2. SS3~5全景（北から，手前からSS3・4・5）
3. SS3断面（北から）
4. SS3下落ち込み（東から）
5. SS4全景（東から）
6. SS4断面（南から）

図版14 SS4~7集石

1. SS4下落ち込み（南から）
2. SS5全景（東から）
3. SS5下落ち込み（東から）
4. SS6全景（西から）
5. SS7全景（北から）
6. SS7断面（東から）

図版15 SS7~9集石

1. SS7下落ち込み（東から）
2. SS8全景（西から）
3. SS8断面（東から）
4. SS8下落ち込み
5. SS9全景（西から）
6. SS9粗大礫肥石状態（東から）

図版16 SS9~11集石

1. SS9断面（西から）
2. SS9下落ち込み（南から）
3. SS10全景断面（東から）
4. SS10断面（東から）
5. SS10下落ち込み（東から）
6. SS11全景（北から）

図版17 SS11~12集石

1. SS11断面（西から）
2. SS11下落ち込み（西から）
3. SS12全景（南から，竹串は炭化物粒）
4. SS12全景（東から）
5. SS12東西土層断面（南から）
6. SS12集石下土坑（東から）

目 次

図版18 S K293～297・302土坑

1. S K293全景（東から）
2. S K293土層断面（東から）
3. S K294・296全景（北から）
4. S K294・296土層断面（北から）
5. S K295全景（北から）
6. S K295土層断面（北から）
7. S K297・302土層断面（南から）
8. S K297・302土層断面

図版19 S K298・299・323土坑

1. S K323全景（南東から）
2. S K323土層断面（南西から）
3. S K298全景（南から）
4. S K298土層断面（南から）
5. S K299全景（北から）
6. S K299土層断面（東から）

図版20 S K300土坑

1. 全景（北から）
2. 北側伊部全景（南から）
3. 東側伊部全景（西から）
4. 遺物出土状態（西から）
5. 東西土層断面（南から）

図版21 S K301・324土坑

1. S K301全景（南から）
2. S K301土層断面（南から）
3. S K324全景（北から）
4. S K324全景（東から）
5. S K324土層断面（南から）

図版22 S K325～327土坑

1. S K325全景（北から）
2. S K325土層断面（西から）
3. S K326全景（東から）
4. S K326土層断面（東から）
5. S K327全景（南から）
6. S K327土層断面（西から）

図版23 S K341～343土坑

1. S K341全景（南から）
2. S K341土層断面（東から）
3. S K342全景（東から）
4. S K342土層断面（西から）

目 次

5. SK343全景(北から)
6. SK343土層断面(西から)
- 図版24 SK344・379土坑, PJ-6
1. SK344全景(北から)
2. SK344土層断面(北から)
3. SK379全景(東から)
4. SK379土層断面(東から)
5. PJ-6土層断面(東から)
6. PJ-6炭化物検出状態(東から)
- 図版25 SI171住居跡, SS2配石跡出土石器
- 図版26 SS2・4・6~9・11集石, SK300・324土坑, PJ327・573出土石器
- 図版27 FO~FQ・68~70区遺物集中地点出土石器
- 図版28 遺構外出土石器(1) 1群(早期樞糸文系)
- 図版29 遺構外出土石器(2) 1群(早期樞糸文系)
- 図版30 遺構外出土石器(3) 1群(早期樞糸文系)
- 図版31 遺構外出土石器(4) 1群(早期樞糸文系)
- 図版32 遺構外出土石器(5) 1群(早期樞糸文系)
- 図版33 遺構外出土石器(6) 1群(早期樞糸文系)
- 図版34 遺構外出土石器(7) 1群(早期樞糸文系), 2群(同押型文系), 3群(同沈線文系), 4群(同条痕文系)
- 図版35 遺構外出土石器(8) 4群(早期条痕文系)
- 図版36 遺構外出土石器(9) 4群(早期条痕文系)
- 図版37 遺構外出土石器(10) 4群(早期条痕文系)
- 図版38 遺構外出土石器(11) 4群(早期条痕文系), 5群(中期前半)
- 図版39 遺構外出土石器(12) 5群(中期前半), 6群(中期後半)
- 図版40 遺構外出土石器(13) 6群(中期後半)
- 図版41 遺構外出土石器(14) 6群(中期後半), 7群(後期)
- 図版42 遺構外出土石器(15) 7群(後期)
- 図版43 遺構外出土石器(16) 8群, 土製円板
- 図版44 SI171住居跡, SS2配石跡出土石器
- 図版45 SS2配石跡, SS6~9集石出土石器
- 図版46 SS9・11集石, SK298・300土坑, 遺物集中地点出土石器
- 図版47 遺構外出土石器(1) 石鏃, 打製石器, 局部磨製石斧, 礮器
- 図版48 遺構外出土石器(2) 打製石斧
- 図版49 遺構外出土石器(3) 打製石斧, 磨製石斧, 礮器, 擗器, 磨石
- 図版50 遺構外出土石器(4) 磨石, 凹石, 敲石

目 次

- 図版51 遺構外出土石器(5) スタンプ形石器, 凹石
- 図版52 遺構外出土石器(6) スタンプ形石器
- 図版53 遺構外出土石器(7) 石皿
- 図版54 遺構外出土石器(8) 石皿, 砥石
- 図版55 歴史時代調査区全景
1. 建物部分(東から)
 2. 道路部分(南から)
- 図版56 S B47・48掘立柱建物跡
1. S B47全景(西から)
 2. S B48全景(北から)
- 図版57 S B49・50掘立柱建物跡
1. S B49
 2. S B49, 1-3柱穴土層断面(東から)
 3. S B50全景(西から)
- 図版58 S I 147住居跡
1. 全景(南から)
 2. 構築時全景(南から)
 3. 遺物出土状態(北から)
 4. 南北土層断面(東から)
 5. カマド全景(東から)
- 図版59 S I 148住居跡
1. 全景(北から)
 2. 全景(南から, 環状埴土層除去前)
 3. 南北土層断面(東から)
 4. カマド全景(西から)
 5. カマド東西土層断面(北から)
- 図版60 S I 152住居跡
1. 全景(東から)
 2. 構築時全景(東から)
 3. 南北土層断面(東から)
 4. カマド全景(西から)
 5. カマド東西土層断面(南から)
- 図版61 S I 195住居跡
1. 全景(北から)
 2. 構築時全景(北から)
 3. 南北土層断面(東から)
 4. 遺物出土状態(南から)
 5. 入口部南北土層断面(東から)
- 図版62 S D57・58溝跡
1. S D57部分(東から)
 2. S D57南北土層断面(東から)
 3. S D58全景(東から)

目 次

- 図版63 S K247～252・268・269土坑
4. S D58南北土層断面（東から）
 1. S K247全景（南から）
 2. S K248全景（南から）
 3. S K249全景（南から）
 4. S K250全景（南から）
 5. S K251南北土層断面（東から）
 6. S K252東西土層断面（北から）
 7. S K268南北土層断面（東から）
 8. S K269全景（東から）
- 図版64 S K270～273・281～284土坑
1. S K270全景（東から）
 2. S K270南北土層断面（西から）
 3. S K271全景（北から）
 4. S K272全景（北から）
 5. S K273全景（東から）
 6. S K281南北土層断面（西から）
 7. S K282全景（北から）
 8. S K283・284南北土層断面（東から）
- 図版65 S K378～380土坑, S A 5 柱列跡
1. S K378全景（西から）
 2. S K380全景（西から）
 3. S A 5 全景（東から）
 4. S A 5, 1-1 柱穴土層断面（東から）
 5. F Q79区 P-355（海獣糞管出土小穴, 東から）
 6. G Q88区焼土粒分布範囲（北から）
- 図版66 S X 6 道路伏道構
1. S X 6 全景（南から）
 2. S X 6 部分（F P～F R75区, 南から）
 3. S X 6 構築時部分（硬質土除去後 F P～F Q75区, 南から）
 4. S X 6 構築時全景（硬質土除去後, 南から）
 5. S X 6 東西土層断面（南から）
- 図版67 S I 147・148住居跡出土遺物
- 図版68 S I 148・152・195住居跡出土遺物
- 図版69 S I 195住居跡出土遺物
- 図版70 S D57溝跡, S K251土坑, S X 6 道路伏道構, P355・803出土遺物
- 図版71 遺構外出土遺物(1)
- 図版72 遺構外出土遺物(2)

I 調査に至る経過

昭和49年8月14日付国教文収第376号にて株式会社竹中工務店東京支店（以下「竹中工務店」と略す）より国分寺市教育委員会（以下「市教委」と略す）を経由して、文化庁長官宛同社社員寮建設工事に伴う埋蔵文化財発掘届が提出された。以降、数度の協議を経て、市教委と竹中工務店の二者間で試掘調査の目的、委託、工事設計に関する意見聴取及び協議、本調査の実施、出土品の取り扱いなどを定めた覚書きが取りかわされ、まず武蔵国分寺遺跡調査会（以下「調査会」と略す）による試掘調査を実施することになった。昭和51年4月～5月にかけて実施した試掘調査の結果およびこの間の経緯については、既に『武蔵国分寺遺跡調査概報Ⅰ——（株）竹中工務店国分寺社員寮建設予定地試掘調査報告書——』として報告済である。

試掘調査をふまえて、本調査の実施要綱を作成し、報告とともに昭和51年7月22日付で調査会より竹中工務店へ提出した。その後、実務担当者レベルで数度協議するも合意に至らず、昭和51年11月8日付で、竹中工務店より調査会へ調査実施要綱の再検討が申し入れられた。調査会では早速再検討を行い、昭和52年1月20日付で回答した。協議における問題点は、調査の範囲、期間、経費の全てにわたってであった。

昭和52年7月、届出人が国際電信電話株式会社（以下「国際電電」と略す）に変更になる（即ち計画建物は同社社員寮へ変更となる）。市教委・調査会と竹中工務店との協議の内容はそのまま継承されることとなった。従い、昭和52年8月18日付で市教委と国際電電間で覚書きを取りかわした。再協議の結果以下の様に合意した。調査範囲は、A・E地区（第6図）を除く約2,500㎡、調査期間は昭和52年8月19日より昭和54年3月31日（内、現地は、昭和52年8月19日より同12月25日まで、昭和53年4月1日より同6月30日まで）、調査経費は33,000,000円そこで、昭和52年8月18日付で調査会と国際電電間で契約が締結され、同年9月1日より現地調査に入った。

調査の進行に伴い、平安時代の検出遺構が予想以上に多く、現地調査期間の追加の必要が生じた。昭和52年12月9日の協議により、当初計画外であった昭和53年1月より3月までの冬期間をこれに充てることになった。

さらに、昭和53年4月頃より縄文時代の調査に主体が進行するに伴い、該期の遺構、遺物の数量が予想外に多く、再度調査期間および経費の追加の必要が生じた。追加分の算出については、縄文期調査の進展をみて、その基礎データを整えた上、調査実施要綱を作成することとなる。また当初契約外であったE地区の調査も要請されることとなった。数度の協議の結果、以下の内容で合意した。追加変更分については、竹中工務店より経費が支出されることとな

I 調査に至る経過

り、昭和53年9月6日付で、竹中工務店と調査会間で契約を締結した。即ち、縄文時代の調査はC地区(遺構確認にとどめる)、D地区とし、B・F地区は除き、E地区を追加する。調査期間は、昭和55年10月31日までとし、内現地については、C・D地区を昭和53年10月31日までとし、E地区を昭和54年2月28日までとする。経費は追加分として、43,438,048円とする。

以降C-E地区の調査は順調に進行し予定通り終了した。

昭和53年12月に至って、国際電電より浄化槽・雨・汚水ます・その他の付帯設備工事の概要が、市教委に提示された。数度の協議の結果、出来るだけ調査終了地区(D・E地区)に位置変更し、F地区(浄化槽部分)の追加調査にとどめることになった。経費は、現行委託費内でおさまる見通しなので、現地調査を昭和54年7月31日までとし、これに伴い、整理期間を延長し、調査契約期間を昭和56年5月31日までとすることになった。これらについては、竹中工務店と調査会間で覚書により明記することになった。

昭和54年7月16日にF地区の調査を終了し、全ての現地調査を終了する。

その後、整理場所や体制などのことから、整理は断続的あるいは体制を縮小して実施せざるを得なくなり、この結果、大幅に遅延することとなった。数次に亘り、延期をお願いし、承諾を得て、今日に至った。

今次調査は、市内における初めての大規模民間開発事業に伴う事前の発掘調査であった。そこで、市教委、調査会、調査団ともそれぞれ慎重に対処するところとなり、都教委ならびに文化庁の指導を得ながら、協議を重ね、調査を実施した。昭和49年8月に竹中工務店より埋蔵文化財発掘届が提出されて以降、今日まで上記した通りの推移で、10年余りが経過したが、この間、文化財の保護と調査の実施をめぐる当事者間で活発な論議が行われ、覚書きや調査計画などの形となって残されているのである。市教委や調査会、調査団にとって、以降の開発計画に対処する一つの指針となっている点でも大きな成果といえることができる。

I 調査に至る経過

武蔵国分寺遺跡調査会組織

(昭和52年8月当時)

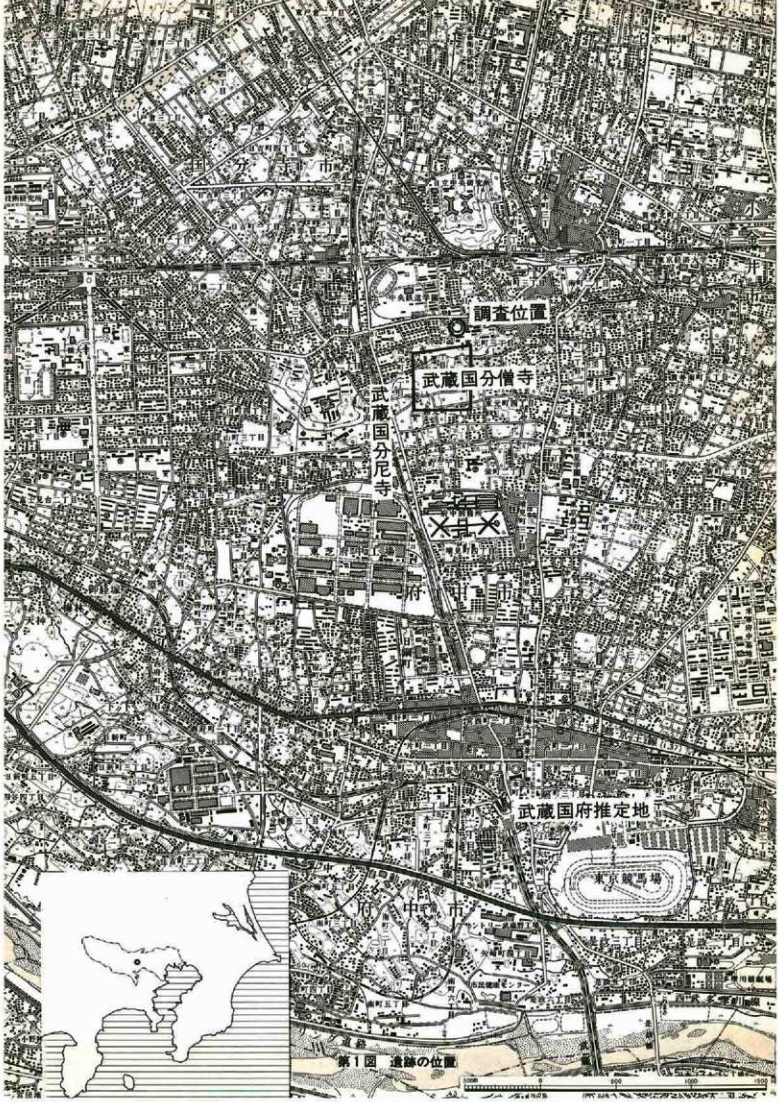
会 長	塩谷 信雄	国分寺市長
副 会 長	滝口 宏	東京都文化財専門委員
"	森田 茂	国分寺市教育委員会委員長
"	佐藤 敏也	国分寺市文化財保護審議会委員長
理 事	永峯 光一	東京都文化財専門委員
"	大川 清	国士館大学助教授
"	坂 踏 秀一	立正大学助教授
"	森本 洋次	東京都教育庁文化課長
"	興津 精二	国分寺市教育委員会教育長
"	坂本 喜市	国分寺市社会教育委員会議長
"	和気 孝術	国分寺市社会教育委員会議副議長
"	星野 亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員
"	松井 新一	"
"	宇野 信四郎	"
"	藤間 恭助	"
監 事	浅見 正平	国分寺市社会教育委員
"	青木 一英	東京都教育庁埋蔵文化財企画調査担当主査
事 務 局 長	進藤 文夫	国分寺市教育委員会次長
事 務 局 長 補 佐	中村 万之助	東京都教育庁埋蔵文化財係長
"	山下 実	国分寺市教育委員会文化財担当主幹
事 務 局 員	下 蘭 春夫	国分寺市教育委員会社会教育課員
調 査 団 長	滝口 宏	東京都文化財専門委員
調 査 副 団 長	永峯 光一	東京都文化財専門委員
"	大川 清	国士館大学助教授
"	坂 踏 秀一	立正大学助教授
調 査 員	早川 泉	東京都教育庁文化課学芸員
"	西脇 俊郎	"
"	有吉 重蔵	国分寺市教育委員会社会教育課員
"	福田 信夫	"
(非 常 勤)	行田 裕美	国学院大学卒
"	浅野 晴樹	"

I 調査に至る経緯

武蔵国分寺遺跡調査会組織

(昭和160年3月現在)

会 長	星 野 亮 勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副 会 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会委員
"	大 島 外 治	国分寺市教育委員会委員長
理 事	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会委員
"	大 川 清	国士館大学教授
"	坂 詰 秀 一	立正大学教授
"	本 多 良 雄	国分寺市長
"	奥 津 精 二	国分寺市教育委員会教育長
"	永 井 佳 雄	東京都教育庁社会教育部文化課主幹
"	坂 木 喜 市	国分寺市社会教育委員会議長
"	佐 藤 敏 也	国分寺市文化財保護審議会委員
"	松 井 新 一	"
"	吉 田 格	"
"	藤 岡 恭 助	"
監 事	浅 見 正 平	国分寺市社会教育委員
"	山 田 弘	国分寺市教育委員会社会教育課長
事 務 局 長	関 口 雄 基 臣	国分寺市教育委員会教育次長
事 務 局 長 補 佐	大 井 川 武 彦	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
"	安 田 暉	国分寺市教育委員会文化財課長
事 務 局 員	田 倉 武 市	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長兼文化財保護係長
"	鈴 木 晃	国分寺市教育委員会文化財課庶務係員
調 査 団 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会委員
調 査 副 団 長	永 峯 光 一	"
"	大 川 清	国士館大学教授
"	坂 詰 秀 一	立正大学教授
調 査 員	有 吉 重 蔵	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
"	福 田 信 夫	"
"	上 村 昌 男	"
"	三 木 弘	国学院大学大学院



調査位置

武蔵国分僧寺

武蔵国分尼寺

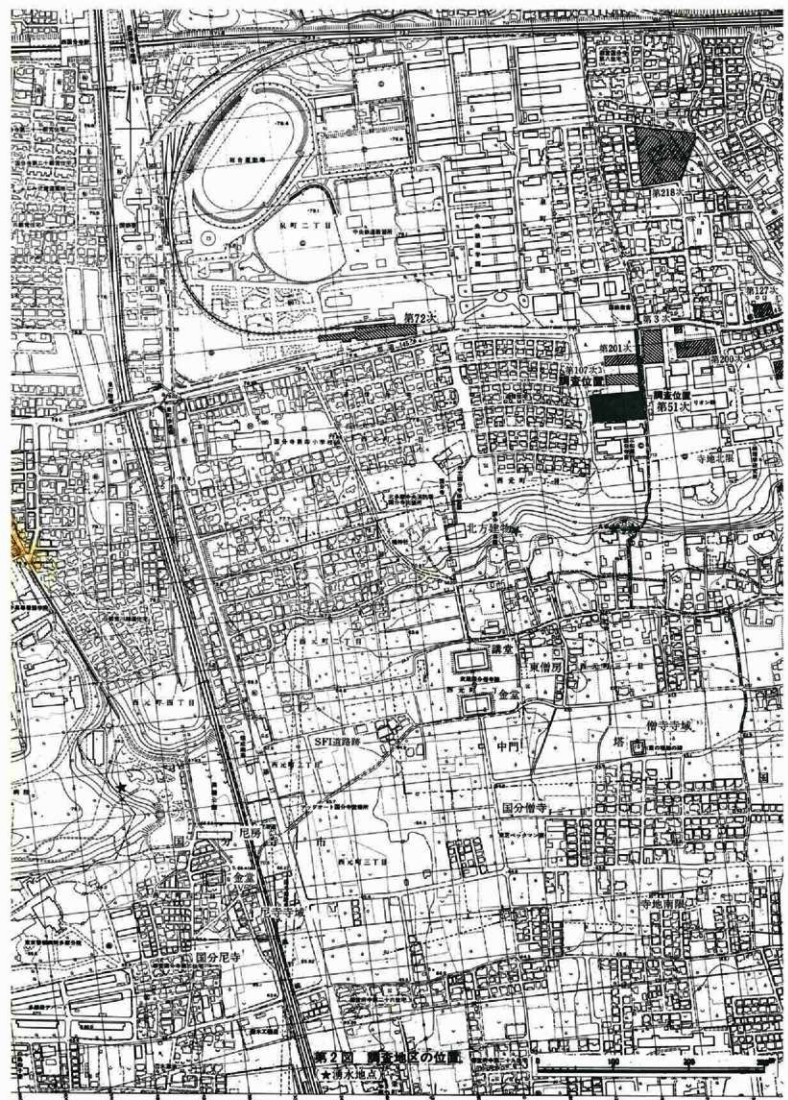
武蔵国府推定地

東京競馬場

府中市

第1図 遺跡の位置

0 500 1000 1500 2000



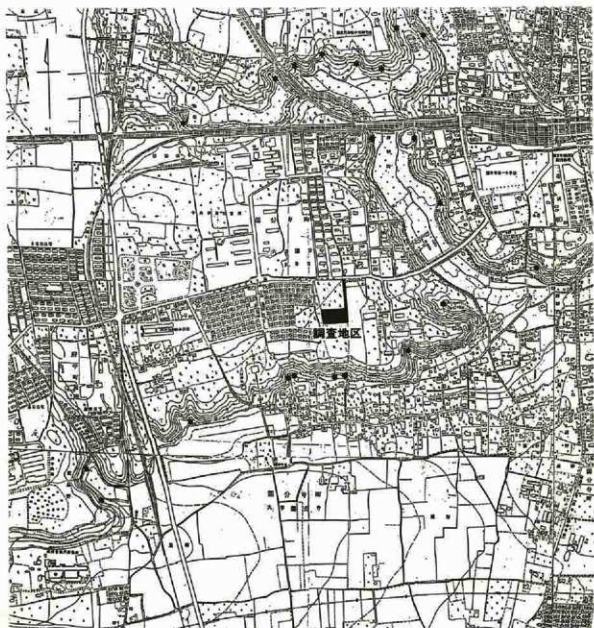
第2回 調査地区の位置

★湧水地点

Ⅱ 調査地区の概観

1. 調査地区の位置・立地

調査地区は国分寺市西元町一丁目2448～3・5に所在する(旧国分寺町大字国分寺多喜窪)。都道145号国分寺・国立線に一部接して、これより南へ80mほど入ったところが建物部分である。南は三和銀行国分寺寮、北は佐藤国分寺共同住宅に隣接し、西は道をはさんで郵政省住宅、東も道をはさんでリオン株式会社で、閑静な住宅地となっている。



第3図 調査地区の立地(昭和28年)
(★湧水地点、縮尺約1/10000)

II 調査地区の概観

海拔標高は、約77mで、武蔵野段丘上にある。調査地区東側の小径を150mほど歩いていくと比高約12mの崖（国分寺崖線＝通称ハケ）となり、崖下の礫層中より豊富な水量の湧水がみられる。真姿弁財天がまつられる真姿の池がここである。湧水は現国分寺の裏山や小林理学研究所構内にもみられ、集合して小川となって蛇行し、東元町三丁目の不動橋の所で恋ヶ窪の湧水を集めて下流する野川の本流と合流する。野川の本流は開折谷を形成しており、調査地区の東約200mでその谷壁斜面となる。東元町三丁目21の東急分譲地西端の谷壁下からは今も豊富な水量の湧水がみられ、これが形成した谷が台地の奥まで北西方向へ浅く延びている（第3図）。調査地区の内建物部分では、西から東への緩傾斜であり、道路部分になると北東方向へのややきつい傾斜となる。現地表面のみでなく、歴史時代遺構検出面（第15図）、縄文時代遺構検出面（第14図）でも同様で、大きな変化はない。

周辺における主な調査をあげると、第3次調査⁽¹⁾（東元町3丁目、リオン厚生会館建設地、711㎡、縄文時代土坑1、歴史時代住居跡7、土坑3）、第107次調査⁽²⁾（西元町1丁目、佐藤国分寺共同住宅地、613㎡、先土器時代礫群1、ユニット1、縄文時代土坑4他、歴史時代住居跡5、土坑3、道路状遺構1他）、第201次調査⁽³⁾（西元町1丁目、佐藤国分寺共同住宅第二期建設地、692㎡、縄文時代土坑2他、歴史時代掘立柱建物跡2、住居跡4、火葬基1、土坑8他）、第72次調査⁽⁴⁾（泉町2丁目、国鉄中央鉄道学園新幹線研修庫建設地、1,614㎡、縄文時代土坑4、歴史時代掘立柱建物跡1、住居跡7、溝跡2、土坑19他）、第168・190次調査⁽⁵⁾（泉町2丁目、国鉄中央鉄道学園排水改良工事に伴う調査、3,464㎡、縄文時代土坑29、配石2他、歴史時代掘立柱建物状遺構2、住居跡3、溝跡8、土坑7他）、第127次調査⁽⁶⁾（泉町1丁目、日立中央研究所来客クラブ建設地、328㎡、先土器時代割片、縄文時代小穴、歴史時代小穴）、第200次調査⁽⁷⁾（東元町2丁目、リオン株式会社本館等建設地、1,967㎡、縄文時代堅穴状遺構1、集石3、土坑10他、歴史時代掘立柱建物跡4、住居跡2、溝跡1、土坑22他）、第218次調査⁽⁸⁾（泉町1丁目、いずみプラザ建設地、280㎡、先土器時代礫群3、ユニット3、縄文時代土坑1、歴史時代火葬基）などがある。

先土器時代においては、本調査地区周辺で第107次、200次など近接して礫群やユニットが検出されており、一つのまとまりを指摘できるが、そのひろがりや占地は詳らかでない。

縄文時代においては、同じ台地上に多喜窪遺跡、恋ヶ窪南遺跡、日影山遺跡などがある。多喜窪遺跡は、国指定重要文化財の勝板式土器を出土した集落跡として著名であるが、主要地方道17号線所沢・府中線が通る谷を中心として西元町1・4丁目付近にひろがりをもっているものと考えられ、狭義の多喜窪遺跡の意として多喜窪遺跡A地点と呼称する⁽⁹⁾。多喜窪遺跡B地点は現国分寺薬師堂、八幡神社付近を中心として、主に早期撚糸文系無文土器の一部や沈線文系土器、スタンプ形石器などが検出されている。そして、本調査地区や、第107次、201次、3次、

II 調査地区の概観

200次などの一群をもって多喜窪遺跡C地点として扱っておく。第72次や168・190次などにおいても遺物や土坑などが散見されるが、まとまりのある一群を抽出すると上述の様に扱えらる。恋ヶ窪南遺跡は、中央線を挟んで、泉町1丁目と西恋ヶ窪1丁目にかかる縄文早期、中期を主とする遺構で、西武国分寺線際で数基の炉穴や、早期打台式土器などが採集されている。⁰⁰日影山（ひかげやま）遺跡は同じく中央線を挟んで、泉町2丁目と西恋ヶ窪1丁目にかかり、中期前葉の土器群が多く採集されている。その他近隣の遺跡としては、野川本流の恋ヶ窪谷を中心として、恋ヶ窪遺跡や日立中央研究所構内遺跡（羽根沢遺跡）、花沢西遺跡などがあり、野川の開析谷を挟んで対岸の東斜面には花沢東遺跡などがある。⁰¹

遺跡の南約3kmほどにある府中市大國魂神社一帯が武蔵国府の推定地である。武蔵国分寺跡は、これに南面して、西元町1～4丁目一帯に所在する。僧寺金堂を中心として東西2.0km、南北1.5kmの範囲で遺物が採集される溝跡で、区画される寺地は東西（北辺）633m、南北（東辺）580mのひろがりをもっている。僧尼寺の主要建物は低位の立川段丘上にあるが、その一部や僧寺々城の区画、寺地北限の区画は段丘上まで延びている。

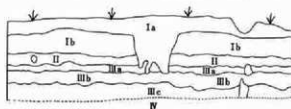
調査地区は、僧寺金堂や塔跡より直線距離にして約450mで、僧寺中軸線の東196～268.5m金堂心より北へ353～467mに位置する。僧寺々城を画する溝跡の北東隅まで最短で60mほどである。武蔵野台地上における武蔵国分寺関連遺構群のあり方は、僧寺々城の北辺域にあたる約60,000㎡の通信住宅一帯の様相が不明のため、詳らかでないが、前述の各調査の成果や、西元町2丁目一帯の市下水道工事に伴う調査の成果より考えると、崖線縁辺部を除き、おおむね10世紀代以降に所属すると思われる小規模掘立柱建物跡や住居跡があまり重複することなく、都道145号線を少し越えて、国鉄中央鉄道学園の南端——寺地北辺溝より250m前後——あたりまで分布するようである。これより北では溝跡や小穴、土坑などが検出されるのみである。西は武蔵野線までは確実に越えて府中市域においては調査例が少なく不明である。尼寺西方の都立府中病院構内では、8～10世紀代の住居跡が検出されている。⁰²東は野川の開析谷になるがこの斜面地で、第200次調査や市下水道工事に伴う調査などで9世紀代の住居跡が検出されている。また、第201次調査区、第218次調査や恋ヶ窪南遺跡、谷壁斜面の東元町3丁目において、8～9世紀代と考えられる火葬墓（須恵器や土師器の骨蔵器）が検出されていたり、第200次調査区における大規模掘立柱建物跡の存在が注目され、他地域のあり方と様相を異にしていることが指摘できる。⁰³

2. 層 序

調査地区は武蔵野段丘上の平坦地であってほぼ単純な層序を示す。以下にその基本層序を略記する。

II 調査地区の概観

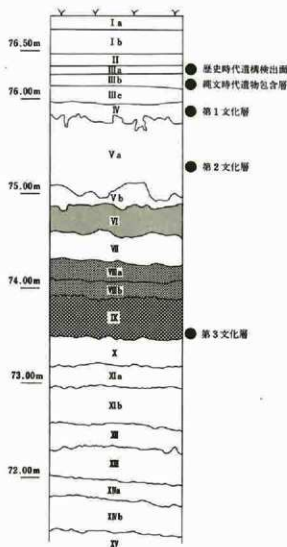
- I a 層 盛土。ローム、砂利、コンクリートブロックなどの客土。10~60cm。全体にみられた。
- I b 層 表土。いわゆる耕作土で、乾燥するとバサバサしてくずれやすい。上部は削られた上、I a 層がのる。II層のブロックが攪乱されて混入する部分もある。20~30cm。
- II 層 黒褐色土。粒子粗く、粘性に欠く。10~20cm。建物部分南側と道路部分で残りが良い。歴史時代遺構内の堆積土に酷似する。
- III a 層 暗茶褐色土。黒色味を帯び、粒子やや粗く、粘性に欠く。乾燥するとバサバサになる。II層、III b層との境は漸移的。該層中にて歴史時代遺構を検出するのは難しい。5~10cm。建物部分西半で顕著にみられ、道路部分ではほとんどみられない。縄文時代の遺物を出土する。
- III b 層 暗茶褐色土。下部にいくに従い褐色味を帯びる。縄文時代の遺物を多く包含する。歴史時代遺構は該層上面にて検出が容易となる。乾燥すると亀裂が多く入る。
- III c 層 茶褐色土。ローム漸移層。上部に多く縄文時代の遺物を包含する。縄文時代の遺構の大半は該層上面にて検出することができる。
- IV 層 暗黄褐色ローム。ソフトローム。縄文時代遺構の大半は該層上面で検出が容易となる。
- V a 層 黄褐色ローム。ハードローム。色調の相違によりV層はa、bの2層に分けられる。下層にいくに従い黄色味薄くなり灰褐色味を帯びてくる。漸移的に変化する。赤色・黒色スコリアを多量に含む。部分的にV bと中間の色調を有する部分がV b上部にある。
- V b 層 暗灰褐色ローム。ハードローム。色調はV aとVIの中間。
- VI 層 暗褐色ローム。立川ローム第一黒色帯。スコリア細かく、全体に粒子緻密。やや粘性増す。
- VII 層 黄褐色ローム。黄色味強く明るい。VIII層へは漸移的に移行し境やや不明瞭。削るとジャリジャリする。
- VIII a 層 褐色ローム。やや暗くなり始まることから本層とした。立川ローム第二黒色帯。成分的にはVIII層下部に似て、削るとジャリジャリする。



第4図 標準層序(1) (F T 81・82区北壁)

- VIII b 層 暗褐色ローム。立川ローム第二黒色帯。さらに暗くなる。粒子細かく、緻密になり、粘性がでてくる。
- IX 層 黒褐色ローム。立川ローム第二

II 調査地区の概観



第5図 標準層序(2)
(F Q76-77区, 先土器
深掘り部分南壁)

削るとジャリジャリする。

黒色帯。VII b層との境は明瞭で、より黒色味増し、細粒で、下部にいくに従い、緻密となり、粘性強くなる。下部の5~10cmはX層の影響が明るい部分もある。

X 層 黄褐色ローム。粒子極めて細かく、緻密で粘性あり。

XI a 層 黄褐色ローム。X, XI b層より明るく、硬く、粘性少ない。

XI b 層 暗黄褐色ローム。XI a層より若干暗く、粘性あり。

XII 層 暗黄褐色ローム。本層下部に黄褐色ロームブロック(ややカレー色で硬い)が多くみられ、このあたりが武蔵野ロームとの境と思われる(大沢進氏ご教示)。

XIII層 暗褐色ローム。色調・成分等一変し、硬度増す。

XIV a 層 暗褐色ローム。硬度さらに増す。

XIV b 層 暗褐色ローム。硬度さらに増す。削るとジャリジャリする。

XV層 暗褐色ローム。硬度さらに増す。

- 註 (1) 既報告 武蔵国分寺遺跡調査団 1979
 (2) 既報告 武蔵国分寺遺跡調査団 1982
 (3) 未報告 昭和60年3月現在発掘中
 (4) 既報告 武蔵国分寺遺跡調査団 1980
 (5) 未報告 近刊予定, 昭和57年12月~昭和59年6月調査
 (6) 未報告 昭和56年5月~7月調査
 (7) 未報告 昭和60・61年度整理予定。昭和59年6月~昭和59年11月
 (8) 未報告 昭和59年11月~12月調査

II 調査地区の概観

- 09 詳しくは、『国分寺市史』第一巻（印刷中）参照
- 00 同 上
- 01 既報告 恋ヶ窪遺跡調査団 1979・80・82
- 02 既報告 恋ヶ窪遺跡調査団 1984
- 03 既報告 都立府中病院内遺跡調査会 1980
- 04 詳しくは、『国分寺市史』第一巻（印刷中）参照

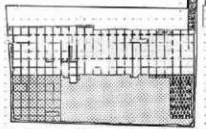
Ⅲ 発掘経過

試掘調査終了後の現地はユンボにて埋め戻しが行われており、下草も若干あるのみでこの点の支障はなかった。委託契約締結後、早速、人員の確保、器材の準備等に入った。写真器材は一式を購入した。又、排土搬出に伴う土木（ユンボ、ダンプ、ベルトコンベアー等々）や現地事務所の維持などについては、器材損料として経費計上されており株式会社東和植物園に竹中工務店を通して一括発注され、同社より木村伸氏が、現地常駐事務員として着任された。経理、一般事務、あるいは賄を含めて上記事務そして土木監督などの一切をお任せしたわけで、氏や同社の多大なる協力があつたことを明記しておく。

準備が整つたところで、9月6日よりユンボによる表土排土が開始された。作業は、西側より調査員と補助員の指示の下に進められた。幸い、試掘調査のデータにて表土の層厚が判っている上にⅡ層（黒褐色土）が遺構面を覆っているため、比較的スムーズに作業が行われ、11日間にて終了した。以後、ベルトコンベアーを搬入して、作業員10余名にて、Ⅱ層の除去と併行して遺構検出作業を進めた。9月27日には、F P 69、F P 70区周辺のⅢ層上面にて、縄文中期末の土器が集中的に出土し、一定のひろがりを持つことが後の調査で判明した。同じく、F N 68区周辺では、精査の段階で、S S 2配石跡を検出した。なお、9月26日から非常勤調査員として浅野晴樹氏（現埼玉県立歴史資料館）が現場を担当することとなった（昭和53年3月まで）。竪穴住居跡は試掘にて検出されていたS I 147、148の外に新たに、F S・F T 65区にてS I 152を検出した。溝跡は、2条になるものかとも思われたが、一つの溝となり、西と東では方向、幅、断面形が異っていたものと判明した。この溝跡と重複して新しく、S X 6道路状遺構が構築されており、S D 57とS X 6の周囲には多数の小穴が集中していることが判り、この小穴の調査に時間を費す結果となった。なお、昭和53年2月6日に、S D 57脇の小穴 № 355より銅鏡1面が出土した。10月21日に遺構検出作業を終了し、翌22日より24日まで基準杭を打ち、10月25日より小穴、10月26日よりS D 57溝跡、11月1日よりS I 147住居跡の発掘を開始し、以降、断続的且併行して遺構の調査を進めた。歴史時代遺構の調査は、作業開始の9月6日より数えて122日目の昭和53年4月7日に終了した。

縄文時代の調査は、2月8日に、F O～F Q・68～70区遺物集中地点及びS S 2配石跡の精査より開始された。包含層の発掘は、これと歴史時代遺構調査終了をまって3月30日より西側から開始した。開始早々、予想外に多くの土器・石器・礫が包含されていることが判った。結果的に、最も多く出土する範囲より開始したことになる。西側南半では多量の礫が出土し、集石遺構も集中して検出された。そこで、現地を6月30日までに終了させることは極めて困難な

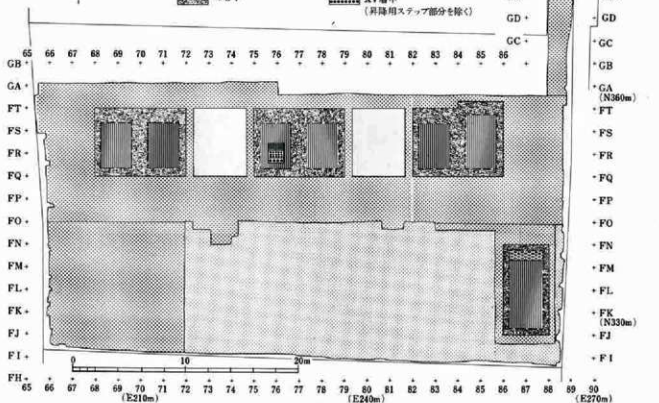
- A地区 未調査地区 559.38㎡
- ▨ B地区 建物部分 (歴史時代調査まで) 797.00㎡
- ▩ C地区 * (縄文時代遺構確認まで) 324.00㎡
- D地区 * (先土器時代調査まで) 1236.00㎡
(内先土器465㎡)
- ▧ E地区 道路部分 (縄文時代調査まで) 253.40㎡
- ▦ F地区 浄化槽部分 (先土器時代調査まで) 136.00㎡
(歴史時代調査時は建物部分に含まれる)



調査行程図

- 未調査
- ▨ III層上面
- ▩ IV層上面
- Va層中
- ▧ VI層中
- ▩ VIIa層中
- ▨ X層中
- ▩ XII層中
- ▧ XV層中 (昇降用ステップ部分を除く)

凡 例



第6図 調査行程図(上)及び発掘深度図(下)

年月日	昭52/9月	10月	11月	12月	昭53/1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	昭54/1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	計数
土・日・祝祭日他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	68.0
雨天作業中止	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24.8
実作業時計表	10	20	30	40	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	6.9
調査区全域	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	36.3
S B47-50																								6.9
S I 147																								1.2
148																								2.5
152																								2.9
S D57-58																								1.9
S K-46																								2.5
S X 6																								1.2
ビット																								2.6
調査区全域																								4.2
S I 171																								7.1
S S 2																								3.6
S S 3-12																								2.5
S K-一括																								6.5
遺物集積地点																								5.9
ビット																								5
先土器																								2.0
調査区全域																								4.5
S A 5																								1.8
S I 195																								4
S K-一括																								3.0
ビット																								5
調査区全域																								2.7
調査区全域																								2.5
S K-一括																								5
ビット																								5
先土器																								1.1
備考	調査開始																							2.8
	住居跡調査開始																							
	住居跡調査終了																							
	縄文調査開始																							
	住居跡調査終了																							
	(採用あり)																							
	(採用増行)																							
	先土器調査開始																							
	縄文調査終了																							
	遺物部分調査開始																							
	遺物部分調査終了																							
	住居跡調査開始																							
	住居跡調査終了																							
	住居跡調査開始																							
	住居跡調査終了																							
	(転用)																							
	調査終了																							

第1表 調査工程表

Ⅲ 発掘経過

状況になったので、協議を進めた結果、既に遺物包含層を発掘中の西側兩半（C地区）については、IV層（ローム面）までの遺構（例えば集石など）を除き、IV層で検出される遺構は確認にとどめることとし（S I 171については上部の遺物との関連で完掘した）、B地区の調査は、既に上面にみえる遺物の処理のみとし、結果、調査は建物本体のD地区のみに行うこととした。この際、道路部分への排水管・水道管等埋設が決まり、同地区の追加調査もスケジュールに組み入れることになった。かくしてC・D地区の縄文時代調査が順調に進行し、10月4日に終了した。

先土器時代の発掘は、8月16日より開始され、11月1日に最終日を迎えた。前年の9月6日より数えて246日目である。先土器時代の調査も西側より始められたが、PE区（東地区）に至るまで石器は1点も出土せず、逆にPE区にはIV層、Vb層、IX層に3つの石器集中部が検出された。Vb層、IX層のものについては可能な限り拡張してまとまりをおさえたが、なお周囲の状況を追及するに至らなかった。

11月6日よりE地区（道跡部分）の調査に着手した。ユンボにより伐根を含め表土を除去し、南より遺構検出を行っていった。都道寄りのHF88区でS I 195住居跡が検出された外は、余り密な分布を示さず、南半では、11月28日より縄文包含層の発掘にかかった。縄文時代の遺物は少なく、遺構も数えるのみであった。2月16日にIV層（ローム面）までの全ての調査を終了した。実作業累計日数で303日目である。

F地区（浄化槽部分）の調査は、建築本設計に伴い要請されることとなったもので、既に歴史時代の調査は終了していたので、縄文包含層の発掘よりの作業となった。4月12日にユンボにより盛土除去より開始して7月17日に先土器時代の調査まで終了した。以上で全ての現地調査を終えた。なお、昭和53年2月より昭和54年4月まで剣持和夫氏（現埼玉県埋蔵文化財調査事業団）に調査員補として、活躍していただいた。

総所要日数363日間、作業員延4,581人（補助員等含む）、調査総面積2,746.40㎡。内訳は、B地区（歴史時代調査まで）797.00㎡、C地区（縄文時代IV層上面遺構確認まで）324.00㎡、D地区（先土器時代調査まで）1,236.00㎡（内先土器465.00㎡）、E地区（縄文時代調査まで）253.40㎡、F地区（先土器時代調査まで）136.00㎡（内先土器72.00㎡）で、A地区（未調査地区）は559.38㎡である。

発見遺構は、先土器時代石器集中地点3ヶ所、縄文時代竪穴住居跡1、配石跡1、集石土坑1、集石9、土坑17、小穴1,310、歴史時代竪穴住居跡4、掘立柱建物跡4、柱列跡(?)1、溝跡2、道路状遺構1、土坑16、小穴1,131である。

出土遺物の総量はコンテナ（40cm×60cm×10cm）にして約400箱で、先土器時代石器、縄文時代土器、石器、礫、歴史時代土器類、瓦磚類、鉄製品そして海獣葡萄酒1面がある。

Ⅲ 発掘経過

各遺構の調査進行状況については第1表にまとめた。また、調査工程及び発掘深度については第6図に示した。あわせて参照されたい。

なお、給排水、ガス管等の都遺への接続部分については、別途、予備調査を行い、遺構等がなく、工事による影響の無いことを確認した。

IV 先土器時代の調査

先土器時代の調査は、建物本体部分（D地区）と浄化槽部分（E地区）を対象に実施され、各々、465.00㎡、72.00㎡、合計537.00㎡が調査されるところとなった。

D地区における発掘区は、発掘基準線にあわせ、9m×12mの12区分を、西（PW区と仮称）中央（PC区）、東（PE区）の3ヶ所に設定して調査を開始した。

試掘調査の折に深掘りを行って得られていた層序に従って、IV層（ソフトローム）より順にジョレンがけをしながらPW区より先に掘り進めていった。試掘調査の結果、F070区VI層中より炭化物、FR66区VII層中より礫1点、同区同層と思われる排土中より黒曜石剥片1点がそれぞれ出土していたことや、縄文時代遺構・遺物の分布よりみて、西側のPW区周辺に先土器時代遺構・遺物が検出されるものと推定していたが、結果は反対に、東側のPE区に集中して検出された。まずIV層においては、PW区、PC区とも何も出土せず、PE区に至って尖頭器、石刃状剥片を伴う石器集中地点が検出された。そこで、中間に、12m×7mのPCW区とPCE区を追加設定して、IV層とVa層中まで発掘を行ったが遺物の出土をみなかった。Va層、Vb層においてもPW区、PC区には何もなく、PE区北東部において、Vb層中より黒曜石剥片・砕片が集中する石器集中地点を検出し、北へ延びるため1m×6mを拡張した。

VI層中において上面（IV層上）よりの深さが1.2mとなったので、安全確保とベルトコンベアーによる排土搬出を考慮して、北壁より2.2m、他壁よりは0.8m内側へ狭め、6m×4.2mの小区を、各区とも2つずつ設定して下層の発掘にかかった。

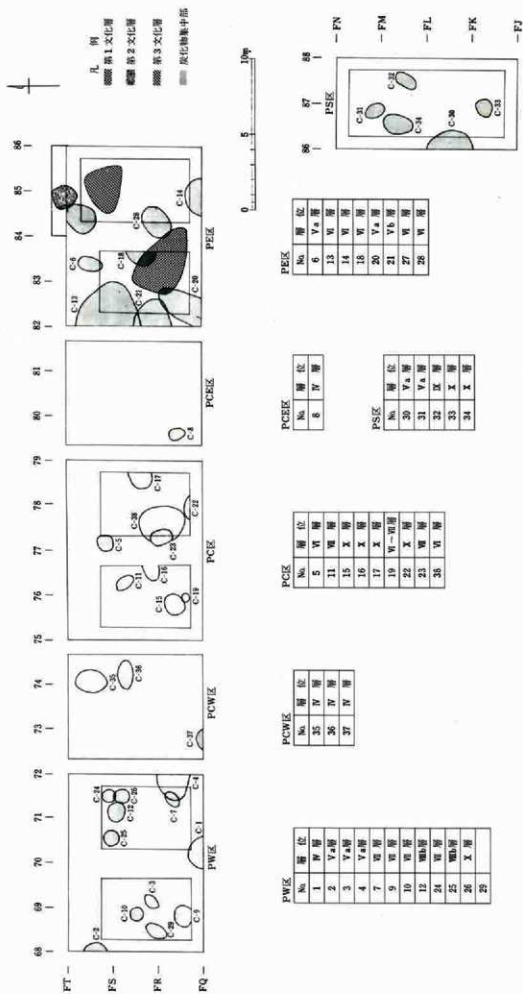
6小区とも全てX層中まで発掘したところ、PE東小区のIX層下部にて、黒曜石剥片等が集中する石器集中地点が検出された。北へ1.2m×4.2m拡張してそのひろがり把えた。

最後に断面観察の為に深掘りをPC西小区南側で実施し、XV層まで確認した。

E地区においても同様に、12m×6mの発掘区（PS区）を設定し、X層中まで発掘を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

ローム層中の炭化物について、各層毎の平面と壁断面においてジョレンがけ、鎌かけによって検出につとめ、38ヶ所の集中地点（C-1～38）を検出し、その一部については、サブトレントを設定して垂直分布の把握を行った。

石器集中地点とその遺物、炭化物集中地点などについて以下に詳述する。（福田信夫）



第7圖 先土器時代発掘区全体図 (1/300)

(1) 第文化層（第8・9図，図版4・6）

PE区のIV層（ソフトローム）より石器が検出された。内訳は，両縁背つき尖頭器2点，石刃状剝片2点，剝片2点，碎片3点であるが，他に5（石刃状剝片）と同一母岩の剝片を，同じくPE区のIII層（縄文包含層）中で検出しているため，合わせて11点の出土をみた。

分布状態（第8図）

一応の広がりには捉えられたものと考えられるが，少数の石器群がきわめて特徴的な出土状態を示しているといえる。

FRラインと83ラインの交差する付近に，径50～60cm程の範囲で5点の分布が見られ，それらの中心よりそれて，北側で2点の製品，東方向で2点の破礫が出土している。特に，2点の製品（両縁背つき尖頭器）は，分布の中心から，約60cm程はなれて，分布しているが，このような傾向は，本文化層に対比される武蔵野・相模台地上の遺跡では，しばしば見られる傾向であり，合せて，単独の製品として，他に同母岩をもたないかたちでもちこまれているため，その共時性に疑問が持たれたケースもある。しかし，このような分布傾向は，一般的なものとして認識しうることが，本資料は物語っているといえよう。

(1)
両縁背つき尖頭器

1は長さ3.2cm，幅1.3cm，厚さ0.5cmを計る完形品である。右縁先端の厚形細部調整を除いて，極厚形細部調整が施されており，左縁下半は1次剝離のままになっている。なお，調整の一部に，右手上極形細部調整も見られる。素材は，石刃状剝片ではなく，石核縁つき剝片の可能性が大きい。黒曜石製。

2は長さ6.0cm，幅1.7cm，厚さ0.5cmを計る。頁岩製の完形品である。基部に打面の一部を残すほかは，両縁ともほぼ厚形細部調整によって成形されているが，一部に，極厚形と侵形細部調整も見られる。裏面にも細部調整が観察されるが，ネガティブバルブは一切見られず，全て，表面の調整に先行する加工である。素材は剝片を利用したものと思われる。

石刃状剝片

5は，現存4.5cm，幅2.5cm，厚さ1.0cmを計るが，打面及びバルブの一部を欠損している。一応，長さが幅の2倍以上で，両縁も平行に近く，一稜石刃の範ちゅうに近いものではあるが，長さが欠損部を補っても，5cmに満たないものと思われるため，このタイプに含めた。溶結凝灰岩製。

8は長さ8.3cm，幅4.3cm，厚さ1.1cmを計る。ほぼ両縁は平行で，長さも幅の2倍以上を計るが，剝離方向は一定しない。表面の剝離面は3面あり，右上面→右下面→左面と切り合いが観察される。打面は上下両設で，上部の打面が主要打面と思われ，打面調整も観られる。左縁全体に細部調整が見られるが特に上半部のものが顕著であり，“刃こぼれ状の使用痕”と従来

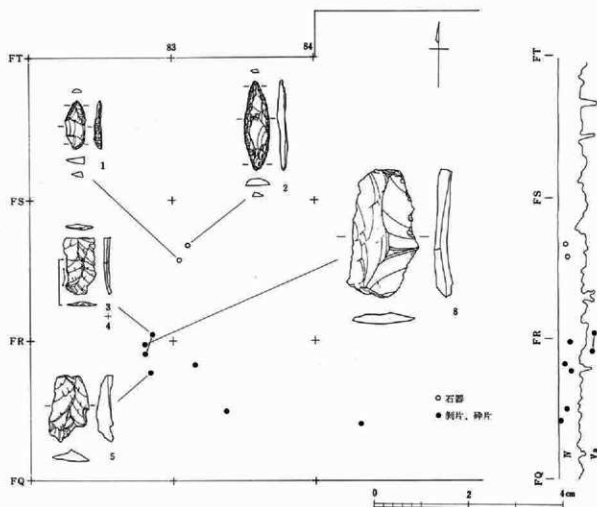
呼称されるものに相当する。安山岩製。

剥片

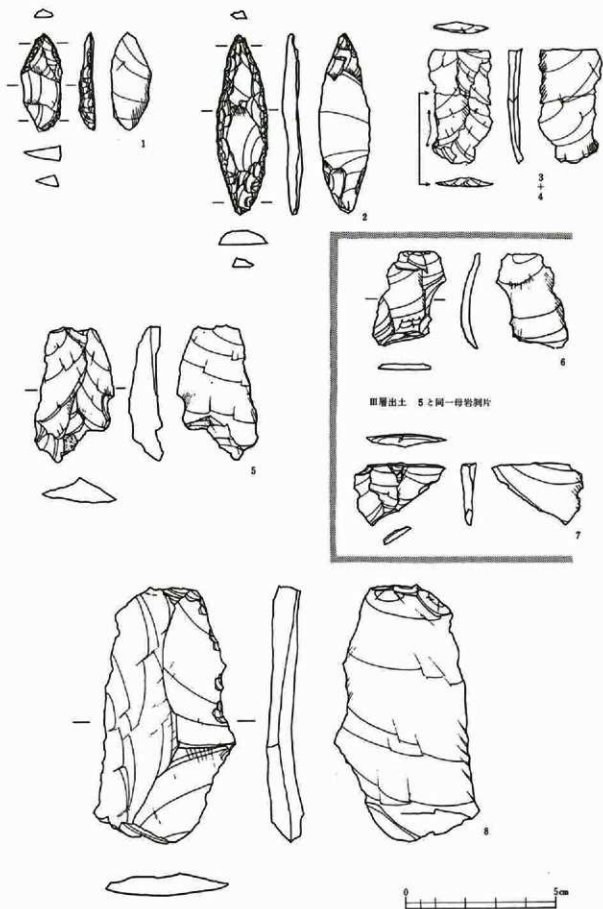
3と4は、接合によって石刃に復元されたもので、1本の石刃を少くとも3つに折りとったうちの先端から胴部にかけての2点である。折断面にはとくに打撃痕は観察されない。4の左縁に、微細な細部調整が観察される。頁岩製。

6と7は、ソフトローム層中の出土ではなく、同区Ⅲ層中の出土品である。しかし、5と同一母岩で石材も溶結凝灰岩と特殊であり、本来、同一集中地点にあったものが、何らかの2次的要因によって上層へ遊離したものと判断される。

6は、所謂ポイントフレイクの範ちゅうに含まれるものと思われ、打面が線状をなす。同母岩製の尖頭器は発見されておらず、5や7とも接合しない。



第8図 第1文化層(N層)遺物分布図



第8圖 第1文化層(N層)の石器

(2) 第2文化層(第10図, 図版4・6)

F T 84の南東隅のV b層を中心に、黒曜石製の剝片及び破片を主体とした径1 m程の小集中点を確認した。ウォーターセパレーションのような微細遺物検出作業を行っていないが、最初の破片を検出後、極めて慎重な掘削を行い、剝片・破片16点と小破礫1点を得た。

分布状態

平面的には、やや周辺に位置する数点を除いて粗密の差を感じさせない。しかし垂直分布では、中心部南側で最高30mのレベル差が認められるため、他遺物の安定したレベル(V a～V b層の層離面付近)と対称的なあり方をなす。これらをより詳細に検討すると、17点の検出剝片中、10点はV a・b層の層離面付近に、残り7点はより下位のV b層中に分布し、平面的にも後者は西側に片よって位置するようである。ただ、これらの分布のあり方と剝片の重量・法量とは全く関係なく、土壌形成過程に伴う2次的要因等との関係も不明である。

このように、単純なあり方をなすと思われる本例でも、それらの形成過程を論ずる場合、問題点は多く、ただ単に、“一時的な何らかの石器修復の場”と解するわけにはいかない。少くとも、平面・垂直分布における特徴にも説明を加え、“石器型式とその数量及びそれらの調整方法”までも分析対象とするが、これらは遺物の風土分析に請うところが大きい。

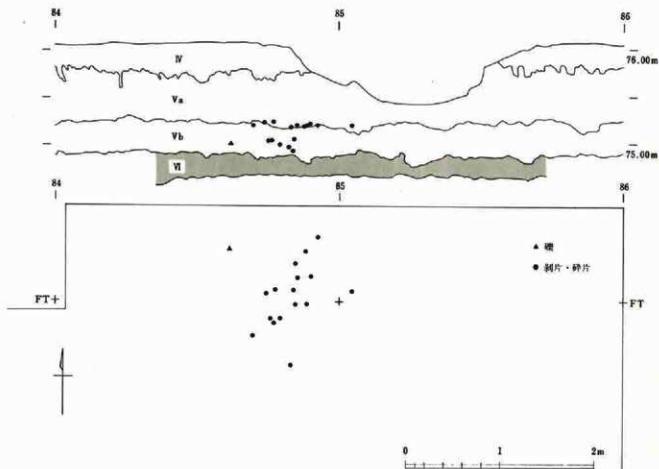
剝片・破片

検出された16点の剝片・破片について、以下に諸特徴を列記する。

- 1) 法量別に見ると、長さ1cm以上1点、1cm～5mmのもの9点、5mm以下5点で、特に1mm以下のものも1点存在する。重量別に見ると、0.50g以上2点、0.49g～0.10gのもの7点、0.09g～0.05gのもの1点、0.04g～0.01gのもの6点となり微細片が主体をなしている。
- 2) 石材は同一母岩の黒曜石と思われるが、微細化とともにその判定は困難となる。
- 3) 明らかに、搔器の刃部破片が1点含まれている。1cmを超える程度の小剝片であるが、刃部再生の著しい壁状剝離が観察される。刃部方向からの大きな剝離の結果生じた剝片であるが、刃部再生を意図したものか不明である。
- 4) 他に搔器刃部再生剝片と明らかに認定できるものはない。
- 5) これら剝片・破片は、技術形態学上の同段階の所産とは考えられないため、或いは、複数の石器がそこで調整された可能性もある。いずれにしても、詳細な属性分析を行わなければならない。今後の課題である。

(3) 第3文化層(第11・12図, 図版4・6)

F Sラインと85ラインのグリットライン交差付近を中心に、IX層下部において集中地点が検出された。出土点数は14点で、細部調整剝9片と剝片、破片である。石材は、頁岩1点と、微

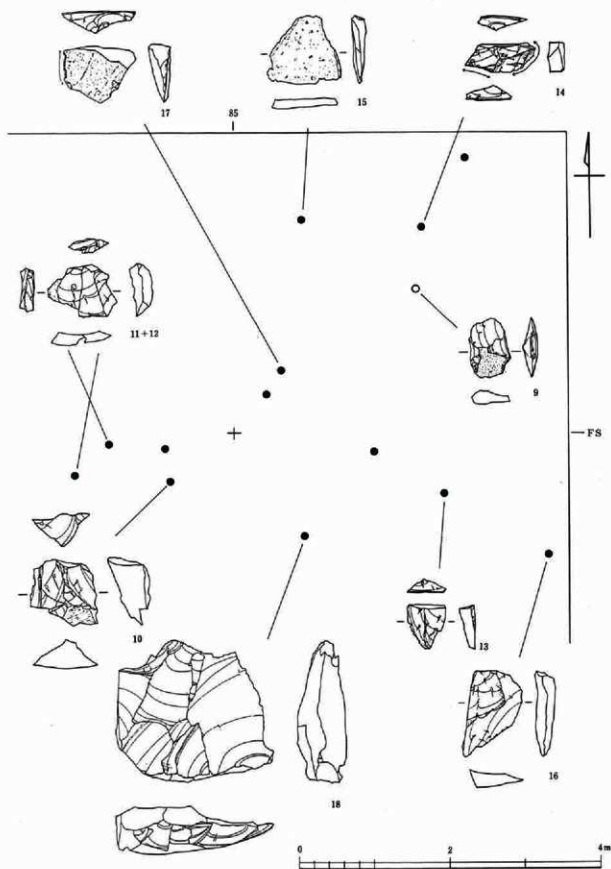


第10図 第2文化層（V層）遺物分布図

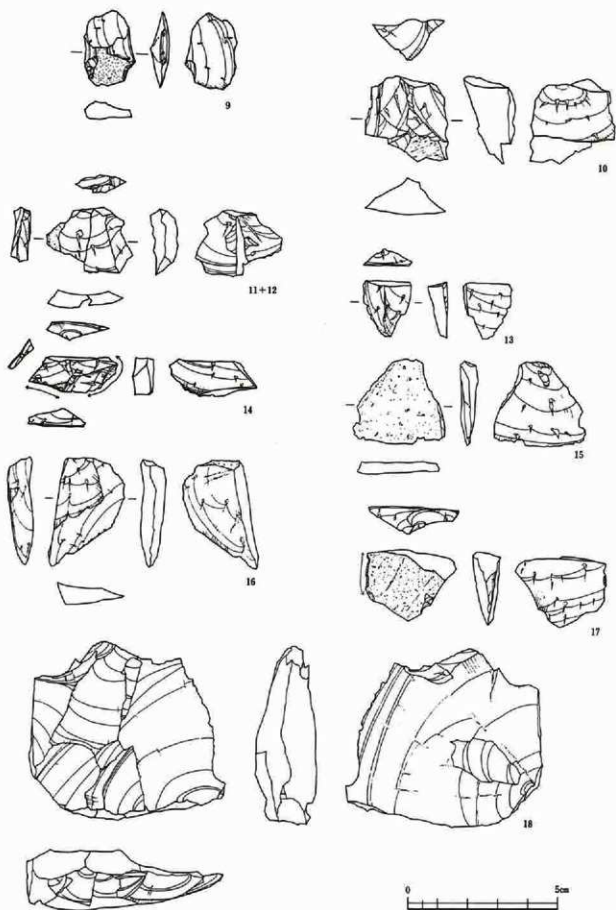
細砕片を除いて全て不純物を含む同一母岩の黒曜石と認定できる。

分布状態

限られた範囲の深層調査であるため分布的に1集中地点全体を捉えきれたものか明らかにしえない。ただ、同一母岩点13の剝片・砕片を検出しながら接合しえたのは、11及び12の垂直割れを起こした2点のみで、折りとられた剝片・原石面を有する剝片が多いことなどを考え合せると、これらと関連する他の集中地点が存在するか、この集中地点が北もしくは東の方向へ分布をのぼすことも十分に予測できる。また、剝片間の分布は、1m前後と比較的距離をもっており、接合する11と12も約60cmと離れていることから、それらの分布上の形成過程は注目に値する。また唯一の頁岩製打面再生剝片は、単独で、外殻に位置することも特筆され、単に、地質学的な土壌形成過程での要因は、あまり考慮されるべきではない。垂直分布としては、全てIX層下部に位置し、X層にくいこむものや中部より上へ遊離するものもない。



第11圖 第3文化層（K層）遺物分布圖



第12圖 第3文化層（K+層）の石器

細部調整剥片

9は、Ⅱ層下部出土石器としては、従来の分類で“ナイフ形石器”の範ちゅうに含まれるものであろう。右下に見られる細部調整は、0.5mm前後のきわめて微細なもので、左下は5mm程の調整も見られる。黒曜石製。

剥片

出土した剥片を一括して、以下に諸特徴を列記する。

- 1) 先端部がヒンジフラクチャー⁽²⁾をおこしているもの、9, 11+12, 15, 17, 18。
- 2) 垂直割れをおこしているもの、11+12, 16。
- 3) 折れ面の観察されるもの、9, 10, 13, 14, 17。
- 4) 原石面の観察されぬもの、9, 10, 11+12, 15, 16, 17。
- 5) 無調整打面を残すもの、10, 11+12, 15, 16。
- 6) 18は、打面再生剥片で唯一の頁岩製品である。

1)ヒンジフラクチャーや2)垂直割れなどは、これらの剥片の技術的特徴を顕著に示しているといえる。例えば、本格的な、石刃生産で知られる“砂川期”では、これら、2特徴を示す剥片は、多量な剥片数に対してきわめて検出されにくい。これは、広義の技術的差異によるものと見てよい。

一般に剥片剝離技術と称した場合、日本では、剝離方向や剥片生産の計画性を示すものと考えられているが、ここで言う技術差とは、A) hammer hardnessとB) 打撃方法をさす。B) 打撃方法については、複雑な様相を示すものと思われ、今後に多くの課題を残している。A) hammer hardness⁽³⁾については、大沼克彦等により、実験研究の成果が発表されている。これらの実験研究は、石器の使用痕研究に比べ、現在、研究者の納得範囲に入りやすく、確実性の高い議論として、今後、期待される分野の一つと言える。ここで大沼等の実験を通して検出剥片を見ると、顕著な“core of percussive”が、10, 11+12, 18に観察され、quartzite hammerのような高硬度のハンマーの打撃による剥片である可能性が高いといえる。しかし大沼の研究では、①ヒンジフラクチャーや②垂直割れについては言及していないが、それらの相関性の高さを予測させる。今後、剥片の属性分析とともに、精力的な研究が望まれるところである。

(4) Ⅲ層出土先土器時代及び縄文時代草創期の石器 (第13図, 図版6)

石 鏃

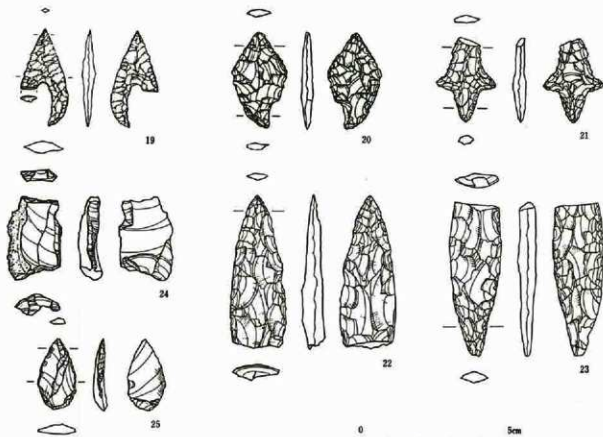
19は長さ3.1cm, 最大幅1.5cm, 最大厚0.5cmの大型石鏃で、学史的には、所謂“長脚鏃”と呼称された範ちゅうのものである。欠損理由は明確に示えないが、左脚を欠いている。断面観察からは、脚部調整時に於けるアクセントとも考えにくく、表裏とも、最終的なトリミングとも施されてると考えてよい。ひとまず、縄文草創期の所産である可能性が考えられる。

有舌尖頭器

21は、現存長2.7cm、最大幅1.9cm、最大厚0.4cmを計る有舌尖頭器である。尖端部を欠損しているが、製作時の折れとは考えられない。両縁とも鋸歯状を呈しており、やはり、縄文時代草創期の所産である可能性は強い。20と同様に、表面の最終調整が裏面のそれに切りかかっており、技術的な特徴をなす。裏面中央に、素材面が残されており、それらヘリング、全体的な反り等を考え合せ、縦長剥片を素材としているようである。凝灰岩製。

両面調整尖頭器

20は、長さ3.2cm、最大幅1.8cm、最大厚0.4cmを計る。チャート製の両面調整尖頭器であり、最大幅が、上半部側にある珍しいタイプである。ネガティブバルブの観察から、表、裏面の切り合いを視た場合、最終調整痕は全周縁ともに裏面側に見られる。裏面左基部にアクシデンタルな剝離痕が見られる。



第13図 III層出土先土器時代及び縄文時代草創期の石器

22は、現存長5.1cm、最大幅1.8cm、最大厚0.7cmを計るもので、基部を欠損している。調整は胴部では表面が、先端部では裏面が切りかかっており、技術的な特徴をなす。折れの原因については、製作時のものとは考えにくく、リングの観察より、表面方向からの力が加わったことがわかる。

23は、現存長5.2cm、最大幅1.7cm、最大厚0.6cmを計るもので、先端を欠損している。調整は、22に見られるように、胴部では裏面側、基部では表面側が切り勝っている。

細部調整切り面彫器

24は、長さ2.8cm、最大幅1.8cm、厚さ0.7cmを計る。良好な細部調整切り面彫器である。両端を切りとり、それらの切りとり面を打面として、上下とも1回づつ、彫刀面打撃が加えられており、上側は、ピンジフラクチャーを、下側は、調整痕の関係か若干のねじれを起こしている。石刃もしくは、石刃状剥片を素材としている。チャート製。

両端切りとり背つき尖頭器

25は、長さ2.4cm、最大幅1.3cm、最大厚0.4cmを計るもので、この型式の中では極めて小型のものと言える。両端は、極厚形細部調整により切りとられ、平面形態上では、きれいな線対称形をなす。左上縁の刃部には極めて微細なタッチが見られるが、大きさ、角度、連続性において、不安定である。黒曜石製。

炭化物集中地点（第7図、図版5）

38ヶ所の炭化物集中地点を検出した。層位別検出数は、IV層、5ヶ所・V a層、8ヶ所・V b層、1ヶ所・VI層、7ヶ所・VII層、6ヶ所・VIII層、2ヶ所・IX層、1ヶ所・X層(上部)、6ヶ所、その他・2ヶ所となる。PCW区とPCE区は、IV層までの調査にとどまるが、以下にその特徴を列記する。

- 1) 検出された3ヶ所の石器集中地点と、炭化物集中地点は、重複又は近接しない。
- 2) 概して、文化層の検出された層位では、炭化物集中地点の検出数が少ない。
- 3) 概して、径2m以内のものが主体をなす。
- 4) 調査区毎に、層位別の検出数の多少が偏在する。
- 5) V a～VI層に大型の炭化物集中地点が存在する。
- 6) 各集中地点とも、確認された炭化物は、微細なものばかりで、2～3mmに及ぶものもほとんどない。

炭化物集中地点は、その全てが人為的結果と捉えておらず、今後も慎重な分析が求められるが、本遺跡の場合、その立地条件が、崖線より200m程奥まった地域であり、石器集中地点を伴って検出されたものの方が少ないため、それらの在り方には注目すべき点が多い。⁽⁴⁾

(5) 小 結

本遺跡では、前述のとおり、先土器時代の3枚の文化層が検出されたものの、それらの個々の文化層は、各々1ヶ所ずつの石器集中地点で構成されるため、量的貧弱さはいなめない。

ここでは、これらの在り方を理解しながら、それらの編年上の問題についてもふれ、本遺跡の特徴を捉えることとする。

第1文化層

IV層（ソフトローム）からは、両縁背つき尖頭器2点を含む集中地点が検出された。レベル的には、IV層全体に位置し、特にV層（ハードローム）上部にくい込むものも少ない。2点の両縁背つき尖頭器は、技術的特徴、法量、石材に於いても差異が認められるが、分布最北部に極めて近接した状態で出土した。「砂川期」に於いて、製品として単独の両面調整尖頭器が、平面分布の外型部から検出される傾向があるが、これらの在り方にも比較されるべきもので、注目すべき特徴といえる。他に4母岩、7点の剥片や得られている。6、7は、石器の調整過程で剥出され、本地点に残された可能性があるが、他は、細部調整痕を有する。或いは、何らかの使用された可能性のある剥片であり、極めて近接した平面分布を示している。

このような量的に「貧弱な」あり方は、崖線上で発見される同時期の、豊富で良好な遺跡の集中地点と比べ、質量共に対照的な様相を示していると思われる。同地点に於ける、先住人の滞在時間、或いは回帰歩度、占有者数、作業内容等が複雑に関連した結果のあり方と見てよい。

炭化物集中地点や礫群が近接地域から検出されていない。このことは、本例の場の機能を解釈するうえで貴重な状況証拠となる。

また、編年上では、細石刃を共伴せず、両縁背つき尖頭器に、合石上極厚形細部調整が観察されることから、従来の武蔵野編年、第IIb亜文化期に比定されるのが順当であるが、剥片剥離技術や石材選択に於いて、特異なあり方をなすことも付記しておく。

第2文化層

Va層最下部からVb層にかけて、碎片等で構成される。小集中地点が検出された。重量で1gを超えるものは1点もなく(最大0.67g～最小0.01g)、小碎片が、主体をなすことが、うかがわれる。ただ、搔器刃部破片が1点のみ認められ、或いは、搔器刃部再生を行った、この跡かとも予想されたが、碎片の観察からは、それらを積極的に裏付けることはできない。1～3点程の石器の調整が行われたことは確かであるが、それらの石器型式までを捉えるに至らなかった。今後、詳細な属性分析を行う必要がある。この集中地点は、調査区北壁で発見されたためよりも、北もしくは東側へ関連する集中地点が存在する可能性もある。が、同レベルでの炭化物集中地点は近接地域になく、単純な様相を示すものかもしれない。

定形的な石器もなく、編年的な位置づけを与えることは困難であるが、層位的には、第Ⅱ a 亜文化期に比定されるべきであろうか。⁽⁵⁾ 編年作業上の問題である。

第3文化層

Ⅱ層下部で、黒曜石の剣片を主体とした集中地点が検出された。レベル的にはⅡ層下部で安定し、それらから上・下へ遊離するものはないが、平面的には、北東側の未調査区へ本来の広がりの一部を残していると思われる。

検出された13点の黒曜石製剣片は、認定の困難な微細片を除いて同一母岩と認定できるものの、剣離時に垂直割れを起こした11+12以外一切接合が見られない。

このような分布・接合状態などは、本文化層の特徴であると同時に、武蔵野台地の立川ロームⅡ層文化層の一般的なあり方とも共通点が多いと言える。

但し、前述の本調査地区の立地を考え合わせると、本集中地点の特殊性は明らかである。本調査地区は、ほぼフラットな台地上に位置し、野川に面する南側の国分寺崖線までは、直線で約200mを計り、従来の崖線上に位置する先土器時代遺跡とは極めて対照的なあり方をなす。今後、周辺地域の調査が進行すれば、近接する崖線上の遺跡と何らかの関係が捉えられるかもしれない。編年的には、その出土層位から第Ⅱ b 亜文化期に比定されるものと思われるが、その内容性からは、第Ⅱ a 亜文化期であっても何ら矛盾はない。やはり編年作業上の問題である。

以上で3文化層のあり方を概観してきたが、3ヶ所の石器集中地点ともに、共通点がいくつか指摘できる。

- 1) 単純な母岩群構成をなす。
- 2) 近接地域に、礫群や炭化物集中地点が存在しない。
- 3) 接合する遺物点数が少ない。
- 4) 集中地点を構成する遺物は、ほとんどが石器類で、礫は非常に少ない。
- 5) どの集中地点も数量的には小規模である。

上記1)～5)のあり方が、各集中地点での滞在時間或いは回帰歩度、集団の規模、行動内容及びそれらの複合性等の結果形成されたものであるとするならば、崖線上の遺物量の豊富で、良好な遺跡は、これらと正反対なあり方といえ、どちらがより研究者の理解しやすい内容をもっていると言えるであろうか。行動の最小単位を抽出・集積し、それらの操作・比較分析の中に遺跡を理解する基本的な視点が存在すると認識する我々にとっては、本遺跡の資料は最も良好な資料であった。

(富樫雅彦)

註1) 用語(石器型式名)については、山中一郎(山中一郎他1980日本の旧石器の分類体系)に従った。氏の

用語は、「ナイフ形石器」のようなある種の機能を想定した「解釈概念」ではなく、石器を技術形態学的に捉えようとする「分析概念」であるため、厳密で客観的な議論を行うためには、現在、提出されているものの中で、最も体系的である。

- (2) 他にヒンジフラクチャーや垂直割れの顕著な例として立川ローム層IV層下部の石器群(例・織笠明他 1980鈴木遺跡II)などが上げられる。
- (3) Katsuhiko Ohnuma: Christopher Bergman "Experimental Studies in the Determination of Flaking made" Bulletin No. 19: 1982 Institute of Archaeology University of London.
- (4) 本遺跡では、文化層の確認されたIX層ではあまり顕著な例が存在せず、文化層の確認されないX層では良好な集中地点を6ヶ所も得た高井戸東遺跡(小田他 1977)でも同様傾向が確認され、特にX層では石器集中地点と離れて、調査区最北部付近でも確認されている。
- (5) 資料が増加し、より複雑な様相を呈してきた現在、編年作業の方法は今日的に明示されなければならないと思われる。

第2表 石器観察表

No.	型式名	現在長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	長幅比	厚幅比	重量 (g)	石 材	折れ面 有 無	備 考
第1文化層										
1	縁背つき尖頭器	3.2	1.3	0.5	2.46	0.38	1.5	黒曜石	—	} 接合 同母 同岩
2	"	6.0	1.7	0.5	3.53	0.29	5.9	"	—	
3	剥片	(2.0)	2.0	0.4	—	0.20	1.5	"	2	
4	"	(2.0)	1.9	0.3	—	0.21	1.3	"	2	
5	石刃状剥片	(4.5)	2.5	1.0	—	0.40	7.9	溶結凝灰岩	1	
6	剥片	(3.2)	1.9	0.3	—	0.16	2.3	"	1	
7	"	(2.1)	2.9	0.5	—	0.17	1.9	"	1	
8	石刃状剥片	8.3	4.3	1.1	1.93	0.26	35.3	安山岩	—	
第3文化層										
9	細部調整剥片	2.4	1.7	0.6	1.41	0.35	1.9	黒曜石	1	} 同 母岩 接合
10	剥片	(2.9)	2.6	1.4	—	0.54	8.1	"	1	
11	"	1.7	1.4	0.5	1.21	0.36	1.7	"	1	
12	"	2.1	1.5	0.8	1.4	0.53	1.8	"	1	
13	"	(1.9)	1.5	0.6	—	0.4	1.1	"	1	
14	"	(1.2)	2.5	0.7	—	0.28	2.0	"	3	
15	"	2.8	3.0	0.6	0.93	0.20	3.6	"	—	
16	"	3.6	2.2	0.8	1.45	0.36	4.4	"	—	
17	"	(2.4)	3.0	0.9	—	0.3	4.7	"	1	
18	打面再生剥片	6.4	5.8	2.1	1.10	0.36	73.6	頁岩	—	
Ⅲ層出土先土器時代及び縄文時代草創期の石器										
19	石 鍬	3.1	1.5	0.5	2.07	0.33	1.0	チャート	1	}
20	両面調整尖頭器	3.2	1.8	0.4	1.78	0.22	1.5	"	—	
21	両面調整尖頭器	(2.7)	1.9	0.4	—	0.21	1.2	凝灰岩	1	
22	両面調整尖頭器	(5.1)	1.8	0.7	—	0.39	6.3	チャート	1	
23	"	(5.2)	1.7	0.6	—	0.35	5.7	安山岩	1	
24	組部調整切り面彫器	2.8	1.8	0.7	1.56	0.39	3.9	"	—	
25	両端切りとり背つき尖頭器	2.4	1.3	0.4	1.85	0.31	0.9	黒曜石	—	

V 縄文時代の調査

縄文時代の調査は、遺物部分（C・D地区）、道路部分（E地区）、浄化槽部分（F地区）において実施され、調査総面積1,949.4㎡となった（第6図）。この内C地区については、IV層（ソフトローム）上面の遺構確認作業までとし、III層中の遺構・遺物についてのみ調査した。また、B地区については、歴史時代調査時に露出している遺物のみ取り上げることとした。

さて、縄文時代の調査は、試掘調査の予測を上回る数量が検出され、長期に亘る結果となった。とりわけIII層（包含層）中より遺物が多量に出土したこと、遺構確認面が3枚（SS2の配石跡などのIII b 上部）、SS3～12、SI171などの大半の遺構がとらえられるIII c 層上面、SK324土坑などIV層上面に至って検出されるもの）あることなどがあげられる。即ち、SS2配石跡等の調査→III b 層の発掘→III c 層上面での遺構確認、調査→III c 層発掘→IV層上面の遺構確認、発掘という工程を全ての発掘区において行った。

以下に調査の概要を記す。

1. 検出遺構

縄文時代に属する遺構は、竪穴住居跡1（SI171）、配石跡1（SS2）、埋壘2、遺物集中地点1、集石・集石土坑10、土坑20、ピット1,608（内311は確認のみ）である。いずれも検出面並びに堆積土、伴出遺物により縄文時代のものと判断した。

(1) 竪穴住居跡

SI171住居跡（図面20、図版10）

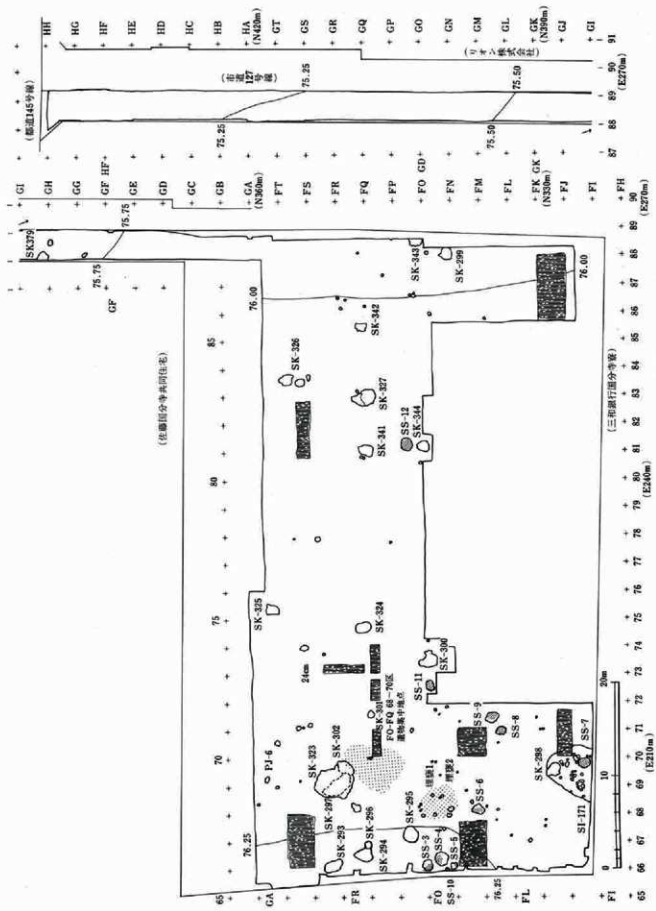
F1・FJ・68～70区に所在する。東西5.2m、南北6.3m以上の規模で、南半は調査区外。西壁はやや直線的で、北・東壁は丸味を有す。隅丸の長方形となるものか。西壁方向はN33°E。SS7集石、SK298土坑と重複しており、いずれよりも古い。

III c 層上面にて確認されたが、南壁断面等の観察の結果、III b 層中位までやや不明瞭ながらも壁の立上りが認められる。壁はやや緩やかに曲線的に立上る。壁高はIII b 層中位よりは最大34cm、III c 層上面よりは最大26cm。周溝はなかった。

床は比較的明瞭に堆積土層と識別され、とらえられた。IV層（ソフトローム）上部まで掘り下げ、直接床としていた。住居中央部が若干凹むも、ほぼ平坦であった。

炉もしくは焼土等の痕跡は認められなかった。

床面上にて検出された31個のピットの内、住居跡と関連あると思われるピットは572・573の2つのみで、共に堆積土上層（暗褐色土）が住居跡堆積土下層に近似していた。ピット572・



第14圖 縄文時代晚期遺跡全体図 (1/400)

V 縄文時代の調査

573は連結しており、底面を2つ有すピットで堆積土は等しい。共に30cm×40cm、深さ15cm前後。他のピットは褐色土～暗黄褐色土で、浅く、壁も明瞭にとらえられないことなどから周囲にも検出されているものと同様に自然の営為によるものが大半であると思われる。

住居跡堆積土は上層より、暗褐色土、暗褐色土(黒色味あり)、暗黄褐色土の順にはほぼ安定して若干レンズ状になっている。調査時において、東壁がとらえにくかった。というのはこの部分のⅢc層が住居跡堆積土に似て黒色味ある暗褐色土であったことによる。一応南壁断面にて、住居跡壁の立上りが確認できたので、住居よりも古いもので、人為的落ち込みのあった可能性がある。

遺物は南東部に多く集中している。上層より下層まで平均的に出土しているが、北及び西では床面近くの出土が少なく、南東方向へ傾斜していることが断面投影図によって判る。床面直上の遺物はない。

305点の遺物の内、土器が160点、石器・剣片が18点、礫が127点で、接合例は、土器に2例あるのみで、土器の大半は小破片資料であった。

木跡には炉及び明瞭な柱穴が存在しないが、隅丸の長方形を量すとと思われる平面形、5.2m×6.3m以上という規模、明瞭にとらえられた壁、床とその形状などから竪穴住居跡と認定した。

出土土器の総数160点中、1群(撚糸文系)118点、2群(押型文系)1点、4群(条痕文系)8点、6群(中期後半)1点、不明32点、であり、1群の出土比率が高い、その内訳は、第3表に示す通りで、1群の内7類(撚糸施文体部)30点(内、節が中位で縦位の無文部やや多いC種が20点)、12類(無文口縁)24点(内、a種の口辺直で、棒状でやや丸味を帯びるもの一20点)、17類(無文体部)49点などが出土比率高い。6類b、7類b、14類a・bなどの新しい様相のものも含んでいる。以上の遺物は全て堆積土中のものであり、住居跡の所属時期を示す良好な出土状態の資料はなかった。そして明らかに、多時期に亘る遺物が混ざりあっているが、住居跡の所属時期は出土比率の高い一群の示す時期に遅くないものと考えられる。即ち、第1群(撚糸文系)稻荷合式期(古)から稻荷原式(新)にかかると時期のものとすることができよう。

(2) 配石跡

S S 2 配石跡(図面21, 図版11・12)

F N・F O・67～69区に所在する。Ⅲb層上部において確認されたもので、東西4.0m、南北3.9mで、径約4mの円形の範囲に石器・礫・土器が集中する。埋壙1が中心点より南東へ0.7mの位置にあり、これより東へ2.3mの位置に埋壙2がある。

構成遺物の総点数は246点。土器が62点34個体、石器が56点、礫が128点である。埋壙1周

V 縄文時代の調査

辺、即ち中央付近と周縁にややまとまる。土器片は中央に多い。この内埋壺1の接合、同一個体破片が7点ある。周縁では、北隅に、打製石斧が5点あり、長軸を中心にほぼ直角方向に向けていた。北東部では打製石斧1点、磨石2点、石皿1点に混じって、定角式磨製石斧1点が長軸をほぼ中心方向へ向けて出土した。この外、南東部の集中域の内、石枕形の石皿(図面47-2)は、若干傾斜した状態——立石風——で検出された。出土位置のレベルはほぼ水平であり一定している。

構成遺物の内訳を記す。土器62点34個体の内、1群(早期燃糸文系)が2点ある外は、全て6群(加曽利E式)である。1類aが20点、1個体、1類bか2類aが5点、3個体、2類aかbが2点、1個体、2類cが8点、2個体、6類cが3点、2個体、7類bが4点、5個体、1・2類の胴部片が9点、9個体、8類bが9点、8個体、不明小片が5点である。比較的大破片が多い。

石器の内、15点が3類、打製石斧で最も多い。定角式磨製石斧が1点。磨石の6点は打製石斧に次いで多い。石皿はa(有縁のもの)が6点の外、計11点ある。11類a(棒状碟)が4点と目立つ。他にスタンプ形石器が2点、フレイクが17点ある。

竪の大半は焼成を受けており、石器・フレイクを含めた184点の内、未焼4点で、11点にスス状黒色付着物が認められた。復元度は比較的高い。石材別にみると、砂岩が多く、チャートが少なく、その他のものが多いが、石器・フレイク等を含む集計のためと思われる。計測した119点の総重量は36,832g、50g以下が62点と半数近くを占めている。

埋壺1は、上半と下半を欠失しており、口縁から胴部にかけてほぼ一周する1個体の土器が正位に埋設されたもので、掘り方は不明瞭で、Ⅲb層より若干暗い程度であり、上面幅26cm、深さ26cmで、平面形はおさえきれなかった。

埋壺2は、正位で下半を欠失し、口縁から胴部が西方へ倒れており、胴部は次第に直立に近くなっていた。ほぼ1/2周ほど復元でき、他は細片となっていた。掘り方はとらえられなかった。検出レベルは埋壺1にはほぼ同じである。

本跡には、炉は検出されなかった。わずかに、埋壺1の断面観察の際周囲の地山土に、木炭粒が検出されたにすぎない。住居跡を想定して、壁、床、柱穴などの検出につとめたが、何ら検出されなかった。掘り下げて、Ⅲc層上面及びⅣ層上面において、P1~P19の19個の小穴を検出した。この内P1~P13まで発掘し、P14~P19は検出までとなった。これらの内、P20はⅢb層中位、P3~P5がⅢc層上面にて検出された他は全てⅣ層上面にて検出された。堆積土や壁の検出状況より比較的良好な小穴は、P1、P2、P3、P4、P6、P7、P8、P9、P11、P13、P14、P16、P17、P18などで、暗褐色土を主体とする堆積土である。P10、P12、P19などは暗黄褐色土で、自然の常為等によるものと思われる。深さを検出面からの数

字とSS2検出面からの数字の順に羅列すると、P1(25, 63), P2(10, 53), P3(7, 50), P4(6, 51), P5(5, 55), P6(22, 62), P7(26, 62), P8(20, 56), P9(30, 67), P10(26, 64), P11(20, 61), P12(8, 54), P13(23, 58)となる。これら小穴に特に規則的な配置は認められないもの(強いてあげるなら、P6とP7が対峙しており、柄鏡形住居連結部の対ピットを想起させる。)、SS2配石跡の周縁に散在すること、周辺においてこの様に良好な小穴がまとまって検出されていないこと、P3が小さく、P8が大きいのを除くとほぼ同規模であり、深さもSS2検出面からの数字を拾うと50~60cm前後におさまること、などを勘案すると、SS2配石跡に伴う可能性を否定できない。ただし、P3, P6, P7, P8, P9, P17などはSS2に配置された遺物と重なってしまう。全てを同時存在と考えなくても良いのであるが、この点不安材料である。

小穴内堆積土は暗褐色土を主体としていたが、これらはⅢc層、Ⅳ層以下の堆積土であり、より上位から掘り込まれているとすると、さらにその上部に、周囲の地山(即ちⅢb層—暗茶褐色—暗褐色土)の影響を受けたより茶褐色味のある堆積土があったことが考えられるので、この場合、Ⅲb層上面即ち、SS2の検出面において、当該小穴の掘り込みを検出するのは極めて困難なことであり、現実には、検出出来得なかったことから考えて、上記の様な事情があったものと解せば、小穴群がSS2配石跡に伴うことの説明はつく。

同じく下部より浅い土坑状の落ち込みが数基検出されたが、こちらは全て地山土のⅢc、Ⅳ層よりわずかに色調が暗い程度で、明瞭な掘り込みといえず、自然の常為等によるものと思われる。しかもこれらは、配石面までの立上りが確認されなかったので、全く別のものと思われる。あるいは、長期的にわたって、グラウンドシートをかけていたことや、この部分のみ注視したことなど、人為的な力が作用したものと考えられる。

埋壙1は、その位置、接合、同一個体片の分布などよりみて、配石跡に伴うものと理解されるが、埋壙2については伴うか否か問題ある。検出面はほぼ同じであるし、時期もほぼ同じである。しかるに埋壙2の破片は、配石跡の範囲になく、ほぼこの埋設位置付近に集中して出土している。そして、埋壙2と配石跡の間は、空白部分となっている。

埋壙1と2の間を張り出し部(柄部)とし、先述の下層でとらえた小穴群を柱穴として考えると、本跡を柄鏡形住居ととらえることができる。

小金井市前原遺跡4号住居(伊藤1976)は、竈、柱穴、炉などを取り除くと、本跡に共通する部分が多い。同跡は、隅丸長方形の主体部に長楕円形の張り出し部(柄部)が連結する柄鏡形で、長軸辺長5.7m、短軸辺長4.0m、主体部4.4×4.0m、柄部1.8×1.0mの規模で、壁高0.2×0.25m、周溝はなく、浅い地床炉が1ヶ所中央に位置し、柱穴は、主体部に42本、柄部に2本検出された。埋壙は4個体ある。床面から出ているものと床面レベルまで埋設したも

V 縄文時代の調査

の各々2個体ずつである。前者は、南側コーナーの正位の深鉢（胴下半欠失）と東側コーナーの逆位の深鉢（胴下半欠失）の各例、後者は、連続部の正位の深鉢（完形）張り出し部（柄部）最奥部の正位の深鉢（完形）の2例である。その他の遺物は、壁から約0.5mの空間を囲って一周ぐる支柱列に沿って、床面上に配列されており、柱穴列と明瞭にあらわれていることから上壁架構後に配置したものと推察している。比較的小形の焼土が多い他、石棒、「石偶的な人形の可能性ある」打製石斧、大小土器片などを配置する。

さて、本例に戻ると、SS2検出レベルにおいては「壁」は削平してしまっただと考えることもできるし、例えあったとしても、Ⅲb層上部という不安定な土層にあって検出は容易でなかったと考えられる。次いで「床」についても同様であり、前原例の様に、軟弱であるとすればなおさらのことと考えられる。ところが「炉」については、同様に解することは難しい。何故なら、焼土、焼け面が残ってしかるべきだからである。前原4号住居例の様に、浅い地床炉であったとしても、何らかの痕跡はとらえられるのではないかと考える。この点で、本跡に「炉」が検出されなかったことは、柄鏡形住居とするに弱い材料となる。

上述した様に、本跡と埋窠1・2をもって柄鏡形住居跡と認定し得る可能性は指摘できるが、確定するに足る根拠に乏しいので、本項では埋窠1を伴う配石跡と単独の屋外埋窠として扱うことにした。

(3) 遺物集中地点

発掘調査時点において包含層中に遺物が集中的に出土する範囲が幾つかとらえられていた。FO～FQ・68～70区の加曾利E式土器を主とするもの、FQ～FS・78～82区周辺の同じく加曾利E式土器を主とするもの、FO～FP・84～86区周辺の後期土器群を主とするものなどである。後二者については、整理段階で分布図を作成して、よりその集中度を認識した次第である。これらについては後節で触れることとし、ここでは前者について、遺物集中地点として取り扱うことにした。

FO～FQ・68～70区遺物集中地点（図面30、図版12）

当該区の範囲において、東西5.3m×南北6.3mの規模を有する。西南↔北東の方向性を持つ。歴史時代遺構検出時において、最初に発見された歴史時代遺構は、Ⅲ層上部のⅢa層下部からⅢb層上部あたりで検出した。本地点は、Ⅲ層上部のⅢa層からⅢb層にかかる上下10cmほどの厚みをもって集中的に分布しているといえる。というのも、Ⅲa層とⅢb層の境は平面においては明確にとらえられるものでなく、本地点の層位についても、近くを通るベルト断面図から推定の規模になった。図示した歴史時代遺構検出面とするのは、同平面図よりとったレベルでⅢb層上とⅢc層上は近くを通るレベル断面図よりの数字。なお投影図は、遺物下のレベルをとって、水平におきかえたもの。

V 縄文時代の調査

以上のことから、比較的明瞭に構成遺物を包含層中の他者と区別し得る。その総点数は198点。土器が122点、礫が70点、石器が6点で、土器の内80点が分類され、30点は分類不可細片等である。

80点の内、第1群（燃糸文系）が4点、第4群（条痕文系）が1点、第5群（中期前半）2点の外は全て第6群（加曾利E式）で、第VI段階に相当する同群2類と6類、及び第VI～VII段階に相当する同群3類～5類を含んでおり、土器より本地点の所属時期を加曾利E式第VI～VII段階に位置づけることができる。

接合図から明らかな様に、西南⇨北東の方向で、接合関係が多く認められ、この内、中心となるのは、図面33-1・2の2個体の深鉢で共に胴下半が大きく欠失している。この2個体で計65点あり、半数を占める。

このように、土器は絶て破片で出土し、完全に復元された個体はない。狭い範囲に集中して垂直分布域も薄いことなどから考えて、比較的短期間の内に、西南⇨北東の方向に土器や礫などが廃棄された結果、本地点が形成されたものとする事ができる。33-1と2の土器は、胴下半部が欠出していて、その出土をみていないが、想像をたくましくすれば、残る下半部については引き続き容器などとして使用し、上半の割れた部分について不用になったため、本地点にまとめて廃棄したものということができよう。

なお、伴う落ち込みなどは検出されなかった。

又、SS2配石跡出土遺物との接合、同一個体関係を持つ資料はないが、SS2の埋裏を除く土器片は第VI段階に相当するものが多く、本地点の西南に近接する位置関係よりみても、何らかの関連を有していたものと考えられる。

(4) 集石

遺物包含層中より多量の焼礫が出土したが、この中において、明らかに人為的作用の結果、礫が集中していると確認される部分があった。これを集石と称して、調査を進めた。以下に記す様にSS3～12の10箇所を数えたが、これらを大きく2つに分けることができる。これをAとBとする。集石Aは径1mほどの規模で大・小の礫が集中し、下部には掘り込み不明瞭な落ち込みが確認され、焼土粒、木炭粒などを伴出しなもので、SS3～11集石が該当する。集石Bはいわゆる集石土坑と称されるもので、明瞭で大形の掘り方（土坑）内に小破礫を主とする焼礫が多量に集中しており、多量の木炭と焼土粒を伴う。SS12の1例のみがある。

SS3集石（図面21、図版13）

FN・FO65・66区に所在し、付近にSS4・5・10がある。東西0.8m、南北1.0mの範囲に礫が集中する。下部に、包含層より若干暗い程度の不明瞭な落ち込みがある。その規模は、東西1.2m×南北1.0mの不正形、深さ0.15mなどで凹凸あり、遺物のレベルはほぼ同じくして

Ⅲc層上部にある。

構成遺物の総数は34点。土器はない。石器は6点あり、石皿が5点と台石が1点である。礫は28点。

第9表に従い説明する。石器、フリイクを含む34点の資料とした。1)石材は砂岩が17点、チャートが13点、その他が4点。2)破損度は、接合作業前における完形資料が5点、破片資料が211点で破礫の占める割合が高い。これに3)接合作業後の観察では、完形資料5点、破片資料29点、合計個体数34点となり、この場合接合例がないことを示すわけである。なお、同一母岩認定作業は行っていないので、破片数はそのまま個体数と対応している。次に4)焼成状況を見ると、火熱を受け、赤色を呈すもの34点、同じく火熱を受け灰色を呈すもの0点、未焼のもの0点であり、全て焼燼である。最後に5)黒色付着物の肉眼観察によれば、スズ状の黒色付着物がみられたもの1点、タール状の黒色付着物がみられたもの0点、何もなかったもの33点であった。

第10表によって、構成礫の重量についてみてみる。50g毎の点数を表にした。総数34点の内計測可能な29点をみると、総重量31,204g、最小3g、最大3,020gで50g以下11点で、100g以下は17点となり過半数となる。完形の資料5点の内、100g以下は1点と少なく、これは他の集石と共通する。

本跡の所属時期は、これを決する資料の出土をみていないので、確定されないが、礫の出土レベルよりみて早期の所産の可能性が強く、このことは他跡に共通する。

SS4集石 (図面22, 図版13・14)

FN66区にあって、SS3の南東1.5mに位置する。東西1.1m、南北0.9mの範囲に礫等が集中する。下部に不明瞭ながら、落ち込みを検出した。東西、南北共1.5mの不正円形、深さ0.2m、やや摺鉢状を呈する。中央に0.4m×0.5m、深さ0.8mの円形のピットがあり、堆積土は暗褐色土を主とする。

構成遺物総数は土器6点を含む103点、石器1点、礫96点である。土器は全て1群(撫系文系)であり、7類2点、12類1点、17類2点と稻荷台期の様相を呈しており、本跡の所属時期もそこに求められる。礫の観察結果は第9・10表に示す通りで、小形の焼燼が多くを占めるのはSS3などと変りないが、150~450g位までのものがやや多く、接合資料が多い。

SS5集石 (図面22, 図版13・14)

FM・FN、66区にあって、SS10に近接する。東西0.6m、南北0.6mの範囲に礫等が集中する。下部にⅢc層に比べ若干暗い暗褐色土の落ち込みがあった。東西0.6m、南北0.7mの不正円形で、検出面より4~5cmと浅く、図では礫集中部とずれて北側になっているが、断面図の通り、礫集中部まで延びていたものと思われる。礫はほぼ水平にあって、まとまっている。

構成遺物の総数は66点。土器は1点のみで、1群17類（燃糸文系の無文体部片）である。礫は全て焼成を受けて赤変し、破片がほとんどで、接合資料が多い。

SS6集石（図面23，図版14）

FM68区に位置して、周辺における包含層中の礫はやや少ない。東西0.8mの範囲に礫が集中する。下部に、東西1.1m、南北1.4mの不正円形の落ち込みあり、深さ4.2m前後。礫はほぼ同レベルにまとまる。

構成遺物は土器4点を含む76点。土器は全て1群（燃糸文系）である。石器はスタンプ形石器と片刃器各1点がある。礫は70点で、石器2点を含む72点の資料の焼成状況等は第9・10表の通りであり、接合資料がやや多い。

SS7集石（図面23，図版14・15）

FI69区のSI171住居跡の堆積土上にある。東西0.5m、南北1.0mの範囲に焼礫等が集中する。下部に東西1.1m、南北1.3mの長円形プランの落ち込みがあり、断面は丸底風で、深さ最大0.15mと浅い。暗褐色土を主とする堆積土で、住居跡堆積土中という条件にもかかわらず、比較的とらえやすかった。既出のSS3～6集石下の落ち込みと比べ、やや明確な落ち込みとすることができる。礫はほぼ同レベルでまとまる。

土器27点を含む構成遺物の総数は67点、石器が2点、礫が40点である。土器は27点と多く1群（燃糸文系）が23点と大半を占めているが、1群（燃糸文系）の時期に比定されるSI171住居跡と重複していることを大巾に差し引いて考えなければならない。

礫は、完形のものが比較的多く、しかも、50g以下は8点にすぎず、100g～350gのものが多。

SS8集石（図面24，図版15）

FL69・70区にあってSS9集石と隣り合う。包含層中であっても最も多く礫の出土をみた範囲である。東西0.8m、南北1.1mの範囲に礫が集中する。下部に東西0.9m、南北1.2mの落ち込みあり、堆積土はⅢc層に比べ若干暗い程度で不明瞭。深さ0.2m（最大）で、摺鉢状。礫はほぼ水平にまとまっていた。

構成遺物は土器4点を含め76点。土器は4片とも、第1群（燃糸文系）。礫にまざって磨石1点がある。礫は71点で、この内、大形（400g～1,000g）で、完形のものの存在が目立つ。

SS9集石（図面24，図版15・16）

FL71区に所在する。東西1.1m、南北1.3mの範囲に礫が集中する。下部の落ち込みは摺鉢状で、東西1.2m、南北1.4mの上面不正円形、深さ最大0.3m。

上部の礫を取り除き、少し掘り下げたところ、大きめの礫が面をそろえる様にして“配石状態”で検出された。東西0.7m、南北0.8mの規模で中央が浅く凹む。35個の構成礫の総重量

は、28,215g(33点)で、平均855gの粗礫である。周縁の礫は、やや立ちぎみかやや傾斜して、中央はほぼ水平。これら配石状の粗礫の下部にはほとんど礫はなく、集石の最下部に位置している。集石下の落ち込みは中央部が最も深く、粗礫下面より約20cmを測る。粗礫の下面にて特に変わったところもなく、粗礫の上部、下部と堆積土に明瞭な差異を認められなかった。粗礫の上部には、比較的小形の破損礫が多く、89点、14,854g、平均167gと、粗礫との重量比 $1/16$ 以下であった。両者の礫を比較すると、まず第一に、完形礫の割合が粗礫の方が多く、33点中20点が完形で、上部礫は89点中7点のみである。重量別点数表によると前者が330g以下4点、351g以上29点であるのに対し、後者は75点と7点となり、総合すると下部の配礫状の粗礫は350g以上の完形礫が多く、上部の礫は350g以下の小礫が多い。石材、接合状況はかわらないが、焼成状況を見ると、上部小礫が赤変101、灰変12、未焼6に対して、下部粗礫は33点全てが赤変である。さらに黒色付着物の有無をみると、上部小礫の内18点にスス状のものが認められるのに対し、下部粗礫では33点とも何も検出されなかった。以上のことから、これら両者は明らかに、別の経過を経て、同跡中に埋没されたものと思われ、下部の粗礫が配礫状にあったことを、人為的要因によるものとすることができ、使用時あるいは、廃棄時等の状況をあらわしているものと思われる。

又、堆積土下層(粗礫の下部)より、硬質炭化物1点(5mm×7mm)が検出された外は、焼土粒は検出されなかった。

礫にまざって石器10点がある。打製石斧1点、磨石5点、石皿1点、スタンプ形石器3点と多く、内、打製石斧を除く全てが火熱を受けていた。

土器片は10点あり、全て、第1群(燃糸文系)である。礫と混在しており、上部の小破礫と伴出するものが多い。

SS10集石(図面25、図版16)

FN65・66区にあって、SS4・5に近接する。調査区西断面にかかって検出されたもので調査区外へ延びる。東西0.4m以上、南北0.6mの範囲に礫が集中し、下部には、東西0.5m以上、南北1.4mの上面不正円形、断面撻鉢状の落ち込みがある。堆積土は、黒色土、暗茶褐色土、暗黄褐色土を主とする。西壁断面によると、Ⅲb層中位よりの掘り込みが明瞭にとらえられた。

フレイク1点と礫15点の全てが焼けて赤化していた。15点相当の接合例はないが、SS4の礫と接合したものの2点、SS9の礫と接合したものの1点があり、同時存在を裏付けている。西半が調査区外であるにしても、16点という数は少なく、この点SS3に似る。大形の完形礫の比率が高い、というよりむしろ他跡に比べ小破礫が少ないのが特徴である。

土器1点(第1群燃糸文系細分不明)が含まれていた。

SS11集石（図面25，図版16・17）

FN・FO72区に位置し，集石群の外縁にあって，2つの炉部を有するSK300土坑に隣接する。東西1.6m，南北1.0mの範囲に礫が集中する。最も集中する部分は径0.6mの範囲である。下部に，東西1.1m，南北1.1mの不正円形を呈す落ち込みがある。壁の立上りはゆるやかで，底面は凹凸あり，深さ約0.3m。

石器16点が混入しているのが特徴で，その内訳は磨石5点，スタンプ形石器6点，フレイク5点で，全て火熱を受け，赤化している。礫は46点でこれも全て赤化している。

包含層中における礫と石器と土器の出土比率はほぼ5：2：3を示しており，この割合でみるとむしろ少ない位であるが，他の集石においてはSS3やSS9を除いては1つか2つ程度であることから，意識的に礫と混入させたものと思われる。ただし，焼成その他の点で礫と変るところは無いし，出土状態についても同様に変るところはなかった。

SS12集石土坑（図面26，図版17）

FO81区に所在する。SS3～SS11とは離れた位置で形態等異なり，下部に明瞭な土坑を有するいわゆる集石土坑とされるものである。土坑の検出面はⅢc層上面にあったが，礫はⅢb層中ほどから出土しはじめた。

土坑は東西1.35m×南北1.25mの隅丸方形で，断面掘鉢状にして深さ最大0.3mを測る。多量の大小の焼破礫が底面より5cm～10cm浮いてほぼ全体より出土した。多量の炭化物と若干の焼土粒が伴出した。

礫は378点あって全て焼成受け，スス状黒色付着物があるもの199点，タール状黒色付着物のあるもの15点とあわせて全体の57%あったこと。又，破片礫が329点87%で，接合例が8あった。重量別点数表によると100g以下の小礫が330点87%，100～1,000gが30点10%，1,000g以上が12点3%となっており，圧倒的に小礫が多いことが判る。

本土坑内には焼土，焼け面等は検出されなかった。堆積土上層より土器片2点が伴出した。共に第4群（条痕文系）土器（無文小片）であった。

本跡の周辺においては第1群（早期燃糸文系）と第4群（条痕文系）がほぼ同量出土しており，中で，2点の第4群土器の出土をみたことは本跡の所属時期として第4群の時期の可能性がやや高いといえることができる。

⑤ 土 坑

縄文時代に属する落ち込みの内，比較的大形で，掘り込みのしっかりしたものを土坑，それ以外をピットとして扱った（次項にてくわしく述べる）。本調査地区においては，SK293～302，323～327，341～344，379とした70基の土坑が検出された。以下番号順に説明した。

SK 293 土坑（図面26，図版18）

F Q65・66区にある。東西1.0m、南北2.1mと南北に長い不正長円形。深さ最大0.25mで、壁の立上りはゆるやかな部分と急な部分がある。底面は凹凸あり。堆積土は褐色土～黄褐色土を呈する。出土遺物はない。

S K 294 土坑 (図面26, 図版18)

F Q66区に所在する。東西最大1.6m、南北最大2.0mの不正形を呈する。凹面摺鉢状で深さ最大0.15mと浅い。S K 296と若干重複しているが、切り合い部分少なく、新旧関係は不明である。出土遺物はない。

S K 295 土坑 (図面27, 図版18)

F O66・67区にあって、東西1.7m、南北1.5mの不正形、西壁は直線的、他は丸味あり、底面は平坦部分少なく、断面形は舟底状を呈す。やや凹凸あり。深さ0.2m。堆積土はロームが全体に多い褐色土～茶褐色土。出土遺物はない。

S K 296 土坑 (図面26, 図版18)

南北0.6m、東西0.8m以上の不正円形。舟底形の断面で、深さ最大0.15mと深い。出土遺物はない。

S K 297 土坑 (図面28, 図版18)

F Q・FR・68・69区にあって、S K 323 風倒木痕、S K 302と重複し、最も新しい、南北1.7m、東西3.4mと大形の不正長円形である。中央が0.6mと深く、南北1.7m、東西1.4mの不正形を呈する。両端に不正半円形がとりつく形となる。ここは浅く、深さは最大0.4mである。底面は丸底で、平坦部分少なく、凹凸ある。堆積土は黒色土を主体としており、比較的とらえやすかった。S K 323 風倒木痕の中にすっぽり納る形となっており、何らかの関連性が考えられる。

出土遺物は上層を中心とし、土器11点、礫13点が出土した。土器は全て第1群(燃糸文系)であった。礫は全て赤変していた。

S K 298 土坑 (図面27, 図版19)

F J69区にあって、S I 171 住居跡の堆積土を掘り込んで構築したもので、底面は同跡の床面より10cmほど下がる。東西1.7m、南北1.2mの不正長方形。北・南壁はほぼ直線的であるが、西・東壁は丸味を持つ。底面はほぼ平坦でしっかりしている。壁はゆるやかに立上る。深さ0.2mを測る。第1群(燃糸文系)土器7点と石皿5点、礫10点が出土した。

S K 299 土坑 (図面27, 図版19)

F M・FN・87・88区に所在する。東西1.4m以上(東壁の一部が調査区外)、南北1.2mの不正円形、西壁が丸味を持ち、北東壁はやや直線的。断面舟底形にして壁はゆるやかに立上る。深さ0.2m。壁、底面は明瞭にとらえられた。出土遺物はない。

SK 300 土坑 (図面27, 図版20)

FN・F O73区に所在する。東西1.5m, 南北1.7mで南北にやや長い不正円形を呈し、深さ0.4m前後にして、断面は舟底形である。北及び東に焼け面を有する張り出し部を設ける。両者の長軸方向はほぼ直交し、北側の方位はN17°Wを示す。

北側の張り出し部は幅約0.6m, 奥行0.6mで、本体部より外へ約0.4m掘り込み形となる。壁の立上りは本体部壁に比べやや急である。焼け面の範囲は幅0.4m, 奥行0.5mで、その中心は本体部の壁直下となる。火床面のレベルは本体部底面より若干下がる。焼土は最大5cmほど地山のロームが火熱・赤化したものである。

東側の張り出し部は、幅0.7m, 奥行0.8mで本体部壁外への掘り込みは0.5m。焼け面の範囲は幅0.4m, 奥行0.4mの規模で、焼け面の中心は本体部壁直下となる。火床面のレベルは北に同じく、本体部底面より若干下る。壁の立上り、焼土面など北側の張り出し部と同じである。

本体部と北及び東の張り出し部との三者相互に重複関係はなかった。本跡が焼け面を持つ張り出し部と本体部が一体で機能したものと考えるのが自然と思われるので、発掘調査結果を基に考えると、①本体部といずれか一方の焼け面を有する張り出し部が先にあって、後に他方を増設し併用したか、②頭初より本体と2つの焼け面を持つ張り出し部を設けて、併用した場合の2つのケースが推定される。いずれにしても人間一人が入って火ききを行うに、適当な広さである。

上層架構を想定し、その痕跡を捜すため内外を丹念に調査したが、東側張り出し部脇に小穴が1つあるのみであった。上面25×30cmのほぼ円形にして、深さ25cmの断面V字形である。

堆積土は大きく3つに分けられ、上層暗褐色土、中層黒色土、下層暗茶褐色土となっていた。

東側張り出し部焼け面上の焼土・ロームまじりの黒色土(17層)より第4群(条痕文系)土器片2点(同一個体)があり時期を決する資料と思われる(図面32—26)無文胴部小片で繊維を少量混入する。

その外は、本体中央付近の上層にまとまっており、土器10, 石器1, 礫7であった。土器は第1群(縞系文系)が2点, 第4群(条痕文系)が7点, 第5群(中期前半)が1点であった。石器は磨石(凹石)である。

SK 301 土坑 (図面27, 図版21)

FP・F Q71区に所在する。東西0.8m, 南北0.65mの不正円形。深さ0.4mの小土坑。中央が一段と凹む、断面は丸底形で、底面の平坦部分少なく、壁の立上りはややゆるやか。出土遺物はない。

SK 302 土坑 (図面28, 図版18)

東西1.25m, 南北1.9mで, 長円形プラン, 深さ最大0.3mと浅く, 断面形は舟底形を呈する。堆積土は暗褐色土→褐色土→暗黄褐色土と下層にいくに従い明るさ増す。壁, 底面の検出は比較的容易であった。出土遺物は土器1点(分類不可小片)と礫2点のみであった。

SK 323 土坑 (図面28, 図版19)

南北4.6m, 東西3.9mの不正形。北半は円形に近い。多量のソフトローム, ハードロームの塊が中央部分にあって, 縁辺に黒色土が環状に入る。全体に大きな摺鉢形で, 深さ最大0.8mの北西部が1.8m×1.8mの規模で一段と低くなっており, 底面はほぼ平坦である。

形態, 規模, 堆積土などよりいわゆる風倒木痕と思われる。出土遺物は礫1点のみ。SK 297, 302土坑によって切られており, 共に本跡の掘り方内に納まる形で構築されているので何らかの関連があるものと思われる。従い, 本跡の時期は, 両土坑よりの出土土器(第1群燃糸文系)の示す年代に近いものとする事ができる。

SK 324 土坑 (図面29, 図版21)

F P・F Q74区に所在する。底面形長方形にして, 幅0.35m, 長さ1.1mを測る。底面はほぼ平坦で, 坑底ピットなどはない。坑底より壁はほぼ垂直に立上り, 断面形は箱形になるも, 中・上半はくずれする。深さ0.95m。

上面形は長円形。その幅1.2m, 長さ1.7m, 長軸方位はN21°Wを示す。堆積土は上層より黒色土→黒褐色土→暗茶褐色土, 暗黄褐色土となり, 下層にはローム, ロームブロック, 黒色土が含まれる。締まり強い。

出土遺物は合計5点ある。いづれも北西部の上～中層より出土したものである。内訳は土器が4点と礫1点で, 土器は4点とも第1群(燃糸文系)土器である。

SK 325 土坑 (図面26, 図版22)

F T75区にある。東西1.0m, 南北1.4mで不正長円形を呈する。断面形は舟底形で底面の平坦部分少ない。深さ最大0.2m。出土遺物はない。

SK 326 土坑 (図面26, 図版22)

F S83区に所在する。東西1.1m, 南北1.6mの不正円形, 断面形は摺鉢形で深さ最大0.3mである。出土遺物はない。

SK 327 土坑 (図面29, 図版22)

F P・F Q82・83区に所在する。深いAと浅いBとに分れる。Aは東西1.8m, 南北1.5mの不正円形で, 中央部が深さ0.6mの摺鉢状。Bは東西1.4m, 南北1.2m以上の不正円形で底面平坦にして立上りはゆるやか。深さ0.1m前後である。Aの部分は堆積土に黒色味があり, 壁の検出が容易であったことなどから人為的所産と思われるが, Bの部分は褐色土Ⅲc層より若

干暗い程度であるので自然営為によるものと思われる。

SK 341 土坑 (図面27, 図版23)

F P・F Q80・81区に所在する。東西1.2m, 南北1.5mの不正円形。断面形は舟底形で壁の立上りはゆるやか。深さ最大0.2m。出土遺物はない。

SK 342 土坑 (図面29, 図版23)

F Q85区に所在する。東西1.0m, 南北1.2mの不正方形。東壁を攪乱により失う。断面は舟底形を呈し、深さ最大0.25m, 底面の平坦面はほとんどない。出土遺物はない。

SK 343 土坑 (図面29, 図版23)

F N・F O88区に所在する。東西0.8m, 南北1.5mの不正円形。摺鉢形、深さ最大0.6m。出土遺物はない。

SK 344 土坑 (図面29, 図版24)

F N・F O80・81区に所在する。東西1.0m, 南北1.1mの不正円形。P J926・927よりも新しく、P J928との関係は不明。断面摺鉢形にして凹凸あり。深さ最大0.9m。出土遺物はない。

これを取りまく周囲のⅢb・Ⅲc層が若干汚れていたり、木の根による攪乱と見られる部分があって、これらを取り除くと東西3.1m以上、南北1.9m以上、深さ最大1.1mの大きな摺鉢形となった。

本体自体の壁の検出は堆積土が黒色土のため、比較的容易であったが、上面部のⅢc層やⅣ層部分では不明瞭であった。両者を考えあわせるとこれらを人為的所産によるものとは決し難い。

SK 379 土坑 (図面29, 図版24)

GH88区に所在する。東西0.8m以上、南北1.5mの不正円形を呈すると思われ、西半は調査区外、Ⅲ層中より掘り込まれている。底面はほぼ平坦で、深さ0.2m。壁の立上りは急な部分とゆるやかな部分がある。第1群(燃糸文系)と思われる土器片1点が出土。

(6) ピットを含む全ての落ち込みについて

縄文時代の調査において、例えば今次調査の場合、Ⅲc層上面やⅣ層上面で、地山土と異なる部分をマークすることにより落ち込みを検出することができる。これらの成因としては人為的要因(即ち遺構)と木の根など自然営力による場合とが考えられる。

人為的要因によるものと判断する場合次の様な条件が求められる。

- A 炬や集石、配石、立石など明らかに人間による行為とみられる痕跡を有すること。
 B ①がみられない場合においては、地山に対して明瞭なる人工的改変がみられること。即ち底面が平坦であったり、壁が直立していたり、面として整っていることなど。

C 穴として一担は存在したことから、自然的に埋ったにせよ人為的に埋めたにせよ、壁・床面と堆積土とが不整合をなすこと。即ち、調査時においては、壁、底面が容易に検出できること。

D 堆積土は、掘り上げ土とロームなどが入る外、当時の地表面にある土より黒色味ある土が入るため、暗褐色—黒色土であること。

以上を統合することにより、遺構と判断するわけで、これらの内住居跡など性格が明らかなもの以外は、単なる穴の意で土坑、小穴などとして取扱うこととなる。この際比較的大形のもの土坑、小さいものを小穴としており、その区別が恣意的であるとする謬りは免れ得ない。形態、法量などから分析し、有意差のある区別か否かを判断するまでに至らなかった。従ってここでは、土坑、小穴としてあっても、明確な基準の上で、区別したものでないことをことわっておく。

これらの調査方法として次の工程をとった。

①全て落ち込みをマークし、番号を与え、台帳と1/100図によって登録する。

②全てを半蔵し、断面観察を行う。断面観察により次の5タイプに大別する。

タイプⅠ 黒色土～暗褐色土。壁の検出が比較的容易に行える。

Ⅰ' 褐色土～暗茶褐色土。ややタイプⅢに近い。

Ⅱ 暗褐色土。ローム・ロームブロックを含む。タイプⅠに近い。

Ⅱ' 暗黄褐色土。ローム・ロームブロックを含む。タイプⅢに近い。

Ⅲ 暗褐色土～暗黄褐色土。壁不明瞭。ローム多い。周囲の地山に比べ若干暗い程度。

③これらの内タイプⅢを除くものの断面図を作成する。

④完結後は、平面図を全てについて作成する。

断面観察については、当初いくつか半蔵してみてタイプⅠ・Ⅱ・Ⅲの3つに大別したものであるが、中間的なものが多くなった結果5大別になったもので、さらにこれらの中間的なもの、あるいは、同一ピット内に2つ以上の異なる部分がみられるものなどがあって、その都度、亜種を設定して分類していった結果、細かくは62タイプに分れた。大量のピットに対処するため数人によって観察を行ったことや、基準が不明確であったことに起因して、相当量の分類洩れや、分類の矛盾をきたしてしまった。

この様にして検出されたピットの総数は1,608個になった。この内311個はFⅠ～FN・65～71区所在のもので、調査計画の変更によって検出のみにとどめたものである。但し、SⅠ171住居床面上で検出された31個のピットについては全て調査した。

トータル1,608個のピットについて、タイプ毎の概数を記すと次の様になる。

V 縄文時代の調査

タイプIが71個(4%), I'が421個(26%), IIが40個(3%), II'が9個(1%), IIIが1,067個(66%)である。

この内、タイプIのものについては、全体図(第14図)に示した。

以上のタイプの内、タイプI, I', IIは堆積土が黒色土~暗褐色土であることや、壁・底の検出が比較的容易であることなどから、先にあげた条件C・Dにかなうため、人為的要因による可能性が強いといえようが問題はBの条件にかなうか否かであろう。通常小穴の性格(目的)としては、柱の掘り方として掘るケースと、木杭の打ち込み→立ちぐされ、あるいは抜き跡痕として成るケースが想定される。前者の場合は、例えば住居の柱穴などにおいて検出されるように比較的明瞭にとらえられようが、後者の場合は、これと木の根等によるものとを区別することは難しい。まして、数千年間という堆積後の変化が余計識別を困難にさせているのであろうか。上面形、規模、深さ、断面形などの分析、他地域のあり方などを比較することによって成因や性格を究明できればと考え大量のデータを得たが、これらを活かすしきれなかった。機会をみて活用していきたい。

また、タイプIとした黒色土はSK300土坑やSK324土坑などの黒色土と共通するものであるが、SK323風倒木痕においてもローム塊を取り囲むように黒色土がみられることや、我々が現場で断面観察時にしばしば見る様に、木杭等の一部もしくは全部が黒色土化していることがあるので、黒色土をもって遺構と判断することはできない。タイプI'の暗褐色土についても同様なことがいえるのである。

土坑とした大形の小穴の内、SK293~296, 325~326, 341~344は堆積土がタイプI'でIIIに近いものもあって、形態においても先にあげた条件Bの点で疑問が残る。とりわけ、SK294・326・343・344などは摺鉢形をしていて、不正形で凹凸があるところなど、SK323風倒木痕などに似ているので、木の根等による可能性がある。

タイプ別の分布状況を見ると、タイプIが道路部分に少なく、遺構・遺物の分布と似ていることと、タイプIIが建物部分の西半に集中している外は、特に際立ったあり方を示してはいない。

最後にカーボンの検出されたPJ-6について説明する。

PJ-6 (図面29, 図版24)

FT69区にあって、上面0.5×0.6mの長円形で断面形はV字形、深さ0.35mの小穴である。上面検出時に、1回で100点余のカーボン、断面観察時に1回で80点余のカーボンが集中して検出された。1~4層全体に入り、壁ぎわは少ないようである、他にこうした例はなかった。

2. 出土遺物

縄文時代の遺物は、遺物包含層内より主に出土したのをはじめ、表土、黒褐色土あるいは歴史時代遺構内よりも若干量出土した。ここでは一括して土器、土製品、石器、礫の順に記述する。

出土遺物の総量はコンテナ 229 箱に及んだ。総点数15,516点。内訳は、土器が4,851点(31%)、石器(剥片、礫片含む)が1,787点(12%)、礫が8,878点(57%)。詳しくは下表に示す。なお、土器、石器の点数は個体数である。

	点 数	比 率	遺構内	包含層	表土他	報告掲載	備 考
土器	4,851	31%	496	3,552	803	559	
石器	1,787	12%	124	1,497	166	158	剥片・礫片含む 内7,101点計測 466,362g
礫	8,878	57%	1,332	7,546	—		
合計	15,516	100%	1,952	12,595	969	717	

(1) 土器・土製品

第3表に示す総数4,984点の土器について、説明の都合上まづ遺構内・外と表土ほかを一括して記述した後、遺構内のものについて触れることとする。図面・図版の順と異なる点ご容赦願いたい。

さて、本調査区出土の土器は次に示す8群に大別される。

第1群 早 期 撚糸文系土器

第2群 早 期 押型文系土器

第3群 早 期 沈線文系土器

第4群 早 期 条痕文系土器

第5群 中期前半 五領ケ台式、勝板式、阿玉台式土器

第6群 中期後半 加曾利E式土器

第7群 後 期 称名寺式、堀之内式、加曾利B式土器

第8群 時期不明及び小片、細片につき類別不明土器

出土比率の多い順に並べると、第1群(48%)→第6群(31%)→第4群(12%)→第7群→第8群→第3群→第2群となる。詳しくは第3表に示す。

第1群 早期 撚糸文系土器(図面34~38)

本群土器のほとんどは破片資料であって器形を復元できるものはない。破片より推察すると、尖底あるいは丸底の大形深鉢形になるものと思われ、31図5の様な小形のものもある。

そこで分類にあたっては、文様、施文部位、整形手法などを基本とし、口縁部片においては口唇部成形と形態を加味した。その結果、次に示す19類に細別された。この内、1類が縄文施文、2～6類が燃糸縦位施文口縁部片、7類が同体（底）部片、8類が燃糸交叉施文、9類が絡条体条痕、10類が横位施文、11～16類が無文口縁部片、17～19類が無文（擦痕等含む）体（底）部片である。

1類 縄文施文のもので、図示する2点のみ。34-1・2共原体RLの単節縄文で若干斜め方向から口縁⇄底部方向へ回転施文したものである。節はやや浅い。

口唇部成形手法 本群土器の口唇部は様々な形態をとっていて、一見まとまるべくもなくみうけられるが、その製作方法をみると、いくつかに分類されるのである。小林達雄氏の説く様に、「同一手法によって製作された口唇部は、肥厚、外反の程度に多少の差異が存しようとも、同類とされねばならない」（小林1966）のである。ここでは、小林1966のI～IV手法に、第V手法を加えることにより分類を行った。I～IV手法については小林1966より転記すると、

〔I〕口唇部に殆んど手を加えない手法

- (a) 口唇部の頂点が円頭状を呈するもの。(b) 口唇部の頂点が角頭状を呈するもの。

〔II〕口唇部を外反させる手法

- (a) 口唇部の外反がゆるやかな曲線を描くもの。
(b) 口辺から深い位置を支点にして「く」の字状に強く外反させるもの。

〔III〕口唇部を折り返す手法

- (a) 口唇部を巻きこむように折り返すもの。(b) 器面の外側に折り返して貼りつけるもの。
(b') 内側に折り返すもの。(c) 外側に折り返してから角頭状に仕上げるもの。

〔IV〕口唇部に粘土紐を貼りつける手法

- (a) 口唇部の外側に貼付するもの。(b) 口唇部の頂上にのせて貼付するもの。

以上の内、III a, III b', III c手法によるものは観察されず。新たに、次の手法が確認された。

〔V〕口唇部を両方向よりつまみ、細く仕上げる手法

これには、(a)直立するもの、と(b)II b手法により若干外反されるものの二種がある。

2類 口唇部に燃糸文が施文されるもの。34-3は口唇頂部に燃糸Rを口辺に対して直交する方向へ回転施文（縦位施文）したもので、圧痕はやや明瞭である。口辺にはきわめて不明瞭ながら、燃糸縦位施文と思われる粒跡がある。34-4は燃糸Rを口唇外側の肥厚部に施文したもので、口縁部にも縦走燃糸文が認められる。34-5は、IV a手法によって肥厚した口唇外面に燃糸Lの縦位もしくは横位施文で、これに一部交叉して絡条体条痕状に施文されている。

3類 縦位の無文部が少なく、ほぼ密接して縦位施文される。口唇部成形がI a手法による a (34-6・7)、II a手法による b (34-8)、IV a手法による c (34-9・10) に細別され

る。34—8の条間隔はもっとも密接している。34—9・10には部分的に縦位の無文がみられるが、これは、施文前の縦位の器面調整が残っている部分（即ち施文しなかった、あるいはきわめて弱く施文した結果）と、施文後に指頭大（単独あるいは連続する形）にて、ナデ消されているがきわめて弱く残っている部分がある。

4類 縦位の無文部が多いもので、次の6種に細分される。口唇成形がI a手法をとるa (34—11~16)、同じくI a手法であるが、径13~16cm前後の小形の深鉢と思われるb (34—17・18)、I b手法をとるc (34—19・20)、II a手法のd (34—21)、IV aもしくはIV b手法をとるe (34—22~32・35)、III b手法をとって口縁が幅広く肥厚し、節の大きい燃糸が、口唇最厚部辺まで施文されるf (34—33・34)。

5類 口辺の2~3cmが燃糸施文後にヨコナデされ、燃糸文は不明瞭となり、ヨコの調整痕が顕著である。4類と同様に縦位の無文部多い口唇成形手法等によりa~dに細分される。aはI aの手法をとるものである(34—36・37)。bはII b手法によって、口縁がやや強く外反し、内面に稜線、外面には段が付く(34—40)。cはIV a手法によるもので、強いヨコナデによりやや外反ぎみになる。34—38・39・41で、34—39・41では斜行する燃糸と縦走する絡条体条痕が交叉する。dはV手法によるもので、34—42がある。

6類 口縁部がIII bもしくはIV a手法により肥厚しヨコナデによって、無文となるもので、4・5類と同じく縦位の無文部多い。肥厚の幅広いa (34—43・44・46~50)と狭いb (34—45)に分けられる。口縁のナデは、燃糸施文後に行われる。但し、34—46は砂粒の移動痕が残る器面調整の後に燃糸施文されたものである。bの無文の幅はaと同じで、肥厚部分の下1cm位までヨコナデされる。

7類 燃糸施文の体部と底部片で、縦位の無文部少ないaと縦位の無文部多いb~d（節の大きいb、中位のc、小さいd）、条が交叉もしくは施文方向が異なるものeの5種に分けられる。

本類に含まれる資料は遺構内をあわせ512点で、1群2,396点中21%を占める。17類の59%に次ぐ。

aは35—1~3、bは35—4~11、cは35—12~59、36—1~7、dは36—8~12、eは36—13~18が該当する。

aの燃糸は節が小さく、条間も狭い、3類a、bに対応するものと思われる。bの燃糸の節は最も大きく、4類fなどに対応するものと思われる。cの内、35—32・37・52、36—1~7は底部及び底部付近の破片であり、尖底(36—2・3)もしくは丸底状(36—4)の底部で、底中央へ向って燃糸が施文され、一部では(35—32、36—6)条が交錯しているものもある。eの内にも底部近くゆえのものも含まれているものと思われるが、36—8の様に明らかに絡条

体の廻転方向をかえて交叉施文しているものがある。36—8は、内面をやや光沢があるほど、縦位のナデ調整している。

以上の撚糸施文の2—7類の125点の内、原体Lは34—5、35—11・21・58の4点のみで、Rが117点（内9点不鮮明）、4点が不明であった。

8類 原体一段Lの絡糸体を廻転方向をかえて糸を交叉させ、斜格子状にさせているもので2個体6片。(36—19・20)共に焼成良好で、堅緻。内面も平滑に仕上げ調整する。内外面、暗赤褐色を呈する。

9類 絡糸体を押し引きし、数条の条痕となるもので、36—21・23の様に、一部節らしきものがみえるもの（廻転と押し引きを連続する）と、36—22の様に、明瞭に絡糸体を押し引きした痕跡が観察できるものがある。

10類 36—24の1片のみ。撚糸が横走する。胎土・焼成良好。内面黒褐色、外面赤褐色。原体R。圧痕はやや弱く、節が不鮮明な為、一見、押し引きした様にみえる。

11類 IV a手法により、口唇部が肥厚するもの。口唇外面を幅広くヨコナデするもの（b、36—35—38）とそうでないもの（a、36—25—34）がある。

12類 I aもしくはI b手法にて、口唇が円頭もしくは角頭状を呈するもの。a～eの5種に分れる。口縁はほぼ直で、I a手法をとるa（36—39—47）、aに加えて口縁外面をヨコナデするb（37—1—6）、I a手法に加え、外面口縁下をおさえ、口唇部をやや肥厚させるc（37—1—19）。I a手法だが、口縁内傾するd（37—20—23）。I b手法により角頭状を呈するe（37—24—27）。この内、a、bは5類aと混同する部分あるものと思われる。37—16には補修孔1個が穿たれている。

13類 V手法により口唇を細くするもので、口縁がほぼ直なa（37—28—30）、内傾するb（37—31）、II b手法を加え、口縁が「く」の字に外反するc（31—16）がある。37—31には補修孔1個が穿たれる。

14類 III bもしくはIV a手法により口唇を肥厚させるもので、幅広い肥厚部をヨコナデするa（37—32—36）と幅狭い肥厚部のb（37—37—41・43・44）がある。aは撚糸施文の4類fや6類aと、bは4類eや6類bとそれぞれ混同している可能性ある。

15類 37—42、口縁下2.7cmに、ヘラ状工具の先端により作出されていると思われる細沈線状の一条の凹線が横走する。凹線より上の口縁は断面直線的で、下の胴部側は厚みを増して膨む。この結果、器外面は断面「く」の字状を呈しており、全体にII a手法により弱く外反し、内面は丸味を有していて、丁度指の先の断面の様な断面形状となる。37—42は胎土にやや大粒な砂粒や細砂粒多く脆弱で、斑点状に器表面が剝落する。内外面ともやや平滑に器面調整している。径21cm前後になる。

16類 37—43・44, III bもしくはIV a手法により口唇肥厚し、口縁下1cmほどに、浅い一条の沈線が横走する。器肉薄い。

17類 1,405点と最も多く(第1群中59%)出土した無文の体部片(37—47~61, 38—1~9), 底部片(38—10・11), 器面を良く研磨するもの(38—12~22)などである。燃糸施文土器の無文部にあたるものが相当量含まれているものと思われる。あるいは、他群土器の無文部片の混入も考えられる。本群土器の胎土として特有であるところの、黒色鉱物多く入るもの、細砂粒が多いもので焼成良く、褐色~暗褐色~赤褐色を呈するものを本類とした。

18類 器面に擦痕が認められるものを一括した。明瞭な擦痕(ケズリなどの器面調整痕と思われる)を有する a (38—23・24)と不明瞭な b (38—25)がある。

19類 18類の擦痕の様に鋭利な痕跡でなく、施文具不明の痕跡を有するものを一括。38—26は絡糸体を引いた様な痕跡が縦位に数条みられる。

不明 他類に属さないもの。38—27は口縁部片で、原体一段の燃糸 R もしくは L の絡糸体の廻転施文と思われる。38—28は口縁下に調整により作出された1条の凹線がみられ、以下少しあいて、縦位に数条の絡糸体を引いた様な痕跡がみられる。38—29は、口縁下に横位に1条の絡糸体圧痕があり、以下は縦位の燃糸と思われる。原体は R。

第2群 早期 押型文系土器(図面38)

1類 縦位密接施文の小粒楕円押型文土器で、2片(接合前4片)1個体である。31—22は口縁部片で、S I 171 住居跡内南東区の堆積土中層より、他の多くの第1群燃糸文系土器(後述)に混じって出土したものである。ほぼ直立し、口唇は角頭状、内面口縁にきわめて弱い稜線が付く。厚さ9mm前後で、胎土は黒色鉱物多く、細砂粒多いなど、第1群土器に似る。31—23は同一個体の胴部片で、F P 69区包含層1片、F J 70・80区包含層1片とF Q 71区II層1片が接合したものである。

2類 格子目押型文土器で、38—301片のみ。F L 71区包含層出土。口縁はほぼ直立し、口唇部は角頭状で厚さ9~10%、胎土は砂粒多い。内面暗褐色、外面暗赤褐色を呈する。内面はやや平滑に器面調整する。押捺やや弱く、廻転方向不明。

第3群 早期 沈線文系土器(図面38)

1類 田戸下層式に比定し得るもの。38—34は口縁部片で、口縁に平行する6条以上の沈線があって、5条と6条の間に連続する刺突文がみられる。7条以下は不明。口唇は円頭状にてほぼ直交する。断面黒色で、外面は暗褐色を呈する。砂粒多い、38—31は尖底部片で、縦位にやや明瞭な擦痕がみられる。内面黒色、外面は暗赤褐色を呈する。

2類 田戸上層式に比定し得るもの。38—33は波状口縁で、口唇に爪形状連続刺突(刻目)があり、内面にも波状の口唇に平行して連続爪形文が部分的(頂部側)にみられる。外面は貝

靱敷縁文と沈線文により、直線的文様を描く。貝殻敷縁文は口唇端とこれに斜行してあり、2条の密接した平行施文により、間がやや高まり微隆起伏となる。沈線文は少しづつ押し引きしたもので、弱い波状を呈している。胎土は砂粒多く緻密。内外面とも良く器面調整する。38—32・35は貝殻敷縁文によって文様が描かれるもので、38—35には円形の刺突文がみられる。

第4群 早期 条痕文系土器

6群(中期加曾利E式)土器、1群(早期燃糸文系)土器に次ぐ604点、約12%の出土量をみた。絡条体庄痕文が1例(38—36)ある外は、条痕文、無文、楕痕文のみで、装飾的文様のものはない。又完形に復原し得た個体もないが、断片から推定して、比較的大形で丈の短い砲弾形(38—36や39—20の様に)で実底(40—43・44)の深鉢形が多いものと思われる。38—43・45の様に薄手で小形の深鉢形土器がこれらに加わるのであろう。胎土に繊維を混入させるのも特長である。不明のものが若干量あるのを除き、多寡はあってもほとんど混入がみとめられる。そこで、分類にあたっては、条痕文を基準とし、その有無、施文面、幅、条間隔などによった。

1類 内面・外面ともに条痕が施されるもの。38—36～41・44が該当する。

38—36は、口径23.8cm現存高19.4cmで底部へ向いゆるやかにすばまる深鉢形土器。内・外面同一原体によると思われる横方向の条痕が密に施される(下半では内・外面ともやや斜め方向になり、粗雑になる)。条痕は底幅0.8mmにして、1単位6～7、その幅13mmを測る。条痕の底面は平坦でなく、いくらか丸味を有している。このため、施文具はアナダラ属の貝殻敷縁によるものでなく、条間隔が規則的であることなどを考えあわせると、絡条体による押し引き(絡条体条痕)による可能性を指摘できる。口唇部にみられる、絡条体庄痕による刻目も、同一施文具の可能性が高い。なおこの刻目は、1～2cm間のあく部分が1ヶ所以上ある。胎土は砂粒多く、繊維の混入やや多い。内外面褐色を呈す。器厚7～8mmで、焼成良好にして堅緻であり、他の類と趣を異にする。

38—37は口唇が細く仕上げられ、内面に稜線が付く。これより上に外面と同じ幅広の斜めの条痕が施文される。内面の稜線以下と外面は縦位の条痕である。同様に、外面が縦位で、内面が斜位もしくは横位のもの、38—40・41・44などがあげられ、内外面とも縦位であるのは、38—38・39である。

2類 外面のみ条痕がみられるもの。a 明瞭な条痕で、アナダラ属の貝殻敷縁を施文具とするものと、b 施文具不明(貝殻によると思われるものも含む)で、幅広く、粗雑で、条が不規則な条痕のものがある。

a は条痕の有様によりさらに次の5つに分類される。

i 条間隔やや密で、平行し、条痕の幅1～2mm前後のもの。38—42・43・45、39—1～

8。

- ii 条間隔あき、粗雑で、条痕の幅広い。39—9—13。
- iii iの条痕で、交錯するもの。39—14・15。
- iv iiの条痕で、交錯するもの。39—16・17。
- v i, iiの条痕で、後の器面調整により条痕が不明瞭となるもの。39—18・19。

以上の内、i, iiが多数を占める。

bとしては、39—20 a, 20 b, 20 cがあげられる。条痕の幅は、最小0.6mmから最大2.5mmまであって、条幅・条間隔とも不規則である。3個体とも縦位に施される。この3個体は同種類の施文具によるものと思われる。

3類 条痕が内面にのみ施されるもの。全量で6点と少ない。39—21—24。21・22が縦位、23・24が横位施文である。

4類 無文もしくは擦痕のもの。aや明瞭な擦痕がみられるもの。b～e無文のもの。fその他の器面調整痕がみられるもの。以上6種に分けられる。本類は4群の内の約6割を占める。

aはさらに、i.内外面にみられるもの。39—25・30。ii.外面にのみみられるもの。39—26—29, 32—37。iii.内面にのみみられるもの。39—31・38・39がある。

無文のものは、部位により、b口縁、c胴部、d底部とe胴部片で砂粒を含み、堅緻で、黄褐色～赤褐色を呈す特長ある一群、に分けられる。

bとしては、39—40, 40—1—18がある。口唇部が円頭状のものが多いが、40—13・15の様に細くなるものもある。又、ほぼ直立するものが多いが、40—5・10の様に外反するものや、39—40の様に内反するものもある。

cは、繊維の混入量によりさらに細分される。i.多い。40—19—22。ii.少量。40—23—27・29・30。iii.繊維と思われるが不明瞭。40—28, 31—39。iv.繊維か否か不明。40—40・41。

dとしては、40—42—44があり、これを含めても6点のみであった。全て尖底。

eは、40—45—51で、内外面を平滑に器面調整している。

fは、40—52—54が該当する。40—52は、内面に横位の、外面に縦位の明瞭なる器面調整痕がみられる。40—53は、外面に縦位の器面調整痕がみられる。aとした擦痕とは異なる。40—54は外面に縦位の器面調整痕がみられる。条痕と擦痕は明らかに異なるもので、繊維束のようなものによるものか。

第5群 中期前半 五領ケ台式・勝坂式・阿玉台式土器 (図面41)

本群土器は、全体の3%と2群、3群に次いで少い出土量である。五領ケ台式・勝坂式・阿玉台式を一括する。

1類 五領ケ台式に比定されるものを一括した。器形、文様構成何えるものがないので、文様要素により a～e に細別した。

a 太い単沈線が横位に2～3条平行し、その間に交互刺突がなされるもの。41-1・2。

b やや太い単沈線が1～3条平行するもの。41-3～6。41-3・5・6は縦位、41-4は横位で、地文は全て縄文である。

c 太い隆帯が貼付され、両側にやや太い単沈線が引かれるもので、i. 隆帯上まで縄文が施文されるもの(41-7・9)とii. 無文のもの(41-8)がある。地文は全て縄文、41-8は波状口縁で、内面に稜線を有する。

d 縄文のみのもの。i. 胴部片(41-10)とii. 底部片がある。41-10の縄文の原体はRLで節が小さく、本類土器に一般的にみられるものである。胎土も同様で、大粒の雲母多く、砂粒が入り、黒褐色～赤褐色を呈している。

e 無文のもの。i. 胴部片とii. 底部片(41-11)がある。

本類土器の底部は平底にして、41-3の様に、ほぼ90°に立上るものや、41-6・11の様に95～98°を示すものなどがある。

2類 五領ケ台～勝版式期の幅狭い結節沈線を多用するものを一括する。a～gの7種に細分される。a～eは深鉢形、f・gは浅鉢形である。

a 結節沈線による直線・曲線文に加え、隆帯貼付し、三角形沈刺文が施される。41-12。

b 結節沈線による直線、曲線文。41-13・14。

c 結節沈線による直線文。i. 横走するもの(41-15)と縦走するものや山形のものなど。ii. 隆帯を伴い、隆帯の両側に結節沈線が施されるもので、横走するもの(41-16～18)と縦走するもの(41-19・20)がある。下半にヒダ状指頭圧痕を伴うものもある。iii. やや幅広の爪形文(押し引き)が伴うもの(41-21)。

d 無文で、ヒダ状指頭圧痕を有するもの。41-22・23。

e 幅狭の連続爪形文により、横位の平行沈線文や曲線文が描かれているもの。一応本類に含める。

f 外面口縁最上部に1条の横位の結節沈線、内面に1～2条の横位の沈線が施されるもの。41-24・25。

g 外面無文で、内面に3条の平行する横位の結節沈線が施されるもの。

本類土器の胎土には細かい砂粒やや多く、黒褐色から赤褐色を呈するものが多い。

3類 阿玉台式に比定されるものを一括した。41-26～29である。41-27は、口縁に横位の2条の隆帯を貼付し(下段の隆帯には刻目を施す)隆帯間に結節沈線により、直線的な文様を

描く。41—29は肩状把手になるものか。隆帯によって区画された口縁部に、竹管を刺突しなから押し引き、直線あるいは曲線の文様を描く。本類土器は、大粒の雲母・砂粒が多量に入り、茶褐色～暗褐色を呈す。

4類 勝坂式に比定されるものを一括した。a 深鉢（41—30～37）と b 浅鉢（41—38・39）がある。41—32は、2条の縦の隆帯があって、その両裾を幅広く、深く刺突した爪形文がめぐらる。41—33は平口縁で、口縁下の横の隆帯下に沿ってペン先状の竹管文と波状沈線があり、胴部は隆帯により渦巻状の文様が描かれ、両裾に幅広い結節沈線文と波状沈線が沿う形となる。断面黒色にして、細砂含み、内外面とも赤褐色を呈する。41—38の浅鉢は口縁が「く」の字状に内反するもので、外面の口縁には2条の平行する幅広い結節沈線が横走する。41—38・39とも、内外面を良くミガキをかける。胎土に黒色鉱物目立つ。焼成良好にして堅緻である。

第6群 中期後半 加曾利B式土器

第1群土器に次いで多く、全体の三割強の出土量を占める。SS 2 配石跡やFO～FQ・68～70区遺物集中地点やFQ～FS・78～82区周辺にまとまって検出された。比較的大形破片が多く、また接合資料がやや多くあって、復元し得る個体が、8個体あった。そこで、分類にあたっては、器形・文様要素並びに文様構成をもととして、下記に記す8類に細分した。なお、遺構出土のものについては、後に詳しく触れることとする。

1類 深鉢形土器。口縁部文様帯を有する。隆帯、沈線によるややくずれた渦巻状文、槽円区画を描く。胴部文様により次の3種に分ける。a 沈線による縦区画を行い、交互の沈線間に縄文を施文する。31—23のSS 2 埋壺1。b 「∩」状区画+「?」状文。42—1など。42—1はキャリバー形土器で口角部文様帯の下に列点文が入る。復元口径22.6cm、現存高22.1cm。4つの突起が付く。地文は横位施文の縄文LR。c bに同じだが、胴上半と胴下半を分離区画するもの。31—24。SS 2 東埋壺2など。

2類 深鉢形土器。口縁部文様帯がなく、沈線による「∩」「∪」状およびこれが連続する波状沈線区画をとるもの。次の3種に細分する。

a 胴下半まで「∩」状区画をとるもの。「?」状文が加わるもの（42—3・9）がある。口縁部に横位沈線が入るもの（42—2・6）があり、42—6付2条の沈線間に列点文が入る。42—9には沈線下の「?」と「∪」状間頂部に4個の列点が付く。

42—2は口径推定12cm、器高推定27cm前後の小形円筒形の浅鉢形土器。胴下半がややすぼまる。口縁下に1条の横位沈線で、以下は「∩」状区画が胴下半までのび、区画内は縄文RLが縦位施文される。

43—3は口径20cm、現存高15.0cmで胴部がやや張る深鉢形土器。周辺下約2cmは単節Lの横位と下は縦位施文となる。「?」と逆の「∪」の2本の組み合わせと「∩」状文が交互に4回

V 縄文時代の調査

配され、区画内は磨り消す(一部磨り消してないところもある)。

42-6は大形の弱いキリバー形になる深鉢形土器。3cm巾で口辺が無文となり、太沈線2条とその間に列点文が施文される。胴部には、幅広い「∩」状文とその間に「?」状文が配される。区画内は縄文RLが縦位施文される。口縁に突起が付く。

42-8は「∩」状文の頂部が凹み、「~」状を呈す。

b 上半に波状沈線文、下半に「∩」状文によって分離区画するもの。FO~FQ・68~70区遺物集中地点出土の33-1などが該当する。

c 「∩」状区画内に刺突による列点を施すもの。42-7など。

42-7は胴部のくびれの少ない深鉢形土器で浅く粗雑な沈線が特徴である。口辺下に横位の1条の沈線がめぐり、以下を「∩」状文で区画し、区画内に、ヘラ状のもの先端を刺突したものをまばらに施文したもので、無文部は平滑に器面調整している。

3類 沈線による「∩」状文およびこれが連続する波状沈線により、胴上半と下半を分離区画するもの。33-2が該当する。

4類 沈線により曲線文を描き、沈線間を磨り消すもの。43-1。

5類 微隆起線文、隆帯文を伴うもの。

a 43-2などで口辺下に1条の微隆起線文がめぐり、以下は沈線による曲線文と思われ、沈線間は磨り消す。

b 微隆起線文による、縦位区画。FO~FQ・68~70区遺物集中地点出土の33-8などで、区画間は縄文と磨り消し部分が交互となる。

c 隆帯により曲線文、直線文が描かれ、区画内に縄文を施文する。43-3などで、43-3は大形の深鉢形土器で、隆帯は幅広くやや高く、隆帯の中央に指で沈線入れ、2条にしている。

6類 直線的あるいは波状の櫛歯状文を有するもの。

a 鉢形土器、43-4に代表される。口辺部無文で、胴部に隆帯による楕円形区画を配し、区画内は縄文施文し、下半は櫛歯状文を縦位に施文する。

b 深鉢形土器になると思われるもの。口縁部に1条の沈線がめぐるもの(43-5)と無文のもの(43-6)がある。

c 鉢形土器。SS2配石跡出土の32-3や包含層出土の43-8。共に、口縁下に1条の沈線がめぐる。32-3は下半部に曲線文が組み合わさる。

7類 地文が縄文のみのもの(口辺部に沈線や列点があるものを含む)。復元できたものはない。

a 口縁部片。全て、小破片資料である。従い他類の一部であるものがほとんどであると思

われる。次の4種に分けられる。

- i 口縁上端から縄文施文。口辺部のみ条方向異なるものあり。5点出土。
- ii 口縁下に1条の沈線がめぐる。沈線を境にして条方向異なる。8点出土。
- iii iiに同じく口縁下に1条の沈線がめぐり、波線まで口辺部が無文となるもの。波線の中に列点付くものあり。2点出土。
- iv 口辺部が無文となるもの。1点出土。

b 胴部片。SS2配石跡出土の32-6など。108点出土。

8類 地文が無文のもの。7類と同様に、復元できるものではなく、全て小破片資料である。従い、他類の一部であるものがほとんどであると思われる。

a 口縁部片で、沈線のないもの(19点出土)とあるもの(10点出土)がある。

b 胴部片で、i. 中期と思われるもの(16点出土)とii. 他群土器の無文部である可能性を有するもの(89点出土)である。

c 底部片で、i. 平底(30点出土、FO~FQ・68・70区遺物集中心地点出土の33-5~7、包含層他出土の43-9~13、16~19など)とii. 脚部を有するもの(43-15)、iii. 脚部に孔を有するもの(43-14)などがある。

以上の如く分類された第6群土器を、安孫子・秋山・中西1980による加曾利E式の段階区分にあてはめて考えてみたい。

同編年試案は加曾利E式を7段階に細分している。この内、「V段階」は、口縁部文様帯+胴部文様帯の文様構成をとる。口縁部文様モチーフは渦巻文が大形・簡略化したもので、渦巻文内には縄文が施文される。胴部は、磨消文が盛行し、懸垂文上部が連続化し、わらび手状文(「?」状文)が発生する。地文としては縄文が主体で、前段階よりの備歯状文がある。連弧文土器は衰退し、波状口縁が出現する。

これらに該当するものとして、1類があげられよう。中で、図面31-24の埋壘2は胴部文様が括れ部を境に上下2段に分れている点、後出的要素を有する。

次に「VI段階」は、口縁部文様帯を喪失し、文様モチーフとしては、渦巻文が消滅して「∩」状文、わらび手状文(「?」状文)が盛行し、微隆起区画が発生する。

これに該当するものとして、2類があげられる。5類cや6類(備歯状文)はV~VI段階に位置づけられよう。

最後に加曾利E式末期の「VII段階」は、口縁部文様帯無く、「∧」状文や微隆起区画が盛行する時期で、称名寺式土器が共伴するものとされている。

図面33-2の3類土器は、「∩」状の先端がやや細くなっており、過渡的様相を呈している。従い、3類はVI~VII段階に相当するとしておく。4類や5類a・bとしたものは、破片資料の

為、全体の文様構成や器形など不明な点が多いので、これもVI～VII段階に相当するとしておく。

7類(縄文)と8類(無文)は各段階に比定できないが、概ねこれらV～VII段階に該当するものと思われる。

上記を整理すると次のようになる。

V 段階	1類
V～VI段階	5類c, 6類
VI 段階	2類
VI～VII段階	3類, 4類, 5類a・b
V～VII段階	7類, 8類

第7群 後期 称名寺式、堀之内式、加曾利B式土器(図面44・45)

第4群土器に次ぐ6%の出土量にて、建物部分東端よりはばまとまって出土したもので、接合はするが、復元し得た個体はない。又、遺構に伴っての出土は1片もなく、包含層と表土等よりのものが全てであった。

1類 称名寺式土器

図面44-1に示す1片のみの出土、胴部片。幅広の沈線にて曲線のモチーフを描く。地文の縄文は、LRで約2cm毎に糸方向を異にする。区画外を磨り消す、砂粒多く含む脆弱。

2類 堀之内式土器

a 44-2・3。大形の深鉢形土器。胴上半がゆるく括れる。内面口唇に1条の沈線が入る。胴上半部は縄文を地文とし(弱い)、細沈線により、上半に「U」状文、下半に「∩」状文、その間に2～3条の縦位の沈線が組み合わさる。「U」状区画間を弱く磨り消す。文様モチーフは、下北原遺跡第6群第1類B-1型(鈴木他1977)と共通する。縄文を地文としている点異なる。胎土に白砂砂粒を含むのが特徴的である。

b 44-4。甕形土器。胴部がやや括れる。口縁下に沈線(間に列点3つ)が走り、列点下の頸部より縦位に8の字状貼付文と刻目有す隆帯を貼付する。隆帯に沿い、3本1組の沈線により、曲線文を描く。胴部は縄文を地文とする。

c 45-1～4。深鉢形土器。口縁上部に刻目のある隆帯が1条ないし2条めぐる、縦位の8の字状隆帯により口唇よりつながる。下半は横位の沈線間に縄文を施文する。44-2, 44-4の様に、沈線により曲線的な文様が描かれる部分もある。沈線は細いが、深く刻まれ明瞭である。44-1の縄文はLRで線が小さい。内外面とも平滑に器面調整しており、器厚5～6mmと薄いが堅緻である。

3類 加曾利B式土器

V 縄文時代の調査

a 45-5。器厚3mm前後と薄手の深鉢形土器。平口縁と思われる。数条の横位細沈線とその間に連続するの字状沈線。下半は細沈線による曲線文で、沈線には縄文が施文される。口唇上に「∞」字状小突起が付く。内・外面とも極めて平滑に器面調整する。

b 44-6。細沈線による格子目文を粗雑に施文する。

c 44-8。注口土器の把手部。口縁外面に隆帯を平行して貼付し、刻目を付ける。把手部外面中央には沈線にて「2」状を描く。外面は極めて平滑に器面調整するが、内面は荒い。

d 44-7。縄文のみの深鉢。内面口唇下に1条の沈線めぐり。LRの横位施文。胎土に細砂を多く含む。褐色～暗赤褐色を呈する。

4類 前の2・3類に属すると思われる無文。胴部・底部片や注口部など。

a 無文の胴部片。11点出土。薄手のものと厚手のものがある。

b 注口部、無文。1点出土。

c 底部。網代底を有するものを一括した。11点出土。2・3類に属するものの外、第5群土器などのものも含んでいるものと思われる。器厚薄く、焼成良好なもの(44-10・12)と厚手のもの(その他)がある。44-9は、底径14.3cmと大形品で胎土に細砂粒を多く含む脆弱。胴部の立上り方などをあわせて考えると、第5群土器に伴う可能性がある。圧痕が不鮮明な網み方の明瞭なものは少なく、45-12が〔経 1本越, 2本潜, 緯 2本越, 1本潜, 1本送り〕、45-14が〔経 2本越, 2本潜, 緯 2本越, 2本潜, 1本送り〕と読みとれるのみである。

第8群 時期不明及び小片、細片につき類別不明土器

何れの時期とも判別つかないものが計58点あって、殆んどは小片であるが、中で、45-16～21に示した同一個体土器の帰属が不明である。

45-16～18が口縁部片、19-21が胴部片で、器厚1cm前後の深鉢形土器。口唇部は45-18の様には円頂状を呈す部分と、45-16・17の様にはやや細くなっている部分がある。外面口縁下に、1条の横位のやや太い沈線がめぐりようだが、部分的に途切れるところもある。これ以下に、細い平行沈線文にて、直線的、曲線的文様を描く。全体モチーフは不明である。施文は極めて粗雑である。内面は、平滑に器面調整する。褐色～暗褐色を呈し、胎土に細かい砂粒多い。

S I 171住居跡出土土器 (図面31)

合計160点の類別出土点数は第3表に示す通りで、第1群土器が116点、73%と大半を占め、これに第2群1点、第4群8点、第6群1点、第8群(不明小片)32点が加わる。

31-1～21が第1群土器である。31-1は4類e、31-2は6類b、31-3・4は7類b、31-6～8は7類c、31-9・10は7類d、31-11は7類dもしくはeである。以上の4～7類の撻糸施文のものは合計33点に対して11～18類の無文のものは80点と、1:2.4の割合を示して、無文のものが断然多い。もっとも17類の無文体部片中に、撻糸施文土器の無文部分が多く

入っていることを差し引かなければならない。

31-12は11類 a。31-5が12類 aの小形尖底深鉢形土器で、復元実測し得た個体である。口径11.8 cm、残存高11.4 cm。口唇は円頭状で、口縁外面を弱く横にナデる。胎土緻密。外面褐色、内面黒色を呈する。31-13は12類 c、31-14・15は12類 e、31-17・18は14類 a、31-19・20は17類、31-21は18類 bである。

31-22は前述の第2群（押型文系）土器である。

SS2配石跡出土土器（図面31・32）

埋壘1 33-23。第6群1類 a。胴部の括れの弱い深鉢形土器で、全体に歪みがある。口縁部の大半と胴下半を欠失して、埋壘として使用されたものである。口縁付近の現存最大径26.0 cm、胴下半の現存最小径16.6 cm、現存高23.0 cmを測る。胎土に砂粒多く、褐色～暗褐色を呈する。隆帯によって口縁部に楕円形区画文（？）を配し、区画内には縄文を施文する。胴部には沈線にて縦位区画を行い、沈線間は交互に縄文と無文となる。LR縄文を施文→沈線→はみ出した部分を粗雑に磨り消す、という工程をとるものと思われる。あるいは前段階に割り付けの為の沈線施文という工程が入るか否か判らなかった。この場合は、細沈線による場合（後の太沈線によって消されることとなる）と頭初から太沈線による場合（縄文施文後のものはナゾリということとなる）が考えられる。

埋壘2 33-24。第6群1類 c。キャリバー形深鉢。口径34.6 cm、現存高29.4 cm、胴下半を欠失する。SS2の東に接して、埋壘として使用されたものである。口縁部文線帯は隆帯と幅広い沈線によって、渦巻文、円形文の区画が成され、内にはRL横位の縄文が施文される。口縁には4つの突起が付く。胴部文線帯は上・下2段構成となる。上段は「U」状文と「N」状文の連結した文様で、「U」状区画内にはRL縦位の縄文が施文され、「？」状もしくは「▽」状沈線が入る部分と入らない部分がある。区画外は無文となる。下半には、上半「U」状文に対して「N」状文が描かれ、間に「？」状もしくは「▽」状沈線が入る。上半と同様に区画内には縄文が施文される。胎土に細かい砂粒多く、赤褐色～褐色を呈する。

32-1・2は第6群1類 bもしくは2類 a、32-4は2類 aもしくは b、32-5・7は2類 cである。何れも2本の沈線により縦位区画もしくは「N」状区画を描き、区画内もしくは区画外に、1・2・4は縄文を施文し、5・7は楕円状施文器具による刺突文を施文したものである。

32-3は楕円状施文器具による条線によって直線文、曲線文を施文する斜形土器。口縁2.5～3 cmほど無文で、横走る1条の沈線以下に条線を縦位に施文する。

32-6は7類 bの縄文施文土器である。

SS4集石出土土器（図面32）

全て第1群土器で、32-8は7類c、32-9は12類a、32-10は9類である。

32-10は器厚1.2~1.4cmで、二次的な焼成によるものか軽くもろい土器で、他と全く顔付きが異なる。繊維は含んでいない様である。3本1単位の縦位の条痕が2箇所付近に近接してみられる。その幅は約1mm、条間約3mmで浅く弱い痕跡であることから、櫛歯状施文具によるものでなく、絡条体を押し引きしたものと思われる。

図示外で、7類cが1点、17類が2点ある。

SS5 集石出土土器

図示外で第1群17類土器1点がある。

SS6 集石出土土器 (図面32)

32-11は第1群12類cで、外に同12類eが1点、同17類が1点、同不明1点がある。

SS7 集石出土土器 (図面32)

32-12は第1群7類a、32-13は同14類b、32-14は同17類で、32-13には補修孔1つが穿たれる。図示外に、第1群7類eが1点、同17類が9点、同不明が10点、第4群4類eが4点ある。

SS8 集石出土土器 (図面32)

32-15は第1群7類c。図示外で、第1群7類cが1点、同17類が1点、同不明が1点ある。

SS9 集石出土土器 (図面32)

32-16は第1群17類。図示外で、第1群7類cが1点、12類aが1点、17類が7点ある。

SS10 集石出土土器

図示外で、第1群不明が1点あるのみ。

SS11 集石出土土器 (図面32)

32-17・18は第4群2類a ii 32・20同4類bで、木跡には第1群は出土せず、全て第4群。図示外で、同2類a iiが4点、a ivが2点、a vが1点、同4類cが1点ある。

SS12 集石土坑出土土器 (図面32)

32-19は第4群4類c iiで、図示外で同不明が1点ある。

SK 297 土坑出土土器 (図面32)

32-21・22は第1群5類c、32-24は同7類c、32-23は同17類で、図示外で、第1群5類cが1点、同7類cが2点、同不明が4点ある。

SK 298 土坑出土土器

図示外で、第1群7類cが4点、同17類が2点、同不明が1点ある。

SK 300 土坑出土土器 (図面32)

32—25は第1群5類d, 32—27は第4群2類ai, 32—28は同2類avで、以上は本体部堆積土出土のものである。32—26は、東側張り出し部焼け面上の焼土・ロームまじりの黒色土(17層)よりの出土で、第4群4類ciiであり、本跡の時期を決する資料となり得る。図示外で、第1群7類cが1点、第4群2類aiが1点、avが3点、同4類c, 第5群不明が1点出土している。

SK 301 土坑出土土器

図示外で、第1群17類土器1点がある。

SK 324 土坑出土土器 (図面32)

32—29は第1群7類cで、図示外で、同7類cが1点、同17類が1点、同不明が1点ある。

SK 379 土坑出土土器

図示外で第1群不明が1点ある。

P J 327 出土土器 (図面32)

32—30は第4群1類である。

P J 573 出土土器 (図面32)

P J 573はS I 171住居跡に伴うとみられるもので、32—31は第1群9類の絡条体条痕施文土器で、押し引きの始めと終りが、明瞭に残る部分がある。

FO～FQ・68～70区遺物集積地点 (図面33)

復元実測出来たのは33—1・2の2個体である。

33—1は第6群2類bで、やや弱いキャリパー形の深鉢で平口縁である。口径23.5cm、現存高19.8cm、文様は太沈線により、上・下2段構成をとる。口縁下に1条の横位沈線があって、以下に2条の平行する沈線によって「 \cap 」状と「 \cup 」状が連結して施文され、「 \cup 」状区画内には縄文が施文され、その他は無文部となる。下段は括れ部以下で、1条の沈線による「 \cap 」状文で、区画内には縄文が施文され、その他は無文部となる。上半はLの縦位施文、下半はRLの縦位施文である。胴下半を欠失する。

33—2は第6群3類で、胴部の括れのやや大きい、キャリパー形の深鉢形土器で、波状口縁である。口径29.3cm、現存高27.5cm。文様は括れ部を境として、上下2段構成で1条の沈線により描かれる。上段は「 \cap 」、「 \wedge 」と「 \cup 」、「 \vee 」が連結したもので「 \cup 」、「 \vee 」状区画内には縄文が施文される。下段は上段の「 \cap 」、「 \wedge 」部の中間位置にくる形で「 \wedge 」、「 \cap 」状文が施文され、区画内には上段と同じく縄文が施文される。「 \cap 」状、「 \wedge 」状といっても区別つきがなく、先の細くなった「 \wedge 」状文とも、先の丸くなった「 \wedge 」状文ともいえず、「 \cap 」状文と「 \wedge 」状文の中間的なものとする事ができよう。区画外は無文部となり、ていねいな器面調整が行われている。口縁下2～3cmは、RLの横位施文、以下は縦位施文により、条方向を異

にしている。胴下半を欠失する。

33-3・4は第5群2類で、33-3は同e、33-4は同gで浅鉢である。

33-8は第6群5類bで、縦位の微隆起区画で縄文部と無文部が交互となる。隆帯の横断面は三角形を呈し、両裾を貼り付け時の押さえの沈線が走る。縄文はRLの縦位施文。

33-5~7は底部片で、第6群8類ciである。

合計180点の出土をみたが、多く小片で図示しなかった。内訳は第3表に示す通りで、第6群にまぎって、第1群、4群、5群が若干出土している。

土製品

土製円板5点が出土した。土器片の周縁を打ち欠き、円形あるいは楕円形にしたもので、その周縁の全周もしくは一部を擦ったものである。全て第1群（早期燃糸文系）7類（燃糸施文）の胴部片である。下表に示す。

図面番号	長径×短径 (cm)※1	器 厚※2	重量 (g)	備 考
45-22	4.4×4.0	最大/最小 0.8/0.7	17.0	1/2周やや摩耗し、残りは打ち欠いたままに近い。
45-23	5.6×4.7	0.85/0.8	24.7	3/4周良く摩耗し、残りはやや摩耗する。
45-24	6.4×6.3	0.85/0.65	45.2	1/2周良く摩耗し、残りはやや摩耗する。
45-25	6.7×6.2	1.05/0.7	47.7	3/4周やや摩耗し、残りは打ち欠いたままに近い。
45-26	3.9×3.3	0.95/0.85	13.1	1/2周やや摩耗し、残りはやや摩耗する。

※1 断面位置と直交する方向での寸法。

※2 図示断面と直交断面上での寸法。

(2) 石 器

石器類1,787点の種別毎、出土位置毎の内訳は第4表に示す通りである。遺構内のもの124点、遺構外のもの1,663点で、13類、44種に分類した。掲載資料158点については、第5表に、計測値と観察事項をまとめたので、詳しい記述は省き、まづ主に包含層出土のものを例に分類の概要を記した後、各遺構内出土石器について触れていきたい。なお、1類の尖頭器等については、前項「IV. 先土器時代の調査」において説明する。

ここで、石器実測図等における凡例を示すと、

- ① 7類（磨石）、9類（スタンプ形石器）、10類（石皿）における摩耗面を示すスクリーン・トーンの内、細かい網点は明瞭な摩耗面を、粗い網点は弱い摩耗面を示す。断面（一部平面も）における実線と破線による矢印の示す範囲も同様であり、実線が前者を破線が後者を示す。
- ② 3類（打製石斧）、9類（スタンプ形石器）における、側縁に沿う実線は、つぶれの範囲

第5表 石器計測表(1)

図番	図名	種別	分類	出土位置	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺存状態	石材 不明	備考
46-1	44	打製石斧	3giii	S I-171	6.85	3.95	1.15	40	Ea	頁岩	
46-2	44	打製石斧	3giii	S I-171	6.1	(4.4)	1.5	30	Eb	變成岩	
46-3	44	磨石(凹石)	7c	S I-171	(8.25)	4.95	4.15	230	片残存	閃緑岩	両面に凹(各1つ)
46-4	44	磨石(凹石)	7c	S I-171	(9.85)	8.7	5.2	625	完形	閃緑岩	片面に凹(1つ)
46-5	44	石皿	10cii	S I-171	(13.5)	(9.7)	5.15	695	片残存	閃緑岩	9d転用か?
46-6	44	打製石斧	3f	SS-2	13.5	6.2	1.46	125	Cb	砂岩	
46-7	44	打製石斧	3f	SS-2	9.75	6.7	1.8	140	Cb	—	
46-8	44	打製石斧	3f	SS-2	11.5	6.1	1.95	125	A	—	
46-9	44	打製石斧	3f	SS-2	13.1	6.1	1.55	145	A	頁岩	
46-10	44	打製石斧	3f	SS-2	12.45	5.6	2.0	155	A	ホルンフェルス?	
46-11	44	打製石斧	3f	SS-2	12.8	3.85	1.6	80	A	頁岩	大熱うけている
46-12	44	打製石斧	3f	SS-2	12.6	4.68	1.9	125	A	砂岩	
46-13	44	打製石斧	3f	SS-2	13.8	6.1	1.65	170	A	砂岩	
46-14	44	打製石斧	3f	SS-2	13.45	4.95	2.0	130	Cb	砂岩	大熱うけている
46-15	44	打製石斧	3f	SS-2	12.5	5.35	1.75	130	Fb	砂岩	
46-16	45	敲石	8a	SS-2	14.6	6.7	4.4	490	完形	砂岩	
46-17	44	磨製石斧	4a	SS-2	9.7	4.3	2.3	187		輝緑岩	
46-18	45	スタンプ形石器	9biii	SS-2	11.3	7.3	5.75	470	完形	閃緑岩	
46-19	44	磨石	7biロ	SS-2	13.4	10.25	5.75	1,070	完形	砂岩	
47-1	26	スタンプ形石器	9civ	SS-2	15.8	8.5	5.25	625	完形	砂岩	
47-2	26	石皿	10cii	SS-2	(21.6)	10.1	4.7	1,660	若干欠	閃緑岩	石枕形
47-3	26	石皿	10cii	SS-2	16.9	8.4	2.4	650	完形	閃緑岩	長なる大型加工品有す
47-4	26	石皿	10cii	SS-2	10.3	9.5	2.45	380	完形	内緑岩	
47-5	26	スタンプ形石器	9cii	SS-6	13.3	9.4	4.85	810	完形	砂岩	
47-6	26	燧石	5a	SS-6	7.1	9.7	2.9	200	完形	變成岩	
47-7	26	打製石斧	3giv	SS-7	7.25	3.8	1.6	50	A	變成岩?	
47-8	26	磨石	7biロ	SS-8	(7.2)	(3.3)	4.0	105	片残存	閃緑岩	
47-9	46	スタンプ形石器	9bii	SS-9	13.5	7.35	4.7	620	完形	砂岩	大熱
47-10	46	磨石	7bi f	SS-9	10.6	(5.2)	4.8	315	片残存	閃緑岩	
47-11	45	磨石	7biロ	SS-9	14.5	11.5	6.5	1,460	完形	砂岩	敲打痕有す
47-12	46	磨石	7biロ	SS-11	10.1	10.3	5.3	840		砂岩	
47-13	46	磨石	7biロ	SS-11	(10.15)	(6.5)	3.7	280	片残存	閃緑岩	
48-1	46	挟入磨石	7b	SS-11	(8.2)	7.4	2.8	280	ほぼ完形	閃緑岩	
48-2	46	スタンプ形石器	9ai?	SS-11	(6.2)	(9.7)	4.7	430	片下半	閃緑岩	
48-3	46	スタンプ形石器	9ci	SS-11	8.0	(11.65)	3.3	420	頭部欠	閃緑岩	
48-4	46	スタンプ形石器	9biv?	SS-11	(8.7)	5.5	3.9	205	片上半残存	燧岩	
48-5	46	スタンプ形石器	9biii	SS-11	(6.0)	(7.9)	6.6	500	片下半残存	閃緑岩	
48-6	46	スタンプ形石器	9biii	SS-11	11.95	6.25	6.1	640	完形	砂岩	
48-7	46	石皿	10cii	S K-298	16.3	16.0	3.4	1,240	片残存	砂岩	

第6表 石器計測表(2)

国	図	種 別	分 類	出土位置	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重 量 g	遺存状態	石 材 —は不明	備 考
48-8	46	磨石(凹石)	7e	SK-300	7.7	7.2	4.5	353	完形	閃緑岩	
48-9	46	スタンプ形石器	9eii	遺跡中地点	10.5	9.7	5.0	695	完形	砂 岩	
48-10	47	磨石(凹石)	7e	遺跡中地点	10.25	9.4	4.2	635	完形	閃緑岩	
49-1	47	石 鍬	2a	III層	(1.0)	1.8	0.3	0.55	欠残存	黒曜石	
49-2	47	石 鍬	2b	III層	1.4	1.45	0.4	0.6	完形	チャート	
49-3	47	石 鍬	2b	III層	1.85	1.35	0.2	0.6	完形	チャート	
49-4	47	石 鍬	2b	III層	1.5	1.3	0.2	0.3	片断若干欠	チャート	
49-5	47	石 鍬	2c	III層	2.0	1.9	0.45	1.1	先端欠損	黒曜石	
49-6	47	石 鍬	2c	III層	2.45	1.8	0.45	1.2	両脚欠損	黒曜石	
49-7	47	石 鍬	2c	III層	(2.55)	1.6	0.4	1.3	先端・両脚欠損	チャート	
49-8	47	局部磨製石斧	3a	III層	8.9	5.15	1.9	130	A	凝灰岩	
49-9	47	打製石斧	3b	III層	9.9	4.75	2.0	180	A	砂 岩	
49-10	47	打製石斧	3b	III層	9.8	4.7	1.7	136	A	砂 岩	
49-11	47	打製石斧	3c	III層	11.5	5.85	2.5	245	A	砂 岩	
49-12	47	打製石斧	3d	III層	15.5	10.1	4.85	815	A	雲母岩	
49-13	47	打製石斧	3d ii	II層	14.6	9.15	3.15	510	A	砂 岩	
49-14	47	打製石斧	3diii	III層	(9.0)	(7.4)	3.5	235	Fg	凝灰岩	
49-15	47	打製石斧	3f	III層	13.3	5.75	1.9	165	A	頁 岩	
49-16	47	打製石斧	3f	III層	13.4	6.6	2.15	210	A	砂 岩	
49-17	47	打製石斧	3f	III層	12.7	5.7	1.75	120	A	砂 岩	
49-18	47	打製石斧	3f	III層	11.95	6.2	2.6	215	A	頁 岩	
49-19	47	打製石斧	3f	II層	14.5	5.95	1.95	170	A	雲母岩	
49-20	47	打製石斧	3f	II層	11.45	5.5	0.95	80	A	砂 岩	
49-21	48	打製石斧	3f	II層	12.85	5.0	1.25	95	A	砂 岩	
49-22	48	打製石斧	3f	I層	14.85	5.5	1.9	175	A	砂 岩	
49-23	47	打製石斧	3e	III層	16.4	6.7	2.5	280	A	砂 岩	
49-24	48	打製石斧	3gi	III層	(9.8)	6.6	2.3	210	Cb	砂 岩	
49-25	48	打製石斧	3g i	III層	10.8	5.7	2.0	140	A	—	
50-1	48	打製石斧	3g i	I層	10.1	5.25	1.7	95	A	砂 岩	
50-2	48	打製石斧	3g ii	III層	9.1	5.2	2.1	140	A	—	
50-3	48	打製石斧	3giii	III層	(8.5)	4.8	2.2	95	Cb	凝灰岩	
50-4	48	打製石斧	3gii	III層	10.7	5.0	2.2	150	A	—	
50-5	48	打製石斧	3giii	III層	9.15	4.3	2.0	100	A	—	
50-6	48	打製石斧	3giii	III層	9.5	4.1	1.9	90	A	—	
50-7	48	打製石斧	3gv	III層	8.1	4.8	1.9	85	A	—	
50-8	48	打製石斧	3giv	III層	7.4	4.7	1.7	75	A	ホルンフェルス	
50-9	48	打製石斧	3i	III層	12.8	8.1	3.25	370	A	砂 岩	
50-10	48	打製石斧	3i	P	9.4	7.5	3.0	205	A	砂 岩	
50-11	48	打製石斧	3j	P	7.7	4.5	2.2	70	A	頁 岩	

第7表 石器計測表(3)

図面	図号	種別	分類	出土位置	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺存状態	石材 一は不明	備考
50-12	48	打製石斧	3j	Ⅲ層	9.15	5.3	2.2	115	A	—	
50-13	48	打製石斧	3k	Ⅲ層	13.6	(8.1)	3.2	325	Fb	ホルンフェルス	
50-14	48	打製石斧	3k	Ⅱ層	14.6	7.8	3.4	305	A	ホルンフェルス	
50-15	48	打製石斧	3li	Ⅲ層	10.85	7.7	1.7	155	A	砂岩	
50-16	49	打製石斧	3li	Ⅲ層	11.0	6.0	1.6	150	完形	崩壊成?	
50-17	49	打製石斧	3li	Ⅱ層	13.8	7.4	2.2	200	A	砂岩	
50-18	49	打製石斧	3h	Ⅲ層	5.5	3.5	0.8	20	A	—	
50-19	49	打製石斧	3h	Ⅲ層	5.3	2.7	0.8	15	A	—	
50-20	49	磨製石斧	4c	Ⅲ層	5.1	2.3	1.0	14	完形	—	
50-21	49	磨製石斧	4b	Ⅱ層	(3.8)	(2.3)	0.75	10	片断刃部のみ	頁岩	
50-22	49	礫器	5c	Ⅲ層	14.1	14.0	3.5	950	完形	閃緑岩	
50-23	49	礫器	5a	Ⅲ層	7.45	8.95	2.5	175	完形	ホルンフェルス	
50-24	49	礫器	5a	Ⅲ層	9.2	7.7	3.5	260	完形	ホルンフェルス	
50-25	49	礫器	5a	Ⅲ層	8.7	11.7	3.5	365	完形	凝灰岩	
51-1	49	礫器	5b	Ⅲ層	(15.3)	7.5	6.15	1,265	頭部欠く	凝灰岩	
51-2	49	接器	6a	Ⅱ層	2.6	6.2	1.25	80	完形	ホルンフェルス	
51-3	49	接器	6a	Ⅲ層	6.25	7.7	1.9	90	完形	頁岩	
51-4	49	接器	6a	Ⅲ層	3.75	5.85	1.25	40	完形	砂岩	
51-5	49	接器	6a	Ⅱ層	(6.5)	(2.8)	0.65	15	片断残存	頁岩	
51-6	49	磨石	7aイ	Ⅲ層	12.95	6.1	5.8	645	ほぼ完形	砂岩	
51-7	49	磨石	7aロ	Ⅲ層	12.9	7.7	8.5	1,020	完形	砂岩	
51-8	49	磨石	7aイ	Ⅱ層	17.4	7.15	4.2	660	完形	ホルンフェルス	
51-8	49	スタンプ形石器	9aiv	Ⅱ層	10.3	6.8	4.1	330	完形		
51-9	50	磨石	7biイ	Ⅲ層	9.95	6.0	3.55	380	ほぼ完形	閃緑岩	
51-10	50	磨石	7biイ	Ⅲ層	10.6	8.8	3.9	590	完形	閃緑岩	
51-11	50	磨石	7biイ	Ⅲ層	12.0	8.65	5.95	865	完形	閃緑岩	敲打痕有す
51-12	50	磨石	7biイ	Ⅲ層	9.4	8.0	3.75	420	完形	閃緑岩	
51-13	50	磨石	7biイ	Ⅲ層	9.2	(5.3)	4.4	295	片欠く	砂岩	
51-14	50	磨石	7biivイ	Ⅲ層	13.0	7.15	5.35	720	完形	閃緑岩	
52-1	50	磨石	7biイ	Ⅲ層	10.8	7.0	4.7	615	完形	閃緑岩	
52-2	50	磨石(凹石)	7c	Ⅲ層	(8.1)	6.7	3.7	285	両端欠く	閃緑岩	
52-3	50	磨石	7biivイ	Ⅲ層	(6.65)	7.2	2.2	185	片欠く	閃緑岩	
52-4	50	磨石(凹石)	7c	Ⅲ層	10.15	8.8	4.6	590	完形	閃緑岩	
52-5	50	挟入磨石	7d	Ⅲ層	(8.6)	7.7	3.3	345	片欠く	閃緑岩	
52-6	50	挟入磨石	7d	Ⅲ層	10.1	6.3	2.3	245	完形	閃緑岩	
52-7	50	挟入磨石	7d	Ⅲ層	(9.7)	8.4	2.7	325	片欠く	閃緑岩	
52-8	50	挟入磨石	7d	Ⅲ層	(8.15)	7.1	3.1	295	片欠く	閃緑岩	
52-9	50	敲石	8a	Ⅲ層	(7.2)	5.9	3.81	210	片欠く	砂岩	
52-10	50	敲石	8a	Ⅲ層	11.9	5.9	3.25	350	頭部や欠く	凝灰岩?	

第8表 石器計測表(4)

図面	図号	種別	分類	出土位置	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	遺存状態	石材 —は不明	備考
52-11	51	スタンプ形石器	9 aiii	III層	9.9	6.95	4.7	470	完形	閃緑岩	
52-12	51	スタンプ形石器	9 ai	III層	12.4	9.85	5.7	845	完形	砂岩	
52-13	51	スタンプ形石器	9 aii	III層	11.2	7.9	4.2	425	完形	砂岩	
52-14	51	スタンプ形石器	9 aiii	III層	9.1	6.7	3.65	330	完形	砂岩	
52-15	51	スタンプ形石器	9 aiii	III層	9.75	7.55	3.4	330	完形	閃緑岩	
53-1	51	スタンプ形石器	9 aiv	III層	10.6	7.4	4.5	600	完形	閃緑岩	
53-2	51	スタンプ形石器	9 aiv	III層	11.5	7.1	6.6	715	完形	閃緑岩	
53-3	51	スタンプ形石器	9 bi	III層	13.8	10.35	5.5	720	完形	閃緑岩	
53-4	51	スタンプ形石器	9 bii	III層	12.7	8.9	5.5	720	完形	砂岩	頭部に敲打痕
53-5	51	スタンプ形石器	9 bli	III層	12.1	8.6	4.1	505	完形	砂岩	
53-6	51	スタンプ形石器	9 biv	III層	13.5	(7.15)	6.85	620	欠欠	砂岩	
53-7	51	スタンプ形石器	9 biii	P-893	10.3	6.55	5.25	440	完形	砂岩	
53-8	51	スタンプ形石器	9 biv	III層	11.0	8.2	5.65	595	完形	閃緑岩	
53-9	51	スタンプ形石器	9 biii	S 1-147	10.6	7.9	5.5	655	完形	砂岩	
53-10	51	スタンプ形石器	9 biv	III層	13.3	6.65	5.65	655	完形	砂岩	
54-1	52	スタンプ形石器	9 biv	III層	10.25	7.4	8.2	535	完形	砂岩	
54-2	52	スタンプ形石器	9 ci	III層	12.8	10.0	3.6	600	完形	閃緑岩	
54-3	52	スタンプ形石器	9 ci	III層	12.2	12.2	4.7	870	完形	閃緑岩	
54-4	52	スタンプ形石器	9 ci	III層	10.6	9.5	3.3	495	完形	閃緑岩	
54-5	52	スタンプ形石器	9 ci	III層	13.2	8.3	4.8	600	完形	砂岩	頭部に敲打痕
54-6	52	スタンプ形石器	9 cii	III層	9.4	9.1	3.7	385	完形	砂岩	
54-7	52	スタンプ形石器	9 ci	III層	11.4	8.9	3.9	615	完形	砂岩	
54-8	52	スタンプ形石器	9 cii	III層	11.15	9.2	4.7	660	完形	砂岩	
54-9	52	スタンプ形石器	9 cii	III層	14.5	10.15	5.75	1,020	完形	閃緑岩	
54-10	52	スタンプ形石器	9 civ	III層	11.8	9.1	5.65	460	完形	砂岩	
54-11	52	スタンプ形石器	9 ciii	III層	11.15	7.5	5.7	705	完形	砂岩	
54-12	52	スタンプ形石器	9 ci	III層	10.1	9.3	4.5	560	完形	砂岩	
55-1	53	石皿	10a	III層 (20.3)	(21.5)	6.5	3,600		欠片	安山岩	
55-2	53	石皿	10b	III層	19.4	16.4	6.1	3,680	完形	閃緑岩	
55-3	53	石皿	10cii	III層	24.2	(13.45)	3.85	1,895	若干欠	閃緑岩	
55-4	53	石皿	10ci	P-1005	28.1	25.1	4.3	4,820	完形	閃緑岩	
55-5	53	石皿	10ciii	III層	12.5	10.65	2.5	525	完形	閃緑岩	
55-6	53	石皿	10ciii	III層	(11.45)	(5.96)	2.2	235	欠	閃緑岩	
56-1	54	石皿	10aii	表採	20.1	17.65	3.9	2,170	完形	閃緑岩	
56-2	54	石皿	10cii	III層	13.9	14.7	3.7	1,060	完形	閃緑岩	
56-3	54	砥石	11a	III層	(8.3)	4.1	0.9	75	欠以下	砂岩	

を示す。

- ③ 石材同定は、大沢進氏に依頼し、肉眼観察による結果を別表に示した。——は不明のものである。掲載資料全ての外、77点を抽出して同定していただき、残る資料については、それにもとづき判断した。

さて、本調査区出土の石器は次に示す13類に大別される。

- 1類 尖頭器
- 2類 石鎌
- 3類 打製石斧（局部磨製石斧，礫石斧含む）
- 4類 磨製石斧
- 5類 礫器
- 6類 加工痕のある剥片（剥片石器）
- 7類 磨石（凹石，挟入磨石含む）
- 8類 敲石
- 9類 スタンプ形石器
- 10類 石皿
- 11類 その他（砥石，台石，棒状礫他）
- 12類 残核
- 13類 剥片（礫片含む）

第4表に示すごとく、13類が約65%を占め、これを除く1～12類が630点となる。この内、3類と7類が28、29%で最も多く、次いで9類(15%)、10類(13%)となり、以下11類の6%を最高に、1、2、4～6、8、12類は3～1%以下の出土比率である。

2類 石 鎌 (49-1～7)

基部の形態により、a. 無脚のもの(基部の挟入が無い)、b. 有脚のもので、基部の挟入が浅いもの、c. 有脚のもので、基部の挟入が深いもの、d. 有脚のもので、基部の挟りこみが極端に深いものの4種に細別される。この内、dは、一般に長脚鎌と呼ばれる草創期に特有のものであり、1類の尖頭器と共に、前項、IVで触れている通りである。

ほとんどが、黒曜石かチャート製で、欠損のものも多く、完形は49-2・3の2点のみである。

3類 打製石斧 (49-8～25, 50-1～19)

打製石斧は、磨石に次ぐ出土比率を占める。素材、形態、加工方法などにより、12種に細別した。

- a 局部磨製石斧 刃部を局部的に研磨されるものを本類に含めた。49-8を含め2点出

土。

b いわゆる礫石斧と呼ばれるもの。長方礫の先端を片面もしくは両面加工して刃部を作り出す。千葉県苗見作遺跡（夏島・稻荷合式期主体）に好例がある。

c 小形の長円礫を片面加工したもの。同じく、苗見作遺跡に類例多い。

d 大形の礫を両面加工したもの。i. 部厚い鈍器。ii. 両面加工により刃部鋭利。iii. iiより大形で両面加工。

以上b～dが礫器で、e以降が割片石器である。

e～hは短冊形、i～jが撥形で分胴形はない。大きさなどにより細分される。

e 大形のもの。49-23の様に、長さ15cmを超える。

f 中形のもの。最も多く、72点出土。49-19・22の様に、長さ15cm前後のやや大きいものと46-6～10、49-15～20の様に、長さ12～13cm前後のもの、46-11の様に細身のものなどがある。

g 小形のもの。i. 幅広のもの。ii. 中間のもの。iii. やや細身のもの。iv. さらに小形のもの。v. 側縁に丸味のあるもの。などに細分できる。これらも比較的多く出土している。

h さらに小形のもの。長さ5cm前後、重量15～20gのもの。50-18・19。

i 50-9・10。大形の撥形打製石斧。粗大礫を両面加工したもので、K種に近い。

j 50-11・12。小形の撥形打製石斧。共に図裏面は自然面。ていねいに周縁を加工し、撥形としている。

k 粗大礫を両面加工し、50-13は楕円形に、50-14は、撥形にしたもので、共に厚い鈍器である。

l i. その他のものとii. 素材割片と思われるものを一括した。i. が50-15～17など50点、ii. にはf・g・hに対応するもの29点がある。50-15は、横長の片面自然面の薄い割片で、両側縁中央に浅い抉りを入れる。狭い方の半周の剝離面のみ打ち欠く。あるいは、刃部は、図上部の未加工部か。50-16は、扁平な長円礫の両側縁中央に打ち欠いたもので、図下部の縁辺はやや磨耗し丸味を有する。町田市田中谷戸遺跡に類例あり、石錘としている。56-17は、15と同じく、横長の割片を素材とする両図右側縁のみ自然面を有し、断面くさび形である。両側縁中央に抉りを入れる。刃部はほぼ直線的にして、両面より加工したものである。

打製石斧の遺存状態

次のA～Fの6種の欠損状態にもとづく10の部位に頭ち示した。

A 完形

B 刃部欠損 刃部（側縁のツブレ、タタキを含まない）をa、残存部をbとする。

C 頭部欠損 頭部（側縁のツブレ、タタキを含まない）をa、残存部をbとする。

V 縄文時代の調査

D 胴部だけのもの。

E ほぼ中央で折れたもの。上半部を a, 下半部を b とする。

F 刃部が斜めに折れたもの。折れた刃部を a, 残存部を b とする。

127 点の判別資料が得られているので、種別毎、遺存状態毎の点数を次に記す。

種別 遺存状態	a	b	c	d	e	f	f・g	g	h	i	j	k	合計(比率%)
A	1	2	1	5	3	16	1	18	5	2	7	1	62 (49)
B a	I							10					11 (9)
B b							5	2					7 (5)
C a				1				8					9 (7)
C b					2	1	3	4					10 (8)
D					2	3	5						10 (8)
E a								7	1				8 (6)
E b								8	1				9 (7)
F a													0 (0)
F b							1						1 (1)
合計	2	2	1	6	7	26	44	24	5	2	7	1	127 (100)

A (完形) がほぼ半数を占めていて、e~f・gの短冊形を除いては、ほとんどが完形のものである。この短冊形においては、F (刃部が斜めに折れたもの) が1点と少ない外は、B a・B b・C a・C b・D・E a・E bとも7~10点とほぼ同様の割合を示している。

4類 磨製石斧 (46-17, 50-20・21)

図示する3点が出土。a. 大形で定角式のもの(40-17)。先端部を叩き石として再使用している。b. 小形で定角式のもの(50-21)。刃部若干と上半を欠失する。ていねいな研磨が施される。c. さらに小形のもの(50-20)。3類(打製石斧)hの50-18・19などと似る。円環を利用したもので、刃部はよく研磨している。

5類 礫器 (47-6, 50-22~25, 51-1)

a 中形で片手に納まる程度の礫を片面加工したもので、50-23・25の如く、扇形で、刃部が丸いものが多い。200~300g前後を測る。b 長方形の大形礫の先端を両面加工した純器。1,265gと重い。c 中形の石皿の先端を両面加工したもの(50-22)、950gある。

6類 加工痕のある剥片 (剥片石器) (51-2~5)

不定形な剥片の先端部に調整加工を施したもの。3・5は頁岩で、連続した細かな加工がなされる。3の刃部は一部やや急角度であり、搔器としての機能もっていたものと思われる。

5の刃部は摩耗し光沢あり。2・4は粗雑な調整加工がなされる。2は3と同じく、刃部にやや急角度の部分があって、搔器の機能を有するものであろうか。4は、刃部を除く縁辺をつぶし加工したものである。

7類 磨石(凹石, 挟入磨石含む)(46-3・4・19, 47-8・10~13, 48-1・8・10, 51-6~14, 52-1~8)

剥片類を除く石器中, 182点29%と最も多く出土しており, 次の4種に細別される。

a 不正形な磨石, 51-6は断面三角形で, 3つの稜が全て, 明瞭に摩耗しているもので, いわゆる“特殊磨石”とされるものである。51-7は, 頂部1ヶ所に敲打痕を有する。51-8は, 3つの稜の内の1つが明瞭に摩耗しており, 図上半はスタンプ形石器に転用されている。

b 円形を基本とするもの, 次の5つに分れる。なお, a・bでは, 明瞭な摩耗面を有するものをイ, ないものをロとした。

i 46-19, 47-10~13, 51-10 様に, 円形~楕円形のもの, 51-9や52-1の様に石けん形のもの, 52-11の様にa種に近いもの。52-12の様に一端が角張るものなどの円形, 長円形を基本とするもの。

ii さらに小形で円形のもの。

iii 扁平なもの。52-3など。10類(石皿)c-iiiの小形石盤状のものと似るが, 摩耗面が平坦もしくは凹んでいるものを10類(石皿)とし, 以外を本類に含めた。

iv 棒状のもの。51-14など。

v 以上の何れかに属するか小片の為不明のもの。10類(石皿)との混同もあり得る。

c 凹石, 凹部を平坦面の中央付近に1~2個, 片面もしくは両面に有するもの。

片面に1個—52-2, 片面に2個—46-4, 48-10, 両面に各1個—48-8, 両面に各2個—52-4, 両面に1個と2個—46-3などのほか, 52-5の様に, 挟入磨石の片面に1個あるものもある。

d 挟入磨石, 長軸の両端を打ち欠き, 挟りを入れたもので, 両長側辺が良く摩耗しているほか, 両平坦面も磨れている。48-1, 52-5~8, のほか3点あり, 計8点出土した。完存品は52-6のみで, 52-5~8の様に, 挟れ部を含む長軸の一端を大きく欠すものや48-1の様に突出部を欠すものがある。

8類 敲石(52-9・10)

敲打痕が明瞭なaと敲打痕ない形態より敲石に利用されたと思われる礫のbがある。

52-9は不正形礫の頂部に敲打痕を有するもので, 上半を欠す。52-10は, 凝灰岩(?)製の完存品で, 断面三角形を呈する。主使用面は図下部で, 頭部も一部使用している。2つの稜をつぶし加工している。

9類 スタンプ形石器 (46-18, 47-1・5・9, 48-2~6・9, 51-8, 52-11~15, 53-1~10, 54-1~12)

a (加工を有さないもの), b (1側縁のみ加工するもの), c (両側縁を加工するもの), d (素材陳もしくは未製品かと思われるもの) の4種に分けられる。これに握り部と底面の形態分類を加えて, dを除いて12に細分される。

a i 握り部がいわゆる凡字形で, 底面は長円形。52-11・12など。

a ii 握り部がいわゆる鳥帽子形で, 底面は不正方形。52-13。

a iii 握り部は頸部にむかいやや細くなる長円形で, 底面は長円形。52-11・14・15など。

a iv 握り部は aiii に同じく, 長円形で, 底面が広いもの。53-1・2など。

b i 握り部がいわゆる凡字形で, 底面が長円形。53-3など。

b ii 握り部が鳥帽子形で, 底面は長方形もしくは長円形。53-4・5など。

b iii 握り部は頭部へむかい細くなる形で, 底面は広く, 三角形, 方形, 不正方形を呈す。53-6・8・10など。

c i 握り部はいわゆる凡字形で, 底面が長円形もしくは長方形のもの。54-2~5など。

c ii 握り部はいわゆる鳥帽子形で, 底面は, 長円形もしくは長方形のもの。54-8・9など。

c iii 握り部は aiv, biii に同じく長円形で, 底面が広いもの。54-11など。

c iv 握り部は biv に同じく頭部へむかい細くなり, 底面が広いもの。54-10など。

以上につき詳しくは後述することとする。

d種としたものの内の2点は, 未製品と思われるもので, 石盤状の粗大礫の一端を打割し, 底面を作出したものである。さらに側縁に加工を加えることによって完成するものと思われる。1つは最大長14.6cm, 最大巾17.0cm, 最大厚5.9cm, 今1つは, 最大長12.7cm, 最大幅12.7cm, 最大厚4.7cmを測る。

外に, 周囲の一部を若干打ち欠いただけの石盤状の粗大礫があり, 素材陳かと思われる。

10類 石皿 (46-5, 47-2~4, 48-7, 55-1~6, 56-1~2)

81点とスタンプ形石器に次ぐ出土量を占める。次の3種に細別される。

a 有縁で, 中央が大きく凹むもの楕円形と思われる。55-1など。点数は最も多いが, ほとんど小片である。

b 平盤状で, 厚みのあるもの。55-2の1点のみ。中央部のみ縦長に細く摩耗する。

c 平盤状で, 薄いもの。大きさによって, 3つに分けられ, 55-1が大形(i), 55-5・6などが小型(III)のもので, 中形(II)のものが最も多い。中形のもの17は, 円形のもの(48-7, 56-1など), 兩丸三角形のもの(56-2), 長円形のもの(47-3), 石枕形のもの(47-2)な

どがある。47-3は側面に細長く摩耗痕があり、磨石としても使用したものである。

11類 その他(砥石、台石、棒状礫他)

56-1は砂岩製の砥石残欠である。図裏は板状に剝離している。側面はていねいにつぶし加工を施す。使用面の中央はやや凹み、この部分を極として、よく摩耗している。

図外で、合石状石器1点、棒状礫16点、小型偏平礫3点、乳棒状礫2点、石剣状製品1点の外、石器か否か不明のものなど16点がある。

12類 残核、13類 剥片

砂岩と頁岩の残核各1点がある。剥片は、a加工痕あるもの、b加工痕ないものがある。bには、石器作出剥片あるいは素材剥片のみでなく、礫片も含んでいる。包含層出土のb種は、1,021点、総重量29,462gを数える。自然面を $\frac{1}{2}$ 以上残すものが105点、 $\frac{1}{2}$ 以下のもの533点、自然面のないもの383点である。石材別にみると、多い順に、ホルンフェルス(288点)、砂岩(265点)、頁岩(81点)、変成岩(32点)、チャート(28点)、黒曜石(23点)、珩岩(5点)、緑泥片岩(4点)、結晶片岩(2点)、礫岩(2点)、石墨類(2点)、凝灰岩(1点)、閃綠岩(1点)となり、不明が277点ある。

S I 17住居跡出土石器(図面46)

小形の短冊形打製石斧2点(46-1・2)、と両面加工の大形礫器1点、小円形の磨石1点、磨石小片が1点、中形の石皿片1点(46-5)、などの外に、小形のスタンプ形石器かと思われるもの1点、磨石かと思われるもの1点、剥片8点がある。46-5は形状から推して、スタンプ形石器に転用した可能性がある。

S S 2配石跡出土石器

打製石斧をはじめとする計56点の石器が礫とともに、遺構周縁部より主に出土した。

打製石斧は全て短冊形のもので、その多くはf種(中形のもの)で、11点を数えた(46-6~15)外に、fもしくはg(小形のもの)が2点ある。定角式密製石斧が1点(46-17)ある。石材は輝綠岩かと思われ、先端を後に、敲石として使っており、原形をとどめないが、優品である。磨石は、不正形のもの1点、円形のもの2点(40-19など)、偏平のもの3点がある。46-16は敲石。スタンプ形石器が2点(46-18、47-1)出土する。石皿は7点あって、有縁のものが3点。中形偏平のものが3点(47-2・3)、小形偏平のものが1点(47-4)ある。この内、47-2は石枕形を呈しており、南東部にあって、立石様の状態で出土した。47-3も長楕円形の特殊なもので、両面がやや磨耗しており、側面には明瞭な磨耗痕が細長く残される。この外剥片など21点が出土している。

S S 3集石出土石器

有縁の石皿片4点と合石状礫1点を出土している。

SS4 集石出土石器

剝片1点のみ出土。

SS6 集石出土石器 (図面47)

中形の片面加工の礫器が1点(47-6)、スタンプ形石器1点(47-5)出土する。

SS7 集石出土石器 (図面47)

短冊形の小形打製石斧1点(47-7)などが出土している。

SS8 集石出土石器 (図面47)

円形の磨石片1点(47-8)が出土している。

SS9 集石出土石器 (図面47)

小形(h種)の打製石斧1点、磨石5点(47-10・11)、スタンプ形石器3点(47-9など)、中形偏平の石皿1点が出土する。磨石は不正形のもの2点、円形のもの3点。スタンプ形石器は、片側縁のみ加工するもの2点、両側縁を加工するもの1点である。

SS10 集石出土石器

剝片1点のみ出土。

SS11 集石出土石器 (図面47・48)

磨石が4点(47-12・13)、挟入磨石が1点(48-1)、スタンプ形石器が6点(48-2~6)、剝片類が5点出土している。スタンプ形石器の内、2点(48-2・3)は、打面全面が明瞭に磨耗する。共に閃緑岩。SS9と並んで、石器類が多く出土するのが特長である。

なおSS5・12集石よりの出土はない。

SK 298 土坑出土石器 (図面48)

中形偏平の石皿1点(48-7)が出土。周辺包含層出土の4点と接合している。

SK 300 土坑出土石器 (図面48)

小形円形の磨石(凹石)が1点(48-8)出土。

PJ 256 出土石器

円形の磨石片1点が出土している。

FO~FQ・68~70区遺物集地点出土石器 (図面48)

中形もしくは小形の短冊形打製石斧1点、円形の磨石1点、磨石(凹石)1点(48-10)、磨石もしくは石皿片1点、スタンプ形石器1点(48-9)の外、剝片2点が出土している。

(3) 礫

縄文時代遺構内より1,332点、包含層中より7,546点、合計8,878点出土。このほかに、表土中や歴史時代遺構内よりも若干出土している。垂直及び水平分布については、後述の通りであるが、遺構や土器・石器の分布にはほぼ合致しており、ことにSS3~12集石の分布に最も相

V 縄文時代の調査

似していることから、これらとの関連を指摘し得る。

ここに概略を記し、SS3～12集石との関連については後に記すこととする。

包含層中出土の7,546点につき、観察を行った結果を記す。なお、接合関係については、みていない。まず、石材をみると、砂岩が最も多く、5,665点(75%)、チャートが1,095点(15%)、その他782点(10%)となっている。破損度をみると、完形礫が2,789点(37%)、破損礫が4,757点(63%)となる。焼成状況は、焼成を受け赤変もしくは灰変しているものが6,988点(93%)、未焼もしくは不明のものが558点(7%)である。スス状もしくはタール状の黒色付着物は739点(10%)にみられる。最後に重量をみると、縄文時代発掘区にかかる7,101点を量ったところ、466,320gあり、1個平均66gとなる。

第9表 遺構内出土礫一覧表

遺 構	点 数 <small>(内は在層 ラレイアの点数)</small>	1) 石 材			2) 破 損 度		3) 接合作業後		4) 焼 成 状 況			5) 黒色付着物			
		砂岩	チャート	その他	完形	破片	個体数	完形	破片	赤変	灰変	未焼	スス	タール	なし
SI 171	127	94	12	21	29	98	—	—	—	122	3	2	4	0	128
SS 2	184 (56)	121	3	60	35	149	145	40	105	158	22	4	11	0	173
SS 3	34 (6)	17	13	4	5	29	31	5	26	34	0	0	1	0	33
SS 4	97 (1)	77	6	14	6	91	56	6	50	94	0	3	4	0	93
SS 5	65	44	21	0	2	63	45	2	43	65	0	0	9	0	56
SS 6	72 (2)	61	7	4	3	69	45	6	39	83	7	2	3	0	69
SS 7	42 (2)	36	5	1	14	28	40	14	26	36	3	3	4	0	38
SS 8	72 (1)	43	28	1	16	56	64	17	47	70	0	2	5	1	66
SS 9	152 (1)	101	42	9	31	121	119	31	88	134	12	6	18	0	134
SS 10	16 (1)	10	2	4	7	9	16	7	9	16	0	0	1	0	15
SS 11	62 (16)	42	3	17	18	41	60	19	41	82	0	0	6	0	56
SS 12	378	269	82	27	49	329	370	51	319	360	18	0	199	15	174
SK 294	1	0	1	0	0	1	—	—	—	1	0	0	0	0	1
SK 297	13	12	1	0	4	9	—	—	—	13	0	0	0	0	13
SK 298	10	10	0	0	0	10	—	—	—	10	0	0	1	0	9
SK 300	7	4	1	2	4	3	—	—	—	6	0	1	1	0	6
SK 302	2	1	0	1	1	1	—	—	—	2	0	0	0	0	2
SK 323	1	1	0	0	0	1	—	—	—	1	0	0	1	0	0
SK 343	10	5	4	1	4	6	—	—	—	10	0	0	1	0	9
SK 344	3	1	2	0	1	2	—	—	—	3	0	0	1	0	2
遺構層中地立	70	67	1	2	25	45	—	—	—	69	0	1	12	0	56
合 計	1,418 (86)	1,016	234	168	254	1,164	991	198	793	1,329	65	24	282	16	1,130

3. 遺物包含層の発掘

(1) 遺物包含層と出土遺物の垂直分布 (第15図)

縄文時代の遺物包含層はⅢ層で、Ⅲ a層(黒褐色土)、Ⅲ b層(暗茶褐色土)、Ⅲ c層(茶褐色土)に分層されるが、この内Ⅲ a層は、Ⅲ層の上層がⅡ層(黒褐色土)の影響を受けたものと思われ両者の境はやや不明瞭であった。Ⅲ a層は断面観察によっても全域で認められるわけではなく、建物部分西半に顕著であるものの、平面においては識別がやや困難であった。

Ⅲ層の層厚は、西半では40~50cm、東半では30~40cmと東が薄く、道路部分では北へ行くに従いやや厚くなって35~40cmとなる。Ⅳ層(ソフトローム)上面においては、西から東へゆるやかに傾斜していて、建物部分の西端と東端(距離約70cm)で北高30cmほどであるのに対し、Ⅲ層上面では、西が相対的にやや高くなり、比高40cmとなる。道路部分の地形は、南から北、そして東方向へと傾斜していて、南端と北端(距離約80cm)で、Ⅳ層上面の比高差が70cm、Ⅲ層上面の比高差65cmとなり、北へ行くに従い5cmほど厚くなる。

建物部分において、南西方向へ層厚が増すのは、台地南縁の小谷群によるもので、この内、現園分寺裏山の湧水湧出箇所2地点がみられるものが、最も大きく影響を与えているものと思われる。道路部分における北東方向への傾斜は、台地東縁の小谷群によるもので、この内、東元町3丁目21の湧水湧出箇所の谷が大きく影響して台地奥まで浅く入っているものと思われる。層厚の変化はこれら地形に対応する。

町田洋氏は富士を給源とする火山灰の研究を行い、富士山麓及びその周辺地域における関東ローム層堆積後の“約1万年前から5000年前ごろまでの爆発的活動の静穏な時期に堆積した火山灰を母材とする腐植質火山灰”を「富士黒土層」と名づけ、それ以降、土器型式からいえば縄文前期末以降の“富士黒色土層の上位に重なる粗粒のスクリア質テフラ層”を「新期富士降下火砕層(新期富士テフラ)」と名づけた。

本調査区で得られた、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ a→Ⅲ b→Ⅲ c→Ⅳの層序は、武蔵野段丘上の平坦面においてほぼ普遍的にみられる。対して、立川段丘上の平坦面の層序は、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ(茶褐色土)→Ⅳとなり、Ⅱ層(黒褐色土)は同一層と考えられるが、Ⅲ a層、Ⅲ b層、Ⅲ c層とⅢ層は対応しない。即ち、Ⅲ a・Ⅲ b層は立川段丘上では認められず、共にローム漸移層としてとらえている武蔵野段丘上Ⅲ c層(茶褐色土)と立川丘上Ⅲ層(茶褐色土)は、色調・性状をやや異にしていて同一層と断定はできない。立川段丘上Ⅲ層ではその上部を主として縄文時代遺物が包含される。又Ⅱ層との境も明瞭に区別している。

町田氏による富士黒色土層がⅢ b層に対応できるか否か、Ⅲ a層が新期富士テフラに対比できるのか否かが問題となる。町田氏によると縄文中期は新期富士テフラ層中に包含されている

ことになるが、山本暉久氏は新期富士テフラの形成の開始が富士山麓周辺におけるあり方よりみて前期末にさかのぼるとしても、その広域な降下は中期後半以降、特に降下の活発化は中期末以降とするのが妥当な理解であるとする。Ⅲb層を富士黒色土に対比するとその考えが首肯できる。又、Ⅲa層をⅢ層の上部ということでなく、新期富士テフラに対比し得る独立層として設定できるとすると、——この場合、降下の時期については山本氏の見解に従う——最も上位に出土した中期末のSS2配石礫やFO-FP・68~70区遺物集中部のあり方が、理解できる。

Ⅱ層（黒褐色土）についても、新期富士テフラに比定される可能性が指摘されている（西脇1979）。Ⅱ層は、歴史時代遺構内堆積土に酷似していて、同遺構の掘り込み面は識別し難い。但、立川段丘上の四中校地体育館部分の調査ではⅡ層上面より明瞭に掘り込む掘立柱建物（ロームを含む柱穴埋め土との対比により判った）があって、極めて近接時期の形成が考えられる。とすると、縄文時代中期以降の新期富士テフラ層と奈良・平安時代の新期富士テフラ層が存在することとなる。

この外、崖線下の黒鍾谷にみられる黒色土（縄文前・中・後期——特に後期を主体とする遺物を包含する）の形成過程や、立川段丘上と武蔵野段丘上のⅢ層の形成過程の相違、等々今後の検討課題とされる。

さて、遺物の垂直分布について全域を対称とするのは困難であったので、第15図に示すようにF1~FT69区（SS2についてはFN・F068区分）、F166~71区出土の土器（群別）・石器・礫の出土位置を各断面図に投影した。又、平面分布図において7群（後期）土器の集中するFO~FP・83~87区と6群土器（加曾利E式）の集中する範囲の内FS78区について、作図してみた。これらの結果にもとづき、看取される事を述べる。

遺物はⅢ層上部、即ち、Ⅲa層からⅢb層を中心としており、Ⅲc層に至ると疎になる。この傾向は調査区全域において、その疎密・層厚にかかわらず認められた。

なお、Ⅲa層については、平面における識別がやや困難であったので、分層発掘をせず、表土除去後、Ⅱ層と共に掘り下げ、Ⅲb層上面にて歴史時代遺構を検出した。従い、Ⅱ層出土として処理されている部分とⅢ層上部として処理されている部分がある。従って、Ⅲa層における遺物包含状況を十分把握するに至らなかった。

遺物の垂直分布図によって特に時期の判明している土器について、その分布中心域をとらえると、大きく3つがある。①は、1~4群（早期）の土器で、Ⅲc層上部からⅢb層下部にかけてである。②は、Ⅲb層中部からⅢ層上部（Ⅲa含む）にあり、5~7群（中・後期）の土器である。③は、SS2配石礫や、FO~FQ・68~70区に集中する土器群で、Ⅲb層上部からⅢa層にかけて分布する。この内、①と②はほぼ峻別できるが、①と②、あるいは②と③はかなり重なる部分がある。

FO～FQ・68～70区遺物集集中地点の加曾利E式第VI～VII段階の土器群等は、歴史時代遺構検出時点で確認されたもので、III層上部のIII aからIII b上部にかけて10～15cmの厚みをもって垂直分布する。又、FO～FP・84～86区周辺にまとまる後期掘ノ内式、加曾利B式土器群も、III aからIII b上部・中部にかけて出土した。これらが最も上位で出土した一群であり、編年と整合する。後期の土器群はIII層中部までの垂直分布を有しており、必ずしもIII層上部に集中していないのに対して、FO～FQ・68～70区遺物集集中地点の土器群ならびにSS 2配石跡の遺物はほぼ同レベルのIII b層上部にまとまって垂直分布していて、一定の行為面（生活面）の存在が予想されるのである。⁽²⁾ところが、FO～FP・84～86区周辺の後期土器群の一部のみでなく、FQ～FS・78～80区周辺にまとまりをみせる加曾利E式第V～VI段階を中心とする土器群は、同じくIII b層上部から中部にかけて分布し、相対的にやや下位までであり、その垂直分布幅が厚い。遺物の垂直方向への移動には、風雨、霜柱、凍結などの自然営力や植物の根、ミミズ、ネズミなどの活動、そして人間の行為などの諸要因が考えられている。本調査区における事例もこうした作用が単独であるいは複合して働いた結果と考えられる。⁽³⁾

草創期に属すると思われる尖頭器と長脚鎌の出土位置をみると、1類aの第13図20と1類b（有舌尖頭器）の第13図21は共にIII c層最下部でほぼその時期を示していると思われるが、1類c（木葉形尖頭器）の第13図22と23及び2類d（長脚鎌）の第13図19はIII b層中位よりの出土であり、移動があったものと思われる。

(2) 土器の平面分布

出土土器の平面分布については、図面1～11に示した様に、グリット毎の分布図を作成した。これにより分布の有様、遍・偏在などが視覚的にとらえられる。

図面1の土器全体の分布によると、ほぼ発見遺構の分布に合わせて、西南部に多いことが判る。西南部には、SI 171住居跡やSS 2配石跡、SS 3～11集石、SK 300土坑などがある。これら土器の主体は、1～4群（早期）である。図面2～8によって確認される。これらに対して、FQ～SF・78～82区周辺に6群（中期後半）があり、FO～FP・84～86区周辺に7群（後期）がまとまるが、共に、遺構はない。

図面2以降により仔細をみていく。第1群（早期撚糸文系）の分布は西南部に多く、周辺部は漸時その数を減少する。もっとも、西南隅（FI～FK・66～68区）部分には、歴史時代住居SI 147があったにせよ、出土量が少なく、ほぼこのあたりを中心として弧状を描く形となり、これは、SS 3～11集石同様に、弧状に分布するのと見かけの上では合致している。もとよりSS 3～11集石の時期は決して長く、中でSS 4・6・7・9が1群に、SS 11が4群（条痕文系）に伴う可能性が大きい。明瞭な下部落ち込みを持たないSS 3～11の場合、周囲の包含層中の遺物と混在するケースが多いものと思われ、SS 4～6・7・9に1群が多

く、SS11に第4群が多く出土しているのはこのことの反映ともとれるので、結局確定する材料は、特別な出土状態等を示さない限り得られないことになる。

図面2で、FK~FL・85~88区に1群土器がまとまっていて、中央の未掘部分を経て、南東側の部分まで密なあり方を示しているものとも思えるが、図面4の様に、この内大半は1群17類（無文の体底部）で、他時期の無文と誤認の可能性もある。FR~FT・70~82区周辺や北壁寄りや東壁寄りなどのものも同様であろう。

次に第4群（条痕文系）土器では、1ヶ所に集中することなく、遍在している様子で、しいて分布の核をあげると2つあり、1つはFN~FO・69~71区、残るはFO84区で、後者は第4群1類の図面38—36の土器が大部分である。これらの分布は、該期の可能性高いSS11・12集石、SK300土坑との関連が考えられる。

第6群（中期後半）土器は、大きく2つに分けられる。1つはFR~FS・78~80区を中心にまとまっていて、図面42—1・2・3・5・7、43—4・5・6・10・13など接合関係を有する土器群で構成されている。FO~FQ・68~70区遺物集中部を上回る出土量であるが、Ⅲb層中の出土であり、調査時には注意されていたものの、作業後初めてその多さに、認識をあらたにした次第である。今一つは、以上を核として、周辺にひろがる範囲で、両者あわせると西南↔北東への方向性が看取され、FP~FQ・68~70区遺物集中部の接合の方向性と一致しており、共通の背景が考えられる。又、前記した図面42—7、43—6などは、周辺部出土の土器と接合している。図面42—4、43—3は分布域を異にして、FQ~FT・72~74区を中心とする。

次に、第7群（後期）土器の分布は、FO~FP・84~86区に集中しているものの、遺構内より遺物は1点も出土しておらず、第5群（中期前半）をしのぐ出土量（約6%）でありながら、その出自は明らかでない。これらも、完全に復元はし得ない資料である。

以上みてきたように、本調査区出土の土器は、その分布状況よりみて、埋納や遺棄ではなく廃棄されたものと考えられる。もっとも、廃棄後の移動はあったとしても、その有様の大枠をくずさない範囲にあったと思われ、このために、上記の様に視覚的なまとまりとしてとらえられるのだろう。

そうすると、一定の範囲内において、継続して（時間の長短を示さない）廃棄行為が行われた結果が上述の分布となっているとすることができよう。

出土遺物の分布に重ねて、接合関係や同一個体関係を示すと、さらに詳細な分析が可能となるが、今回は、第6群土器（中期後半）の一部について行い、記述したのみに終った。

(3) 石器の平面分布

出土石器についても、土器と同様に、グリッド毎に点数を集計し、図化した。以下にその概要を記す。石器分布の要の一つは、その所属時期の想定をし、土器との関連性適及に供すこ

とにあるが、ほぼ土器分布と同じくして容易につかめない。

まづ、3類の打製石斧には、早・中・後期の各期のものが混じっているものと思われるが、明確に分離することは、石器形態からも、分布からもできない。中で、b～dは1～4群の早期にe～fは6群の中期に、gは両方にそれぞれ、分布が相似していて、所属時期の可能性を示唆する。

7類(磨石)8類(敲石)9類(スタンプ形石器)は1～4群(早期)に、10群(石皿)は3群(打製石斧)の分布にも似ていて、早・中・後各期のものが混じっているものと思われ、細分類による分離もできない。

全体の傾向は、土器や礫に相似しているものの、西南部への集中度がやや弱いので、このことから、1～4群(早期)に属する石器の出土比率が、1～4群(早期)の土器などの出土比率などより小さいものとする事ができよう。

(4) 礫の平面分布

縄文時代遺構内より1,332点、包含層中より7,546点(内、縄文時代発掘区より7,101点、466,362g)合計8,878点出土、この外に表土中の歴史時代遺構内よりも若干出土している。

グリッド(3×3m)毎の出土点数を級数表に従い図化したのが図面19である。ただし、不完全発掘区については3×3=9㎡に比例換算した。

これらによると、まづ、全体の傾向として、土器、石器などの出土分布が遺構分布に合っている。又、土器と同じく調査区西南隅に少なく、集中域が弧を描いている。

ことにSS3～12集石の周辺には多く集中している。SS12周辺には、FO80・81区の2区で538点と密集していて、SS12に伴うものと理解される。土器の分布とは重ならない。FQ～FS・78～82区周辺には第6群土器(中期後半)が多量に分布していたが、礫は周囲に比べやや多い程度で、土器を主体としたまとまりといえる。FO～FP・84～86区周辺では土器(第7群後期)の分布と合致してやや多い。FK・FL・85～87区では第1群17類(早期桃糸文系無文体底部)が多く出土したが、礫は他に比べて多くない。

4. 小 結

(1) 早期の遺構と遺物について

早期に属する遺構

伴出遺物、検出面等よりみて、早期に属すると思われる遺構は最も多く、次の通りである。

S I 171住居跡, S S 3~12集石, S K 297・298・300~302・323・324・379土坑, その他の土坑, ビット。

S I 171住居跡は、既述の通り、出土土器の大半を占める第1群(燃糸文系)土器の示す、稲荷台式期(古)から稲荷原式期(新)にかかる時期とすることができる。

S S 3~12集石の内、燃糸文期とされるのはS S 9集石である。S S 4~6・8・10集石はその可能性が高いとしておく。条痕文期とされるのはS S 11集石である。S S 7・12集石は、その可能性が高いとしておく。S S 3集石は出土土器なく、何れか不明である。S S 3~11集石は、第1群(燃糸文系)、第4群(条痕文系)土器の集中分布する範囲にあることから、包含層中のものが多く混入することが考えられる。この中において、S S 9集石では第1群(燃糸文系)土器が10点、他群はなし、S S 11集石では、第4群(条痕文系)土器が11点、他群はなしとなっていて、各々への帰属は確実性がある。しかるに、その他については不確実である。S S 7集石の場合、第1群(燃糸文系)土器23点、第4群(条痕文系)土器4点と第1群(燃糸文系)土器の比率が高いが、S I 171住居跡の上に構築されたものであることを割り引かなければならない。S I 171住居跡の場合、第4群(条痕文系)土器が8点で、全体の5%であったのに対し、本跡の場合、4点、15%を占めていることを重視し、条痕文期のものである可能性を指摘しておく。

次に土坑の内、所属時期の判別するものは少ない。燃糸文期の可能性があるものとして、S K 297・298・301・302・323・324土坑があげられる。S K 302土坑はS K 297土坑に切られることから、併行もしくはそれ以前と考えられ、S K 323土坑はS K 297土坑を切ることから、併行もしくは、それ以後と考えられる。以上は、堆積土上層を主とする少ない出土遺物からの推測であり、周辺包含層中に第1群(燃糸文系)土器ならびに、第4群(条痕文系)土器が多く分布していることから、当該期に位置づけることは確定的でない。

S K 300土坑は、東側に張り出した炉部の底面近くの焼土まじり黒色土層より、第4群(条痕文系)土器が出土しており、条痕文期に位置づけられる。

その他の土坑よりは出土土器は無いが、検出面がⅢC層及びⅣ層にあることから、早期の所産とらえて大過ないものと思われる。

多数検出されたビットも同様に解される。この内15個よりは、第1群(燃糸文系)土器13点、

第4群(条痕文系)土器8点の合計21点が出土していることもその証左となろうか。

第1群(燃糸文系)土器について

縄文時代早期前半に位置する燃糸文系土器の編年は、井草Ⅰ式・大丸Ⅰ式→井草Ⅱ式・大丸Ⅱ式→夏島式→稲荷台式→大浦山式・花輪台Ⅰ式という5期区分が一般的に確立している(小林1966)。この様な中で、近年、終末期において、稲荷原式(三友・安岡1966)、石神式(鈴木1977)、金堀式(篠原1977)などの諸型式が提唱され、大浦山式、花輪台Ⅰ式などととも、地域色ある複雑な様相を呈することが明らかにされてきた。これらに後続するものとして位置付けられていた平板式や花輪台Ⅱ式の無文土器群については、その発展的要素と考えられた平底の出現や器形の大小の分化などが燃糸文系土器群の初期の段階より内在していることが明らかにされたり(小林1966)、その伴出をもって一線を引く根拠としていた押型文土器も、燃糸文系土器の終末期以前に併存することが明らかにされた(鈴木1979)ほか、岡本孝之氏は花輪台Ⅰ式とⅡ式の分離を否定するのみでなく、無文土器群そのものを、形態差は無いとして、燃糸文系土器群から分離することを否定した(岡本1972)。

この様な中で、宮崎朝雄氏は、埼玉県東山遺跡出土の口縁下に1条の沈線、凹線を有す無文土器を紹介し、終末期の稲荷原式の変化から変遷を辿ることができるとして、燃糸文系土器の系統上に位置付けた(宮崎ほか1980)。さらに氏は、終末期から無文土器群への変遷を、中央部(武蔵野台地、大宮台地と周辺)、西南部(多摩丘陵と三浦半島)、東部(常総台地)の三地域毎に、三段階区分を行い、各地域間の相互関係や変遷を明らかにした(宮崎1981)。

中央部である武蔵野台地・大宮台地に限ってそのおおよそをみると、第Ⅰ段階は、小金井市貫井遺跡、西之台遺跡B地点、大宮市稲荷原遺跡(古:Ⅰ群1・3・4類、Ⅱ群1・5類)などが該当して、稲荷台式の系統を残存——稲荷台式(新)とされる——するとともに、口縁部無文帯が意識され、節が太い燃糸文が施文されるのを特長とする。第Ⅱ段階では、稲荷原遺跡(新:Ⅰ群2類、Ⅱ群2~4類)や秋川市二宮神社境内出土土器が該当し、口縁部無文帯が確立する。第Ⅲ段階は、埼玉県東山遺跡や、西南部の町田市藤の台遺跡第3群土器、横須賀市平根山遺跡、同平板貝塚出土資料が該当し、口縁部無文帯を沈線により明確に区画する無文土器と、ケズリ又は擦痕による無文土器が主体を占めるようになる。

さて、本調査区出土の第1群(燃糸文系)土器を、既存の型式ならびに宮崎区分に従って比定し、編年的に位置付けを行うこととしたい。

まず、稲荷台式に比定されるものとして、縄文施文の1類、燃糸施文の3類、4類、7類a・c~eがある。この内、1類、3類、7類aは古段階の様相を示している。4類及び7類c~eは(古)より(新)にかけてのものを含んでいると思われる。

次に稲荷原式(古)段階に該当するものとして、燃糸施文の5類があげられる。口辺2~3cm

を燃糸施文後にヨコナデし無文部とするもので、稲荷原遺跡Ⅰ群3類に対応するものと思われる。又、無文の11類bも、口辺部をヨコナデするもので、これに対応するものと考えられる。燃糸の節の大きい、7類bは、稲荷原式の(古)及び(新)にみられるものである。

最後に、稲荷原式の新段階に相当するものとして、燃糸施文の6類があげられる。口縁が肥厚し、無文部となるもので、稲荷原遺跡Ⅰ群2類に比定し得る。無文の14類もこれに対応しよう。無文の12類dと13類cは口辺内傾する器形で、稲荷原遺跡Ⅱ群3類に対比できる。15類は口辺が「く」の字に屈折するもので、二宮神社境内遺跡出土資料に似る。16類は、口縁下に浅い1条の沈線が施されるもので、稲荷原遺跡Ⅱ群4類に対比できる。

この外の大半を占める無文を主とする一群は、その帰属を明確にし得ないが、胎土や色調、整形手法などの特長よりみて、ほぼこれら全般に対比するものと考えられる。

又、16類は、横走する燃糸文がみられ、やや厚手で、外面赤褐色の土器片1点であり、他と明瞭に識別し得る。大浦山式と思われる。

以上をまとめると、本調査区出土の第1群(燃糸文系)土器は、稲荷台式(古)から、宮崎区分の第Ⅰ段階=稲荷台式(古)、稲荷原式(古)を経て、同第Ⅱ段階=稲荷原式(新)までに位置づけられる。

集石と礫について

集石遺構の用途については、Stone-Boiling 説、土器製作址説、墓薫・祭祀説、食物調理説と多々ある中で、礫の焼成、破砕、黒色付着物等の状態や遺構内における焼土、炭化物の検出例、民族例、実験結果などから、加熱した礫に伝わる熱を利用した食物調理用施設——特にEarth-Oven とよばれる蒸し焼き用の施設——との考えが有力となってきている(小栗1979, 阿部・小栗・小島1984)。

同時に、集石内の礫と、それ以外の場に散乱したり、密集している礫とは、いずれも相互の関連が強く、後者は集石が構成され、機能していた一連の流れの中におさめて把握することができると考えられている(阿部・小栗・小島1984)。

本調査区においては2形態の集石遺構が検出されたほか、周辺調査区より多量の礫が出土した。集石AとするSS3~11集石と同BとするSS12集石である。繰り返すと、集石Aは、径1mほどの規模で、大・小の礫が集中し、下部には掘り込み不明瞭な落ち込みが確認され、焼土、炭化物を伴出ししないものである。集石Aには、SS9の様に、掘り込み底部近くに、粗礫による配石状のものがあるほかは一様である。集石Bは、いわゆる集石土坑と称されるもので、明確で大形の土坑内に、小破礫を主とする焼礫が多量に集中しており、多量の炭化物と焼土粒を伴うものである。

本調査区検出の2形態の集石構成礫と、周辺調査区包含層出土礫を比較すると、次の様なこ

第10表 集石等構成礫重量別点数表 (接合前、計測可のみ、()内完形、単位:g)

	SS 2	SS 3	SS 4	SS 5	SS 6	SS 7	SS 8	SS 9	SS 10	SS 11	SS 12	合 計
1~ 50	62(8)	11(1)	33	15(1)	32	8(2)	22	54(5)	3	21(12)	252(12)	513(41)
51~ 100	14(4)	6	15	14	7	2	12(1)	18(1)	1	2	78(26)	169(32)
101~ 150	12(7)	6(1)	3(1)	9	1	3	10	23	1	6	30(7)	104(16)
151~ 200	5(6)	1	6	8	5	4(1)	4	6	2	6(1)	8	55(8)
201~ 250	3	1	6	6	2(1)	5(2)	1	4	0	2(1)	2(2)	32(6)
251~ 300	2	1(1)	3	4	2	2(1)	2	7	0	0	2	25(2)
301~ 350	1(1)	0	3	5	4(1)	8(4)	2	2(1)	0	3(2)	2(1)	30(10)
351~ 400	4(2)	0	2(1)	2	1	1(1)	0	4(2)	0	1	1	16(6)
401~ 450	0	0	2	0	2	0	4(2)	4(2)	2(1)	1	3(1)	18(6)
451~ 500	2(2)	0	1	0	2	1(1)	2(1)	0	0	2	0	10(4)
501~ 550	5(2)	0	1	1(1)	1(1)	0	2(1)	3(3)	0	0	0	13(8)
551~ 600	1	0	0	1	1	0	2(2)	1(1)	0	0	0	6(3)
601~ 650	1(1)	0	0	0	0	2	1(1)	2(1)	0	0	0	6(3)
651~ 700	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	4
701~ 750	0	0	1(1)	0	3	0	3(3)	2(1)	0	0	0	9(5)
751~ 800	0	0	0	0	0	0	1(1)	2(2)	0	0	0	3(3)
801~ 850	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	1(1)
851~ 900	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1(1)	0	3(1)
901~ 950	1	0	1(1)	0	0	1	1(1)	0	2(2)	0	0	6(4)
951~1000	1	0	0	0	0	1(1)	1(1)	1	1(1)	0	0	5(3)
1001~1050	0	1	0	0	1	1(1)	0	2(1)	1(1)	0	0	5(2)
1051~1100	1(1)	0	0	0	0	0	0	2(2)	1(1)	0	0	3(3)
1101~1150	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	2(2)
1151~1200	1	0	0	0	0	0	0	2(1)	0	0	0	4(2)
1201~1250	0	0	0	0	0	0	0	2(1)	0	0	0	2(1)
1251~1300	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	1(1)
1301~1350	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	1(1)
1351~1400	0	0	0	0	0	0	1(1)	1(1)	0	0	0	2(2)
1401~1450	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	1(1)
1451~1500	0	0	1(1)	0	0	0	0	2(2)	0	0	0	3(3)
1501~1550	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1551~1600	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	1(1)
1601~1650	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1651~1700	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
1701~1750	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
1751~1800	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1801~1850	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1851~1900	0	1(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)
1901~1950	1	0	1(1)	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	3(2)
1951~2000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2001~	1(1)	1(1)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3(2)
合 計	119(35)	29(5)	80(6)	65(2)	65(3)	40(14)	72(16)	152(31)	15(7)	47(18)	378(49)	1,062(186)
総重量	36,832	31,204	15,858	10,145	14,040	13,138	16,778	43,069	8,177	11,268	19,509	220,018
最小~最大	5-2520	3-3020	5-1910	5-590	1-1035	3-2010	1-1395	1-1930	2-1570	1-890	2-440	

とが指摘される。なお、SS3～12集石においては、伴出の石器類を含んだ数字である。

①数量 SS3～11集石の隕数が最少15、最多80、平均68と少ないのに比べ、SS12集石では378と多い。

②重量 SS3～11集石では565点、163,677g、平均290gと重いものが多いのに比べ、SS12集石では378点、1,950g、平均52gと軽く、重量の少ないものが多い。包含層では、縄文時代発掘区にかかる7,101点を計量したところ、466,362gあり、平均66gとの数値を示しているが、重量別の出現頻度は観察していない。総重量でみると、SS3～11集石では、最小8,177g、最大43,069g、平均18,186gとなり、SS12集石の19,509gはその幅の中へおさまる。

③破砕度 SS3～11集石では完形102点、破損隕510点で、完形隕の割合は17%。対してSS12集石では、前者が49点(13%)、後者が329点(87%)で、完形隕の割合が低い。包含層では、7,546点の資料の内、完形が2,789点(37%)、破損が4,757点(63%)と完形隕の割合が高い。

第10表から、SS3～12集石では、重量のあるものほど完形隕の占める比率が高いことが判る。

④焼成状況 SS3～11集石では、焼成隕が596点(97%)、未焼隕が16点(3%)。SS12集石では、焼成隕が360点(95%)、未焼隕が18点(5%)。両者の割合がほぼ等しい。包含層では、焼成隕が6,988点(93%)、未焼隕が558点(7%)と未焼隕の割合がやや高い。

⑤黒色付着物 SS3～11集石では、有るものが52点(8%)、無いものが560点(92%)であるのに対し、SS12集石では、有るものが204点(54%)、無いものが174点(46%)と、有るものの割合が高く、半数をこえている。包含層出土隕では、有るものが739点(10%)、無いものが6,807点(90%)と、SS3～11集石にはほぼ同じである。

⑥石材 SS3～11集石では、砂岩が431点(70%)、チャートが127点(21%)、その他が54点(9%)となっている。SS12集石では、砂岩が269点(71%)、チャートが82点(22%)、その他が27点(7%)となっており、ほぼ同様の比率を示す。包含層出土隕においても、砂岩が5,669点(75%)、チャートが1,095点(15%)、その他が782点(10%)とほぼ同様である。

以上をまとめると、石材の点では、砂岩が7割、チャートが2割、その他が1割という比率で、三者に大きな相違は無いが、その他の点で異っている。

SS3～11集石構成隕は、数量15～80点と少なく、重量あるもの多く(平均290g)、完形隕の比率は約17%を示す。ほとんどが焼成を受けるが、黒色付着物の有るものは約8%と少ない。

SS12集石構成礫は、数量378点と多く、重量少ないものが多く(平均52g)、完形礫は約13%と、SS3~11集石に比べやや少ない。ほとんどが焼成を受け、半数をこえるものに、黒色附着物が認められた。

周辺包含層出土礫は、平均の重量少なく(66g)、完形礫は37%と割合が高い。焼成礫は93%で、未焼成の割合が、集石内に比べ高い。黒色附着物は10%に認められた。

集石Aと集石Bの形態差・構成礫の差は何に起因しているのでしょうか。

小栗氏によれば、A型(土坑を伴う)集石とB型(土坑を伴わない)集石の機能差はないものとされる(以下を含め、小栗1979)。第一に、民族例によって、土坑を掘らなくとも蓋し焼きが可能なことをあげている。第二に、土坑を伴わない集石では、焼土・炭化物の検出例が極めて少ないが、このことをもって、その場での礫の焼成を否定することは出来ないとする。即ち、野外においては、その焚火跡の焼土・炭化物が自然要因(風雨等)によって消滅し、残存しにくいものであることを理由としている。なお、氏は、土坑の大きさは、民族例からみて調理される食物の量、使用人数等の差によるものとしている。

さて、本例に戻って、集石Aは不明瞭な落ち込みを伴うものであるが、これは、礫の集中する範囲が周囲の包含層に比べ若干暗くなっている程度のものであり、多くは、断面観察によりとらえられた(SS7のみはやや明瞭にとらえられた)。小栗1979にいうB型(土坑を伴わない)集石に相当し得るものと思われる。そこにおいて、焼土粒、炭化物粒が一点も検出されなかったことは、この場所において、礫を焼成したものでないことを示していると考えられる。即ち、この場所で、礫の焼成が行われたとすれば、自然要因による消滅作用は少なからず受けたとしても礫の拡散を生じない程度のものである以上、その痕跡となる焼土粒・炭化物粒が僅かであっても検出されてしかるべきと考えられるからである。この場合、条痕文期にあっては、SK300炉部を有する土坑が、礫の焼成遺構の一候補としてあげられようが、それを示す資料は見出せなかった。

次に、構成礫をみると、石材焼成状況はほぼ同じであるが、集石Aでは、数量少なく、重量あるもの多く、完形礫が17%であるのに対し、集石Bでは、数量多く、小さく、破損礫がやや多い。礫の破砕は、礫の焼成・赤化と移動に伴って進行するものと考えられるので、これよりすると、集石Bの方が使用度数の進んだものとする事ができるが如何であろうか。SS3~11集石においては、完形礫の比率では、SS4~6集石の様にSS12集石よりも少ないものがあるものの、100g以下の礫数をみると、SS12集石が87%を占めるのに対して、SS3~11集石では、完形礫の比率と若干の相関関係を有する様であるが、25~60%の間におさまる。即ち、SS12集石に比較して、SS3~11集石では、破損礫であっても大きいもの(重いもの)が多いことがわかる。よって、SS3~11集石は、程度の差こそあれ、SS12集石に対して、

ほぼ一様のあり方を示しているといえ、SS12集石と同様の構成礫がないことは、小さい破損礫が多いことを、一概に使用度数の多さに帰結することができないことを傍証しているものと解される。

以上のことから、集石A(SS3~11集石)と集石B(SS12集石)の差は、調理対象物の相違や調理法の相違などの機能に関わる差と考えることができる。この場合、SS12集石にのみ黒色付着物が半数以上認められることは注目に値する。又、条痕文期にあっては、集石AのSS7・11集石と集石BのSS12集石、さらに、SK300炉部を有する土坑の三者が併存する可能性があるが、この場合、三者の機能差を示唆するものといえよう。

周辺調査区包含層出土礫は、遺構内礫に比べ、総体でみると、完形礫がやや多く、平均重量は少ない。これらは、集石遺構の構築・使用・廃絶に伴って、長年月を経て、繰り返し、採取、搬入、使用、廃棄あるいは遺棄されたものが移動・拡散し、埋没・固定したもの(阿部・小栗・小島1984)と考えられるので、一概に対比することはできない。相互の接合関係や、集石構成礫との接合関係をつかみ、その属性分析を詳細に行うことによって、個々の集石との関連を構造的に把握することができるものと思われるが、今回は、残念ながらそこまで立ち至れなかった。

出土石器の組成について

出土石器の帰属については、明確にすることが難しい。土器と同様に、他時期のものが混在しているものと思われる。但、遺構内出土のものをみれば、おおよその傾向は把めるものと思われる。第4表に示される通りである。

石器分布と遺構・土器分布が重なるものとしては、まづ、3類-e(大形)・f(中形)・g(小形)短冊形打製石斧が中期後半加曾利B式期の分布に合う。ただし、3類gは早期分布範囲へも拡がる。7類aの不定形磨石、同cの磨石(凹石)は早期(撻糸文・条痕文期)に、同bの円形磨石は、早・中期の分布範囲に合致する。9類スタンプ形石器は早期とほぼ重なる。10類aの有縁石皿は中期に、同cの平盤状石皿は、早・中期に合う。

以上を総合すると、まづ、撻糸文期に伴う石器としては、3類dの両面加工の大形礫器、3類gの小形短冊形打製石斧、5類aの片面加工の拳大の礫器、7類aの不定形磨石、同dの円形磨石、同cの磨石(凹石)、8類aの敲石、9類のスタンプ形石器、10類cの平盤状石皿などがあげられる。

撻糸文期の石器組成としては、磨製石斧、局部磨製石斧、打製石斧、礫器、打製石器、敲石、スタンプ形石器、磨石、凹石、石皿、石鏝、搔器、削器、石鏝、砥石、石錘など多くがあって多摩丘陵、武蔵野台地においては、該期の前半から後半に至るまで、磨石、凹石、スタンプ形石器などを主体とし、局部磨製石斧、打製石斧、礫器など占める比率が小さい組成を示し

ており、他地域の組成と異っている(宮崎1981)。特に、スタンプ形石器は、本地域に特有の石器として認識される。本調査区においても、同様の結果が得られたわけである。

次に、条痕文期に伴う石器としては、3類gの小形短冊形打製石斧、7類bの円形磨石、同cの磨石(凹石)、同dの抉入磨石などがあげられる。抉入磨石は該期に特有な石器として位置づけられている(戸井1982)。

該期の石器組成としては、礫器、礫石斧、局部磨製石斧、磨石、凹石、抉入磨石、敲石、石皿、石鏃、尖頭器、石匙、搔器、打製石斧、石鏟などがあり、地域毎、時期毎に組成が異っていることが知られている。多摩丘陵から武蔵野台地南縁にかかる本地域においては、燃糸文期同様に、磨石、石皿、敲石類が主体であり、抉入磨石の伴出地域として特徴づけられる。このほか、礫器の中では、拳大の礫を片面加工したもの(本報告5類に相当)が多く、又、不定形(本報告6類に相当)もしくは台形状の剝片石器の存在などが特徴としてあげられるという(小葉1983)。本調査区においても、ほぼ同様な傾向の一端を伺うことができた。

遺構に伴わない石器の内、3類aの局部磨製石斧や同b・c・j・k及び5類などの礫器の大半は、早期(燃糸文、条痕文期)に属するものとする事ができる。

なお、燃糸文期に特有な9類スタンプ形石器が、条痕文系土器を多く出土し、条痕文期に位置つけたSS11集石より6点も出土した。この内完形は2点のみで、全て礫と共に焼成を受け赤化していた。これをどう解釈すべきであろうか。次の3つのケースを考えてみた。①条痕文期において、何らかの方法で入手した燃糸文期のスタンプ形石器を利用したケース——全て焼成を受けており、礫と共に混入されたものであることから、最も蓋然性がある。なお、中期末のSS2配石跡よりも1点出土している。但、記述の通り、他集石に比べ、伴出石器数が多いことは、意識的に混入させたものと思われる。②スタンプ形石器の伴出をもって、SS11集石の帰属時期を燃糸文期とし、伴出した条痕文系土器や抉入磨石を後の混入と考える。——燃糸文系土器の分布範囲にあって、当該土器が1片も出土しないことはやはり不自然であるので、この可能性は低い。③スタンプ形石器の帰属を条痕文期にまで広げる。——スタンプ形石器出土遺跡において、条痕文系土器の出土する遺跡は少なく、あっても僅かであることから、可能性は近い。該期には消滅しているとされる意見がある(小葉1983)。従って今のところ、①のケースが最も妥当なものと思われる。

スタンプ形石器について

大正12年に首藤保之助氏によって凡字形を呈する一形態(本稿でいうタイプA=ai・bi・ci)が「凡字形石器」として世に紹介され(首藤1923)、墓地付近より多く採集されることから、石器時代における墓の標石とした。これに対し、早速、同年大場雄雄氏、梅原末治氏により反論が寄せられている。即ち、大場氏は石冠の墮落した形状であり、信仰の対象物か性崇拝の意義

を持つものとし、梅原氏は墓石としての解釈に疑問を投げかけた（以上をはじめ、研究史に関しては小田1983による）。

戦後に至り、燃系文系土器の編年的研究の中で行われた昭和26・27年の神奈川県大丸遺跡の発掘で、2点発見され、報文（芹沢1957）中において、岡本勇氏の提案により「スタンプ形石器」と命名したことが記されている。この2点は、掲載図より判断して、本稿でいう *cū* と *aiv* であると思われる。東京・千歳船橋遺跡からの出土と群馬県の稲荷台式土器を出土する遺跡からの発見を紹介し、2点の内1点が稲荷台式を主体とする第三層出土であることにより、2点とも稲荷台式に伴うものとした。その後、続く論考、報告例も余りなく、1964年に小金井市新橋遺跡（後期）で1点出土している程度であった（吉田1967）。1971年に府中市武蔵野公園遺跡の調査（小田・キリー1973）において多く出土し、この時点では、遺跡・土器の多い中期から後期の所産と考えていたという（小田1983）。1973・74年の小金井市西之台遺跡B地点の発掘調査によって燃系文系土器に伴って多量に出土し、その分析の結果、従来、凡字形石器と呼ばれていたものはスタンプ形石器の一形態であり、共に早期前半の燃系文期の所産であることが明らかになった（小田編1980）。以後、野川流域のみにおいても、小金井市はけうえ遺跡（小田ほか1981）、三鷹市東京天文台構内遺跡（河内ほか1983）、調布市池ノ上遺跡（河内ほか1983）などにおいて、燃系文系土器に伴って多量に発見されている。共に、様々な角度から分析が加えられるようになってきている。即ち、形態、重量、製作技法、周縁加工の有無、摩耗の有無、範囲、欠損状態、石材、伴出土器、分析などである。

小田静夫氏によれば、大略次の様にまとめられる（小田1983）。

- ① 形態は、素材の形状から棒状、偏平に大別でき、側縁の加工がないもの(A)、片側のみ(B)、両側のもの(C)に細別される。
- ② 長幅比、長厚比、重量をみると、B・Cのタイプがよく集中しており、規格性が伺われる。
- ③ 打痕や摩耗痕の観察の結果、打割された底面平坦部を主に使用して、側縁の挟れ部を手で握り、植物資等のあまり固くない物資をたたいた状況が看取される。
- ④ 製作工程は、素材により二通りとなるが、いずれも底面の平坦作成と握り部の画一化に努力していた。
- ⑤ 石材は、多摩川流域では、砂岩が最も多いが、閃緑岩の使用も目立つ。磨石、敲石、石皿などに共通する。
- ⑥ 伴出時期は、早期燃系文系土器型式中の後半期（稲荷台式新、稲荷原式古以降）に比定される。
- ⑦ 分布をみると、燃系文系土器文化圏内でも特に多摩川の上・中流域に集中する傾向があ

る。なかでも、野川上・中流域では、一遺跡で400点を越す出土例（小金井市はけうえ遺跡）が確認されている。

分布集中傾向に関して小田静夫氏は、石材を供給できる場所が近くにあることをあげると共に、同じ撚糸文土器の分布圏内の遺跡でも併出しないう遺跡も多いことなどから、この石器の機能を関連した特徴的な生業を営む小集団の存在を推察した。

山崎丈氏はスタンプ形石器の集中傾向と夏島式土器の集中傾向の類似性よりみて、多摩丘陵、武蔵野台地、大宮台地が単に撚糸文系土器群の分布域ということだけでなく、同じ分布域を持つ石器の特徴的な存在で示される同一のあるいは共通した“生業圏”の中心であったことをも示唆しようとしている（山崎ほか1982）。

さて、次に、本調査区出土のスタンプ形石器につき、いくつかの分析を加えた結果を記述することにしたい。

はじめに、加工の有無、状態、素材の形態によらず、握り部と底面の形状によって分類すると次の5つのタイプにまとめることができる。

- タイプA a i・b i・c i 握り部が凡字形で、底面が長円形もしくは長方形のもの。
 タイプB a ii・b ii・c ii 握り部が烏帽子形で、底面は長円形もしくは長方形。
 タイプC a iii 握り部は頭部にむかい若干細くなる長方形で、底面は長円形。
 タイプD a iv・b iii・c iii 握り部の平面形状はタイプCと同じで、底面が広いもの。
 タイプE b iv・c iv 握り部は頭部へむかって、タイプC・Dより細くなる形状で、底面はタイプDと同じく広い。

これらは、比較的良好にまとまっており、規格性が看取される。観察事項としては、重量、握り部平面における最大長・最大幅・底面平面における最大長、最大幅、底面形状、底面作出方法、底面における摩耗痕、底面周縁の細かな剝離痕、底面周縁の稜のつぶれ、握り部下端の細かな剝離痕、握り部の摩耗痕、握り部の敲打痕、石材などとした。対象資料は図示した34点の完形資料、4点の欠損資料に、図示外の28点の完形資料、20点の欠損資料を加えた。観察表、集計表を次に掲げる。

9類(スタンプ形石器)観察表(完形のみ)

No.	記号	国産 △ 閉鎖 ○ 小外	種 分 類	握り部			底面			石 材	打面形状	製作 一回	出土 層以上	A 底面に 磨耗痕	B 底面に 磨耗痕	C 底面に 磨耗痕	D 底面に 磨耗痕	E 底面に 磨耗痕	F 底面に 磨耗痕	
				最大 長さ	最大 幅	最大 厚	重量	最大 長さ	最大 幅											
1	FP-68-7-757	32-12	A(sil)	12.4	9.85	5.7	845	9.96	4.5	砂	長方形	○								
2	FO-69-8-1165	53-3	A(bis)	13.0	10.25	5.05	720	10.25	4.4	閃緑岩	長方形	○								
3	FP-66-84-1135	54-5	A(eil)	12.2	8.3	4.8	600	8.0	3.4	砂岩	長方形	○								
4	FJ-72-11-1324	54-7	A(eil)	11.4	8.9	3.9	615	8.8	3.6	砂岩	長方形	○								
5	FJ-84-1617	54-12	A(eil)	10.1	9.3	4.5	560	9.3	4.3	砂岩	長方形	○								
6	FI-67-44-2286	54-4	A(eil)	10.6	9.05	3.3	495	9.05	3.3	閃緑岩	長方形	○								
7	FR-67-5-728	54-2	A(eil)	12.8	10.0	3.6	600	10.0	3.6	閃緑岩	長方形	○								
8	FK-67-8-1098	54-3	A(eil)	12.2	12.2	4.7	870	12.1	4.6	閃緑岩	長方形	○								
9	FL-67-211-1890	△	A(eil)	11.3	7.5	4.6	475	5.5	4.6	砂岩	長方形	○								
10	FQ-65-1-1086	△	A(eil)	13.5	8.6	4.4	635	8.2	4.3	燧石	三角形	○								
11	FL-71-3-1317	△	A(eil)	10.2	7.7	3.8	460	7.5	3.95	閃緑岩	長方形	○								
12	FO-69-8-694	△	A(eil)	11.7	10.25	4.8	785	9.8	4.9	閃緑岩	長方形	○								
13	FR-66-67-182	△	D(sil)	12.6	6.4	4.7	510	6.3	4.3	砂岩	長方形	○								
14	FJ-67-黒色土	△	H(sil)	10.0	8.0	4.8	550	7.9	4.8	砂岩	長方形	○								
15	FI-66-4-1056	52-13	R(sil)	11.2	7.9	4.2	428	7.9	4.2	砂岩	長方形	○								
16	FP-70-70-1709	△	B(sil)	11.6	7.6	3.5	495	7.5	3.4	砂岩	長方形	○								
17	FI-67-18-2121	△	D(sil)	12.0	7.0	4.25	525	6.85	4.25	砂岩	長方形	○								
18	FQ-66-28-1081	△	H(sil)	11.8	6.4	3.2	335	3.2	6.2	砂岩	長方形	○								
19	IJ-68-39-1210	53-5	B(sil)	12.1	6.6	4.1	505	6.1	4.1	砂岩	長方形	○								
20	FL-69-1225-21	53-4	D(sil)	12.7	6.9	5.5	760	6.6	5.5	砂岩	長方形	○								
21	SN-9-67-2007	47-9	R(sil)	13.0	7.35	4.7	820	6.9	4.25	砂岩	長方形	○								
22	FP-75-75-2505	△	B(sil)	10.9	7.01	4.9	525	6.5	4.8	砂岩	長方形	○								
23	FM-69-94-1516	△	D(sil)	12.6	9.4	4.5	650	9.1	4.4	砂岩	長方形	○								
24	FC-72-310	△	H(sil)	10.2	6.5	5.7	495	6.0	5.6	砂岩	長方形	○								
25	IK-67-16-1096	54-6	B(sil)	9.4	9.1	3.7	385	9.1	3.3	砂岩	長方形	○								
26	FI-67-13-1113	54-8	D(sil)	11.15	9.2	4.7	660	9.0	4.25	砂岩	長方形	○								
27	FK-70-96-1613	54-9	H(sil)	14.3	10.15	5.75	1,020	10.1	5.35	閃緑岩	長方形	○								
28	JV-1-90-834	48-9	B(sil)	10.5	9.7	5.0	695	8.8	4.6	砂岩	長方形	○								
29	SS-6-48-1125	47-5	D(sil)	13.2	9.4	4.95	810	9.4	4.7	砂岩	長方形	○								
30	FP-67-15-1176	△	C(sil)	12.4	7.2	3.3	410	7.1	3.1	砂岩	長方形	○								
31	FI-85-110	△	C(sil)	10.3	7.3	4.1	480	3.3	7.3	砂岩	長方形	○								
32	FL-82-230	△	C(sil)	13.2	7.3	3.9	710	6.45	2.6	砂岩	長方形	○								
33	FI-76-21-2076	52-13	C(sil)	9.75	7.55	3.4	330	7.5	2.3	閃緑岩	長方形	○								
34	FM-74-2-1276	52-11	C(sil)	9.5	6.95	4.7	470	6.95	3.6	閃緑岩	長方形	○								
35	FJ-74-3-1260	52-14	C(sil)	9.1	6.7	3.65	330	6.6	3.5	砂岩	長方形	○								
36	評定なし	△	D(sil)	12.6	7.9	4.9	675	7.8	4.8	砂岩	三角(3&4&5&6)	○								
37	FK-70-66-1610	53-1	D(sil)	10.6	7.4	4.5	600	7.4	4.5	閃緑岩	長方形	○								
38	FQ-75-10-2056	53-2	D(sil)	11.5	7.1	6.6	715	5.6	6.2	閃緑岩	不正四角形	○								
39	FI-69-13-1222	51-8	D(sil)	10.3	6.8	4.1	330	(6.8 4.1)		砂岩	三角	○								
40	SI-147-422	53-9	D(sil)	10.6	7.9	5.5	655	7.9	5.2	砂岩	長方形	○								
41	FL-67-132-1406	52-6	D(sil)	12.5	7.15	6.85	620	6.9	6.8	砂岩	不正四角形	○								
42	P-893-771-333	53-7	D(sil)	10.0	8.55	5.28	440	8.5	5.2	砂岩	三角形	○								
43	SS-2-147-1163	46-18	D(sil)	11.3	7.3	5.78	470	7.1	5.1	閃緑岩	不正四角形	○								
44	SS-11-63-2459	48-6	D(sil)	11.95	6.25	6.1	640	5.7	6.1	砂岩	長方形	○								
45	FI-68-26-1218	△	D(sil)	10.7	7.4	4.8	608	4.8	7.3	燧石	燧石長方形	○								
46	FK-69-95-2335	△	D(sil)	12.1	6.5	5.1	640	4.2	6.5	砂岩	長方形	○								
47	FL-70-71-54	△	D(sil)	10.3	6.5	4.1	345	6.1	2.9	砂岩	長四(長口)	○								
48	FK-77-5-2083	54-13	D(sil)	11.18	7.05	5.7	708	7.0	5.7	砂岩	長方形	○								
49	FP-66-25-1129	△	D(sil)	13.4	7.2	6.0	788	6.9	6.0	閃緑岩	不正四角形	○								
50	FQ-72-5-1293	54-1	E(sil)	10.25	7.4	8.2	535	7.4	8.2	砂岩	三角	○								
51	FQ-70-32-1120	53-8	E(sil)	11.9	8.2	5.65	595	7.6	5.4	閃緑岩	三角	○								
52	FN-69-64-1197	53-10	K(sil)	13.3	6.95	6.65	658	6.4	5.65	砂岩	長方形	○								
53	FP-65-7-1138	△	E(sil)	14.3	5.5	4.8	565	5.4	4.1	砂岩	長方形	○								
54	FM-71-31-1509	△	E(sil)	11.6	7.1	5.9	395	7.1	5.9	砂岩	長方形	○								
55	FI-67-31-1084	△	E(sil)	11.4	6.4	6.3	570	5.8	6.3	砂岩	燧石長方形	○								
56	FL-66-1412-36	54-10	E(sil)	11.8	9.1	5.65	460	8.5	5.5	砂岩	三角形	○								
57	SS-2-46-75	47-1	E(sil)	15.8	8.05	9.25	925	7.8	5.1	砂岩	三角	○								
58	FO-66-154-1360	△	E(sil)	10.9	7.5	4.35	445	7.5	4.5	砂岩	長方形	○								
59	MKI-15-2820	△	E(sil)	12.7	5.9	3.9	420	5.6	3.75	砂岩	長方形	○								
60	FQ-66-14-1080	△	E(sil)	13.01	7.3	5.6	565	6.8	4.5	砂岩	三角	○								
61	FK-67-49-1188	△	E(sil)	12.6	8.5	8.7	725	8.0	8.7	砂岩	長方形	○								
62	MKI-15-F164-83-68	△	E(sil)	13.3	8.0	5.3	675	7.8	4.7	砂岩	三角形	○								

V 縄文時代の調査

9類(スタンプ形石器)観察集計表(完形のみ)

項目	細分類		A			B			C		D		E		合計	比率 %	備考	
	砂 凹 縁	岩 凹 縁	ai	bi	ci	ait	bit	cit	aiii	aiiv	biii	ciiii	biv	civ				
石 材	1	1	4	5	1	6	7	4	2	2	6	1	5	6	45	73		
			1	1	6	1	2	2	4	1	1	1	1	1	18	30	計62点	
底 面 形 状			3	3	1	2	2	5	2	1	1	1	1	1	16	26		
			1	1	6	1	2	2	4	1	1	1	1	1	14	22		
			1	1	3	1	1	1	2	1	2	2	4	2	14	22	計62点	
底 面 作 出			1	1	6	3	6	6	5	4	4	2	6	4	42	69		
			1	1	3	3	6	8	6	4	4	2	6	3	19	31	(eiに不明1点)	
A 底面に磨耗痕			1	1	3	3	6	8	6	4	8	2	1	5	7	4	6	計62点
			1	1	3	3	6	8	6	4	8	2	1	5	7	4	6	
B 底面縁線に細かな刻線			1	1	3	1	2	6	7	5	3	7	2	1	1	9	15	
			1	1	7	2	6	7	6	3	7	2	1	1	6	53	85	計62点
C 底面縁線のつぶれ			1	1	3	1	2	4	2	2	2	1	2	4	24	39		
			1	1	7	2	4	4	4	2	6	1	4	3	38	61	計62点	
D 握り部下端に細かな刻線			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	7	11	11		
			1	1	9	2	5	7	5	4	8	2	8	5	55	89	計62点	
E 握り部に磨耗痕(内側面のもの)			1	1	2(1)	1	1	1	3(1)	1(1)	4	1	1	1(1)	1	18(4)	27	
			1	1	9	2	5	7	3	3	3	4	1	5	1	45	73	重観測1点あり
F 握り部に磨耗痕			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3	3	
			1	1	9	3	5	8	6	4	8	2	6	7	60	97	計62点	

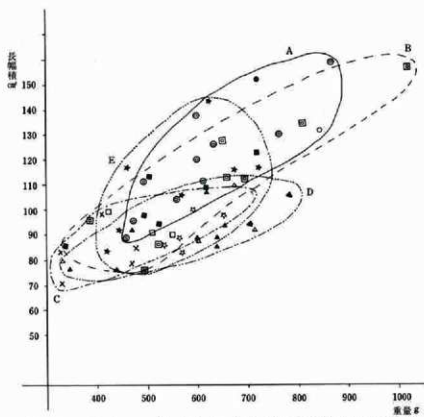
1) 大きさ・重量

握り部平面の長幅積と重量の関係を、完形資料62点について第16図に示した。積の増大に比例して重量が増している。重量の一定化が条件とすれば(石の比重を一定と仮定して)、積の増大に伴って厚みを減じ、扁平なものとせざるを得なくなるものと思われるから、長さ、幅、厚みが一定の割合となることを意図したものと考えられる。長幅積は61~149cm²にて、70~90cm²が最も多い。重量では、最小330g、最大1,020gで600~650gが最も多い。タイプA・Bが広範囲で平均的分布を示すのに対し、タイプC(a iii)は長幅積97cm²以下で重量は330~480g(一点のみ710g)と小さくまとまる。両側縁の加工がなく握り部が長円形であることから、加工にて握りやすい小さいものを選択した結果と思われる。調布市深大寺池ノ上遺跡におけるAグループのものに対比され(河内1983)、普遍的に存在するようである。タイプD・Eは、A・Bに比べ長幅積小さく、重量はA・Bのごとく800gをこえるものはないが、ほぼ平均的に分布する。

2) 底面形状

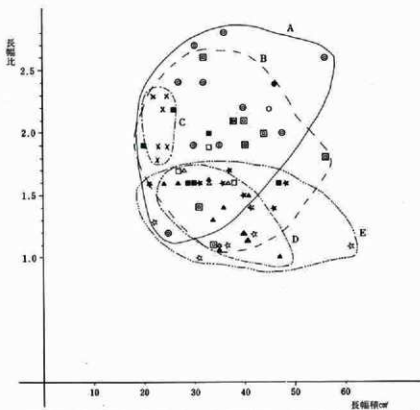
底面の最大長と最大幅の長幅比(一覧表で値の大きい方を長として作図)と長幅積の関係を完形資料62点について、第17図に示した。長幅比は1.0~2.8まであり、1.4を示すものが最も多く、分布の中心である。長幅積は20~61cm²まであり、30~35cm²が最も多い。タイプA・Bはばらつきがあり、全体的に分布している。タイプCは、長幅比1.8~2.3、長幅積22~25cm²に全てまとまる。握り部に対応して、小さくまとまったものであることが判る。形状をみると、タイプA・Cに長円形多く、タイプBに長方形が多いことが指摘できる。なお、タイプD・Eは三角形・方形が多い。

1)・2)によって、広い底面と相応の重量、そして、握りやすい形状を指向した結果、A~F



第16図 9類(スタンプ形石器)握り部長幅横と重量関係図(完形のみ)

- 凡 例
- aI
 - bI タイプA
 - ⊙ cI
 - aII
 - bII タイプB
 - ▣ cII
 - × aIII タイプC
 - △ aIV
 - ▲ bIII タイプD
 - ▲ cIII
 - ☆ bIV タイプE
 - ★ cIV



第17図 9類(スタンプ形石器)底面長幅横と長幅比関係図(完形のみ)

の各タイプとなったものと考えられる。

3) 底面作出方法

大きく、1度の打撃によって作出するものが61例中42例と7割方を占める。タイプA～Cでは8割もこえる。2回以上の打撃によるものが19例である。この中には、大きく1回の打撃後に1～数回加えるものが13例、3～4回前後のものが3例、4回以上10回前後のものが3例ある。タイプD・Eでは、1回のもものが14例、2回以上が13例と相半ばする。中で、2回以上のものは、biii・biv・civに多く、aiv・ciiiにないことが指摘できる。1回による打撃の場合、打点の位置は、長幅比のあるもの、即ち底面が横長のものは長辺の中央付近であり、そうでないものは、コーナー部分であるものが多い。

4) 摩耗痕、敲打痕、剝離痕など

底面における摩耗痕(Aとする)は4例に認められる。内全面の摩耗が2例、周縁のみ(中央部が凹んでいる結果と思われる)が2例ある。閃緑岩が3点、砂岩が1点で、磨石の石材(判別156点中122点、78%が閃緑岩、残りが砂岩)と類似していることから考えても、磨石として、機能したものと見える。

握り部の側面・頭部を除く平坦な自然面がややつるつるであるのは13例あり、他の資料でも程度はおちるが、これに近いものが多い。小金井市西之台遺跡B地点出土のスタンプ形石器においても同様の観察結果が得られている(小田1983)。磨石、石皿などにおいても明瞭な摩耗痕は無いものの、ややつるつるであるものが多く観察できることと無縁ではなさそうである。当該面を使用したものなのか否か、否とすればその原因は何か、磨石等とあわせ考察していく必要があろう。

次に底面周縁に細かい剝離のあるもの(Bとする)が9例、底面周縁の稜がつぶれて丸味を有しているもの(Cとする)が24例、握り部下端(底面周縁と接するところ)に細かい剝離のあるもの(Dとする)が7例あった。

以上、A～Dの関連をみると、Aの4例中、Cが3例あり、これは、底面周縁の剝離もしくは摩耗により稜がつぶれたものと思われる。A・B・C・D全て重複するものが1例あった。次にBの9例中、Cとの重複は6例、Dとの重複は3例で、Dと重複するもの3例は全てCとも重複している。即ち、底面周縁に剝離のみられるもの多くと、握り部下端に剝離のみられるもの全てに底面周縁のつぶれがみられることが指摘できる。

5) 敲打痕

握り部の頭部に、敲打痕を1ヶ所有するものが2点あった(53-4, 54-5)。敲石の機能を有していたものと思われる。54-5は、1例面がやや明瞭に摩耗しており、磨石としての機能を有していたと思われ、側面加工とつぶしとの切り合いから、当初砥石として使っていたもの

をスタンプ形石器に転用したものと考えられる。

6) 石 材

62点の完形資料の石材別内訳は、砂岩45点(73%)、閃緑岩14点(22%)、礫岩3点(5%)となっている。bii・civでは砂岩が各6点あるのに閃緑岩が無く、aiv・ciでは両者はほぼ半々であることなどが看取される。種別毎に原材を選択した結果によるものか、あるいは、原材の形状の差は加工の難易などに起因するものか、今後の課題としたい。

7) 欠損状態

次に欠損資料24点の状態をみると、大きく9種に分けられる。次表に示す通りである。

種別 残存状態	種 別											計
	ai	a _{ii}	a _{iv}	a・b	b _{ii}	b _{iii}	b _{iv}	ci	c _i - c _{ii}	c _{iv}		
頭 部 の み 小 片								2				2
頭 部 の み 欠 く 3/2 残 存								3				3
頭 部 と 底 面 欠 く 胴 部 片									1			1
1/2 片 側(頭 部 ~ 底 面)				1								1
1/2 上 半(頭 部 側)		1				1	1	1				4
1/2 下 半(底 面 側)	1			1	1	1						4
1/2 下 半 で 底 面 一 部 欠 く			1					2				3
ほ ぼ 完 形 で 底 面 一 部 欠 く											1	1
底 面 の み の 小 片				5								5
合 計	1	1	1	7	1	2	1	8	1	1		24

この中で、ciに頭部片とこれに対応する頭部欠損品が多いことは、両側縁加工により細くなっていることと関連するものと思われる。又、aもしくはbに底面のみの小片が多いことは、底面形状が細長いことに起因するものと思われる。

8) 出土状態・伴出遺物

遺構内より13点、包含層より76点、表土はかより8点出土している。遺構内のものうち、加曾利E式期に属するSS2配石跡とFO~FQ・68~70区遺物集集中地点よりあわせて3点出土しているほかは、全て早期に属する集石跡出土のものである。SS6集石に1点、SS9集石に3点、SS11集石に6点とまとまっており、SS6集石、SS11集石においては、磨石、石皿などの石器類と伴出する。これら石器類の大部分は、スタンプ形石器を含め、火熱を受けて赤化しており、完形品が少ないことを考えあわせると、礫と一緒に再利用されたものという

ことができる。但、既に述べたように、SS9集石、SS11集石において石器類がまとまっていることは、偶然の結果とはみなしがたく、何らかの意識が働いたものとみることができよう。

伴出土器は、SS6集石において第1群(燃糸文系)土器4点、SS9集石において、同群土器10点があり、説明に伴うものとして理解される。SS11集石は第4群(条痕文系)土器11点が出土しており、条痕文期と考えられる。その中におけるスタンプ形石器の多量の出土については、前項に触れたところである。

9) 機能

スタンプ形石器の機能に関しては、底面を主な使用面にして、握り部を手で握り、あまり固くない植物質のものをたたいたり、すりつぶしたものと考えられている(鈴木1981)。

底面周縁や握り部下端にみられる細かな剝離痕と、底面周縁の稜のつぶれは、一部を一体的なものとしてとらえることができる。又、底面における摩耗痕との関係を加えて、各々が単独で出現している比率は、底面周縁に細かな剝離痕あるもの9点の内2点(22%)、底面周縁の稜のつぶれがあるもの24点中15点(62%)、握り部下端に細かな剝離痕あるもの7点中3点(43%)となっている。このことより、底面周縁の細かな剝離と他の要素との相関関係があることが判る。又、底面周縁の稜のつぶれが他の要素と必ずしも関連のないことなどを示している。

以上の底面周辺にみられる痕跡は、必ずしも製作段階における底面を整えるための調整加工だけでなく、使用痕とみることもできよう。底面周縁の細かな剝離と稜のつぶれが一部一体的にとらえたが、これなどは、固いもの——石など——に接触した結果と考えることはできないであろうか。又、稜のつぶれだけみられるものが多いことは、その接触の程度が弱いことに起因するとも考えられ、これらのことから幅広い使用法が推察されるのである。

加えて、62例中31例には、底面周辺にこうした痕跡がなく、打割時のままであり、これらのある部分は、こうした痕跡を採集しない使用法——即ち、従来いわれてきた、あまり固くない植物質のものをたたいたり、つぶしたりし、台とする石に接触しないか、あるいは石以外の固くないものを台としたことなど——が推定される。同時に、明瞭な摩耗痕を底面の全面あるいは周縁に残すものがあることや、頭部に敲打痕を有するものがあることなどをあわせ考えると、この石器の機能は相当幅広いものということができよう。

なお、立川市大和田遺跡では120点のスタンプ形石器が出土しており、この内D類とした“側縁および底面の調整がなされていないもの”(本稿でいうところのai・aII・aIII・aIVでA~Dのみられないもの)を、素材あるいは未成品としている。これらは出土総数の約58%あるとのことである(小野塚1982)。同様の解釈は、東久留米市下里本邑遺跡出土のスタンプ形石器についても行われている(山崎ほか1982)。本調査区出土例に限ってみれば、側縁の調整加工

は握りやすくするためのものであり、無加工のものは比較的小形で、そのままでも握れることから加工を必要としなかったものと考えられる。又、底面周辺が打割時のままであるものは、底面周縁における細かな剝離や稜のつぶれなどを調整加工とみれば、未成品とすることもできるし、使用痕とみるならば、未使用品とすることもできる。さらに、前述の通りこうした痕跡の残らない使用法も想定される。本稿では結論を得るに至らなかったが、今後は、植物質等のやわらかいものをたたいたり、つぶしたりする時、底面に何の痕跡も残らないのか否か、“台”との関連を含めて究明しなければならない。同時に、打割時のままと報告されている資料を再吟味して、細かな剝離や稜のつぶれなどが全くみられないのか否か検証していく必要があるかと思う。

(2) 中期の遺構と遺物について

中期に属する遺構

伴出遺物より中期に属する遺構としては、SS 2配石跡、埋壘2、FO～FQ・68～70区遺物集集中地点などがあげられる。

SS 2配石跡、埋壘1は加曾利E式の7段階区分(安孫子・秋山・中西1980)に従うと、V段階に相当し、配石を構成する石器・礫と伴出した土器片にはV～Ⅶ段階という幅広い時期のものを含んでいる。本跡の時期としては、埋壘1の示すV段階を上限とするものと考えられる。

埋壘2も埋壘1と同じく、V段階に相当し得るが、埋壘1と比べ、胴部文様が括れ部を境に上下2段に分れている点で、後出的要素を有する。

FO～FQ・68～70区遺物集集中地点、若干のV段階資料の外は、ほとんどⅥ～Ⅶ段階を中心としている。

この他に、FQ～FS・78～82区の集中箇所では、掲載資料の中で底部片5片の外に、V段階1個体(図面42-1)、V～Ⅵ段階1個体(42-5)、Ⅵ段階7個体(42-2・3・6・7、43-4・5・6)とⅦ段階はなく(破片資料にても少ない)、Ⅵ段階を主体とする。即ち、FO～FQ・68～70区遺物集集中地点に先行する。

両地点の中間地点である、FO～FT・72～75区にて、図示する2個体の破片資料が分布していた。即ち、V段階相当の42-4とV～Ⅵ段階の43-3である。

本調査区における加曾利E式期の土器分布は、以上の3箇所周辺を中心としており、加曾利E式V～Ⅶ段階と広範囲にわたっている。既述の通り、FO～FQ・68～72区遺物集集中地点については、比較的短期間のうちに、西南⇔北東の方向に土器や礫などが廃棄された結果形成されたものと考えられる。

出土石器について

加曽利E式期に伴う石器としては、SS2配石跡併出石器などから、3類e(大形)、f(中形)、g(小形)短冊形打製石斧、4類の磨製石斧、7類aの不定形磨石、7類bの円形磨石、7類c磨石(凹石)、10類aの有縁の石皿、同cの内長円形や石枕形の石皿などがあげられる。この内、3類gの小形短冊形打製石斧や、7類の磨石類は早期のものと識別し難い。

(3) 多喜窪遺跡C地点の設定と遺跡の変遷

昭和60年度刊行の「国分寺市史」作成段階で、武蔵野台地上に広がる広域の縄文時代遺跡について整理する必要に迫られた。「遺跡地図」の上では、重文勝板式土器の出土地として知られる多喜窪遺跡と武蔵国分寺遺跡の中に含まれていたわけであるが、現時点において扱えられる遺構・遺物の集中範囲を地点として仮に認識し、調査・研究の便に供しようということになった。その際、字名をとって、全体を多喜窪遺跡と総称することとした。

まず、西元町2丁目～4丁目に広がる中期の集落跡である、従来の多喜窪遺跡を、多喜窪遺跡A地点とすることとした。さらに、B地点としては、西元町1丁目の現国分寺業師堂付近を中心とする範囲で、第33次調査(僧寺寺域北辺確認調査)の成果にもとづき、燃糸文系土器終末期の無文土器群を主体とするものをとりあげた。そして、本第51次調査地区をC地点とし、東元町3丁目付近の野川に面する東斜面をD地点とした。又、泉町1丁目～西恋ヶ窪1丁目付近の縄文時代早期後半土器を主体的に出土する地点については、地形的にみて独立したあり方をとするものとみられることから、以上のA～Dとは別のものとして、恋ヶ窪の南にある遺跡の意で、恋ヶ窪南遺跡とした。

さて、多喜窪遺跡C地点における、縄文時代人の活動痕跡は、草創期から後期中葉までの長期間に及んでいる。とりわけ、早期前半燃糸文期、同後半条痕文期、中期後半加曽利E式期が主体を占め、集落を営んでいたものと思われる。

燃糸文期の遺構としては、SI171住居跡をはじめ、SS9集石があげられ、SS4・5・6・8・10集石とSK297・298・301・302・323・324・379土坑が可能性としてあげられる。これら遺構の分布をみると、調査区西南部に集中する傾向があり、SI171住居跡を核として、その周囲に集石群が弧状に分布し、さらにその周辺に土坑が散在するあり方を示す。出土遺物の分布も同様で、調査区西南隅のSI171住居跡西方部分のみは少なく、ほぼ集石と一体に集中域がこれを弧状に囲み、周辺にむかって減衰するあり方を示す(この点、集石の用途を考える上で、重要なポイントとなろう。遺物の性格ともあわせて究明していかなければならない)。こうしてみると、集落の中心はさらに調査区の西南方にあるものと思われ、本調査地点は集落の縁辺部分にあたるものと解される。調査区西南方には、現国分寺裏山の発達したノッチがあって、崖下の2ヶ所に湧水泉がみられ、豊富な水量を誇り、野川の一支流の源流となっている。多喜窪遺跡B地点は、このノッチの西岸にあたり、木C地点と対峙する形となる。一帯は

現国分寺境内地と郵政省住宅地となっており、未調査のため様相は全く不明である。

さて、S I 171 住居跡の検出は、該期における住居跡が集中する多摩丘陵から武蔵野台地南縁にかかる地域において、1例を追加するところとなった。該期集落のあり方については、その占地条件から3つの類型が考えられている(原田1983)。①丘陵頂部直下に、比較的等間隔で住居跡が散在している遺跡(茨城県花輪台貝塚、横浜市荏田第10遺跡、川崎市菅生水沢遺跡)、②丘陵中腹の急峻な地区を故意に選択し、比較的狭小な集落のまとまりを示す遺跡(町田市小山田 No. 13 遺跡、小金井市はけうえ遺跡の南部に群在する4基)、③広い台地の縁辺部、平坦な地区に住居跡が散在し、その周辺に広域な遺物の分布が認められる遺跡(千葉県木の根遺跡、小金井市はけうえ遺跡の台地上の7基)、本調査地区は③の類型に属するものと思われ、その規模は、小金井市はけうえ遺跡に匹敵するものと思われる。

次に、早期後半条痕文期の遺構としては、S S 11 集石と S K 300 土坑がほぼ確実なものとしてあげられ、S S 7・12 集石が可能性としてあげられる。出土土器の分布も、ほぼ遺構の分布に重なり、本調査区の中央付近にまとまるようであるが、燃糸文期と同様に、さらに西及び南方向へ分布する地域の一部であることは確実であり、その中における一部の遺構・遺物群とすることができよう。今回は住居跡の検出をみなかったが、いづれにしても、集落の一部であることが伺われる。

前期の遺構・遺物は、第8群(不明)土器とした中に、疑いものがあるほかは、検出されなかった。隣接の第107次調査地区(武蔵国分寺遺跡調査団1982)では、踏礎b式期の復元可能な2個体があったが、遺構はなかった。周辺においては、南町2丁目の花沢東遺跡にて踏礎b式期の住居跡1軒が検出されている(恋ヶ窪遺跡調査団1984)が、該期における市域の様相については不明な点が多い。

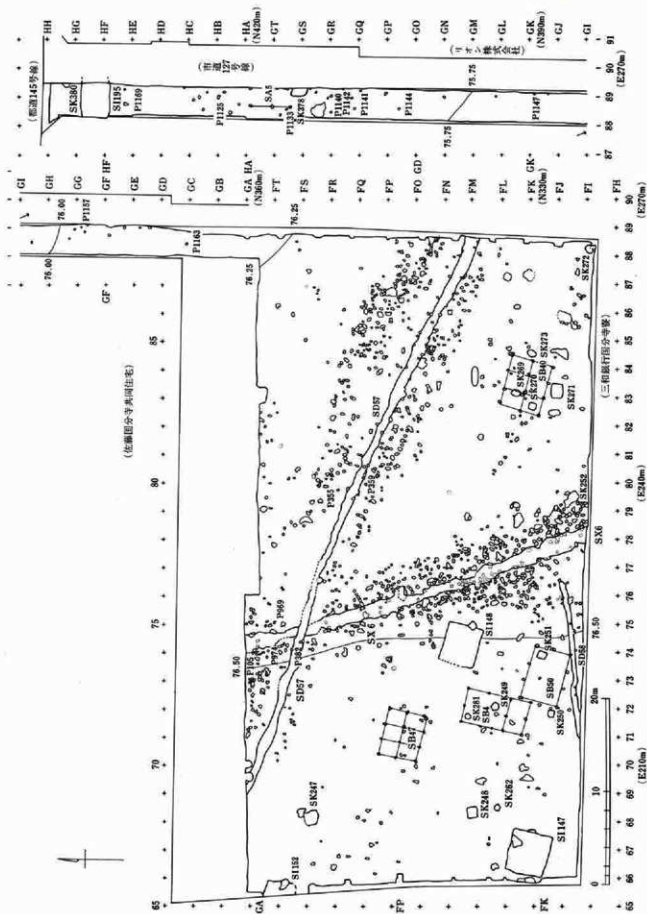
中期前半の五領ヶ台式・勝板式・阿玉台式期の土器は破片資料が若干あるのみで、散在する程度である。隣接するリオン株式会社構内における第200次調査B地区(昭和59年度調査)は台地東縁にあたるが、該期資料がまとまって得られているので、関連性が考えられる。近辺では五領ヶ台式期のまとまった資料が、泉町2・3丁目の日影山遺跡と恋ヶ窪南遺跡にある。勝板式期のものとしては、多喜窪遺跡A地点と恋ヶ窪遺跡の二大集落がある。

中期後半の加曾利E式期の遺構と遺物は、S S 2 配石跡と埋室、遺物集中地点としてとらえられた多量の土器集中範囲があげられる。これらは調査区中央付近にまとまっており、周囲への広がりは看取されない。北側の隣接地である第107次調査地区においても該期遺構はなく、遺物も若干量あるのみであった。これら遺構は、加曾利E式7段階区分のV~VII段階に相当する幅のあるものである。集落構造については今後の周辺における調査に委ねられる。

後期においては遺構はなく、調査区東端のFO・FP・84~86区周辺にまとまって土器が分

布しており、他期と全く違ったあり方を示している。該期の遺跡としては、立川段丘上の八幡前遺跡が著名で、東方400mに位置する。又、南方崖線下の黒煙谷の表土下にみられる黒色土中には該期の遺物が多く包含されることが知られてきている。東元町3丁目の本調査区東南方ならびに西元町2丁目の多喜窪遺跡A地点南方などで検出されている。その様相は不明である。本地点における該期遺物もこれらとの関連の上で位置づけられるものと思われる。

- 註 (1) 金井安子氏は前原遺跡4号住居跡例などをあげて「住居址の壁に沿って環状ないし弧状に礫や土器片、石器等がめぐり、その多くは銀指大から拳大程度の小礫によって構成される」ものを「周礫を有する住居跡」と規定し、通常の住居が廃絶された後、その住居の存在を意識して礫が配されたものであるなら、住居の構築ないし居住の時点での住居構造の強化も、祭祀の場として機能した住居と考えるよりも、住居を廃棄する際ないし廃絶後に配礫行為を要するような何らかの事情が生じたもので、廃絶された住居址の居住空間を礫を以って囲繞することにこそ意味があった」とする。(金井安子 1984)
- (2) 山本暉久氏は、中期末以降に急増した配石遺構が、南関東を中心とする地域で、面的にとらえられるとしており、本調査区の面も同様に理解できる。さらに氏はその要因を富士火山活動の活発化に伴う降灰現象に求めている。(山本暉久 1981)
- (3) 遺物の水平、垂直方向への移動について、谷口康浩1981に多く啓発された。
- (4) 上田典男氏は「焼礫集積遺構」を中期を中心として分析し、形態別に機能を推定した。即ち、Ⅰ類（掘り込みを伴い、焼礫が掘り込み内に満遍なく分布しているもの——掘り込みの底部に礫や土器片が配されているものを含む——）は、祭祀的な性格をもった、あるいは非日常的な要素をもった食物調理施設。Ⅱ類（掘り込みを伴い、焼礫がその覆土の上表面に分布しているもの）は、何らかの祭祀にもとづく埋納、あるいは埋葬を目的とする施設。Ⅲ類（焼礫が径1～2mの範囲に分布するもので、掘り込みは伴わない）は、焼礫置場・廃棄場あるいは食物調理施設など。Ⅳ類（焼礫が径2m以上の範囲にわたり分布し、さらにその中で幾つかのまとまりに分けることができるもの）は焼礫の廃棄場。などと推定されるとし、形態の相違に関係なく祭祀的な性格を有し、特別な意識の反映にもとづき構築されたものであるとした。なお、本項でいう集石AはⅢ類に、集石BはⅠ類に相当する。



第18圖 厩史時代器棚区全体圖 (1/400)

VI 歴史時代の調査

1. 検出遺構

本調査によって発見された歴史時代遺構は、下記に列挙する独立柱建物跡5棟、竪穴住居跡4軒、溝跡2条、土坑19基、道路状遺構1条、ピット(小穴)1,335個で、調査区全域にわたっている。検出面、堆積土、出土遺物などから、該期のものと判断した。

なお、柱列跡1条(SA5)は、隣接地(第201次調査,昭和59年度)の調査により、SB80独立柱建物跡となることが確認されているが、本文、図面ではSA5柱列跡の名称を用いた。又、道路部分(GR88区)にて、Ⅲ層上部に焼土粒の分布する小範囲を検出し、精査したが、明瞭な落ち込みもなく、遺構とするに至らなかった。(図版65-6)

独立柱建物跡(SB47・48・49・50)、竪穴住居跡(SI147・148・152・195)、溝跡(SD57・58)、土坑(SK247・248・249・250・251・252・268・269・270・271・272・273・281・282・283・284・378・380・391)、柱列跡(SA5-SB80)、道路状遺構(SX6)、ピット(P-1~1335)

SI148・152住居跡の一部が攪乱されているほかは、残存状況は比較的良好であった。I層表土、II層黒褐色土があわせて、50~60cm前後であったことなどによるものと思われる。

遺構の検出は、試掘調査の結果にもとづき、機械力を併用して実施し、確認が容易となるⅢb層上面でとめた。実際には、もう少し上層から掘り込んでいるものと思われる。

(1) 独立柱建物跡

SB47独立柱建物跡(図面57, 図版56)

FN~FP・70~72区に所在する。南北2間×東西3間の東西棟で、総柱である。柱間は南北2.05m等間、東西1.65m等間で4.1m×4.95mの規模となる。柱位置は必しも一直線上に並ばない。桁行方位はN78°Wを示す。柱穴の平面形は円形で、柱痕跡も円形である。柱穴2-3の如く、0.26m×0.23mと小さいものから、4-1の如く、0.4m×0.6mと大きいものまである。深さ(確認面より)も、中央の2-2、3-2柱穴の如く0.2m前後浅く、側柱においては、3-3柱穴の0.2mから1-1の0.7mまで一定しない。柱痕跡は柱穴掘り方一杯で、掘り方埋め土は少ない。ほとんどの柱穴底面がローム面まで達している。建て替えはない。出土遺物はない。

SB48独立柱建物跡(図面57, 図版56)

FJ・FK・82~84区に所在する。SK269土坑とSK270土坑が建物内に存する。南北2間

×東西3間の東西棟で、総柱である。柱間は、南北2.2m等間、東西1.8m等間で、4.4m×5.4の規模となる。柱位置は必しも一直線上に並ばない。桁行方位はN75.5°Wを示す。柱穴、柱痕跡の平面形は円形である。柱穴3-3の如く、0.16m×0.24mと小さいものから、2-3の如く、0.45m×0.5mと大きいものまで様々である。確認面よりの深さは、中央の2-2、3-2柱穴が0.2mと浅く、側柱においては、4-2柱穴の0.25mから、1-2、1-3柱穴の0.6mまで、概して深いが一定しない。柱痕跡は掘り方一杯で、埋め土は余りない。ほとんどの柱穴底面がローム面まで達している。建て替えはない。出土遺物はない。規模、方向、構造など、SB47と相似している。

SB49掘立柱建物跡（図面58、図版57）

FK~FM・71・72区に所在する。SK249・281土坑が建物内に存する。3-1柱穴が、SB50西妻柱列と接触する形となり、同時に存在したものでないことが判る。東西2間×南北3間の南北棟建物である。柱間は、東西1.8m等間で、総長3.6m、南北は東側柱が、北より2.25m+2.2m+2.25m、西側柱が同じく、1.9m+2.55m+2.25mで、総長は6.7mである。柱穴は必しも一直線上に並ばない。桁行方位は、N13.5°Eを示す。柱掘り方は、1-4の如く、0.2m×0.2mと小さいものから、1-1の如く、0.4m×0.45mと大きいものまで様々である。確認面からの深さは概して浅く、1-4、3-4柱穴の0.15mから、1-2、2-2、3-1柱穴の0.35mまでである。柱穴の底面はローム面に達しているのは3-1柱穴のみで、他はローム漸移層中でとまっている。掘り方平面も柱痕跡平面も円形で、柱痕跡の径は0.2m前後で、掘り方一杯となるものが多い。建て替えはない。出土遺物もない。

SB50掘立柱建物跡（図面58、図版57）

FI~FK・72~74区に所在する。南北2間×東西3間の東西棟である。SK251土坑が建物内にある。なお、東妻があと1列延びて、東西4間となり梁行も南へ廂を設け3間となる可能性を考えて、精査したが、4-1の東、4-3の東、1-1の南、2-1の南各延長方向にそれらしき小穴を検出したが、4-2の東、4-1の南柱穴延長方向のもの是不確実であるし、3-1南延長方向には検出されないことから、上記の規模とした。柱間は、南北2.0m等間、東西1.9m等間で、規模は4.0m×5.7mである。桁行方位はN74.5°Wを示す。柱穴は4辺とも一直線上に並ばない。掘り方平面は円形で、径0.3m前後を測る。確認面からの深さは0.3m前後であるが、1-1柱穴の如く0.05mと浅いものや、2-1の如く0.8mと深いものまでである。底面がローム面まで達しているのは、1-2、1-3、2-1柱穴の3本のみである。柱痕跡を明瞭にとらえられたものは、3-1のみで、その上面形は径0.15mを測る。建て替えはない。出土遺物もない。SD58と4-1柱穴が重複するが、新旧関係は不明である。

（福田信夫）

(2) 竪穴住居跡

S I 147住居跡 (図面59~61, 図版58)

F J・FK・66・67区に所在する。僧寺中軸線より北へ330 m, 東へ201 mの位置である。S K 283・284土坑とS K 391土坑に重複する。S K 283・284土坑より新しく, S K 391土坑より古い。

規模は, 北壁4.5m, 南壁4.5m, 西壁4.18m, 東壁4.0 mを測り, 方形を呈する。四壁はほぼ直線的である。北壁方位はN76.5°Wを示し, S B 49掘立柱建物跡と一致する。

第Ⅲb層中より約40cm掘りこんで, 第Ⅲc層上面に床面を形成している。床面は黒褐色土の貼床を薄く施す。周溝は, 北壁の北東隅を除き, ほぼ全周しており, 幅0.2~0.3m, 深さは床面より約0.1 mを測る。西壁と東壁下に一部不規則な部分が認められるがほぼ一定している。

カマドは北壁のやや東寄りの部分に構築されていたが崩壊が著しく, 明確に構造を把握するに至らなかった。崩壊粘土は住居の北東区全体に薄く分布しており, 堆積土下部に発掘が及んではじめて, 本カマドを検出できた。本カマドは, 壁外への掘り込みを伴わず, 住居内に造られているのを特徴とする。北側には周溝が走行する。天井部煙道は崩落しており, 両袖の基底部が残存していた。火床部は, 0.8m×1.0mの長円形の範囲で大きく凹み中央部分は赤色焼土化していた。これを粘土が馬蹄形に囲んで残存していた。粘土の一部は北壁まで延び, この部分に周溝はみられなかった。間に大礫1個があった。残存粘土の範囲は, 東西1.5 m×南北1.0 mを測った。瓦小片が若干出土したのみで, 芯材として用いられたものはなかった。

東側にも弱い焼け面が1ヶ所あった。0.15m×0.3 mの長方形で, 火熱を受けているが, 赤色焼土化していない。“旧カマド”となる可能性を考え, 精査したが, これらを覆う粘土は, “新カマド”のものと変わりなく, 残存粘土を識別するに至らなかった。粘土を除去したところ, 図の様な浅い掘り込みが確認されたが, “旧カマド”との関連はつかめなかった。

北西隅に, 径0.5m×0.7mの大きさで深さは床より約0.4 mのピットが検出された(P-1)。覆土は4層に分離でき, ロームブロックが人為的に詰められたような状態で, 貯蔵穴と思われる。貼床が施されていた。住居中央のピット(P-2)も貼床が施されていた。径0.3 m, 深さは0.35mを測る。この外に構築時に穿れたピットが南西隅, 南東隅とP-2脇にある。いずれも深さ0.05~0.1 mと浅い。

堆積土は大きく2層に分けることができ, 1~3層の上層は黒褐色土で, スコリアの含有量が異なり, 下層にいくに従い増し, 焼土粒も増す。4~12層の下層は, 茶褐色味, 締まりとも強く, 下部にいくに従って, 粘土, 焼土, スコリアの量が増す。

遺物は中央部の上層に多く, 下層においては, カマド付近を中心として, 住居北半部にやや多い。接合資料も下層のものが多。310点出土。

S I 148住居跡 (図面61~63, 図版59)

FL~FN・73~75区に所在する。僧寺中軸線より北へ338m, 東へ223mの位置である。東側にSX6道路状遺構が走行する。西壁の大部分と西半の一部が擾乱により大きく破壊されていた。

住居跡の規模は、北壁4.9m, 南壁4.9m, 東壁3.9m, 西壁3.5mの方形プランで、北と東の壁は直線的である。床面はローム面まで達せず、ローム漸移層中に形成する。

住居内はロームの細粒子を含む黒褐色土が主に堆積し、下層にいくに従って焼土を多く含んでいる。また、カマド付近の下層には焼土の塊が多量に分布している。

周溝は、東壁のカマド下を除き全周している。幅0.15~0.2m, 深さ0.05~0.1mで、ほぼ一定している。

カマドは東壁の南寄りに位置し、幅0.8m, 奥行0.5mほど掘りこんで構築する。遺存状態はあまりよくない。天井部及び両袖の崩壊土がカマド中心に厚く堆積している。カマドは白色粘土を用いて構築しており、左右両袖ともにわずかに白色粘土が残存している。また崩壊土中に瓦片が認められることから瓦を袖などの芯に使用したものと思われる。カマド基底面は、住居跡床面より深さ約0.1mほど掘り下げて形成する。火床部には、ほとんど被熱の痕跡は認められなかった。崩壊土中においても焼土は少ししか検出されなかった。

南東隅のピットは、貯蔵穴と思われる、カマドと同時に機能していたもので、約0.5×0.6mの不整形円で、深さ0.3mである。

床面は2段の高低差を有する。カマド前面の東西2.5m×南北2mの方形の範囲が明瞭な段で区画され0.05~0.1mほど低くなっている。西の段は幅狭く、北の段は幅広い。北の段は構築時より成されている。全体が同一の暗褐色~暗茶褐色土を0.05~0.1mほどで覆って貼床としており、床面は連続する。

住居の中央部に、幅0.2m径1.8mの馬蹄形を呈した焼土塊が検出された。焼土自体(16層)は床より若干浮くが、焼土まじりの黒色土(17層)がここにのみ床面との間に介在する。性格は不明である。

柱穴はない。

出土遺物は123点と少ない。カマド前面を中心とする。接合資料も同様である。

S I 152住居跡 (図面63・64, 図版60)

FS・FT・65区に所在する。僧寺中軸線より北へ357m, 東へ198mに位置する。住居西半は、調査区外にして、西側道路下へ延びる。南東部分は大きく擾乱を受けている。北壁方位はN79°Wを示す。

規模は、南北3.2m×東西2.2m以上で、方形を呈する。東壁中央のやや南寄りにカマドを有

する。一部ルーム上面まで掘り込み、茶褐色土を充填して、貼床を施す。床面より0.1~0.2mほどにある。床面は根などにより攪乱を受けていることもあって非常に起伏に富んでいる。カマド前面は低くなっていた。カマド付近には約1m四方にわたり床面上に焼土粒子が分布していた。

周溝はカマド下を除きほぼ全周していたと推定される。現存する周溝は、東壁下で幅0.3m、深さは床面から約0.1mとほぼ一定であるが、北東隅から北壁にかけては幅広となり、不規則な状態を呈していた。南壁下では、攪乱あって平面的にはとらえられなかったが、西壁側面に明瞭にあらわれている。

カマドは、東壁のほぼ中央付近(やや南寄り)を、奥行0.3mほど掘りこんで構築している。規模は南北0.5m以上、東西0.75mと小さい。カマドの南側は大きく攪乱を受けており、右袖部は把握できなかつた。天井部、左袖部は白色粘土を用いて構築しており、補強材として土師器を利用したと思われる、粘土中やカマド覆土中に土器が多量に検出された。カマド焚口部から燃焼部にかけての基底面は、床面レベルより0.15mほど掘り込んで、その上に約0.1mほど黒褐色土を充填している。壁、周溝の延長上付近が掛け口と思われる、ゆるやかに立上りはじめる。さらに0.25mほど奥の部分で急激に立上る形態を示しており、煙道部に移行するものと考えられる。

ピットはカマドの前に、径1.0m、深さ0.15mの浅い落ちこみが確認されたが上に貼床が施されていた。またこの落ちこみの南側にも2個あった。径0.4m×0.25m、深さ0.15mのものと、径0.2m×0.15m、深さ0.1mで同じく、貼床が施されていた。

堆積土は床面まで、黒褐色土の単層で、カマドと周溝付近に異なる層が若干あるのみであった。

出土遺物はカマド付近にあるのみで、85点を数えたにすぎない、内74点が接合されている。堆積土がほぼ一層であることと考えあわせると、人為的に埋めた可能性が考えられる。

(浅野晴樹・福田信夫)

S I 195住居跡 (図面65, 図版61)

HE・HF・88・89区に所在する。僧寺中軸線より北へ436m、東へ267mに位置する。東端部は東側調査区外で、カマドは東壁にとりつくものと思われる。

東西2.5m以上(ボーリングの結果では、調査区東壁より0.5mで東壁に達するものと思われるので、全長推定4mとなる)、南北3.2mを測る。長方形プランを呈する。北壁方位は僧寺南北中軸線に対し、北で西へ87°偏する。

構築時にはルーム面まで大きく掘りこむ。中央が浅く、周囲が深い。床面までは0.1~0.25mで、底面より暗黄褐色土を多量に充填し黒褐色土をもって、貼床を施す。床面はほぼ平坦で

ある。壁高は0.35m、西壁断面の観察ではII層が住居堆積土を覆っており、壁の立上りをII層内に求めることはできなかった。床面の内壁際はやや軟弱で、堅固な範囲は南壁中央の入口部に接する中央付近から東壁へむかって広がっている。

周溝は北壁東端の一部を除き全周する。入口部下にも存した。幅0.15~0.25m、深さは床面から0.05mを測る。

南壁中央に入口部を設ける。幅0.65m×0.7mで、床面より壁上へ向って、スロープとなり、上面が固く締まる。横断面形は逆舟底形となる。構築土は黒褐色土を主体とする。

東壁寄りには、P-1A、1Bが確認された。P-1Aは長円形で、0.3m×0.4m、深さ0.03mと浅い、P-1Bは円形で、径0.6m、深さ0.1m。中央に径0.2m、深さ0.05mのピットがある。P-1Bには貼床が施され、P1B→P1Aと変遷したことが判る。

北壁下にはP-2A・2Bが確認された。P-2Aは0.4m×0.6mの不正円形で、深さ0.1m。南寄りに、径0.15mの範囲で、焼け面があった。P-2Bは、南に拡がったもので、南北は0.7mとなる。径0.2m、深さ0.05mのピットが南寄りにある。P-2Bの部分は貼床が施されていて、P-2B→P-2Aと変遷したことが判る。

住居堆積土は、大きく2層に大別される。上層(1層)は黒褐色土で、0.2~0.3mと厚い。下層は床面までで、2・3・5層などが該当する。締まり、粘性増し、調査区東半では焼土粒、粘土粒多くなる。

出土遺物は355点と多く、住居の西南部から北東部付近を中心に、上・下層の別なく集中していた。接合資料においても、上・下層の別なく、西南部から北東部への方向を持つ例が多い。

(福田信夫)

(3) 溝跡

SD57溝跡(図面66, 図版62)

GA68・69区よりFL・FM88区にかけて所在する東西溝である。北西端は僧寺中軸線より北へ360.5m、東へ207.5mの位置で調査区北壁におつかり、さらに北西調査区外へ延びる。FR77区の僧寺中軸線より北へ352.2m、東へ231.6m地点付近で方向、規模、断面形などが東西で相異なる。試掘調査時には別溝と考えた。西半の方位は北で約72°西偏し、東半方位は北で65°西偏する。交角は、187°となる。西半では、上面幅0.7~0.8m、底面幅0.4~0.5m、深さ0.3mで、底面の平坦部は少ない。中央のFR79区付近では、幅がやや広がり上面幅1.0m、底面幅0.4m、深さ0.3mとなり、この付近より2段掘りが明瞭となってテラスをつくるようになる。断面観察では二段の新旧関係はとらえられない。東端では幅1.4mとさらに広くなり、底面幅1.2m、深さ0.2mで底面はほぼ平坦となる。東壁断面の観察では、II層黒褐色土が溝

堆積土を覆っており、壁の立上りをⅡ層中に確認することはできなかった。溝全体の掘り込みはローム漸移層から深いところではソフトロームの上面まで達している。溝の底面はF S75区付近を境として、西半が0.1m高くなっている、西半・東半とも若干の起伏はあるものの全体としてはほぼ平坦であるといえる。堆積土は地点により層厚の差異は認められるが、大きく3層に分けられる。第1層はローム粒少し含む黒褐色土で、第2層は黒色土、第3層は、溝底上部のローム粒多く含む暗茶褐色土である。

F S74区においてS X道路状遺構と交錯する。S X6道路状遺構が明らかに溝の上に覆っており、溝の方が古い。

須恵器環・甕・土師質土器環（図面74-1）、男瓦・女瓦片など17点が覆土中より出土した。

溝に沿う形というよりも、むしろ溝かその両端を走行する形で、幅10m前後の帯状にピット群が集中しており、調査区内においては、東半がやや多い。溝内においても重複するものがあった。溝との新旧関係は把握しにくいものが多く、明らかに、溝より古いものや新しいものも若干あった。溝の中央のものより、壁際のものの方が多様である。ピットの分布は不規則で、種別等々をみいだすに至らなかった。S X6周囲にも同様に存在しており、まとめて後述することとする。

S D58溝跡（図面66、図版62）

F I71・72区からF I・F L76区にかけて所在する東西溝である。南西端は僧寺中軸線より北へ325m、東へ213.6mの位置で、調査区南壁におつかり、さらに南西調査区外へ延びる。北東端は僧寺中軸線より北へ327m、東へ229.4mの位置で消滅する。若干蛇行しているが、南西端と北東端の心々を結ぶと、N98°Wを示す。溝の幅は0.5~0.7m、深さは0.05~0.1mと浅い。溝底はほぼ平坦である。溝底は南西が高く、北東端との差は0.1mであるが、検出面のレベルはこれを上回り、南西端に比して、北東端では約0.15m低くなり、結果的に溝は東に行くに従って浅くなり、北東端では僅かに溝底上に残る堆積土をもって検出し得たにすぎず、東への延びは確認できなかった。砂質土等の流水を想定させる事実はみられず、性格は不明である。

（浅野晴樹・福田信夫）

(4) 土坑

S K247土坑（図面66、図版63）

F R・F S・68・69区に所在する。僧寺中軸線の北353m、東204mに位置する。東西1.6m×南北1.6mの不正方形を呈する。深さは0.1~0.15mで、底面の起伏が大きい。堆積土も良好でなく締まり弱い部分多く、攪乱の可能性ある。覆土中より土師器甕、須恵器環、蓋、甕小片計10点が出土している。

（福田信夫）

SK248土坑 (図面66, 図版63)

FL・FM68区に所在する。僧寺中軸線の北336m, 東205mに位置する。SI147住居跡の北方4mである。1.3m四方の方形プランで、深さは0.15m。壁の立上りはゆるやかに傾斜し、開いている。底は平坦だが不規則なピットがある。土坑堆積土は比較的締まりの良い黒色土により構成されている。覆土中より土師器壺、須恵器杯、甕小片計5点が出土している。

SK249土坑 (図面66, 図版63)

FL72区に所在する。僧寺中軸線の北334m, 東216mで、SB49掘立柱建物跡内の東側中央に位置する。長径1.03m, 短径0.97mの不整形を呈しており、深さは礎礎面より0.24mである。壁はほぼ垂直に立上り、壁面には斜位に小ピットがあった。底はほぼ平坦で、踏みかためたように良く締まっている。堆積土はローム粒子、炭化粒を含む黒褐色土の単一層である。覆土中より須恵器杯、男瓦、女瓦小片各1点が出土した。

SK250土坑 (図面66, 図版63)

FJ71区に所在する。僧寺中軸線の北328m, 東215mでSB50掘立柱建物跡の西妻南端に隣接する。西壁は、試掘時に誤って削ってしまったものらしい。東西0.82m以上, 南北0.75mの隅丸方形を呈し、深さ0.02~0.08mと浅い土坑である。底は皿状を呈して起伏ある。壁もゆるやかに立上っている。堆積土はローム粒子を含む黒褐色土により構成されている。出土遺物はない。

SK251土坑 (図面66, 図版63)

FJ73・74区に所在する。僧寺中軸線の北329m, 東222mでSB50掘立柱建物跡内の北東隅に位置する。1.1m四方の方形土坑で、深さは0.16mを測る。壁の立上りは上部がやや外反きみである。壁面には斜方向に小ピットがある。底は平坦で壁面同様の小ピットが数ヶ所確認され、その面は踏みかためたように非常に堅い面となっている。堆積土は2層で、上層は木炭粒を含む黒褐色土で、下層は上層よりやや明るい黒褐色土であった。両層とも締まりは良好である。上面より、図面74-3の須恵器杯1個体と、覆土中より土師器壺、須恵器杯小片計5点が出土している。

(浅野晴樹・福田信夫)

SK252土坑 (図面67, 図版63)

FJ79区にあって、SX6道路状遺構の東側にピット群と混在する。僧寺中軸線の北326m, 東238mに位置する。東西最大1.8m, 南北最大1.6mで不整形落ちこみが連続した形となる。深さは0.2~0.3mで底面は起伏がある。締まり弱い部分もあって、攪乱の可能性もある。格子目叩きの女瓦小片1点が覆土中より出土している。

SK268土坑 (図面67, 図版63)

FL68区に所在し、SI147住居跡の北東方向となる。僧寺中軸線の北334m, 東206mに位

置する。径0.6mの円形で、深さ0.05m未満と浅い。一部に小ピットがある。堆積土に焼土粒を含む。土師器壺小片1点が覆土中より出土している。

(福田信夫)

SK269土坑(図面67, 図版63)

FK83区に所在し、SB48掘立柱建物跡内の2-2柱穴と2-3柱穴間に位置する。僧寺中軸線の北332m, 東250mとなる。東西0.88m, 南北1.03mの不整形円形で、南側は一部直線的である。壁はほぼ垂直に立上っているが、部分的にオーバーハングしている。深さは0.35mで、ソフトローム上面に達している。底はほぼ平坦を呈している。堆積土は黒褐色土をベースにして、上層は焼土粒子を多く含み、下層ではローム粒を多く含んだ層となっている。遺物は検出されなかった。

SK270土坑(図面67, 図版64)

FJ・FK82区に所在し、SK269土坑と同じく、SB48掘立柱建物跡内にあって、同跡南西隅に位置する。僧寺中軸線の北330m, 東248mとなる。東西0.9m, 南北0.1mの隅丸方形を呈し、深さは0.28mである。形態的には、SK269土坑に似る。底面はほぼ平坦で、小ピットが2~3存在する。堆積土は中央部付近で、スコリア・ローム粒子を含む黒褐色土で、両側壁際では暗褐色土により構成されている。土師器壺小片1点が覆土中より出土している。

SK271土坑(図面67, 図版64)

FI・FJ83区に所在する。SB48掘立柱建物跡の南になる。僧寺中軸線の北327m, 東250mに位置する。東西1.75m, 南北1.23m, 深さ0.2mで、隅丸方形プランを呈する。底はわずかに起伏し、小ピットが検出された。土坑堆積土はローム粒子を含む黒褐色土で、非常に締まりが良かった。出土遺物は覆土中より須恵器環小片1点の外、縄文土器片が数点検出された。

(浅野晴樹・福田信夫)

SK272土坑(図面67, 図版64)

FH・FI88区に所在する。調査区南東隅にあたる。僧寺中軸線の北324m, 東265mに位置する。東西, 南北とも1.0mの不整形方形を呈する。深さ0.2mで、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

(福田信夫)

SK273土坑(図面67, 図版64)

FJ・FK84区に所在する。僧寺中軸線の北330m, 東254mに位置する。SB48掘立柱建物跡の東妻中央の東側に隣接する。長径1.0m, 短径0.75mの不整形円形を呈する。深さ0.2mで断面舟底状を呈する。堆積土は茶褐色土をベースにしており、粘土粒・木炭粒を含む。男瓦小片1点が覆土中より出土した。

(浅野晴樹・福田信夫)

SK281土坑 (図面67, 図版64)

FM71区に所在する。SB49獨立柱建物跡内の北西隅に位置する。僧寺中軸線の北337 m, 東215 mに位置する。径0.7 mの不整形円で深さ0.1 mほどである。底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

SK282土坑 (図面67, 図版64)

F075・76区に所在する。僧寺中軸線の北344 m, 東228 mに位置する。SX6道路状遺構の下部に検出された。ピット群と混在する。東西1.8 m, 南北1.2 mで、掘り込みが明瞭でない為、壁の検出は難かしく、結果的に不整形プランとなった。深さは0.1~0.2 mで、底面には凹凸がある。P1, P2は土坑より古く、その他は新しい出土遺物はない。

SK283土坑 (図面67, 図版64)

FJ・FK65・66区に所在する。僧寺中軸線の北330 m, 東198 mに位置する。SI147住居跡の調査終了後において、西壁断面清掃時にSK284土坑とともに検出された。従って、SI148住居跡と若干重複しているが、住居より古い可能性が高いが、未確定となった。又、北半は、SK284土坑に切られている。SK284土坑とともに、西側調査区外へ延びる。東西0.6 m以上、南北1.4 m以上の長円形プランを呈するものと思われる。深さは0.3 mを測り、底面は若干起伏がある。出土遺物はない。

SK284土坑 (図面67, 図版64)

FK65・66区に所在する。僧寺中軸線の北331 m, 東198 mに位置する。東西0.4 m以上、南北1.2 mの長円形プランを呈する。深さ0.3 mにして、SK283土坑と連続する。底面はほぼ平坦である。SK283堆積土に比べ黒色味がやや強い。あるいは一つの土坑となる可能性を有する。出土遺物はない。

SK378土坑 (図面68, 図版65)

GR・GS89区に所在する。僧寺中軸線の北415 m, 東268 mに位置する。東側調査区外へ延びる。東西1.0 m以上、南北1.7 mの不整形円形を呈する。深さ0.2~0.35 mで、掘り鉢状を呈し、平坦面は少ない。断面図において、II層下部にあるIII a'としたものは、III層上部のIII a層よりII層に近いもので、むしろII'とすべきものである。出土遺物はない。

SK380土坑 (図面68, 図版65)

HG89区に所在する。僧寺中軸線の北439 m, 東268 mに位置する。SI195住居跡の北側にあって、東半は調査区外となる。東西0.4 m以上、南北1.1 mの不整形円形プランとなるものと思われる。深さは中央部が最大で0.25 mを測り、掘り鉢状を呈する。底面の平坦部は少ない。II層黒褐色土が堆積土を覆っており、壁の立上りをII層中に求めることはできなかった。出土

遺物はない。

S K 391土坑 (図面59, 図版58)

F J・F K 67区に所在する。僧寺中軸線の北330 m, 東203 mに位置する。S I 147住居跡の東壁中央部と重複し、住居を切る。平面、断面においても明瞭な切り合いではなかった。東西推定0.4 m, 南北1.0 mの不整形円形プランである。深さは0.15 mで、底面はほぼ平坦である。住居内堆積土と似ており、住居に関連するものの可能性を有する。出土遺物はない。

(5) 柱列跡

S A 5柱列跡 (図面68, 図版65)

G S・G T 88区に所在する。僧寺中軸線の北417 m, 東204 mに位置する。径0.3 mほど、深さ0.25~0.4 mのピット3個が南北に、北から2.1 m+2.0 mの間隔で並ぶ。明瞭な柱痕跡を検出することができなかったが、柱列跡とした。昭和59年度実施の第201次調査地によって西側隣接地において、1-1柱穴の西直角方向に、2個の柱穴を検出した。柱間が東より2.2 m, 2.5 mとなる。従って、南北4.1 m×東西4.7 m以上の掘立柱建物跡(S B 80とした)であることが判明した。西もしくは、東へ延びるものと思われる。

(福田信夫)

(6) 道路状遺構

S X 6道路状遺構 (図面68, 図版66)

F I 77・78区からG A 73・74区にかけて所在する。南東から北西方向へ走行する。南東端は、僧寺中軸線の北234.4 m, 東324.2 mに位置し、南方調査区外へ延びる。その延長方向は、僧寺寺域北東隅まで崖線となる。北西端は、僧寺中軸線の北360.6 m, 東222.3 mに位置し、北方調査区外へ延びる。北方隣接地の第107次調査地区南西隅をかすめて検出され、さらに北へ延びることが判明している。その位置は、僧寺中軸線の北373~376 m, 東219 mである。本調査区中央付近で若干蛇行するが、南東端心と北西端心とを結ぶ方位はN18°Wを示す。幅1.0~2.0 mの硬質面が連続するもので、幅が一定でないのは検出面のレベルが一定していないことによるものと思われる。構築土は、上・下2層に分けられる。上層が主構成土の黒褐色土で、やや茶褐色味を帯びていて、堅く締まり、乾燥するとブロック状にくずれてくる。上面のみ堅いのではなく面縁を除く本層全体(特に上部)が堅く締まっている。下層は茶褐色土で、締まり劣る。この点、北方第107次調査では、慎重に掘り進めたところ、同様に上下2層が確認されたが、上層黒褐色土の上面において明瞭なる硬質面(中央がやや凹む)が検出されたのみならず、遺構中央付近(幅0.3 m以上を確認)では、掘り方上面のⅢc層が、極めて堅固になっており、道路面の造り替えを示すものか、構築段階の工程を示すものか結論を得るに至らなかった。本調査区では、掘り方下部はⅢc部に達して、中央がやや深くなっているものの、硬質

面はなかった。掘り方の幅は1.3~2.6mとなる。

歴史時代遺構検出時に硬質土の存在をもって確認した為、若干盛り上った硬質土をおさえた形となったが、両縁が把握しにくいことや本来の掘り込み面はさらに上部にあると考えられることから、本跡は中央部が凹んだ、道路敷の様な施設と考えられる。

構築土内より、土師器環、甕、須恵器環、甕、土師質土器環、灰陶陶器碗、鍔瓦、男瓦、女瓦小片等々127点が出土している。図面74-4はこのうちの一つで、凹面に「父」の押印を有す女瓦片である。

S D57溝跡とF S74区で交わり、溝堆積土を切って構築する。

S D57溝跡と同様、周辺に多数のピットが存在する。その幅は7~10m前後である。硬質土を切ってあるのは2個のみであった。構築土下において81個検出されたが、FL・FM76区付近を除き、掘り方両縁に多く、中央部に少ない傾向が伺える。この場合、ピット群が道路状遺構掘り方掘削に先行するものが、同時あるいは、後になるものか明確でない。

(浅野晴樹・福田信夫)

(7) ピット

調査地区において検出され、登録したピットは総数1,335個あったが、明らかに木の根等による攪乱と思われるものや、建物跡の柱穴となったものを除くと、1,245個となる。全体図にて明らかなように、その大半はS D57溝跡とS X 6道路状遺構周辺に集中する。即ち、S X 6道路状遺構内外周辺に537個(S D57までを算入し北側は含めず)、S D57溝跡内外周辺に564個、計1,101個(全体の約88%)と集中する。

ピットの平面形も、円形のもの、楕円形のもの、不整形、三角形のものなど様々で、地域による差や、深度、断面形などとの相関関係は看取されなかった。その規模は径0.1m以下のものから、径0.7mを超えるものまであり、0.2m~0.4m前後のものが最も多い。断面形においても、円筒形のもの、掘り鉢状のもの、砲弾形のもの、鍋底状のものなど様々で、この内円筒形もしくは砲弾形をなすものが大半である。その深さは0.05mの浅いものから、1.0mと深いものまで様々で、集計の結果0.1m未満159個、0.1m~0.2m未満207個、0.2m~0.3m未満253個、0.3m~0.4m未満220個、0.4m~0.5m未満164個、0.5m~0.6m未満102個、0.6m~0.7m未満85個、0.7m以上55個となり、0.2m~0.3m前後にピークがある。両跡周辺以外のものは、径0.2m前後で、深さ0.2m未満のものが多く、小規模であることが指摘できる。S D57溝跡周辺のもの、東にいくほど数量が増し、深さは0.2m~0.5m前後が多い。S X 6道路状遺構周辺のもの、南側にいくほど数量が増し、深さはやはり0.2m~0.5m前後が多い。但、南にいくほど深いものが増える傾向(50m以上が北側では10%近く、南側では27%近くの数値を示すようになる)があり、堆積土の良好なものの出現度も高くなる。

さて、その堆積土であるが、検出時において、全てのピットにつき断面図を作成することを断念し、一応半載した上で、ピット群を、①黒褐色土を主とし、締まり良く住居堆積土等に似るもの、②粒子粗く締まり弱いもの、単一層のものが多い、③両者の中間的なもの、と3つに分け、①と③については断面図を作成し、②については、台帳に堆積土の特徴などを記載するとどめた。②については、木の根などによる擾乱と思われるものがあり、総体として、新しい時期のものと考えていた。全体の凡そ84%、966個が②のタイプであった。しかるに、調査の進行に伴い、②として処理したもので、掘立柱建物跡の柱穴となるものが現われ、一向に新しい時期の遺物出土例なく、結果的には土師器坏、壺、須恵器坏、壺、土師質土器坏、灰釉陶器碗、男瓦、女瓦小片等々95点が出土したのみであった。従って、その分類基準そのものが不成立となったわけで、凡その堆積土の状況を示す材料にすぎなくなったのである。

なお、図面74-5の小型海獣葡萄鏡1面はS D57溝跡北側、FR79区調査のP-355より出土したもので、堆積土は茶褐色土ブロック入り、締まり悪く、粗粒の黒褐色土で、②のタイプに分類したものであった。その短径0.3m、長径0.6mの長円形で、南と北に、底面各1を有する。深さ0.5m、鏡はその覆土中より出土したものである。

さて、S D57溝跡ならびにS X6道路状遺構周辺のピット群は、深さ0.2m~0.5m前後のものが多く、他に比べ深いものが多いことが指摘された。又、両者共遺構中央部にかかるものは少ない。S X6道路状遺構内においては、構築土を切るものは少なく、掘り方上面にて、検出されるものがほとんどである。この場合、掘り方→ピット→構築土となるか、ピット→掘り方→構築土となるかは明らかでない。ピットの形態は、平面円形もしくは楕円形で断面円筒形もしくは砲弾形をとるものが大半で、堆積土は粗粒で締まり悪い黒褐色土の単一層のものが多い。又、重複して底面を2つ以上有すものでも、堆積土が同一のものがあつたり、切り合い関係を有すものもあり、全て同一時期のものでなく変遷の結果であることは明らかである。これらピット群は両跡に沿って幅10m前後で、群在しており、規則的配列は取敢されない。以上のことから、これらピットは、S D57溝跡ならびにS X6道路状遺構と強い関連を有していることは明らかで、その性格としては木の根あるいは杭の打ちこみなどによるものとの想定が浮かぶ。溝あるいは道路状遺構と一体にして、いかなる構造、配列のものであったのか、両跡の性格とあわせて考究していかなければならない。

なお、武蔵国分寺跡において同様のピット群が検出されている例としては、第175次調査地区（昭和58年度）をあげることができる。寺地南辺を画するS D17溝跡、S D173溝跡とこれに直交するS D72溝跡の交点部分で、溝跡内外に、約400個のピット群が集中しており、平面円形もしくは楕円形、断面円筒形もしくは砲弾形で堆積土の締まり弱いものが多いなど、本調査区例類と共通項を有する。

2. 出土遺物

本調査により出土した歴史時代遺物としては、土器・陶器・瓦埴類・鉄製品・鏡など総量コンテナ30箱ほどであり、その多くは住居跡から出土したものである。

遺物の説明は全て一覧表によることとし、出土位置毎に、土器→陶器→瓦埴類→金属製品の順とした。表記の方法について以下に補足説明をする。

(1) 各遺物共通

- イ. 遺物番号としてあるのは、各個体毎の登録番号で、各個体に黄色ポストカーラーで註記してある。資料抽出の便に供する。
- ロ. 出土位置において、「カマド」はカマド構築土崩壊土及びカマド覆土、「床直」は床面直上出土を示す。
- ハ. 計測値、記号なしは完数値、() は復元数値、() は残存数値、— は計測不可を表わす、単位はセンチメートル。

(2) 土器類

- イ. 種別 土：土師器、須A：須恵器A(環元焼成)、須B：須恵器B(酸化焼成)、土師質：土師質土器、灰釉：灰釉陶器
- ロ. 灰釉陶器については、斎藤孝正氏・守屋雅史氏(名古屋大学)に実見していただき、その所見を備考欄の〔 〕内に記した。

(3) 瓦

鍔瓦 (本報告にないので省略)

宇瓦

- イ. 内区文様 G：重弧文、KK：均正唐草文、HK：偏行唐草文、H：へら書き文、T：竹管文、K：格子文(へら書きは除く)、J：縄文、O：その他
- ロ. 外区、脇区文様 a：素文、b：珠文、c：長円珠文、d：圏線文、e：鋸齒文、f：凸線文、g：その他
- ハ. 頸の形態 以下の組み合わせにより記入

E 直線頸

- a 凸面を整形するもの
- b 瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの
- c 不整形のもの

F 段頸

- F1 瓦当凸面と凹面が平行するもの

VI 歴史時代の調査

F2 F1以外のもの

- a 瓦当凸面および瓦当裏面を整形するもの
- b 瓦当凸面のみ整形するもの
- c 瓦当裏面のみ整形するもの
- d 不整形のもの

G 曲線類

- G1 瓦当凸面が内側しながら女瓦凸面に移行するもの
- G2 瓦当凸面がやや直線的に内傾しながら女瓦凸面に移行するもの
- G3 いわゆる踏型形式
 - a 瓦当凸面を整形するもの
 - b 瓦当部と女瓦部境部分のみ整形するもの
 - c 不整形のもの

男瓦・女瓦

- イ. 布目本数 3cm四方内での側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表わす
- ロ. 縄叩き本数 3cm四方内での縄数を表わす
- ハ. 縄の撻り L: 縄圧痕が右上り左下りの傾斜をなすもの
R: 縄圧痕が左上り右下りの傾斜をなすもの
- ニ. 粘土板合せ目 佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」での分類S・Zによる
- ホ. 布合せ目 粘土板合せ目の分類S・Zに準ずる
- ヘ. 叩き締め円弧 A: 叩き締めの円弧が一方のもの
B: 叩き締めの円弧が「ハ」字状をなすもの

第11表 歴史時代出土遺物一覧(1)

SI 147 住居跡 土 器 一 覧								
図 面 図 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径 高台高	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	備 考		
69-1 図版 67 147-1	土一袋	覆土、 カマド、 床直	(23.8) (8.0)	口縁径が最大、口縁やや「く」 字状に外反、口唇部は、やや 立つ、胴部の張りは少ない。	胴部外面横方向のへら削り、 口縁内外にかけ横ナデ、に胴 部内面は、へら状工具による 調整痕顕著。	胴下半分、口縁部片欠、 焼成良好、細かい砂粒を 多く含む。灰褐色～暗赤 褐色。		
69-2 147-2	土一袋	覆土	(23.3) (3.7)	口縁「く」の字状に外反し、口 唇部はまっすぐ立つ。	口縁内外は、凹凸が目立つナ デ調整外面は滑(?)ナデ、体 部内面はへら状工具による調 整。	口縁部片欠土色調は酸化 変地成の顕著層下に似る。 暗赤褐色焼成良好。 砂粒を少量含む。		
69-3 147-3	須臾一坏	覆土	(13.0) (4.0) —	体部は若干内彎しながらゆる やかに立ち上り、口縁若干外反 する。	ロクロ調整。	口縁肉厚の小破片、底部 欠損、酸化劣、焼成良好。 砂粒若干含む、暗赤褐色。		
69-4 図版 67 147-4	灰釉一陶	カマド	(15.9) 4.4 6.9 (0.6)	体部下半に、ややゆるい段が 付き若干内彎しながら立ち上 る。器厚は薄い。高台は太 くやや外に開く。	高台は粘付け。物はうすく口 外面とも体部下平まで、へら 削りされる。	口縁欠、底部欠損存。焼 成良好、胎土堅密。物は 白灰色。素地は灰色。 (東大Ⅱ第2)		
SI 147 住居跡 瓦 一 覧								
図 面 図 版 遺物番号	出 土 位 置	端 面 全 長 厚 寸	成・整 形 の 特 徴				備 考	
			凹 面	凸 面	輪 面	輪 面 特 徴		
69-5 図版 67 147-5	床直	(9.6) — (12.3) (28.0)	栞上板	21×21	伏端へた削り。	格子目	不整形。 伏端、右端端へ へら削り。	凸面に「花」の押型。 凹面にへら書き(文 字不明)
SI 147 住居跡 鉄 製 品 一 覧								
図 面 図 版 遺物番号	種 別	出 土 位 置	寸 法		備 考			
69-6 図版 67 147-6	不 明	覆土	長さ 幅(最大)	5.8 0.5	基部と思われる。先端欠損。先端部(図下部)は、0.3角の断面正方形を呈する。 厚み(最下) 0.4			
SI 148 住居跡 土 器 一 覧								
図 面 図 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径 高台高	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	備 考		
70-1 図版 67 148-1	須 A 一坏	南壁部埋 溝上	12.3 3.5 4.6	若干歪んでいる。体部内彎し 口縁若干外反する。	底部右回転車切り。内外面と もロクロ調整。外面口縁下に 輪積みもしくは巻き上げ痕あり。	完形。還元焼成やや不 良。砂粒を少し含む。灰 色～黒灰色。		
70-2 148-2	須 A 一坏	床直	(13.2) 3.95 (5.0)	体部やや内彎し、口縁やや外 反する。	内外面とも、ロクロ調整。	口縁欠、底部殆ど欠損。 還元焼成、焼成不良と思 われる。胎土緻密、灰色 ～暗灰色。		

第12表 歴史時代出土遺物一覧(2)

SI 148 住居跡 土器一覧のつづき						
図 番 図 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径 高台高	器 形 の 特 徴	成・装彩の特徴	備 考
70-3 図版 67 148-3	須 A 一 坏	貯 蔵 穴 覆 土 床 直	(12.1) 3.65 (4.7)	体部内彎し、口縁若干外反する。	底部右回転糸切り、内外面とも、ロクロ調整。	口縁勾欠状、底部若干欠、環状尖の焼成不良。砂粒を少量含む。灰色～暗灰色。若干橙灰色部分有り。
70-4 図版 67 148-6	須 A 一 坏	貯 蔵 穴	12.2 35-41	体部大きく歪む。体部内彎し口縁若干外反する。	口縁外面下に焼痕み、もしくは巻き上げ痕有り。内外面ともロクロ調整。底部右回転糸切り。	定形。チール状色付着物内外面にあり。焼成不良。灰色～暗灰色。やや大粒の砂粒含む。
70-5 148-8	須 A ? 一 坏	貯 蔵 穴	(14.5) (3.1)	体部内彎し口縁やや外反する。	内外面とも、ロクロ調整。	口縁勾欠状。酸化赤の焼成不良か。粘土緻密。赤色スコリア状物質少し入る。
70-6 図版 67 148-10	須 A 一 坏	床 直	11.8 4.95 5.7 0.5	体部やや内彎する。高台は低くやや外に開く。器厚厚い。	高台貼付部を両面とも指先でやや強くおさえる。(ロクロ)ロクロ目顕著。	定形。環状尖。焼成不良。砂粒少し含む。やや土師質に近い。黒灰色～灰色～暗赤褐色。
70-7 図版 67 148-4	須 B 一 坏	覆 土 貯 蔵 穴	(11.6) 4.3 4.6	体部内彎する。口縁若干肥厚する。	底部右回転糸切り。内外面とも、ロクロ目顕著。外面は目立たない。	体部勾底部定形。酸化赤の焼成不良。土師質。砂粒を多く含む。暗赤褐色。内外黒色の部分有り。
70-8 148-5	土師質一坏	床 直	(11.4) (4.26) (4.5)	体部やや内彎し、口縁やや外反する。	底部右回転糸切り。	口縁勾底部定形。酸化赤の焼成不良か。粘土緻密。赤色スコリア状物質少し入る。
70-9 148-7	須 B ? 一 坏	カ マ ド	(11.9) (3.2)	体部内彎し口縁やや外反、肥厚する。	内外面ともロクロ調整。	口縁勾欠状。酸化赤か。砂粒多い。暗赤褐色。
70-10 図版 67 148-12	須 B 一 坏	床 直 貯 蔵 穴	(13.2) 6.6 8.2 1.2	体部内彎し口縁若干肥厚する。高台は大きく外に開く。	体部外面ロクロ目顕著。	口縁若干欠存。粗い砂粒を多く含む。赤褐色(赤色地味強い)。
70-11 図版 67 148-9	土師質一坏	床 直 覆 土	(13.0) (5.5) 5.7 0.6	体部内彎し口縁やや外反する。高台は低くやや外に開く。	高台貼付部を両面とも指先で強くおさえる(ロクロ)。	口縁と体部片は接合せず擴大復原。口縁勾、底部完形。酸化赤地或砂粒やや多い。赤褐色。
70-12 図版 67 148-11	土師質一坏	床 直	13.0 5.7 5.3 0.7	体部内彎し口縁やや外反する。高台はやや低く、外に開く。	高台貼付部を両面とも、指先でやや強くおさえる(ロクロ)。	口縁勾欠。砂粒を少し含む。赤色スコリア状物質少し含む。暗赤褐色。
70-13 148-13	須 一 坏	覆 土	(19.6) (8.7) —	口縁外反し、口唇部肥厚してまっすぐに立つ。	胴部の上に頸部を接合する。外面に粘土接合線2条みられる。	口縁部片。口縁勾、胴部勾残存。焼成良好。砂粒やや多い。暗灰色。
70-14 148-14	灰釉一坏	カ マ ド 覆 土	(15.1) (3.7)	体部内彎し、口縁やや外反する。	釉はうすく、内外面とも体部下平まで、ハケ塗りされる。	口縁勾残。体部下平～底部欠。焼成良好。粘土緻密。書地は灰色。釉は淡灰緑色(塗料。K-50)。
70-15 図版 68 148-15	灰釉一坏	貯 蔵 穴	— (3.3) 0.9 7.76	高台はやや高くまっすぐ。	釉をかけた部分残存しない。	体部下平～底部片有。底部内面に垂れ懸着有り。書地灰色。粘土緻密。(東瀛。虎洞山1)

第13表 歴史時代出土遺物一覧(3)

SI 148 住居跡 瓦 一 覧									
国 道 区 画 遺物番号	出 土 位 置	供 養 溝 長 厚 寸	成・整 形 の 特 徴					備 考	
			四 面		凸 面		端 面		
			業 材	寸 法	特 徴	印 記	特 徴	特 徴	
70-16 図版 68 148-16	床 直	- - 3.0	-	21×21			編 目 9 本		
SI 148 住居跡 鉄製品一覧									
国 道 区 画 遺物番号	種 別	出 土 位 置	寸 法		備 考				
70-17 図版 68 148-17	釘	環状焼土 内	長さ 頂部幅 厚み	(3.7) 1.4 1.1	頂部は折り曲げて作出。 胴部、断面形はほぼ正方形。胴部寄りで0.8×0.8。				
SI 152 住居跡 土 器 一 覧									
国 道 区 画 遺物番号	種 別	出 土 位 置	口 径 底 径 高 寸	器 形 の 特 徴		成・整形の特徴		備 考	
71-1 図版 68 152-6	土一 罎 覆 土	カマド、 覆 土	(21.1) (19.0)	口縁部に最大径あり、口縁はゆるく「く」字状に外反。胴部は余り張らない。器厚厚い。		胴部縦方向の、頸部は横方向のへら削り、口縁内外面は横ナデ、胴部内面は、ヘラナデ。		胴下半～底部欠片。 焼成良好。砂粒多い。 褐色。	
71-2 図版 68 152-7	土一 罎 覆 土	カマド、 カマド、 袖、覆土	(23.6) (13.2)	口縁「く」字状。最大径は口縁と胴部上半。胴上半部は張りがある。		胴上半外面、裏、斜方向のへら削り、胴部へ先(下)により、横方向の削り。胴部一口縁内面横ナデ、胴部内面横ナデいへラナデ。		胴下半～底部欠片、約1/3(口縁)、焼成良好。細かい砂粒多い。 褐色。	
71-3 図版 68 152-8	土一 罎 覆 土	カマド、 覆 土	(26.0) (7.3) -	口縁部肥厚する。口縁ゆるく「く」字状に横曲。最大径は口縁及び胴上半にある。		外面頸部横。胴上半横、斜めのへら削り(器肌見れ不明瞭)と思われ、口縁内外面横ナデ、胴部内面ヘラナデ。		胴下半～底欠片、(口縁)、焼成良好。細かい砂粒が多い。器厚褐色。	
71-4 図版 68 152-9	土一 小砂器 覆 土	カマド、 覆 土	9.9 10.0 6.4	全体に若干歪み、肉壁がない。口縁、底部肥厚。		胴部外面縦方向のへら削り、内面ヘラナデ、口縁先によりおさえ、やや横曲させる。口縁内外面ナデ。		ほぼ完形(部分欠損多い)焼成良好。細かい砂粒多い。褐色。	
71-5 図版 68 152-4	灰 A一 罎 覆 土	カマド、 覆 土	- (3.4) 6.3 0.45	底部内彎する。高台は低く、外へ開く。		高台粘付後破部をナデ、底部外面調整され、切離痕残す。		体部上半欠。環状灰焼成(やや不良)。砂粒やや多い。灰色～橙灰色。	
71-6 図版 68 152-3	灰 A一 罎 覆 土	カマド、 覆 土	- (3.4) -	体部やや内彎する。		底部は回転糸切り。高台粘付後、破部をナデ。		口縁、高台欠片。環状灰焼成(やや不良)。砂粒を少し含む。灰色～橙灰色。	
71-7 図版 68 152-2	灰 B一 罎 覆 土	カマド、 覆 土	(13.8) (2.7) -	体部やや内彎し、口縁部わずかに肥厚し外反する。		内外面口縁調整。		口縁部欠片、約1/3現存。体部下半～底部欠損。酸化異焼成。赤色スロリア状物質含む。橙褐色。	
71-8 図版 68 152-1	土砂器一 罎 覆 土	カマド、 覆 土	12.0 4.7 6.1	体部やや内彎し、口縁やや外反する。		底部、回転糸切り。		ほぼ完形。口縁～底部欠片現存。器表が、焼成中に剥落する。焼成やや不良。酸化異焼成。赤褐色。赤色スロリア状物質含む。橙褐色。	
71-9 図版 68 152-5	灰 袖一 罎 覆 土	カマド、 覆 土	(15.2) (3.6) -	体部内彎、口縁下で器厚がすく、やや横曲する。		袖付、ヘケ作り。内外面とも体部上半まで。		底部欠片、約1/3現存。焼成良好。環状。赤褐色は灰色。袖は灰緑色。 〔図版? K-90?〕	

第14表 歴史時代出土遺物一覧(4)

SI 195 住居跡 土器 一 覧									
図 面 図 版 遺物番号	種 別 器 形 位 置	出 土 位 置	口 径 口 高 底 径 底 高	器 形 の 特 徴	成 ・ 型 形 の 特 徴	備 考			
							72 - 1 195 - 2	須 A 一 環	覆 土
72 - 2 図版 68 195 - 3	須 A 一 環	覆 土	(4.7) 6.0	体部内彎する。	底部回転車切り、内外面ロクロ調整。	口縁欠。体へ底迄。細砂較多い。褐色。			
72 - 3 図版 68 195 - 6	須 A 一 環	覆 土	(14.2) 5.0 (6.3)	体部ゆるやかに内彎する。	底部回転車切り、内外面ロクロ調整。	口へ底約瓦。露出表面地成不良。砂較多く、大粒のもの目立つ。灰色～褐色。			
72 - 4 図版 69 195 - 4	土師管一環	覆 土	13.9 4.1 5.8	体部やや内彎する。内面口縁下に、一条の浅い凹線が走る。	底部右回転車切り、内外面ロクロ調整。	口へ底迄。砂較少なく、微塵でやや土脚質。赤色スコリア状物質、金雲母少し入る。淡赤褐色。			
72 - 5 195 - 5	須 B ? 一 環	覆 土	(12.0) 2.8	体部直ぐ、やや内彎する。	内外面ロクロ調整。	底部欠。約瓦。微塵。砂較少ない。淡赤褐色。			
72 - 6 図版 69 195 - 1	土師管一環	覆 土 P-1A	(13.2) 4.2 5.9	体部直線的で、口縁わずかに凹曲する。	底部右回転車切り。内外面ロクロ調整。口縁内外面ナデ。	口縁へ体部迄欠。酸化及地成不良。赤色スコリア状物質、金雲母多。細砂較多い。褐色～黒褐色。			
72 - 7 195 - 7	須一環?	覆 土 P-2A	(29.4) (15.2)	体部下半ゆるやかに内彎。口縁は折り返し、外反し巻を持つ。体部上半に把手が付く。(断面のみ残る)	内外面ロクロ調整。	口縁部約瓦。細砂口縁口縁部約瓦。体部内面口縁口縁部約瓦は含まず。体部内面口縁部約瓦は酸化。赤色スコリア状物質多。褐色。			
SI 195 住居跡 男 瓦 一 覧									
図 面 図 版 遺物番号	出 土 位 置	狭 長 金 厚 端 長 長 寸	成 ・ 型 形 の 特 徴				備 考		
			凹 面		凸 面			端 面	
72 - 8 図版 69 195 - 8	R 2 A 覆 土	(10.9) — (23.1) 0.95	粘土練	15×15	不整形。		板状工具による凹縁ナデ。後縁縁幅広くナデ。	へう削り。後縁ナデ。	
72 - 1 図版 69 195 - 9	床 直 P-1B 覆 土	(10.2) — (36.7) 1.6	—	30×30	右側端縁へう削り。			へう削り。	
72 - 2 図版 69 195 - 10	R 2 A 覆 土	— 11.8 (20.4) 1.6	粘土練	33×34	端縁へう削り。	端目。	甲き後ナデ。端縁へう削り。	へう削り。	
SI 195 住居跡 女 瓦 一 覧									
図 面 図 版 遺物番号	出 土 位 置	狭 長 金 厚 端 長 長 寸	成 ・ 型 形 の 特 徴				備 考		
			凹 面		凸 面			端 面	
72 - 3 図版 69 195 - 11	覆 土	— — (29.6) 2.4	—	25×27	端縁へう削り	端目 L 5本。	不整形。	左側端縁へう削り。	凹面にへう巻き。端縁背刺多く含む。暗赤褐色。

第15表 歴史時代出土遺物一覽(5)

SI 195 住居跡 鉄製品一覽							
図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考			
72-9 図版 69 195-12	不明	P-1B	現存長 6.6	釘などの中央部分か。頭部及び先端欠損。断面、略正方形。最大0.7×0.8、最小0.5×0.55			
SD 57 土器一覽							
図面 図版 遺物番号	種別 器形	出土 位置	口径 器高 底径 高台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考	
74-1 図版 70 57-1	土師甕一坏	覆土	— (4.6) 6.7	底部厚く、一見高台状。体部内凹する。	体部下端を強くおさえ、底部をやや高く、又若干外へ開かせ高台状にする。底部右回転糸切り。	口縁欠。軟質、緻密、細かい砂粒多い。赤色スフロア状物質のすかに入る糖褐色~赤褐色。	
74-2 図版 71 57-1	須B?一輪?	覆土	— (4.0) (23.8)	底部大きく盤状で、体部は若干開き内彎ぎみに立上る。底部外面周辺は、幅6%で高さ0.5%ほどわずかに高い。	体部外面に稜状の圧痕が並列してみられ、径調整(ロクロ?)する。体部内面と底部内外面はロクロ調整。	底部小片。底部外面全面に薄く黒色付着物。S I 152 覆土上層出土片と複合。焼成堅緻白灰褐色。	
SK 251 土坑 土器一覽							
74-3 図版 70 251-1	須A一坏	覆土	13.9 4.3 5.8	底部よりはば直線的に立上る。口唇若干肥厚。	底部右回転糸切り。	ほぼ完形。胎土砂粒少なく、やや軟質。灰色。	
S×6 女瓦一覽							
図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭幅 端長さ 全厚	成・整形の特徴				備考
			凹面		凸面	端部	
74-4 図版 70 6-1	覆土	— (9.0) (2.45)	素材	布目 特徴	叩き 特徴	特徴	凹面に「兄」の押印。胎土に黒褐色針が多い。
74-4	覆土	—		布目をナテて消す(文字部分のみか)。	編目		
P 355 金属製品一覽							
図面 図版 遺物番号	種別	出土 位置	寸法	備考			
74-5 図版 70 355-1	海象歯製鏡	覆土	鏡面径5.95。鏡背厚径5.6。縁厚0.4~0.5。内区径3.74。外区幅0.93。	全体に縁厚く磨化する。周縁大半が欠くつぷれ。文様不鮮明。面に孔有す。鏡面ゆるやかに度り強い凸面となる。正円ではなく、図右半分がやや中心に近く、幅僅かに楕円形を示す。内区は全体に薄く0.05~0.1を測る。厚部から外区へ厚みを増す。縁は直立せず内凹する。重量(保存処理後)47.1g。			
P 403 女瓦一覽							
図面 図版 遺物番号	出土 位置	狭幅 端長さ 全厚	成・整形の特徴				備考
			凹面		凸面	端部	
74-6 図版 70 403-1	覆土	(11.1) — (14.0) 1.85	素材	布目 11×14	不整形。	縄目L 7本。	狭側端ナテ。胎土に赤色スコリア状物質含む。

第16表 歴史時代出土遺物一覧(6)

P 863 字 瓦 一 覧													
図 面 図 版 遺物番号	出 土 位 置	上体幅 下体幅 厚 深 厚 深 厚 深 厚	内 区		外 区				輪 区		支 棟 深 全 長	備 考	
			厚 深	文 様	上		下		幅	文 様			
					厚 深	文 様	厚 深	文 様					
74-7 図版 70 863-1	灰 土	6.85	3.15	KK	1.5	a	2.2	a	(7.0)	a	0.2	(14.6)	類G-1a。素材粘土。布目19×25。西面広端へラ削り。側面へラ削り。断面へラ削り。ナデ。幅目L.8本。青灰色。
遺構外 土 器 一 覧													
図 面 図 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 高 径 底 径 高 台 高	器 形 の 特 徴			成・整形の特徴		備 考				
75-1 外-1	土一環	辨土	(12.6) (3.7) —	体部わずかに内彎する。			編織み。巻き上げ時の粘土接合部凹陥に浅る。体部中央は指頭による調整。体部下端へラ削り(横)。口縁横ナデ。体部内面へラミヤス。		底部穴貫。口縁で約1/3弱明赤褐色。				
75-2 外-19	土一鉢	茶褐色土	— (2.7) (12.0)	大きい底部より体部は外方に開いて立ち上がる。			円板状の底部に体部を接合。接合部内外面は指頭で強くおさえる。		底部外面に木炭屑残る。胎土に細砂含む。明赤褐色。				
75-3 外-3	土一壺	黒褐色土	(23.6) (15.2) —	口縁に鉄大径。割は余り張らない。口縁ゆるい「く」の字状。			口縁内面具。横ナデ。断面へラ削り(横)。割上平横及び斜下半縦。へラ削り。割部内面へラナデ。		割下半一底部欠。側部で1/3。明褐色。				
75-4 図版 71 外-16	須A一埴	黒褐色土	(12.7) 5.0 5.5 9.5	脚壁厚く。体部下平丸味を帯つ。やや低い断面三角形の高付付く。			底部に赤切り施し残。高台付前後。裾部やや強いナデ。		端元尖の焼成不良と思われる。灰色一層赤褐色軟質。磁面でやや土脚質に乏しい。				
75-5 図版 71 外-2		黒褐色土	— (2.5) (5.6)	体部ほぼ直立する。底部中央に孔(径1.2-1.6mm)を有す。			底部右側斜赤切り。体部口縁調整。底部内面に溝まき状の痕跡残す。		底部片。酸化表焼成。橙褐色。赤色スクリヤ状物質含む。				
遺構外 字 瓦 一 覧													
図 面 図 版 遺物番号	出 土 位 置	上体幅 下体幅 厚 深 厚 深 厚 深 厚	内 区		外 区				輪 区		支 棟 深 全 長	備 考	
			厚 深	文 様	上		下		幅	文 様			
					厚 深	文 様	厚 深	文 様					
75-6 図版 71 外-4	灰 土	— — (5.5)	2.9	KI	1.0	a	1.5	a	(15.4)	a	0.1	(4.7)	類F-1b。布目12×26。幅目L.12本。側面へラ削り
75-7 図版 71 外-6	黒褐色土	— — (7.0)	2.6	KK	2.1	b	2.3	b	6.8	b	0.2	(9.75)	類F-1b。布目25×19。幅目L.8本。
75-8 図版 71 外-5	灰 土	— — (4.6)	3.5	KK	(0.6)	a	0.5	a	5.3	a	0.25	(9.4)	類F-1a。布目21×21明赤不明。西面広端幅広く側面若干へラ削り。断面はへラ削り。後ナデ。
75-9 図版 71 外-13	灰 土	— — 5.4	3.8	O	1.3	a	0.3	a	—	—	0.1	(3.7)	類不明。布目17×19。幅目L.9本。

第17表 歴史時代出土遺物一覧(7)

遺構外 字瓦一覧のつづき													
図 面 版 遺物番号	出 土 位 置	上位盛期 下位盛期 瓦厚 深さ	内 区		外 区				脇 区		支 棟 深さ	全長	備 考
			厚さ	文様	上		下		幅	文様			
					厚さ	文様	厚さ	文様					
75-10 図版 71 外-7	赤褐色土	— — 4.3	3.0	0	0.9	a	0.4	a	3.0	a	0.2	(10.8)	型E-1b。布目24×18。織目L12本。瓦当部も織目印と。端部不整形。端部ナテ。布目ど目あり(1列)。
遺構外 女 瓦 一 覧													
図 面 版 遺物番号	出 土 位 置	供 出 全 長 厚さ	成・整形の特徴						備 考				
			凹 面			凸 面		端 面					
			素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴					
76-1 図版 71 外-9	赤 土	— (6.0) —	—	—	—	—	格子目	—	—	—	—	凸面に「花」の押型。	
76-2 図版 71 外-10	赤 土	— (3.6) (5.4) (2.6)	—	21×18	端縁へラ削り。	—	格子目	—	—	へラ削り+ナテ。	—	凸面に「花」の押型。	
76-3 図版 71 外-12	黒褐色	(1.6) — (9.8) 2.0	—	21×20	端縁幅広くナテ。	—	格子目	—	—	へラ削り。	—	凸面に「花」の押型。	
76-4 図版 72 外-18	黒褐色土	(8.5) (6.7) (10.0) 2.6	—	21×21	—	—	織目L5本	—	—	—	—	凹面に「大」のへら書き。	
76-5 図版 72 外-17	黒褐色土	(4.1) — (7.2) 1.9	—	—	端縁幅広くナテ。	—	格子目	—	—	へラ削り。	—	凸面に「大」の押型。	
76-6 図版 72 外-8	赤 土	— (6.9) 2.2	—	18×15	—	—	織目L6本	—	—	—	—	凸面にへら書き。(材質不明)	
76-7 図版 72 外-11	黒褐色土 上 面	— (14.0) 2.2	粘土板	23×20	端縁へラ削り。	—	格子目	—	—	へラ削り。	—	—	
遺構外 埴 一 覧													
図 面 版 遺物番号	出 土 位 置	長 辺 短 辺 厚 さ	素 材	成・整形の特徴			備 考						
				上 面	下 面	側 面							
76-8 図版 72 外-15	赤 土	(12.0) (8.0) 5.3	—	へラ削り+ナテ。	へラケズリ+ナテ。	ナテ。	—	—	—	凹面に「鳥」のへら書き文字。			
76-9 図版 72 外-14	赤 土	(6.2) (8.5) (3.0)	—	へラ削り+ナテ。中央に段有り。狭い中央部が薄くなる。	部分的に生き(?)の箇所あり。上面の段に対応するものか。	へラ削り。	—	—	—	—			

3. 小 結

(1) 出土土器について

本調査区出土の土器群について、その編年的位置を検討する。纏まって資料が得られたのは S I 147・148・152・195住居跡であるので、これらが対象となる。

4軒の住居跡出土土器群は、いずれも、その覆土、カマド周辺、床面直上等の出土位置のものが、床面直上のもとの覆土中のもとの接合していたり、覆土上層のもとの覆土下層のものが接合する例が多く、時期的には混在したものととの予測が立つが、一群の土器として取扱われるべきものといえよう。

まず、住居跡出土土器の組成をみると第18表に示す通りとなる。小破片資料を含めて考えると、供器形態において、S I 147住居跡に土師質土器が無いのを除くと、いずれも須恵器A(還元焰焼成)、須恵器B(酸化焰焼成)、土師質土器、土師器の4者が混在しており、その他の器種をみても、ほぼ一様のあり方を示しているものと解することができる。

須恵器に関しては、南武蔵地域において、服部敬史氏らによる南多摩窯址群出土須恵器の編年が既に確立しており、北武蔵地域においては、高橋一夫氏・宮昌之氏によって、末野・南比企・東金子窯址群や新開、栗谷ツ諸窯出土須恵器の編年が確立されている⁽²⁾。両者は、微妙な違いはあるものの大枠では同様の推移をすることが確認されている。ここではより精緻なデータが得られている南多摩窯址群との対比を行うこととし、北武蔵諸窯との対比については今後の課題としたい。さて、南多摩窯址群の編年に拠れば、平安時代のものに限ると、G37(御殿山地区37号)窯式→G59窯式→G25窯式→G5窯式→G14窯式と変遷し、酸化焰焼成須恵器を主体とするG14窯式をもって終焉をむかえる。これらの年代観としては、845年を上限とする武蔵国分寺七重塔の再建瓦と併焼された北武蔵新久A地点窯、E地点窯出土の須恵器環とG59窯式の須恵器群との比較分析から、後者を前者より一段階新しいものと位置づけ、ここを仮の定点として、G37窯式を9世紀第2四半期、新久A-1号窯式を介在して、G59窯式を9世紀第4四半期、G25窯式を10世紀前半、G5窯式を10世紀中葉から後半にかけて、G14窯式を10世紀末葉から11世紀初頭頃と想定されている(服部敬史 1981b)。

法量比が得られる個体は須恵器環A(還元焰焼成)が、6個体、須恵器環B(酸化焰焼成)が1個体ある。形態等を加味すると、S I 195住居跡出土の2個体(72-1, 72-6)はG5窯式に相当し、S I 148住居跡出土の4個体(70-1~4)はG5窯式からG14窯式にかかる時期のものとなることができる。何れも、色調は灰色~橙灰色を呈した半還元焰焼成ともすべきもので、G5窯式新期以降の特徴を示している。

次に、土師質土器については、本跡出土のものを含めて先に、「武蔵国分寺跡出土の土師質

VI 歴史時代の調査

土器について」と題し、土師質土器を伴出する平安時代後期の土器群については概観した（福田1984）。S I 148 住居跡出土の1個体（70-8）とS I 195 住居跡出土の2個体（72-4, 6）は、拙稿において、土師質土器第3群としたもので、南多摩窯址群編年G15窯式～G14窯式の法量・形態を有しているながら胎土が土師質のもので、土師質土器出現期の様相を反映したものとした。S I 152 住居跡出土の1個体（71-8は、大ぶりの環で、G5～G14併行のものと考えられる。拙稿I群（須恵器+土師質土器+土師器の組成となる）供膳形態において特有のものである。

土師器環は良好な資料がなく、甕は「く」の字状に外反する口縁と、胴部に縦方向もしくは斜、横方向のヘラケズリを施した厚手のものである。

以上を総合すると、4軒の住居跡出土土器群は、南多摩窯址群出土須恵器編年に照すと、G5窯式（新）からG14窯式にかけての時期を与えることができる。実年代としては、南多摩窯址群出土須恵器編年に準拠すれば、10世紀後半から11世紀初頭頃のものとする事ができる。

灰釉陶器がS I 147・148 住居跡にて出土しているので、比較してみる。S I 147 住居跡出土の69-4は〔東濃、大原2号窯式〕、S I 148 住居跡出土の70-14は〔猿投、黒笹90号窯式〕、70-15は〔東濃、虎溪山1号窯式〕に多々比定された。灰釉陶器の編年、実年代比定については、諸説があるが、末期に関する最新の前川試案（前川1984）に拠れば、黒笹90号窯式を9世紀後半、大原2号窯式は10世紀前半、虎溪山1号窯式は10世紀中葉から11世紀初頭頃とされており、本調査区出土の土器群は大略10世紀後半から11世紀初頭頃と想定されるので、これより下る時期に位置づけられたものではなく、この点矛盾はない。

なお、S D57 溝跡出土の土師質土器環（74-1）は、拙稿でいうI類の大形の環で、G5窯式初期からG14窯式併行期と考えられるI群に特有なもので、このことから、住居跡出土土器群と同時期に位置づけられる。

S K 251 土坑出土の須恵器A（環元焰焼成）環（74-3）もG5窯式に位置づけられ、灰色

第18表 住居跡出土土器群の組成

器種 住居跡	須恵器A(環元焰焼成)				須恵器B(酸化焰焼成)				土師質土器		土師器			灰釉 器 輪 壇	備 考
	環		高台 付環	装類	環		高台 付環	装類	環	装	羽蓋	コップ 形			
	G5	G5 -G14 その他			G14	その他									
S I 195	②	①△		△	①△	①	②		△	△			△		
S I 148	④	①△①	①		①△①	①	①	②	△	△			②△	灰釉〔猿投K-90〕 〔東濃虎溪山1〕	
S I 152		△	②	△	①△		①		△	③△		①	△		
S I 147			△	△	△	①△	△			△	③△	△	①△	灰釉〔東濃 大原2〕	

(○は図示資料、数字は個体数を示す。△は小個体資料(図示外)の存在を示す。)

軟質の半環元焼成状態を示すことなどから、同新期のものとする事ができ、これも同様に、住居跡出土資料と同時期に位置づけられる。

S X 6 道路状遺構からは時期を決し得る資料はなく、小破片資料のみであったが、土師器環、甕、環元焼成須恵器環、甕、酸化焼成須恵器環、土師質土器環、灰陶陶器柄、など65点と、甕瓦、男瓦、女瓦など62点が出土しており、住居群の時期と離れたものでないことが問われる。

掘立柱建物跡柱穴からの遺物はほとんどなく、遺物から時期を決することはできない。

(2) 検出遺構について

前項において検討した結果、本調査区検出の歴史時代遺構の大半は平安時代後期を中心として展開されたものとする事ができる。竪穴住居跡4軒と、S D 57溝跡、S K 251土坑はその出土遺物より10世紀後半から11世紀初頭頃のものとする事ができる。北側の隣接地(第107次調査)ではこれらと併行、並びに以降の住居跡等(大略10世紀後半から11世紀代のものとした)が検出されており、若干様相を異にしている。

さて、S D 57溝跡以南の遺構群を一見すると、その方向が共通していることが判る。僧寺南北中軸線との交角を求めたものを整理すると次の様になる。

S D 57溝跡	F R 77区以西	72°西偏
	F R 77区以东	65°西偏
S I 147住居跡(北壁)		76.5°西偏
S I 148住居跡(北壁)		72.5°西偏
S I 152住居跡(北壁)		79°西偏
S B 47掘立柱建物跡(桁行)		78°西偏
S B 48掘立柱建物跡(桁行)		75.5°西偏
S B 49掘立柱建物跡(梁行)		76.5°西偏
S B 50掘立柱建物跡(桁行)		74.5°西偏

住居跡と掘立柱建物跡は72.5°から79°の間におさまり、S D 57溝跡のF R 77区以西の72°と近似値を示す。溝跡は、必しも直線的なものでなく、屈曲がある中で仮に得られた方位であることや、各遺構群においても、1°、2°単位の厳しい規範があったとも考えにくく、その許容の幅があるものと考えられることなどから、S D 57溝跡と、これら住居跡、掘立柱建物跡の方向性について、ほぼ合致したものとする事ができよう。

なお、S X 6 道路状遺構はS D 57溝跡と直交せず、溝跡堆積土を切って構築しているの、後出のものであることは明らかであるが、中軸線に対して18°西偏(東西中軸線に対して72°東偏となる)しており、傾き方向は全く逆であるが、傾き角度が一致しており、偶然の結果によ

るものであるのか否か、注意をひく。S D58溝跡は南北中軸線に対して82°東偏して、S X6道路状遺構との交角は約80°で、S X6道路状遺構近くで、東端となることを考え合わせると、何らかの関連性が伺われる。

次にS D57溝跡以南の各遺構の分布をみると、10~20mの間隔をおいて点在していることが判る。但し、S B49掘立柱建物跡とS B50掘立柱建物跡は前者の南東隅柱穴(3-1)が後者の西妻柱間に入ることから、併存は考え難い。S B47掘立柱建物とS B48掘立柱建物は、共に南北2間×東西3間の東西棟柱建物で、溝跡から約10mの位置にくることなど共通する点が多く、併存して同一の機能を有していたものと考えられる。

次にS D57溝跡以南の住居跡、掘立柱建物跡の規模を整理すると次の様になる(S I152住居跡は除く)。

S I 147 住居跡	4.18m×4.5 m	18.81 m ²
S I 148 住居跡	3.9 m×4.9 m	19.11 m ²
S B47掘立柱建物跡	4.1 m×4.95m	20.295m ²
S B48掘立柱建物跡	4.4 m×5.4 m	23.76 m ²
S B49掘立柱建物跡	3.6 m×6.7 m	24.12 m ²
S B50掘立柱建物跡	4.0 m×5.7 m	22.8 m ²

住居跡の方が若干規模が小さいものの、平均して、4m×5m(20m²)とほぼ同規模といえ、しかも竪穴住居跡と掘立柱建物跡が混在しており、一体的に配置、使用したものであることが伺われる。

最後に、土坑について触れることとする。土坑には、平面形が円形のものと同方形のもの2種があって基本となっている。S D57溝跡とS X6道路状遺構より離れて、住居跡、建物群と混在していることが判る。共に所属時期を示す資料は、S K 251土坑よりの環元煖焼成須恵器坏(G5室式期)が1点あるのみであるが、こうしたあり方からみて、ほぼ同時期のものとみて大過ないであろう。この中で、掘立柱建物跡内並びに近接するものが8基ある。これを列挙すると、

S K 269 土坑	S B48掘立柱建物内	$\frac{2-2}{2-3}$ 柱穴間	不整円形	0.8 × 1.03m	深さ0.35m
S K 270 土坑	"	内 南 西 隅	隅丸方形	0.9 × 1.0 m	深さ0.28m
S K 273 土坑	"	外 東 妻 中央	不整円形	1.0 × 0.75m	深さ0.2 m
S K 271 土坑	"	外 南 中 央	隅丸方形	1.75×1.23m	深さ0.2 m
S K 281 土坑	S B49掘立柱建物内	北 西 隅	不整円形	径0.7m	深さ0.1 m
S K 249 土坑	"	内 中央 東 側	不整円形	1.03×0.97m	深さ0.24m
S K 251 土坑	S B50掘立柱建物内	北 東 隅 方 形		1.1 × 1.1 m	深さ0.16m

S K 250 土坑 // 外 西妻, 南端 方 形 0.82以上
 ×0.75m 深さ0.02~
 0.08m
 となる。建物内の S K 269・270・281・249・251 土坑は、底面平坦で、S K 249・251 土坑は踏み固められたように堅くなっていた。又、S K 273 土坑堆積土には焼土粒、木炭粒が、S K 251 土坑には木炭粒が入っていた。この内、S K 271 土坑と S K 250 土坑は、建物と方向を若干異にするので、関連性が薄い。その他については、位置、方向よりみて、建物跡と関連があるものと考えられる。S K 270 土坑、S K 281 土坑、S K 251 土坑は何れも建物の隅の位置にあって、S K 270 土坑と S K 251 土坑は、その方向が建物とはほぼ合致する。S K 269 土坑は柱穴間、S K 249 土坑は中央東側の位置となる。これらは何れも、整然とした配置であり、偶然に重複した結果として片付けることには無理であろう。S B 47 掘立柱建物跡の様に、何もないものもあることから、必ずしも、必須のものでないことは明らかである。建物跡の用途を住居と仮定した場合、土坑の機能としては、何らかの貯蔵施設とみる考えが有力であろう。ところが、竪穴住居跡にはこの種土坑が伴う例はないので、違ったあり方を示すこととなる。あるいは、作業小屋もしくは倉庫といった用途を仮定しても、土坑の有無、位置、形態など様々であり、決して一様の使われ方をしたものでないことが判る。今後は類例の検出に努め、掘立柱建物跡とあわせて、その機能について考究していきたい。その際、床板の有無（高床か土間敷か）が大いに関連するものと思われる。S B 47・48 掘立柱建物跡は、総柱建物であり、何れも中央の 2 個の柱穴が側柱より浅いので、これを束柱とし、高床式と考えると、土坑のある間のみ土間であったのか、あるいは別の構造を有していたものなのかなど、考究されるべき点が多く興味深い。今回は指摘にとどめ、類例の集成と考察は後に譲る。なお、土坑と掘立柱建物との関連については、浅野晴樹氏よりの指摘が出发点となった。

以上の様に、今次調査地区の歴史時代検出遺構の内、S D 57 溝跡以南の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などの遺構群は、S D 57 溝跡の方向とほぼ合致しており、規模をほぼ同じくする竪穴住居跡と掘立柱建物跡が計画的に配置されたものとする事ができる。その年代としては、出土土器の検討から、平安時代後期（10世紀後半から11世紀初頭頃）と推定される。僧寺北方域にあたる武蔵野段丘面上では、該期並びに、土師質土器が盛行する次期（11世紀代）に属する竪穴住居跡をはじめとする遺構群が多く検出され、その多くは本調査本区例と同様に、重複すること少なく、10~20mの間隔をおいて散在しており、寺地内の僧尼寺中間地における様相（第四中学校校地内など）と違ったあり方を示している。何れにしても、これら遺構群は寺地外において寺院を支える計画的集落と考えられ、今次調査はその一部を明らかにしたこととなる。こうした遺構群のあり様は、武蔵国分寺の構造、変遷を究明していくにあたり、極めて重要な地位を得ている。今回の広範囲の発掘調査がもたらした大きな成果の一つである。

(3) 出土鏡について

ビット(P-355)内より小型海獣葡萄鏡1面が出土した。昭和31年に薬師堂周辺の竪穴住居跡から白銅製の八花鏡断片1面が出土した(甲野1960)のに次ぐ2例目の鏡である。

本鏡は鏡面径5.95cm, 鏡背面径5.6cm, 縁厚0.4~0.5cmを測る小型鏡で、鏡面はゆるやかに反る。全体に縁青厚く磨化しており、周縁の大半が丸くつぶれている。鏡背文様は鋳あがりが悪い上に、錆化が著しい為、不鮮明である。内区径3.74cm, 外区幅0.93cmを測る。鈕に孔を有する。正円でなく、図右半分がやや中心に近く歪み、ごく僅かな楕円形を呈する。内区厚は全体に薄く、0.05~0.1cmを測る。1箇所孔があいてしまった。界圍から外区へと厚みを増す。縁は直立せず内傾する。重量47.1g(保存処理後)。

この種の鏡は、奈良時代の唐式鏡の中でも最小の形式で、銅質悪く、文様も鋳出しが鈍く不鮮明な雑鏡とされている。さらに本邦における踏返鏡造鏡とみられ、文様表出が極めて落ちるのは、大量生産のために、踏返鏡造鏡をさらに踏返鏡造した末期的状态を示すものとされている(中野1973)。その文様は、内区には伏獣形の鈕を中心に四圍の獣形を配し(本来は所謂婆娑形と竜形の交互配置)、界圍に沿って、葡萄の房を7個置く。外区には7翼の禽形が配され、その内に1ないし2個の葡萄の房を計10個所置いているとされる(松村1984)。

この種鏡は現在までに、出土10面、伝世7面、計17面の存在が知られており、大きさ、文様などの共通性から同范鏡と考えられている。以下に列挙する。

- | | | | |
|----------------------|----|-----------------|-----------------------------------|
| 1 京都府北桑田郡京北町周山庵寺址出土 | 1面 | 径5.9cm | (石田・三宅1959, 中野1973) |
| 2 兵庫県宝塚市中山勅使川窯址出土 | 1面 | 径5.9cm | (中野1973) |
| 3 奈良県吉野郡天川村金峯山出土 | 1面 | 径5.6cm | (中野1973) |
| 4 三重県鳥羽市神島町八代神社伝世 | 6面 | 全て径6.0cm | (中野1973) |
| 5 宮崎県東臼杵郡南郷村神門神社伝世 | 1面 | 径5.85cm | (中野1973) |
| 6 千葉県印旛郡富里村松の木台2号墳出土 | 1面 | 径6.2cm | (芝山はにわ博物館1975) |
| 7 奈良県桜井市大福遺跡出土 | 1面 | 径6.1cm | (權原考古学研究所1975) |
| 8 石川県羽咋市寺家遺跡出土 | 2面 | (径6.2cm—写真図版より) | (羽咋市教育委員会1984, 石川県埋蔵文化財センター—1981) |
| 9 佐石川県鮎倉島奥津比咩神社旧社地出土 | 1面 | 記載なし | (羽咋市教育委員会1984) |
| 10 千葉県印旛郡印旛村瀬戸鈴耕地出土 | 1面 | 径6.05cm | (千葉県立房総風土記の丘1980) |
| 11 奈良県大和郡山市平城京九条大路出土 | 1面 | 径6.0cm | (松村1984) |

これに本例を追加して、12ヶ所、計18面ということになる。

さて18面の同范鏡の中にあつて、武蔵国分寺跡出土例はどのような位置を占めるのであろうか。中野敬樹氏によれば、こうした雑鏡は、一地域で量産され、多方面に分配されたものであ

るといふ見方と、僻地での鑄製であって、地方に伝わった唐式鏡をさらに地方で踏返鑄造したものとの見方ができるという。

松の木台2号墳鏡を分析された山田友治、杉山晋作氏は、面径大きく、文様が鮮明であることから、踏返鑄造の際の径の縮少と文様が不鮮明になることを前提として、松の木台2号墳出土鏡を、最も早い段階のもので、祖鏡に近いものとした。ただし、中央で量産されたものが、地方に伝わった唐式鏡をさらに地方で踏返鑄造したものかは明らかでなく、同鏡がアンチモンを含むというような化学分析による成分比の検討も加えてみることによって生産地の考察が可能となるとしている。

武蔵国分寺跡出土鏡については、今のところ生産地は不明であるが、上述の前提に立てば、後出的なものとする事ができよう。

この小型海獣裾帯鏡の年代が明らかとなる資料は少ない。1つは石川県寺家遺跡出土の1面で、奈良時代前半の竪穴住居跡より出土している(古代を考える会1981)。もう1例は、平城京九条大路北側溝出土の1面で、平城Ⅲ期(750年前後)の土器と共伴している。又、大福遺跡においては、奈良時代の土層中より出土している。いずれも、この鏡の所属する実年代の一端を示しているものといえよう。

漢式鏡のほとんどが古墳副葬品で、死者とのつながりにおいて意識されていたのに対し、唐式鏡は墳墓への副葬は少なく、神として永久にまつられる性格があらわれ、更に発展して仏教儀礼の中にまでとりいれられてきた。しかし、なかには性格の不明確なものも多く、住居跡出土鏡や窯址出土鏡など特殊な性格をもつものがあらわれているという(中野1973)。本跡例を加えた12例18面の出土・伝世地別内訳は、古墳出土1例1面、神社出土・伝世3例8面、祭祀遺跡出土1例2面、寺院跡出土2例2面、山岳信仰地出土1例1面、窯跡出土1例1面、京跡出土1例1面、その他2例2面となっており、そうしたことが首肯される。

武蔵国分寺跡出土例は、僧寺北方の集落を規制する溝跡に付随するピット群の内の一つのピットの覆土中よりのものである。残念ながら、発掘ミスにより正確な出土状態の記録・観察はなし得なかったが、少なくとも意識的に埋納あるいは、遺棄した形跡は認められなかった。よって、ピット内への土砂の流入と一緒に入り、埋没、固定したものと考えられる。

そして、埋没の時期を明確にすることはできないが、ピット群、溝跡、住居、建物を一体のものとしてとらえ、平安時代後期、10世紀後半から11世紀初頭頃と想定されるので、ほぼこの時期とすることができよう。勿論、これ以前に土中していたものが、ピットの開口に伴って二次的に流入・埋没した可能性もあるが指摘にとどめたい。

上述した本鏡の持つ年代、意義よりすれば、本出土鏡は、奈良時代に武蔵国分寺の宗教行事に伴ってもたらされ、しかる後に、本調査区へ埋没するに至ったものとの推測ができる。勿論

その直接的証左は無く、埋没に至る過程とあわせ、今後究明していかなければならない。

最後に、本鏡に関して、早川泉氏（当時本会調査員、東京都教育庁）を通じて、金子裕之氏（奈良国立文化財研究所）より、参考文献、同范鏡につきご教示賜わった。千葉県松の木台2号墳鏡他については、五代吉彦氏・原田昌幸氏（房総風土記の丘）にお世話になった。奈良県大福遺跡出土鏡については、松田真一氏（楡原考古学研究所）より資料提供を受けた。又、唐式鏡ならびに本同范鏡に関しては中野政樹氏の論考に負うところが大きかった。以上、記して深謝申し上げる次第である。

（福田信夫）

註 (1) 原部・福田1979・1981、原部1980、1981 a・b、1982、1983、神奈川考古同人会1983

(2) 高橋一夫、宮 昌之1983

(3) S D57清跡以北の遺跡群（第3次、第107次、第201次調査を含めて、住居跡17軒、竪立建物跡2棟）について、同様に住居跡では北壁、建物跡では東西方向の僧寺中軸線からの方位を調べると、大きく、5つに分けることができる。1はS D57清跡以南に同じく70°~80°西偏するもので、S I 39・40住居跡（第3次調査区）、S I 228住居跡（第107次調査区）が追加される。この中で、特に集中する傾向はない。2は、83°~87°と85°前後西偏するもので、本調査地区のS I 195住居跡の他に、S I 36・38住居跡（第3次調査区）、S I 326・327住居跡（第201次調査区）、S B 78竪立建物跡（第201次調査区）、S B 80竪立建物跡（旧S A 5、第51・201次調査区）などが該当する。3は、ほぼ直交するもの（中軸線に合致するもの）で、S I 34・35・37住居跡（第3次調査区）、S I 230住居跡（第107次調査区）、S I 325住居跡（第201次調査区）などでよく集中する。4は、94°~103°西偏し、1・2とは逆の傾きのもので、ばらつきある。S I 229・232住居跡（第107次調査区）、S I 328住居跡（第201次調査区）の3軒である。5は、S I 231住居跡（第107次調査区）の1軒のみで131.5°西偏しており、中軸線に対して、45°近く傾き、何れを北壁と呼んでよいものか判らないもので、カマドは住居内の北西壁の中央部に1ヶ所と、南東壁と南西壁のコーナー部分に1ヶ所ある。以上の通り、S D57清跡以北地域では、以南の遺構と同様の傾きを有するものは、3軒の住居跡のみで、以南とは対照的である。

こうした傾向が寺地内外に広がる住居跡群に敷衍するものか否か、あるいは僧尼寺主要建造物・区画との関連、年代的変遷等については、早急に究明するべく課題として取り組んでいきたい。

(4) 中野政樹氏の見解に従う（中野1973）。即ち、同范鏡の呼称は、同一銚型から何面かの鏡を繰返し銚造した場合に最も適切な用語であるが、実際と同じ鏡背文様をもつ鏡を集めて分析すると、同一銚型から銚造されたと考えられない場合が多く、奈良時代の唐式鏡には同種類鏡と呼んでも、純粋に同范鏡といえるものはないと考えられる。この問題を意識して、同型鏡と呼んだり、同文様鏡と呼ぶ場合があるが、何れにおいても、不都合な場合があり、的確な名称がみあたらないことから、便宜的に従来からの同范鏡という呼称を広義にとり、これら同型の鏡すべてを含めた意味で用いる。

Ⅵ 結語にかえて

武蔵国分寺は、その造営主体である武蔵国のおかれた特殊性により、規模広大なものとして実現し、内容もそれに相応する多彩なものであったと推察されている。その一斑は、遺跡地がそれを証明している。広い地域から耕作の折などに出土する遺瓦類の多量であり、かつその文様・文字の多様なことが、江戸時代から好事家をこの地に引き寄せる基になっていた。明治以降この遺址を対象とした研究が徐々に進んできたが、戦後、市街化の波がこの地に及んできたことにより、遺址の保護のために一部を発掘調査し、性格を究明する方法をとらざるを得なくなり、それまでの短期間の調査の累積に代えて、常設の調査団をおくことにした(昭49.11)。

調査団の責務は、すでに概略知ることのできた伽藍中根部だけでなく、その周辺を含めた広域を対象とすることにした。そのため農地林地の宅地への転用だけでなく、既設の建物の増改築から道路筋の地下施設敷設工事などの折にも調査を重ねなければならなかった。本書に示す調査もその一つであることはいうまでもない。この調査の内容については、対象とした各時代毎に調査の成果及び問題点を述べ、それぞれ「小結」を付しているのだから、それによって戴きた。本項では調査に当たって知り得たいいくつかの点について略記しておきたい。

先ず本書に述べるように、調査地区は伽藍中根部に限る北方の溝のすぐ北側で付近からは既に縄文土器も出土しているのだから、多少の予想はあったが、発掘を進めるうちに、縄文早中期の資料が豊富に出土し、住居跡、配石跡、集石などの様相を知ることができたばかりでなく、さらに、その下層に三層に及ぶ先土器層を認め、これを調査し得たことは望外の喜びである。この台上は、武蔵野段丘の南端に当り、「国分寺崖線」となって一段下に立川段丘があり(この立川段丘は現府中市域にまで延び、南に現多摩川が流れる)、台下に野川の小流が現存する。なお、奈良平安時代の国分寺は主要伽藍をこの台下の地におき、一部台上をとりこんで中心地城をつくっており、その北限が台上の東西に走る溝である。崖線の下部にはしばしば湧水があり、今でも国分寺境内の池、弁天池などの湧水があるが、先土器人・縄文人而も早期の石器時代人がこの地に生活したことは地勢から見て肯げるところである。それにしても、奈良平安の遺構・遺物を主な目標として準備したために、その後の調整には思わぬ時間を要することになった。

その経緯も本文中にしるしてあるが、まず竹中工務店より申し入れがあり、市教委はこれにより調査団に交渉をゆだね、試掘が行われた。その結果、予想を超える複合した遺跡であるこ

Ⅷ 結論にかえて

とがわかり、本調査の実施計画について慎重に検討し要綱をまとめた。これについて調査会と竹中側の協議を重ねられたがまとまらず、竹中側の再検討要請を受けて調査会側は再考の結果を返答した。その後、半年受益者側は竹中から国際電電（KDD）に移り、KDD、調査団に市教委を加えて三者の協議となり成案を得て調査が開始された。しかし、その後、平安時代の遺構も予想より多く、ために現地調査の期間を延し、重ねて縄文の遺構遺物の量の増加のため期間の再延長と発掘区域の増加などを重ねて、本調査開始の51年7月から丸3年を経た54年7月に及び野外を了え、室内作業に移りこの程ようやく報告書刊行に漕ぎつけたのである。

近年、大規模調査の事例は全国的に増加の一途をたどっているが、緊急調査例では国分寺市として、これが最初のものであり、市教委、受益者、調査会三者共に貴重な経験となった。国分寺址研究上、寺中樞部だけでなくその周辺について綿密な調査を行うことは必須のことであり、その性格を究明した上、 possible の限り保護の措置をとるべきであるが、実体は、礎石の存在、土壇の残存する最小限度に限られ保存されるのにとどまる。例えば、僧尼両寺址が近接して存在するのに拘らず、その両址の中間に道路を開き分断したもの、両址の中間に役所など公共施設を広くとり建設を強行したものなど、その地方の特殊な事情があるのであろうが、大局的にみて文化財保護の思想に反するものが見受けられる。

武蔵国分寺址をかかえる国分寺市としては、今回の措置は、一応効果のあったものといえよう。これには竹中、KDDの好意のある協力があつたことに感謝するものであるが、現在各地に起っている埋蔵文化財と開発問題について、多くの難問を抱えているわれわれにとって、ひとつの灯であつたと思っている。しかし、この事例でも、野外作業と室内整理に多くの時間をかけなければならなかつた事情の主な理由は、予想を上回る豊富な内容を包含した遺跡であるのに対し、調査員の数の不足、資料整理の場（施設・設備）ならびに迅速な情報処理の諸機能の整備などが十分でない、ことなどを挙げることができる。

以上述べた問題はあつるにせよ、本遺跡の調査について、武蔵国分寺の設置されたこの地の石器時代からの人の歴史の一端を知り得たことは得難い収穫であり、今後の調査に大きく貢献するものであることをよろこぶものである。

（滝口 宏）

参 考 文 献

- ア 安孫子昭二・秋山道生・中西 充, 1980, 「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」『神奈川考古』第10号「シンボジウム 縄文時代・中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器との関係について」所収
阿部祥人・小栗一夫・小島正裕, 1984, 「縄文遺跡における「観」の考古学的位置づけ」『古代文化』36—12
- イ 石川県立埋蔵文化財センター, 1981, 『専家 1980年度調査概報』
石田茂作・三宅敏之, 1959, 「丹波開周山鹿寺」『考古学雑誌』45—2
伊藤富治夫ほか, 1976, 『前原遺跡』前原遺跡調査会
今村啓爾ほか, 1973, 『舞ヶ丘』
今村啓爾, 1983, 「陥穴(おとし穴)」『縄文文化の研究』2(生業)
- ウ 上田典男, 1983, 「縄文時代焼土集積遺構の形態的把握」『物質文化』41
- オ 岡崎謙治, 1960, 「神門神社遺とその間文様について」『大和文化研究』5—9
岡本孝之, 1972, 「稲荷台文化の展開①・②」『古代文化』24—1・2
小栗一夫, 1979, 「縄文時代における焼石遺構」小田原考古学研究会会報第8号
小栗一夫, 1983, 「縄文時代早期後半における石器群の様相—南関東地方を中心に—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ』
小田静夫・C・T・キリー, 1973, 『武蔵野公園遺跡Ⅰ』野川遺跡調査会
小田静夫ほか, 1981, 『はけうえ』国際基督教大学考古学研究所センター
小田静夫, 1983, 「スタンプ形石器」『縄文文化の研究(道具と技術)』
小野塚恵子, 1982, 「第4類石器」『東京都立川市大和田遺跡』立川市大和田遺跡調査会
- カ 榎原考古学研究所, 1975, 『大福遺跡』
金井安子, 1984, 「縄文時代の周濠を有する住居址について」『青山考古通信第4号』青山考古学会
神奈川考古同人会, 1983, 「シンボジウム収録. シンボジウム 奈良・平安時代土器の諸問題」『神奈川考古』第15号
金子義樹, 1984, 「縄文時代における壙廬についての一試論—事例分析を中心に—」『神奈川考古』第19号
河内公夫ほか, 1983, 『調布市深大寺池ノ上遺跡』調布市深大寺池ノ上遺跡調査会
河内公夫ほか, 1983, 『東京天文台構内遺跡』
- コ 恋ヶ窪遺跡調査団, 1979・80・82, 『恋ヶ窪遺跡調査報告』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
恋ヶ窪遺跡調査団, 1984, 『花沢東遺跡 都営国分寺南町三丁目団地建設に伴う調査』
甲野 勇, 1960, 『武蔵野を掘る』

参考文献

- 小島正裕・田中純男・斎藤 進, 1983, 「No.746遺跡」『多摩ニュータウン遺跡一昭和57年度(第5分冊)』
- 小島正裕・田中純男・斎藤 進・岩橋陽一, 1984, 「No.40遺跡」『多摩ニュータウン遺跡一昭和58年度(第7分冊)』(財)東京都埋蔵文化財センター
- 古代を考える会, 1981, 「古代を考える29 羽咋市寺家遺跡の検討」
- 小林達雄, 1966, 「縄文早期前半に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』多摩ニュータウン遺跡調査会
- サ 斎藤孝正, 1981, 「尾北高における灰釉陶器の変遷」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅲ 小牧市篠岡古窯群』愛知県建設部・小牧市教育委員会
- 斎藤孝正, 1982, 「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル No.211』
- シ 重住 豊ほか, 1977, 「高井戸東遺跡」高井戸東遺跡調査会
- 首藤保之助, 1923, 「凡字形石器について」『武相研究第四輯』
- 徳原 正, 1977, 「金瓶遺跡発掘調査概報」富里村史編さん委員会
- 芝山はにわ博物館, 1975, 「遺跡 日吉倉一葉泉印磨郡富里村日吉倉遺跡調査報告書」
- 十栗駿武ほか, 1971, 「大瀬第2遺跡」『港北ニュータウン地域内文化財調査報告(Ⅰ)』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 市立市川考古博物館, 1982, 「シンボジウム類之内式土器資料集」, 『シンボジウム類之内式土器の記録』
- ス 杉山博久ほか, 1981, 「東田原八幡遺跡」
- 鈴木道之助, 1977, 「縄文時代」『京葉Ⅱ 東寺山石神遺跡』
- 鈴木道之助, 1979, 「押型文土器と燃糸文土器」『考古学ジャーナル』No.170
- 鈴木道之助, 1981, 「図録石器の基礎知識Ⅲ 縄文」
- 鈴木保彦ほか, 1977, 「下北原遺跡」神奈川県教育委員会
- セ 芹沢長介, 1957, 「神奈川県大丸遺跡の研究」『教台史学』7号
- タ 高橋一夫・宮 昌之, 1983, 「北武蔵の窯址」『シンボジウム 奈良・平安時代土器の諸問題』『神奈川考古』第14号
- 谷口康治, 1981, 「Ⅱ 3・4丘段上にのこされた縄文時代前期後半の遺跡」『藤の台遺跡Ⅳ』藤の台遺跡調査会
- チ 千葉県立房総風土記の丘, 1980, 「企画展 房総の古鏡一展示図録No.8-1」
- ト 戸井晴夫, 1982, 「第6章 挟入磨石について」『神谷原Ⅱ』八王子市市野田遺跡調査会
- ナ 中野政樹, 1973, 「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同類鏡の分布とその製造技術」『東京国立博物館紀要 第8号 昭和47年度』
- 植崎彰一・斎藤孝正, 1981, 「猿投窯編年の再検討について」『シンボジウム「平安時代の土器・陶器」一各地域の諸様相と今後の課題一発表要旨』愛知県陶器資料館
- 植崎彰一, 1983, 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)(尾北・三河地区)』愛知県教育委員会

参考文献

- 二 西脇俊郎, 1977, 「IV 出土遺物」『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅲ』武蔵国分寺遺跡調査会, 国分寺市教育委員会
- 西脇俊郎, 1979, 「Ⅲ 3. 厨子」『武蔵国分寺遺跡調査会年報Ⅰ(1974)』武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 西脇俊郎・山口辰一, 1980, 「武蔵国府, 国分寺跡出土土器の変遷一試案」『文化財の保護第12号, 特集 武蔵国府と国分寺』
- 西脇俊郎, 1981, 「VI 小結, 出土土器について」『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅴ』武蔵国分寺遺跡調査会, 国分寺市教育委員会
- ハ 羽咋市教育委員会, 1984, 『寺家』
- 服部敬史・福田健司, 1979, 「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号
- 服部敬史, 1980, 『八王子市南部地区の遺跡—東京都八王子市宇津貫町および周辺所在の遺跡分布調査報告』八王子市南部地区遺跡調査会
- 服部敬史, 1981a, 『南多摩窯址群—御殿山地区62号窯址発掘調査報告書』八王子市継水遺跡調査会
- 服部敬史, 1981b, 「関東地方の窯址出土須恵器編年と年代」『シンポジウム「歴史時代の土器・陶器」発表要旨』愛知県陶磁資料館
- 服部敬史・福田健司, 1981, 「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号
- 服部敬史, 1982, 「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』第1号
- 服部敬史, 1983, 「南武蔵の窯址」『シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題』『神奈川考古』第14号
- 服部敬史, 1985, 「関東地方における九・十世紀の須恵器生産」『論叢 日本歴史』
- 原田昌幸, 1983, 「燃糸文期の竪穴住居跡—資料の集成とその解題的研究—」『土曜考古』第7号
- 原田昌幸, 1984, 「続・燃糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』第8号
- フ 福田信夫, 1982, 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅵ』武蔵国分寺遺跡調査会, 国分寺市教育委員会
- 福田信夫, 1984, 「武蔵国分寺跡出土の土師質土器について」『東京考古』2
- マ 前川 要, 1984, 「惣持窯における灰胎陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心として—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』
- 松村恵司, 1984, 「平城宮・京の出土遺物—近年発見の平城京出土遺物を中心として—」『仏教芸術』第154号
- ミ 三友国五郎・安岡路洋, 1966, 『稻荷原』大宮市教育委員会
- 宮崎朝雄ほか, 1980, 『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告第30集
- 宮崎朝雄, 1981, 「燃糸文系土器群の終末と無文土器群」『土曜考古』第3号
- 宮崎朝雄, 1981, 「燃糸文文化の石器について」『奈良』第19号, 奈良同人会
- ム 村田文夫, 1975, 「柄鉢形住居址考」『古代文化』27—11
- 武蔵国分寺遺跡調査団, 1979, 『武蔵国分寺跡 武蔵国分寺遺跡調査会年報(1974)』
- 武蔵国分寺遺跡調査団, 1980, 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅳ』

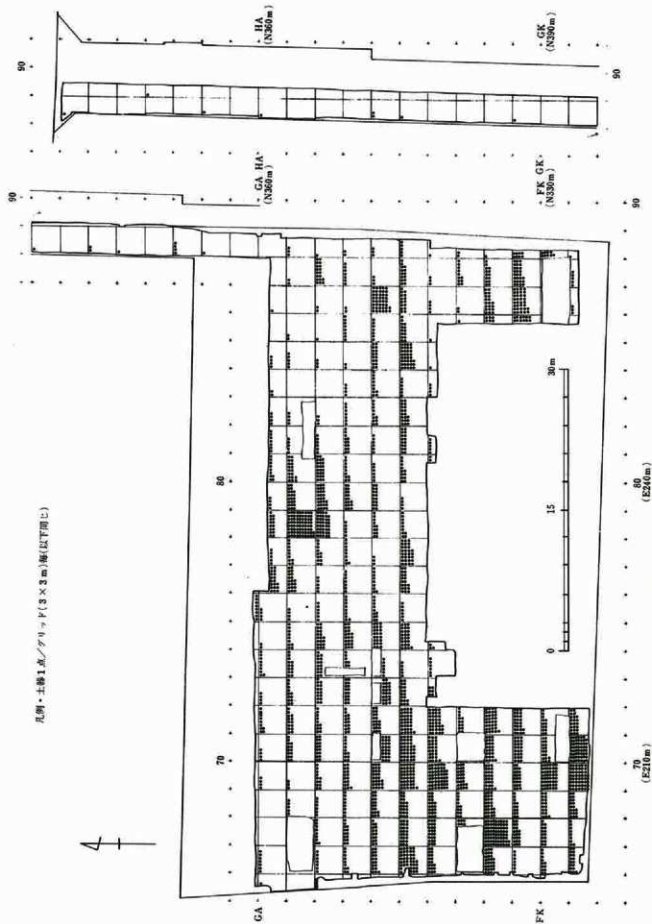
参考文献

- 武蔵国分寺遺跡調査団, 1982, 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅶ』
- ヤ 山口辰一, 1984, 「武蔵国府関連遺跡における土器編年試論」『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ』府中市教育委員会
- 山口辰一, 1985, 「武蔵国府と奈良時代の土器様相」『東京考古』3
- 山崎 丈ほか, 1982, 『下里木邑遺跡』
- 山本暉久, 1976, 「敷石住居出現のもつ意味(上)(下)」『古代文化』28-2・3
- 山本暉久, 1980, 「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考古』9, 神奈川考古同人会
- 山本暉久, 1981, 「縄文時代中期末における配石面の存在について」『小田原考古学研究会会報』第10号
- ヨ 吉田 格, 1967, 「新橋遺跡」『小金井市誌資料編』

圖 面

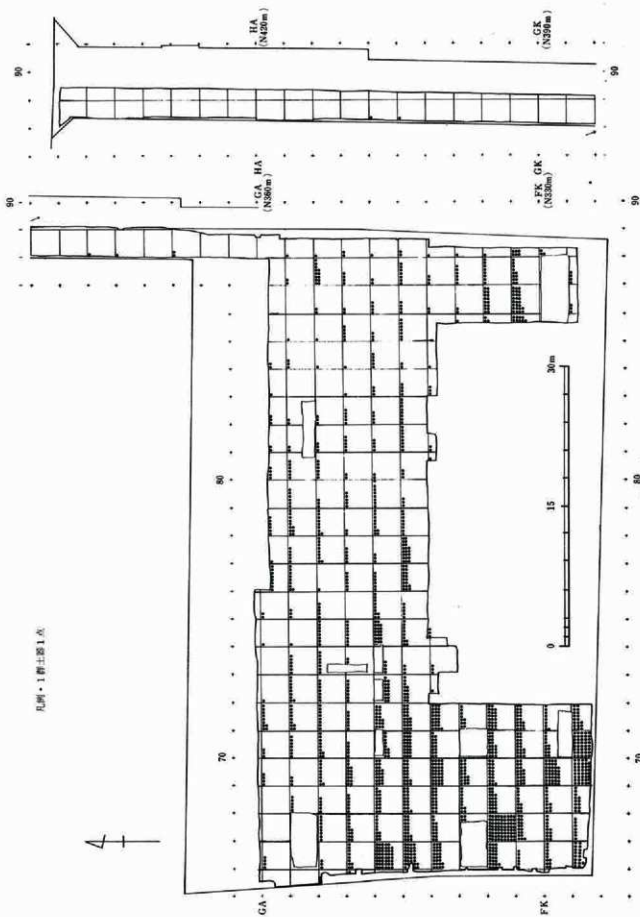
図面1 グリッド別土器出土分布図(1) 1~7群

凡例・土器1点/グリッド(3×3m)毎(以下同じ)



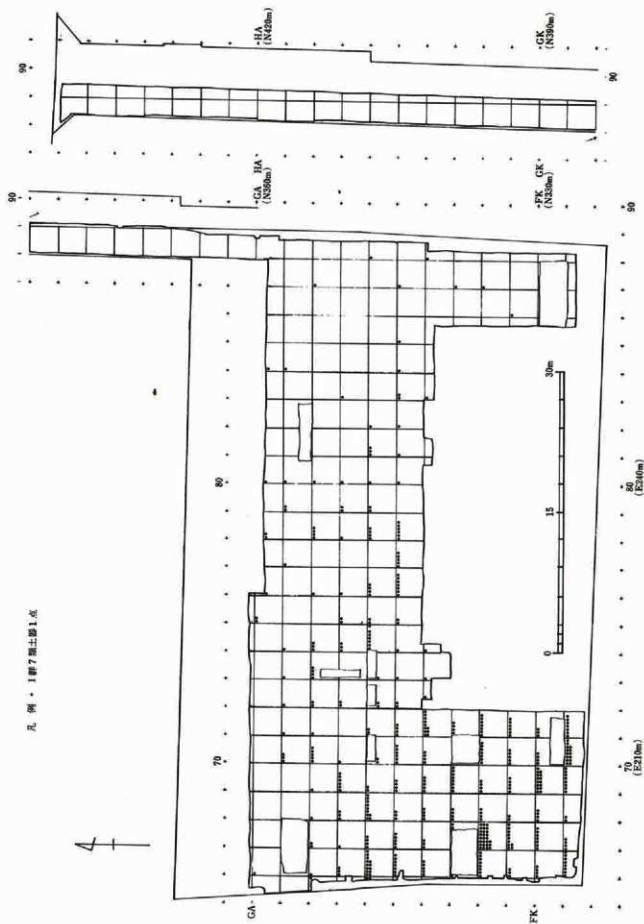
図面2 グリッド別土器出土分布図(2) 1群(早期燕文系)

凡例・1群土器1点



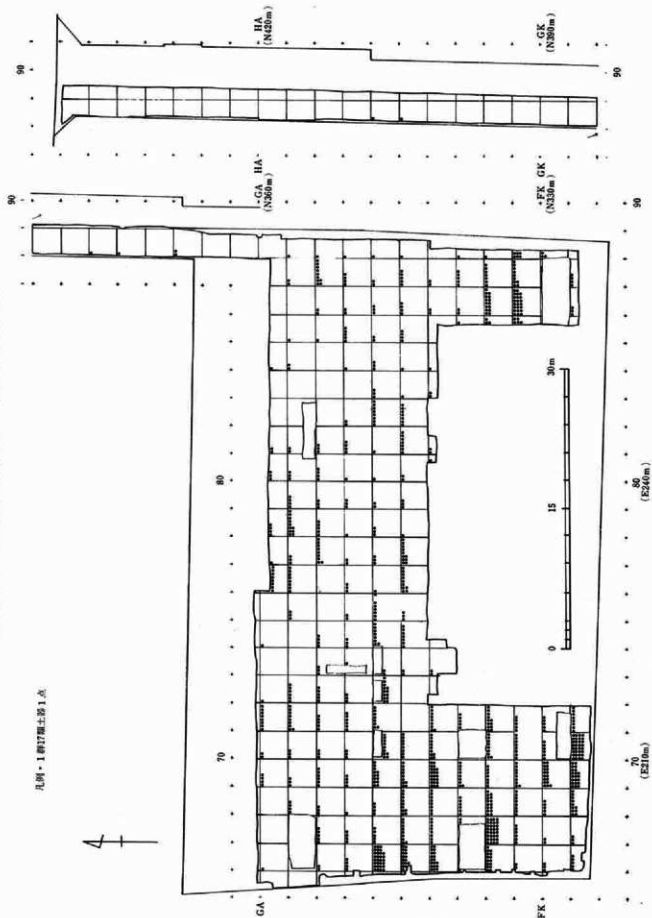
図面3 グリッド別出土品分布図(3) 1群7類(燃糸織文の体底部)

凡例・1群7類出土品1点

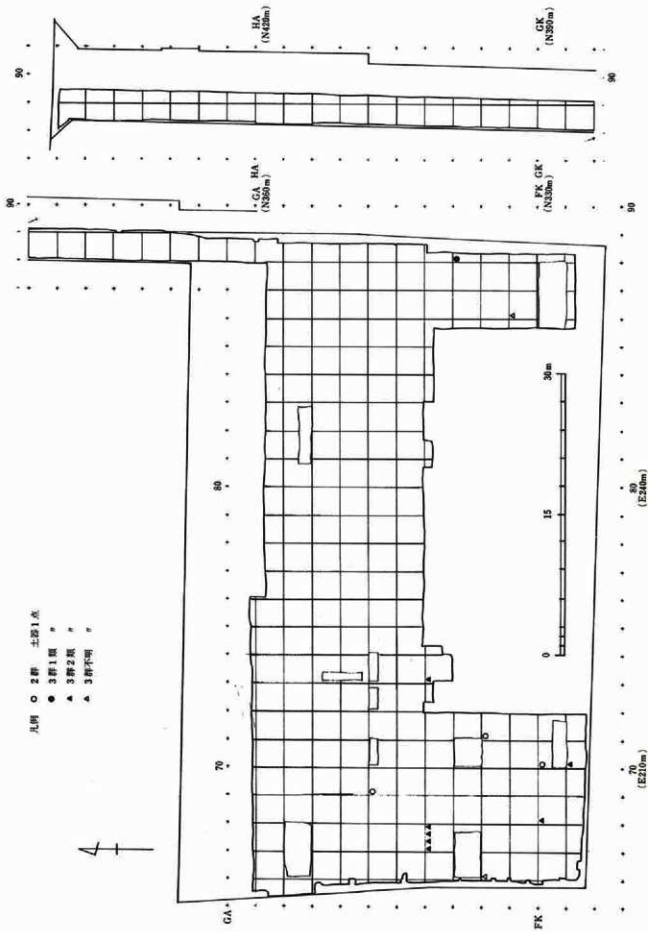


図面 4 グリッド別土器出土分布図(4) 1群17順(無文体底部)

凡例・1群17順土器1点



図面5 グリッド別土層出土分布図(5) 2群(早期押型文系) 3群(早期社線文系)



- 凡例 ○ 2群 土器1点
● 3群1層 "
▲ 3群2層 "
△ 3群不明 "



70

50

90

90

GA

FK

GA HA
(N350m)

FK GK
(N300m)

HA
(N400m)

GK
(N350m)

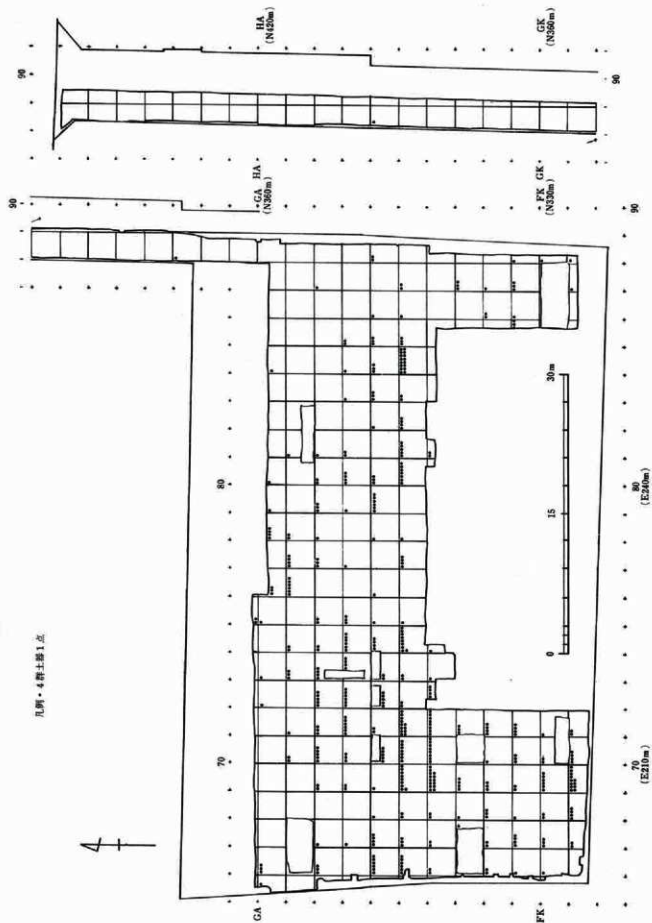
70
(E210m)

50
(E240m)

90

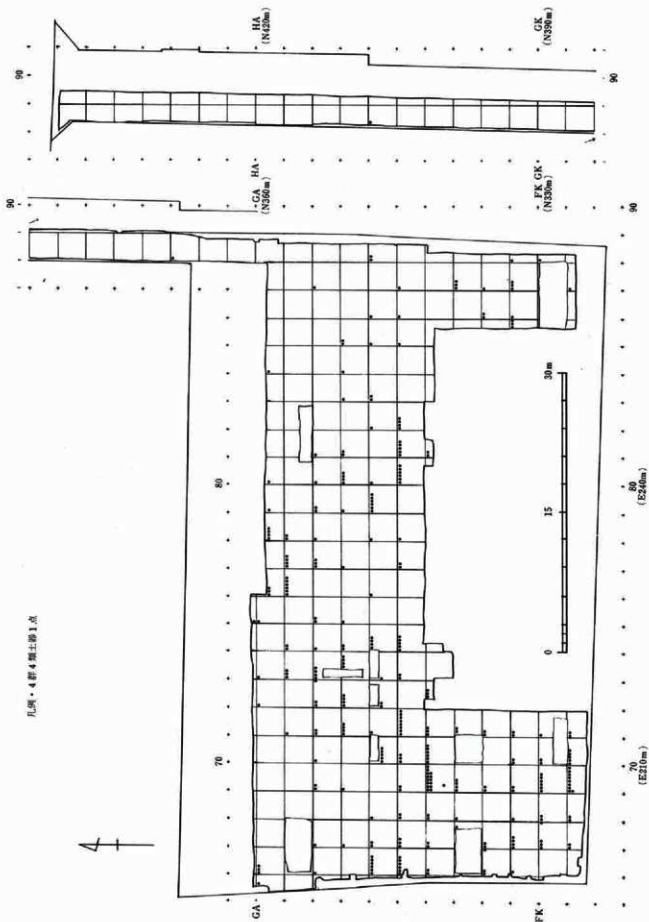
図面 6 グリッド別土器出土分布図(6) 4群(早期系底文系)

凡例・4群土器1点



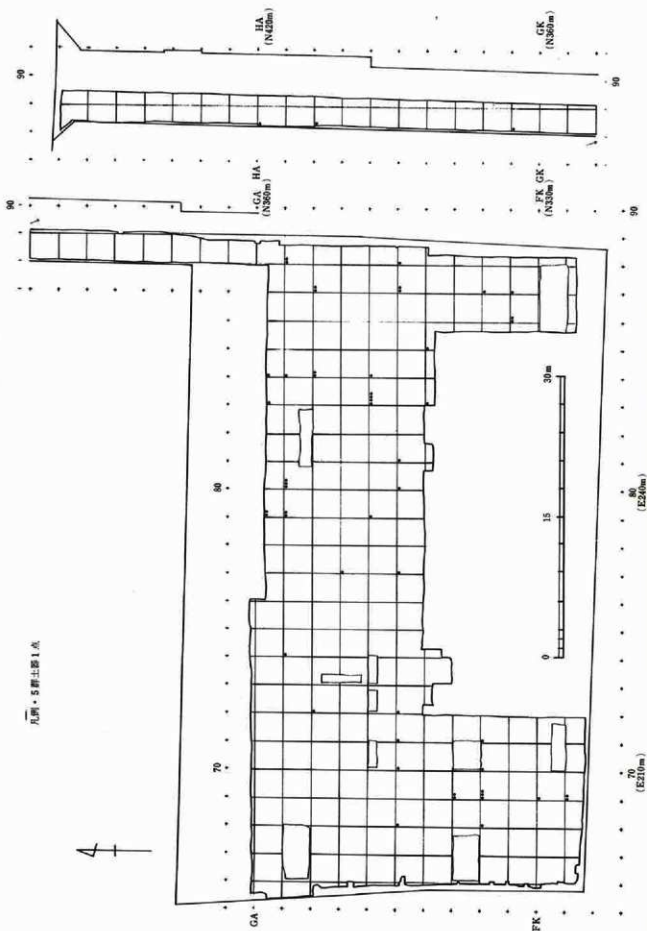
図面 8 グリッド別土器出土分布図(8) 4群4類(無文・捺波)

凡例・4群4類土器1点



図面 8 グリッド別土器出土分布図(9) 5群(中期前半)

凡例・5群土器1点

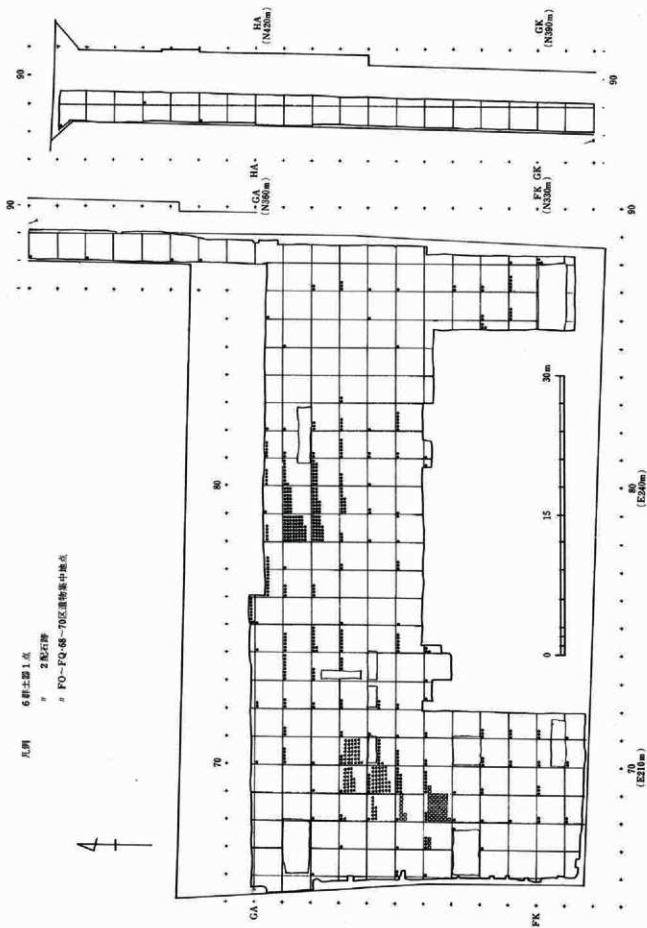


図面10 グリッド別土器出土分布図(10) 6群(中期後半)

凡例 6群土器1点

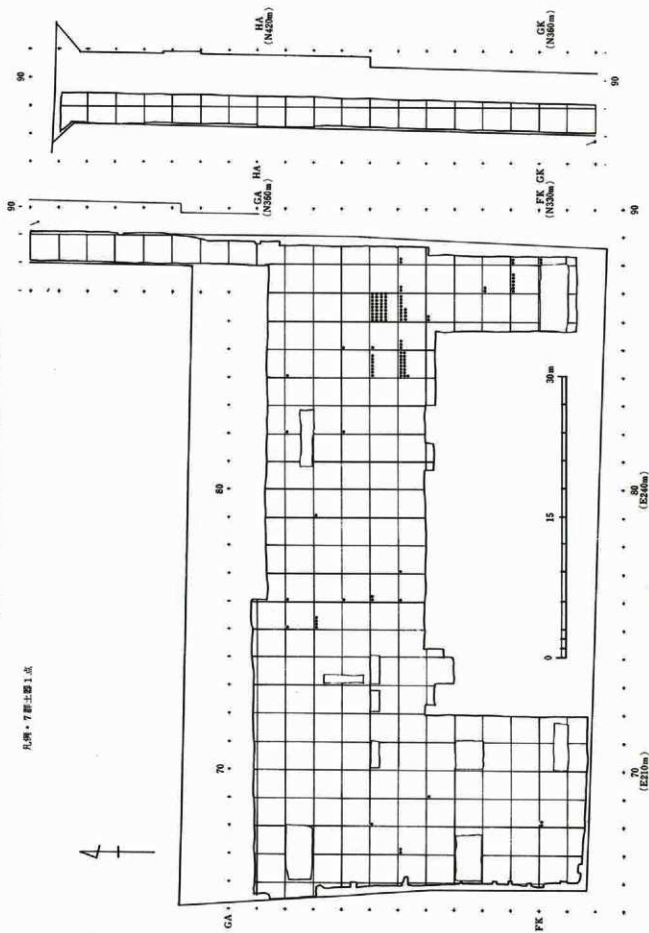
〃 2配石群

〃 FO-FQ-68-70区遺跡集中心点



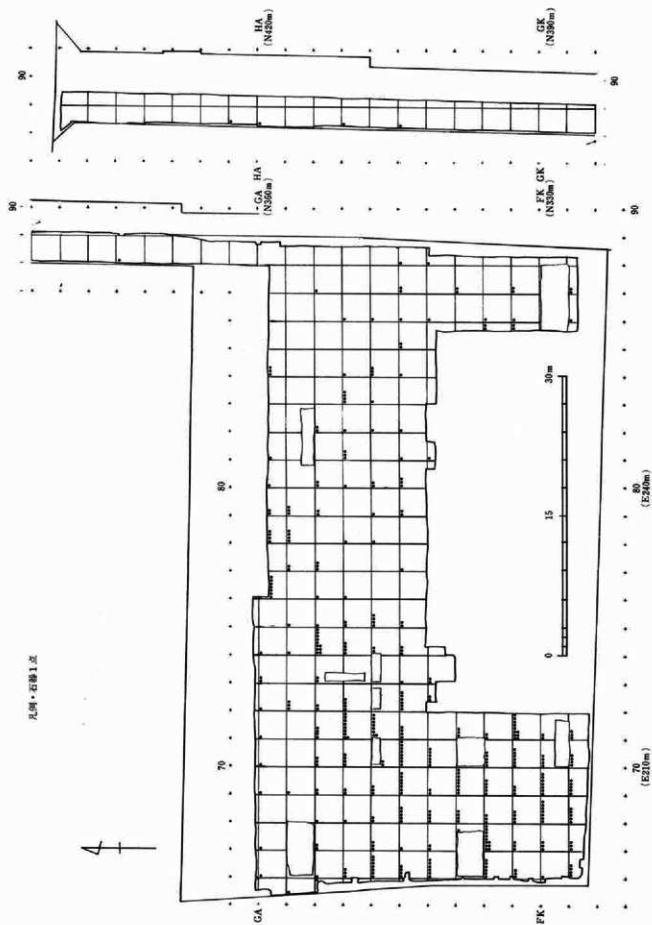
図面11 グリッド別土器出土分布図(11) 7群(後期)

凡例・7群土器1点



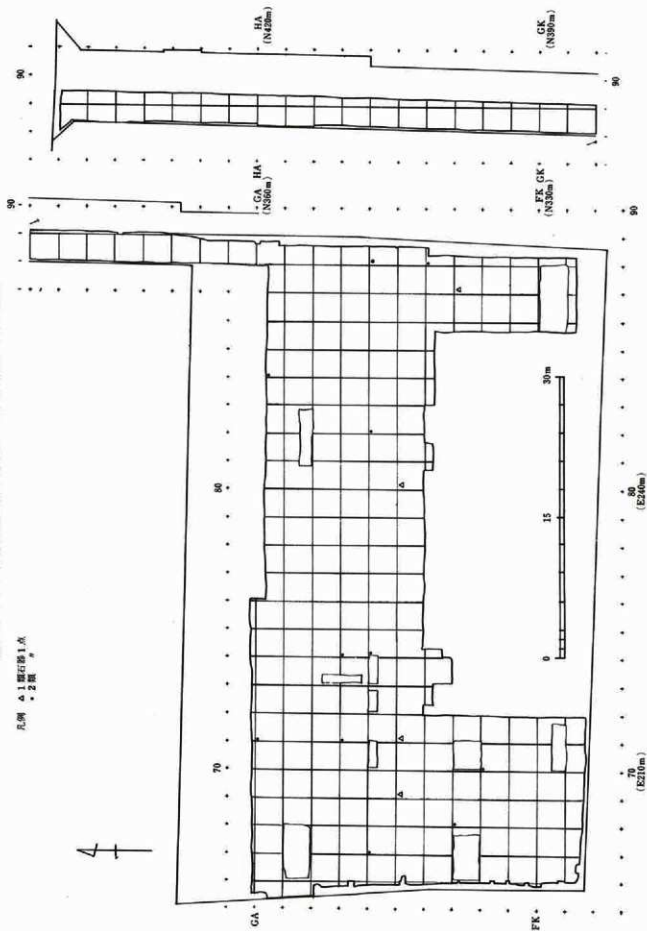
図面12 グリッド別石器出土分布図(1) 1~12線の石器

凡例・石線1点



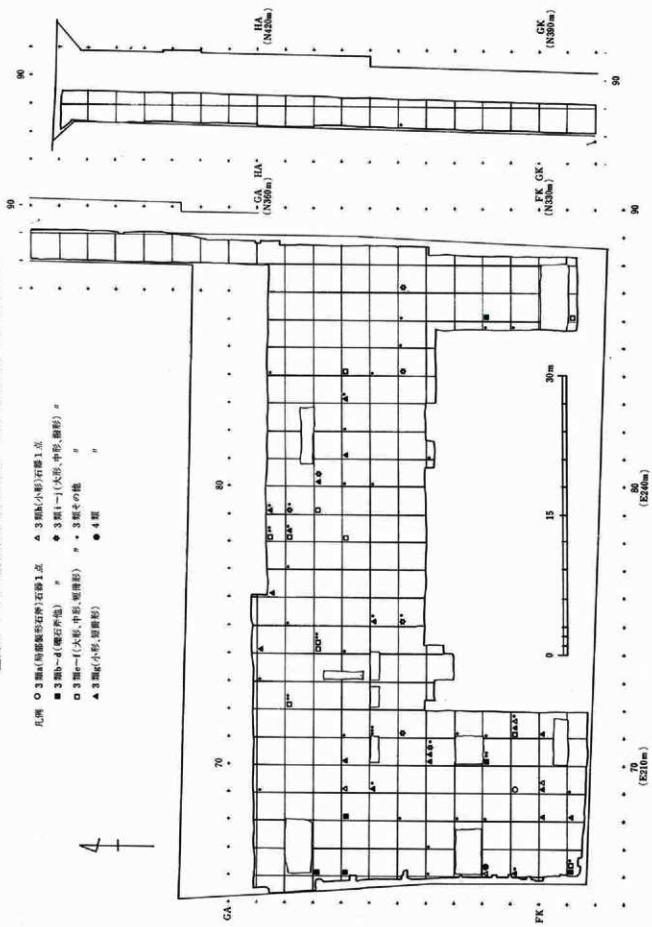
図面13 グリッド別石器出土分布図(2) 1類(尖頭器) 2類(石鏃)

凡例 △ 1類行跡1点
● 2類



図面14 グリッド別石器出土分布図(3) 3類(打製石斧) 4類(磨製石斧)

- 凡例
- 3類(局部磨製石斧)石斧1点
 - 3類(小形)石斧1点
 - 3類(磨石产地)
 - 3類(大形, 中形, 磨製形)
 - △ 3類(大形, 中形, 磨製形)
 - ▲ 3類(小形, 磨製形)
 - 4類



4 +

GA

FK

70

70 (E210m)

80

80 (E240m)

90

90

GA HA (N369m)

HA (N425m)

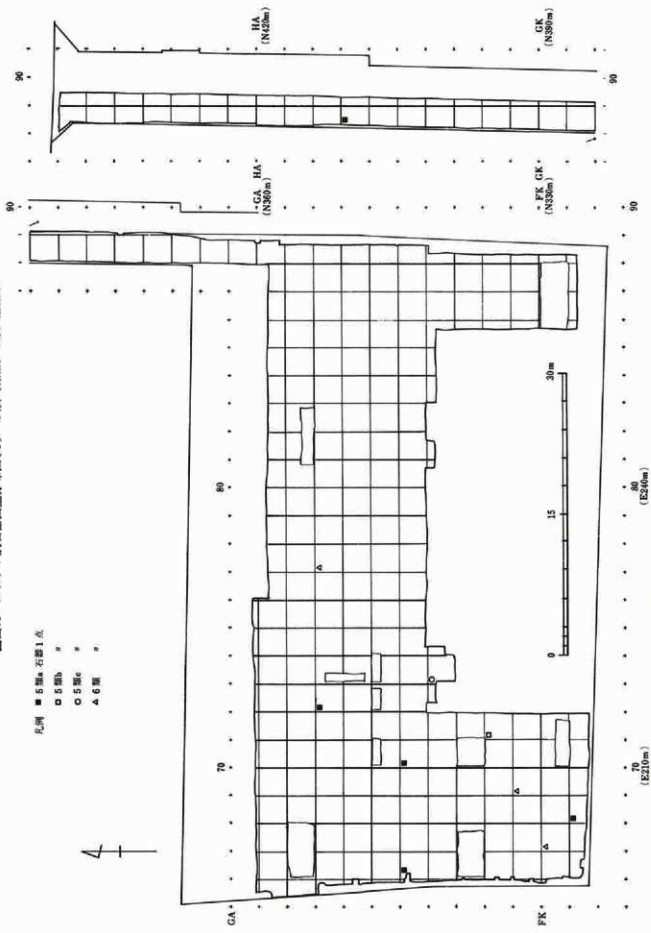
FK GK (N359m)

GK (N390m)

90

90

図面15 グリッド別石器出土分布図(4) 5類(鎌器) 6類(盛器)



図面16 グリッド別石器出土分布図(5) 7類(磨石, 凹石)

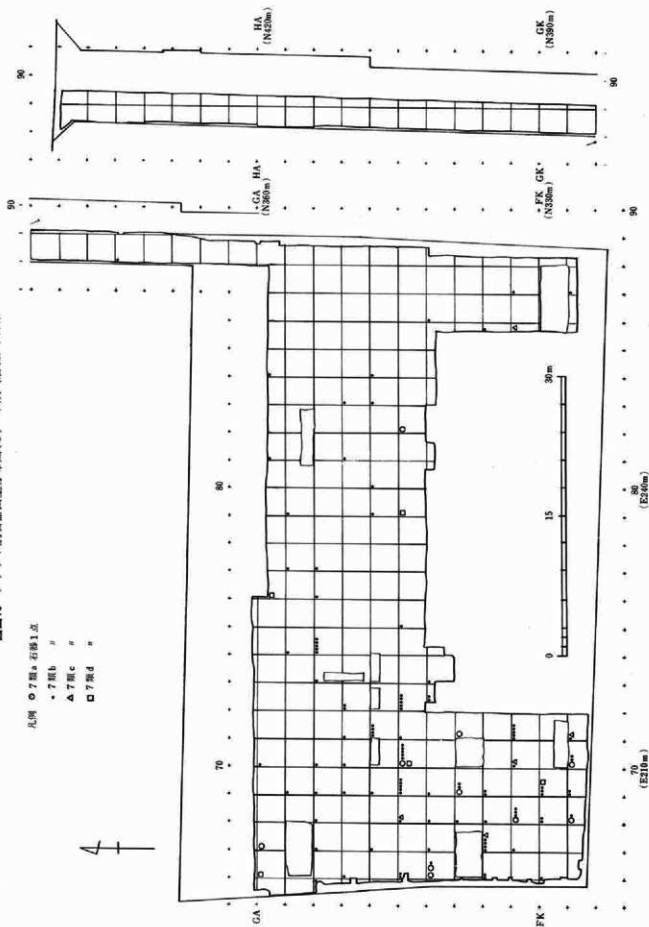
凡例 ○ 7類a 石器1点

● 7類b "

▲ 7類c "

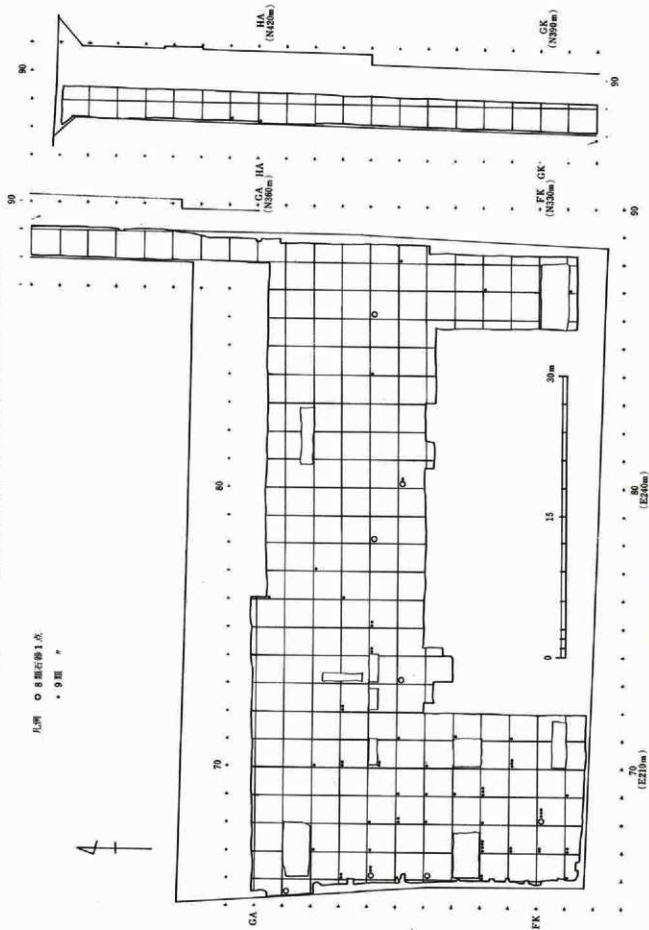
□ 7類d "

4 ↑



図面17 グリッド別石器出土分布図(6) 8類(礫石)9類(スタンプ形石器)

凡例 ○ 8類石器1点
● 9類 "

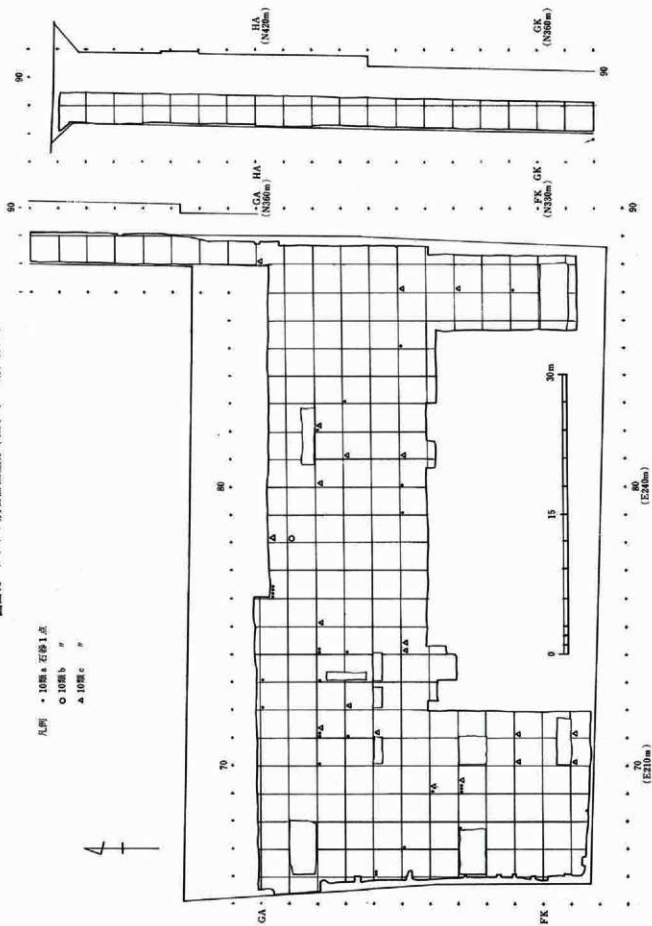


図面18 グリッド別石器出土分布図(7) 10類 (石皿)

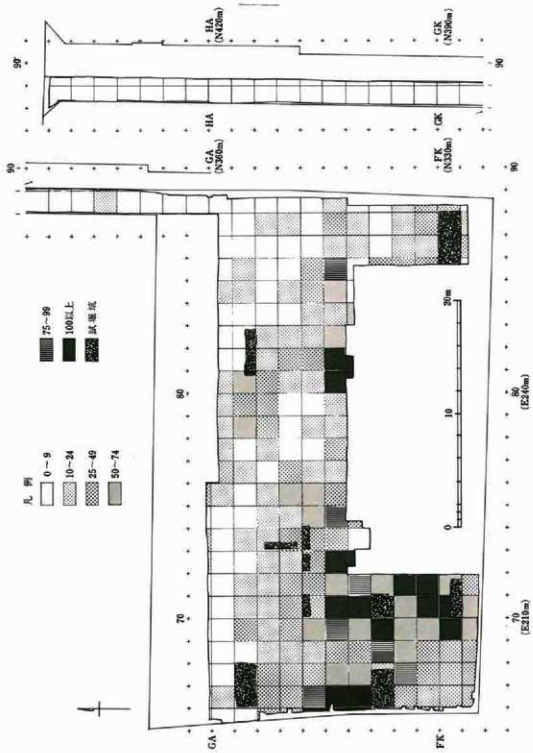
凡例 ・ 10類a 石皿1点

○ 10類b 1点

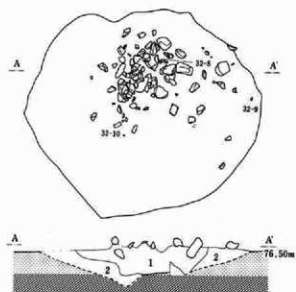
△ 10類c 1点



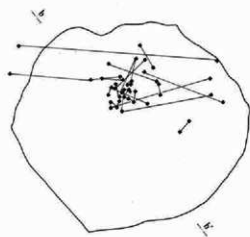
図面19 グリッド別出土分布図



図面22 SS4・5集石実測図

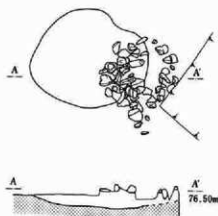


SS4



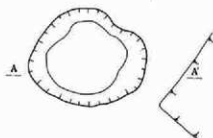
SS4

- 1 褐色土(ロームブロックを含む)
- 2 黄褐色土(黒C層よりわずかに暗い)

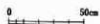
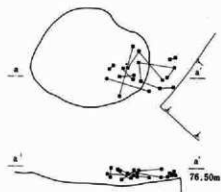


SS5

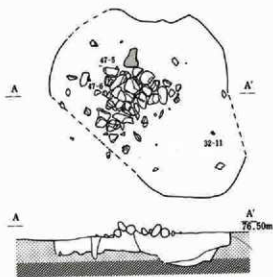
- 1 暗褐色土(黒C層よりやや暗い、ロームスコリア少量含む)



SS5

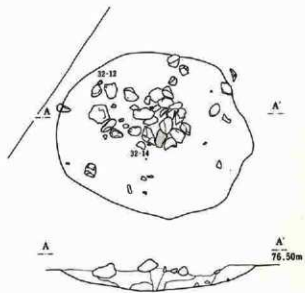
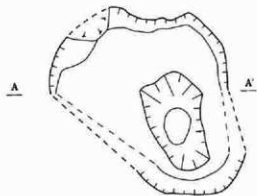
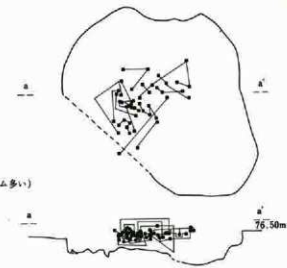


図面23 SS6・7集石実測図

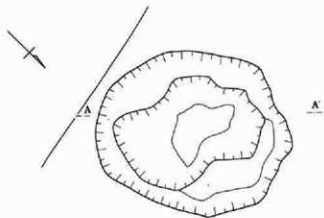
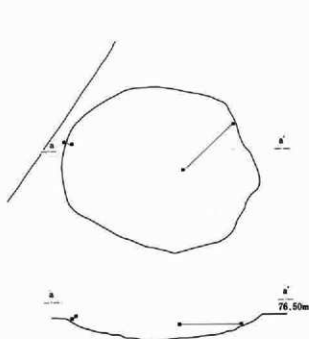


SS6

1. 褐色土
2. 暗褐色土
3. 茶褐色土 (ソフトローム多い)



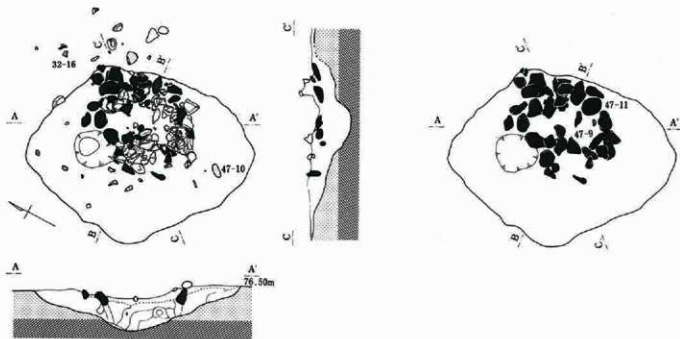
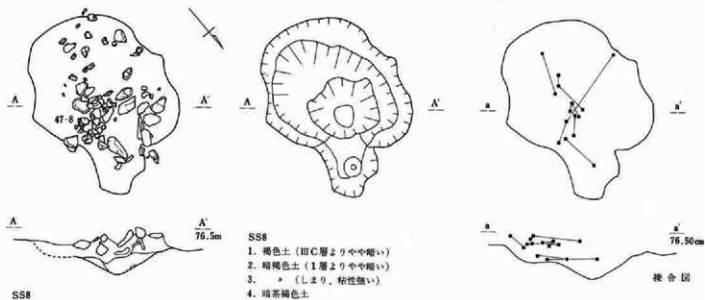
0 50cm



SS7

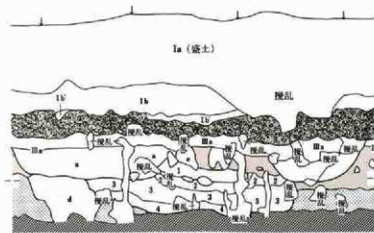
1. 暗茶褐色土 (細かいローム粒を極少量含む)
2. * (III層よりやや暗い)
3. * (II層よりやや明るい)

図面24 SS8・9集石実測図



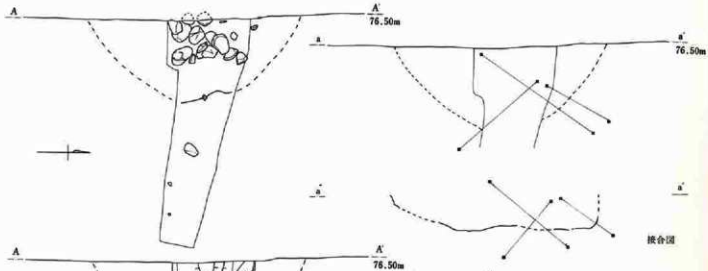
0 50cm

図面25 SS10・11集石実測図

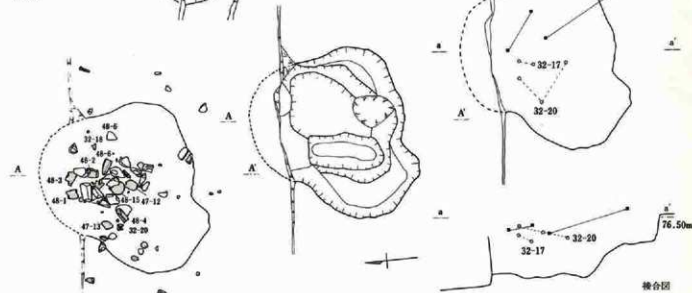


SS10

- 1 黒色土(a層あり黒色味あり、IIb層の境やや明瞭)
- 2 暗茶褐色土(IIc層あり、黒色味あり)
- 3 " (IIc層あり、若干黒色味あり)
- 4 暗茶褐色土
- 1b' 黒褐色土(IIb層+II層)
- a 暗茶褐色土(IIb層を覆り込む落ち込み)
- b " (" " ")
- c " (" " ")
- d 暗褐色土(IIc層を覆り込む落ち込み)
- e 茶褐色土(ローム多く入る、ブロック)



SS10



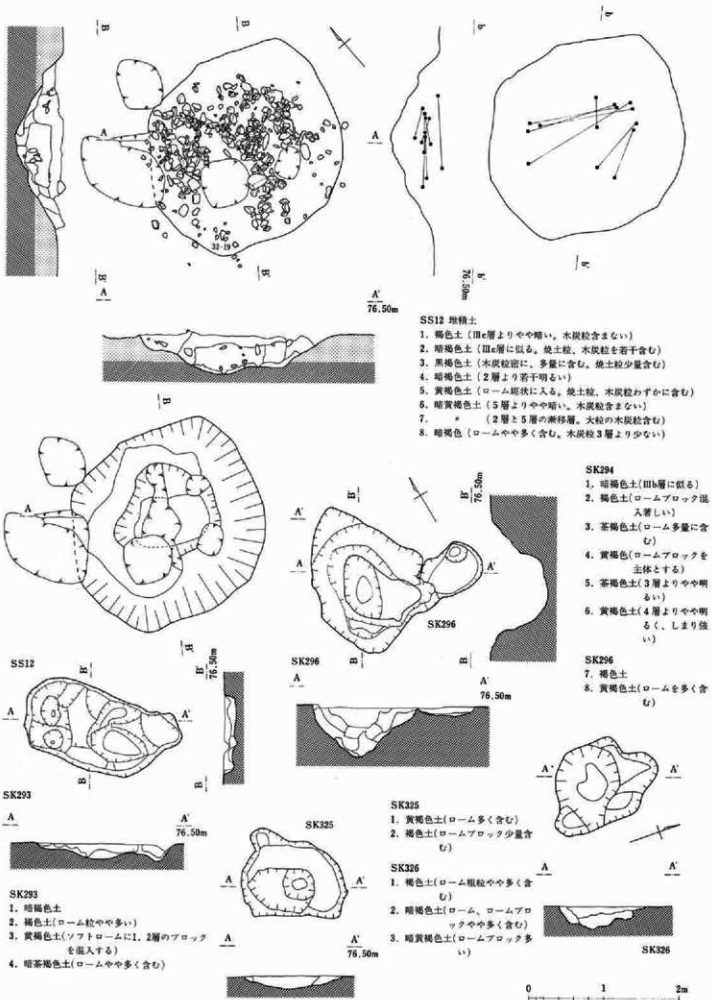
SS11



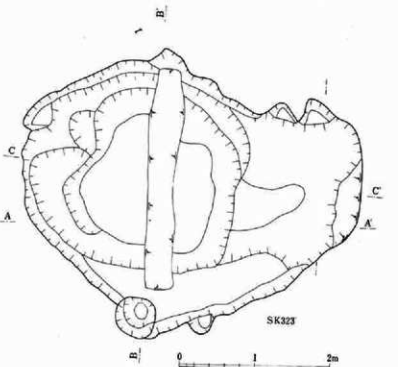
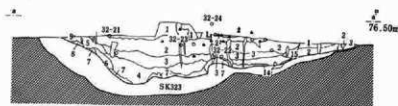
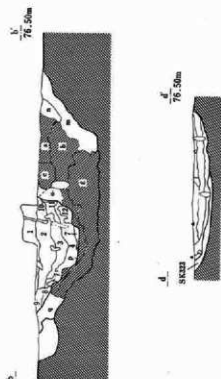
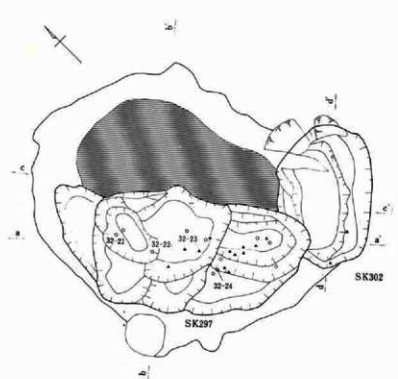
SS11

- 1 暗褐色土(IIb層との分別困難)
- 2 褐色土(ロームを含み、明るい)
- 3 暗茶褐色土(茶褐色土ブロック入る)
- 4 褐色土(ロームやや多く含む)
- 5 暗褐色土(黒色土やや多く含む)
- 6 暗茶褐色土(IIc層より若干暗い)





図面28 SK297・302・323土坑実測図



SK297 堆積土

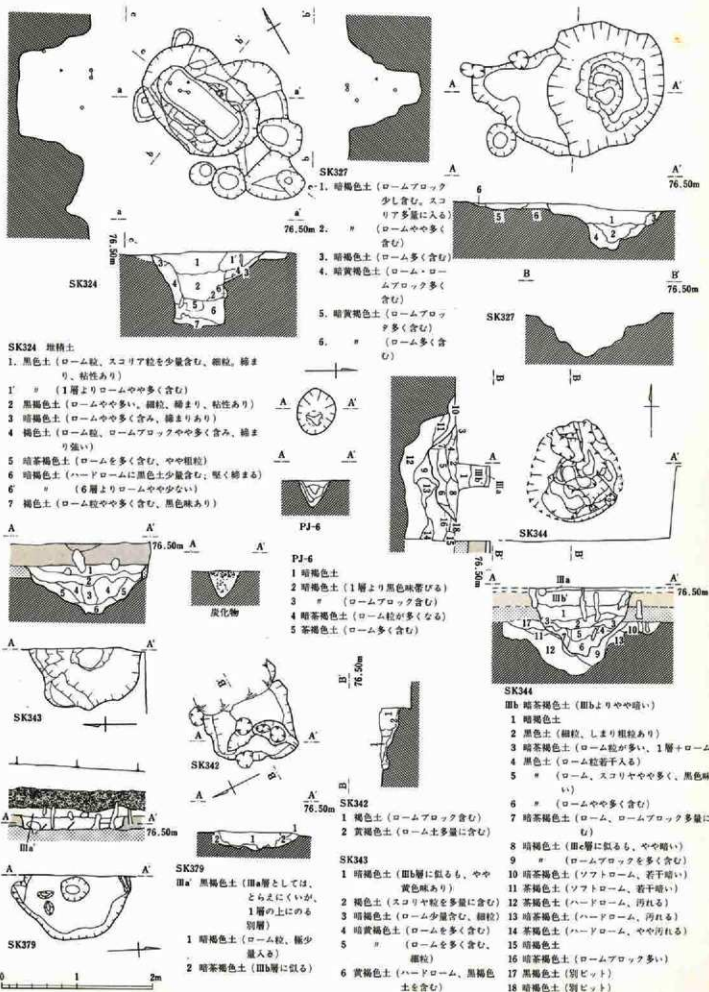
- 1 暗褐色土(細粒)
- 2 黒色土(細粒, 締まり, 粘性あり)
- 3 * (黒色味根く, 締まり粘性2層より強い)
- 4 * (ロームスコリア多含む)
- 5 褐色土(ロームスコリアやや多い)
- 6 暗褐色土(5層よりローム多い)
- 7 黄褐色土(ロームを多量含む, 締まりあり)
- 8 暗黄褐色土(ロームを多く含む)
- 9 褐色土(5層に似るもロームやや多い)
- 10 褐色土(2, 3層よりロームやや多い)
- 11 黒色土(ローム, スコリア少ない)
- 12 黄褐色土(7層よりローム多い, 4, 7層に比べ粘り弱い)
- 13 黒色土(4層に似るも, ロームスコリアやや少ない)
- 14 暗黄褐色土(ロームを多量に含む, 粘り粘性強い)
- 15 褐色土(1, 2層よりロームやや多含む)

SK302 堆積土

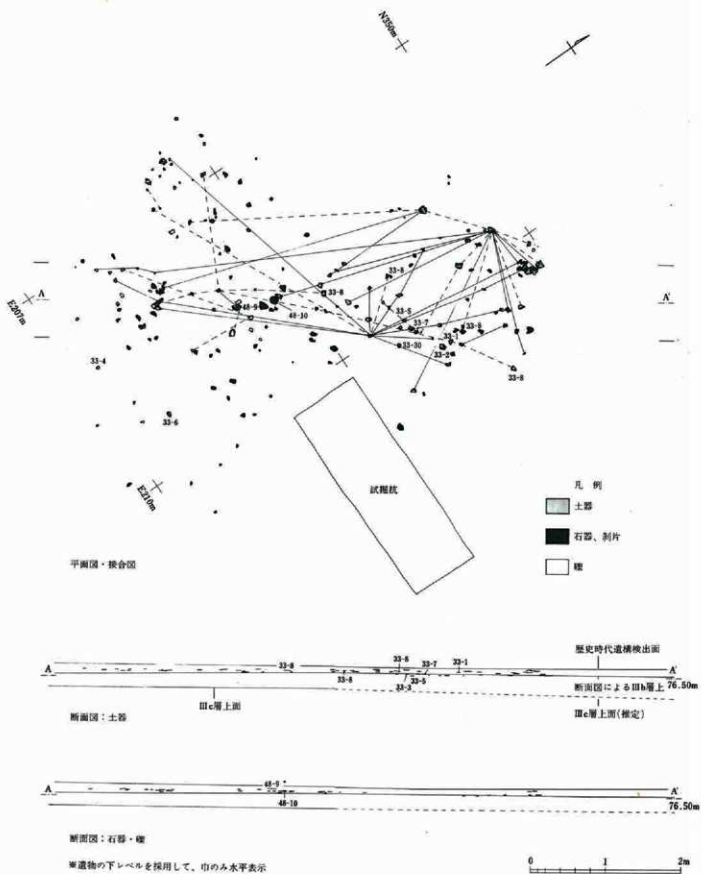
- ① 暗褐色土(スコリア少量含む, SK297-2層よりやや明るい)
- ② 褐色土(1層よりローム, スコリアやや多い)
- ③ 暗黄褐色土(ローム多く入り, 粘りあり)

SK323 堆積土

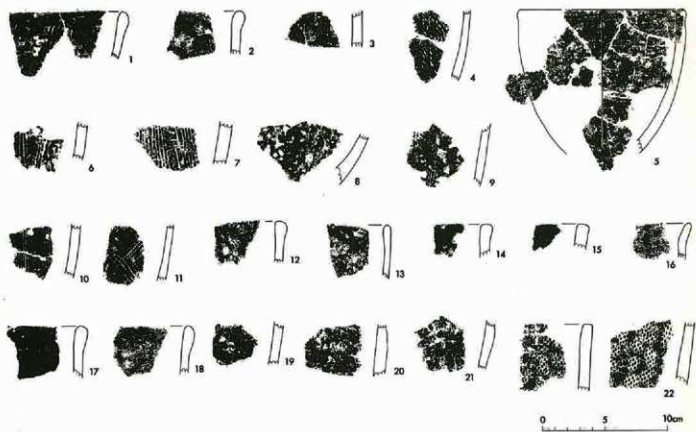
- a 暗黄褐色土(汚れたソフトローム, 粗粒)
- b 黄褐色土(ハードローム, 粗粒)
- c 暗褐色土(ソフトローム, 6層より弱い)
- d 褐色土(ロームやや多含む)
- e 黄褐色土(ソフトローム, a層よりやや明るい)
- f 暗褐色土(6層よりやや弱い)
- g 暗黄褐色土(汚れたローム, やや粗粒)
- h 黄褐色土(やや汚れたローム, 6層より明るい)
- i * (やや汚れたローム, h層より明るい)
- j 褐色土(4層に似るもやや明るい)
- k 黄褐色土(やや汚れたローム)
- l * (やや汚れたハードローム, やや粗粒)
- n 黒色土(細かいローム粒, ロームブロックを含む)
- m 暗黄褐色土(ローム多含む)
- o 暗褐色土(ロームスコリア多含む)
- p 黄褐色土(汚れたローム, 黒色土粒やや多い)
- q 暗黄褐色土(ロームやや多くブロック状に入る)



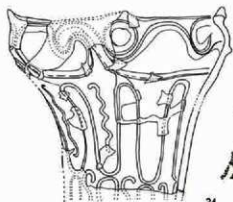
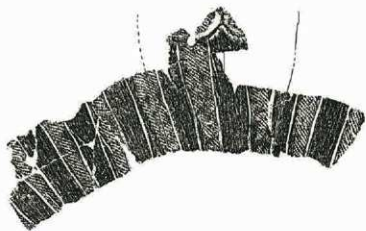
図面30 F0~FQ68~70区遺物集中地点実測図



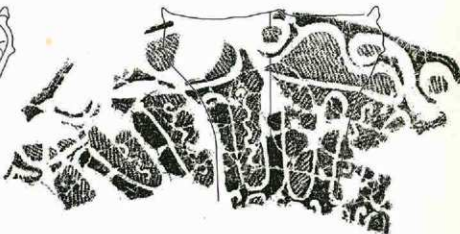
图面31 S I 171住居跡, S S 2配石跡出土土器



23

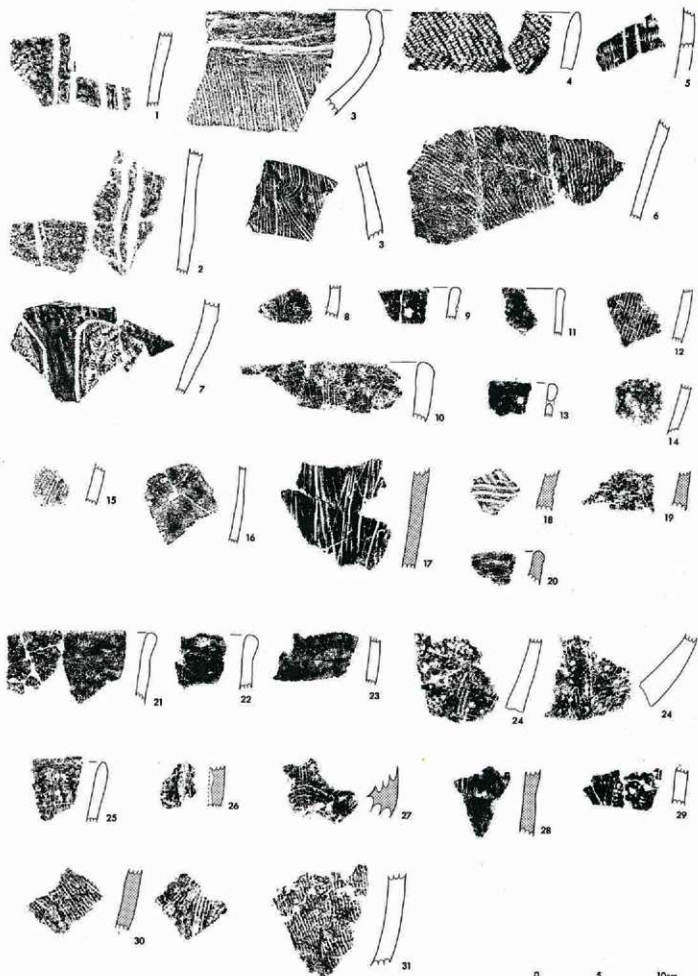


24



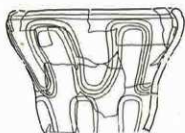
0 10 20cm

圖面32 SS 2配石跡, SS 4・6~9・11・12集石, SK 297・300・324土坑,
P J-327・573出土土器

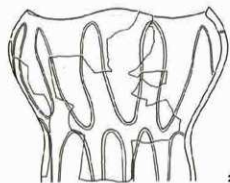


0 5 10cm

图33 FO~FQ·68~70区遗物集中地点出土土器



1



2



0 10 20cm



3



4



5



6



8



8



7



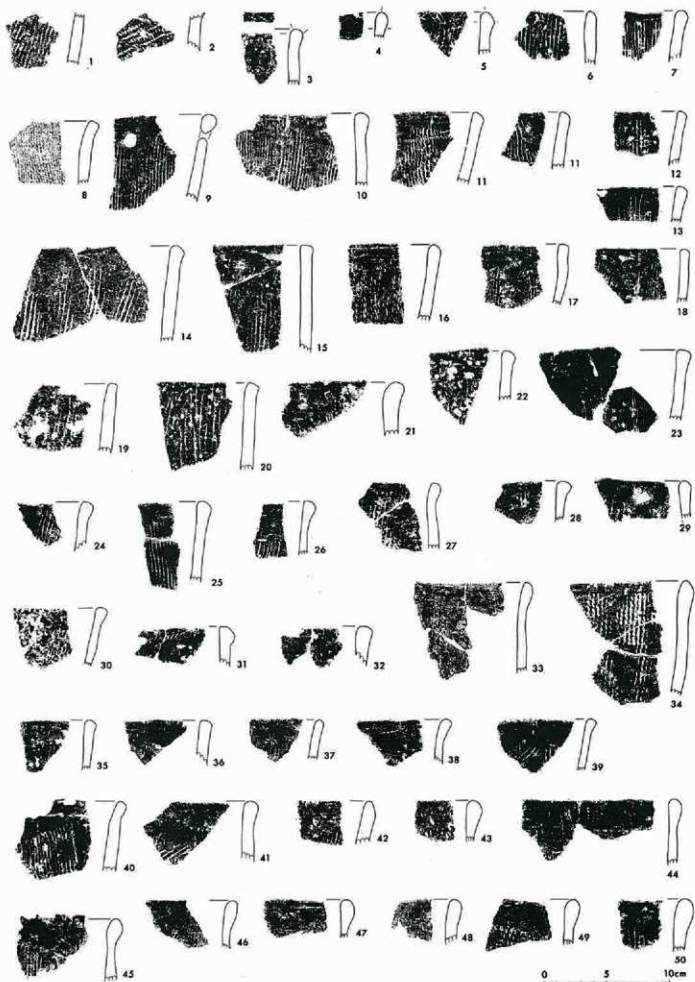
8



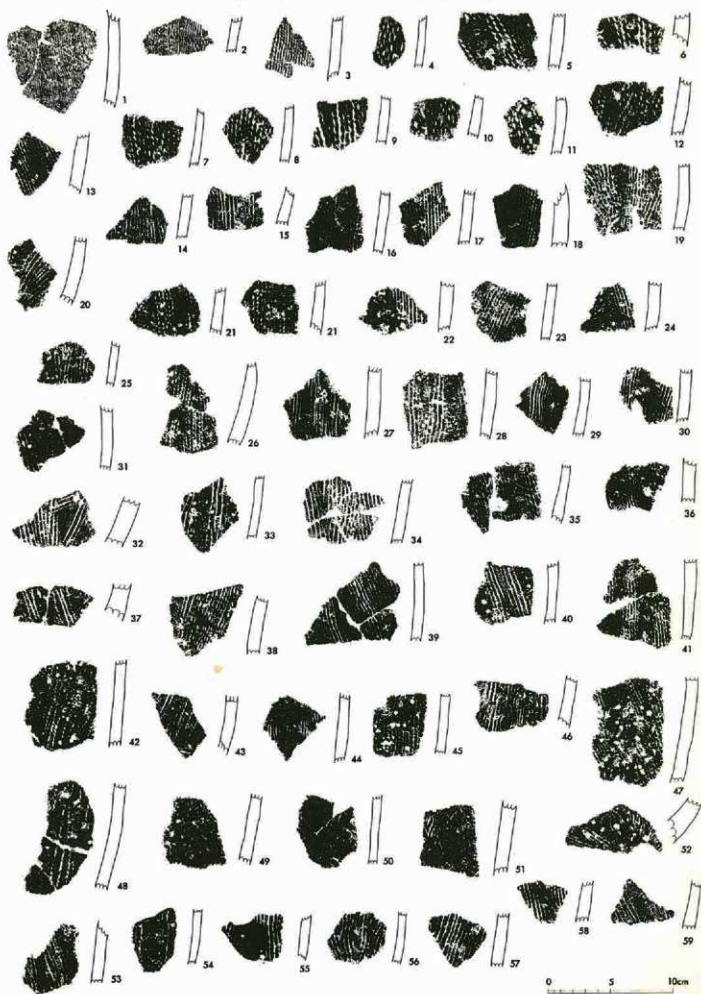
8

0 5 10cm

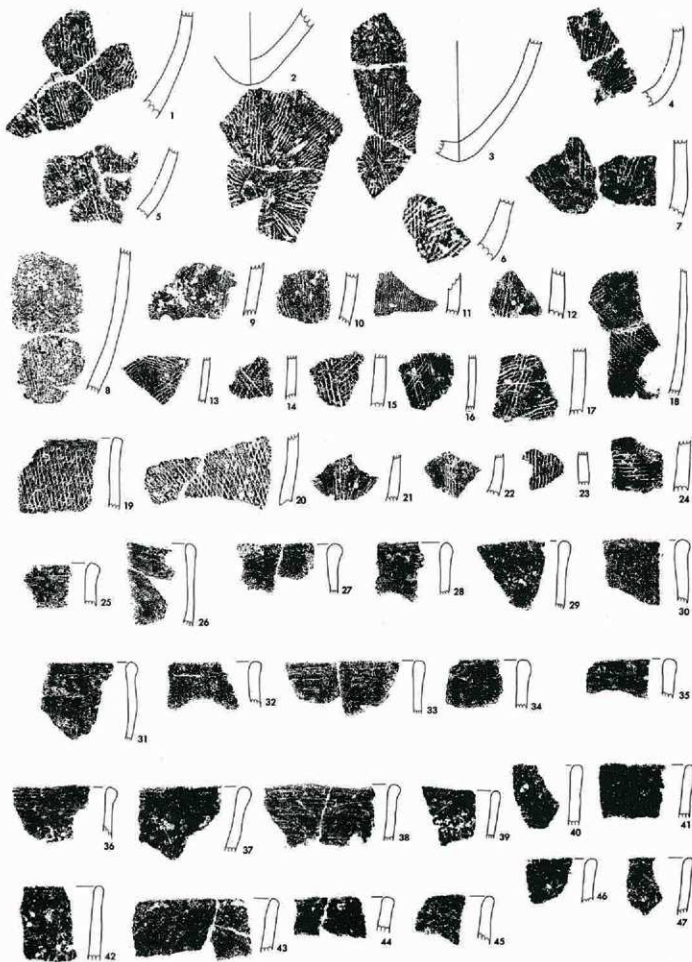
图面34 遺構外出土土器(1) 1群(早期燕系文系) 1~6類



図面35 遺構外出土土器(2) 1群(早期熱水文化系) 7類a~c

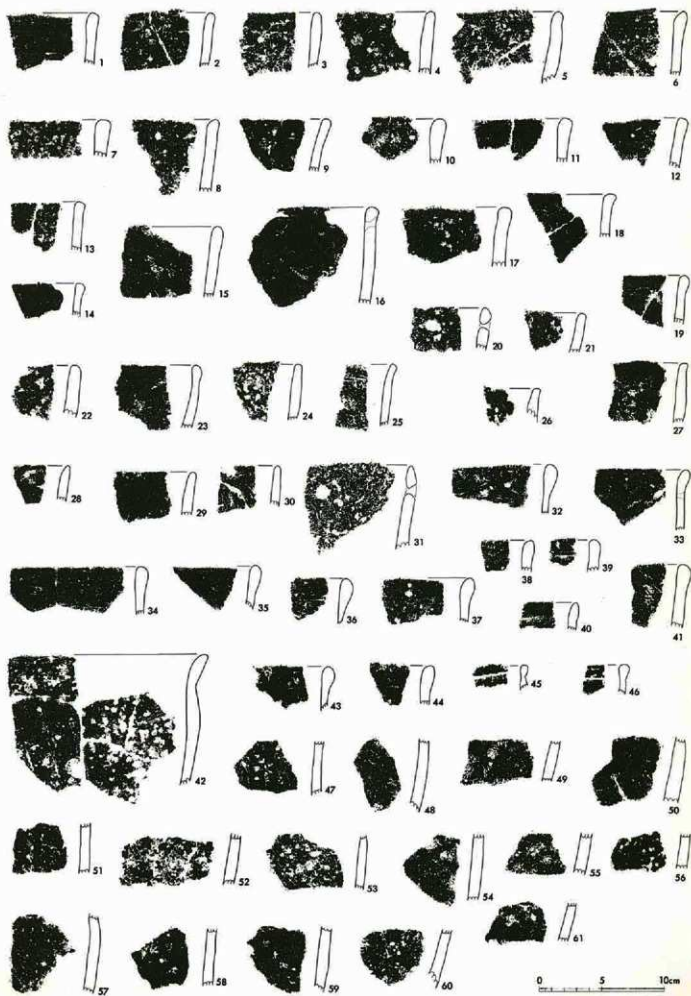


图面36 遺構外出土土器(3) 1群(早期燕系文系) 7類c~12類a

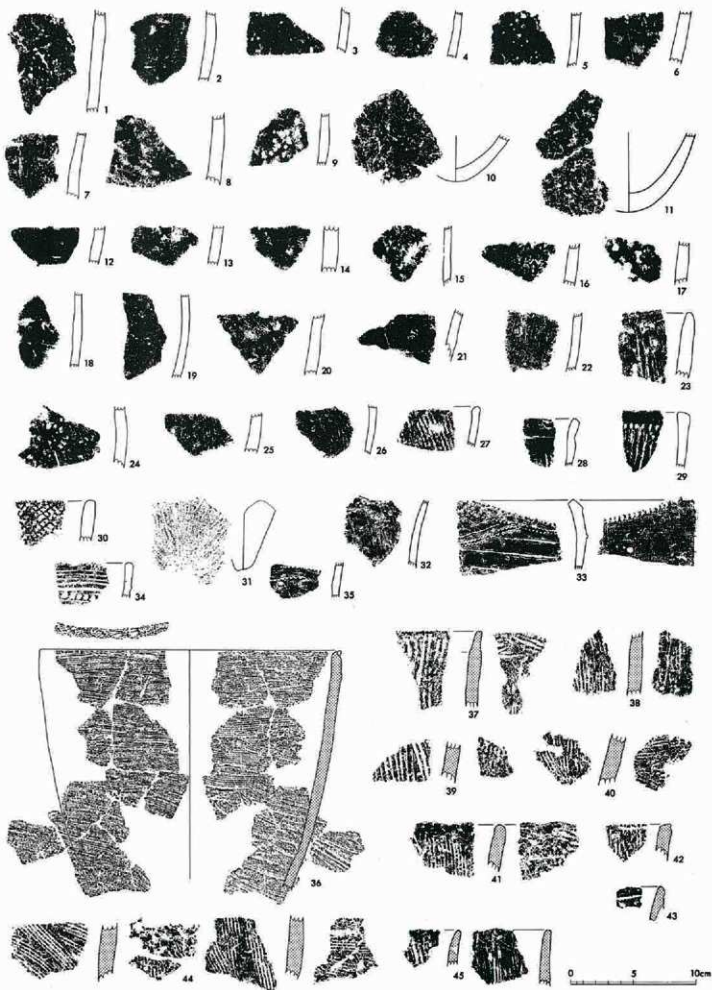


0 5 10cm

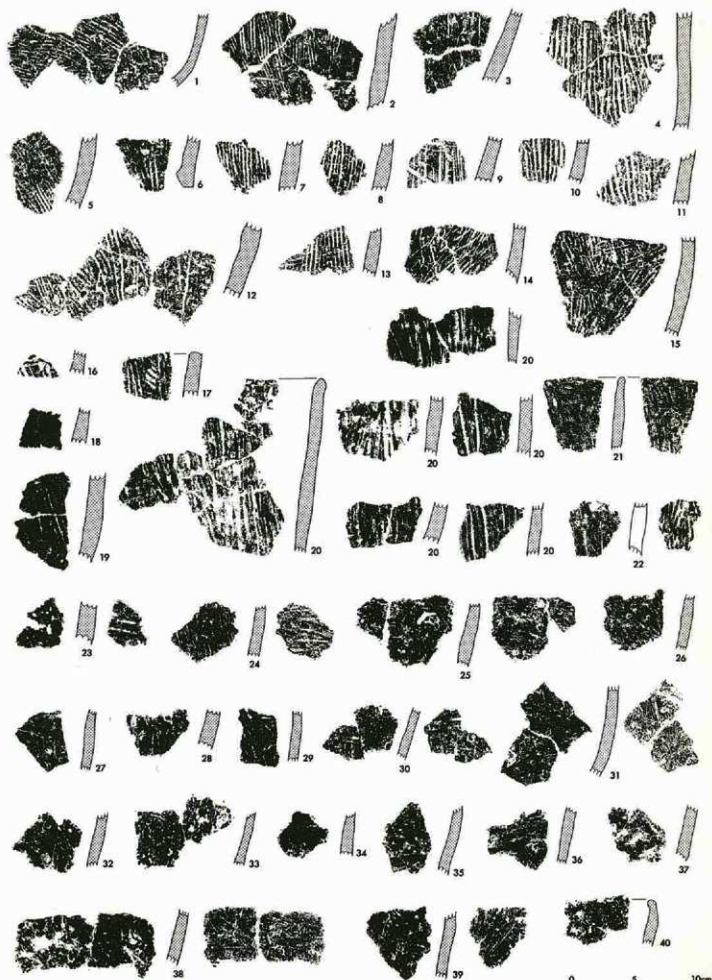
図面37 遺構外出土土器(4) 1群(早期撫糸文系) 12類b~17類



圖面38 遺構外出土土器(5) 1群(早期燕糸文系)17類, 2群(同押型文系),
3群(同沈線文系), 4群(同條痕文系)1~2類a

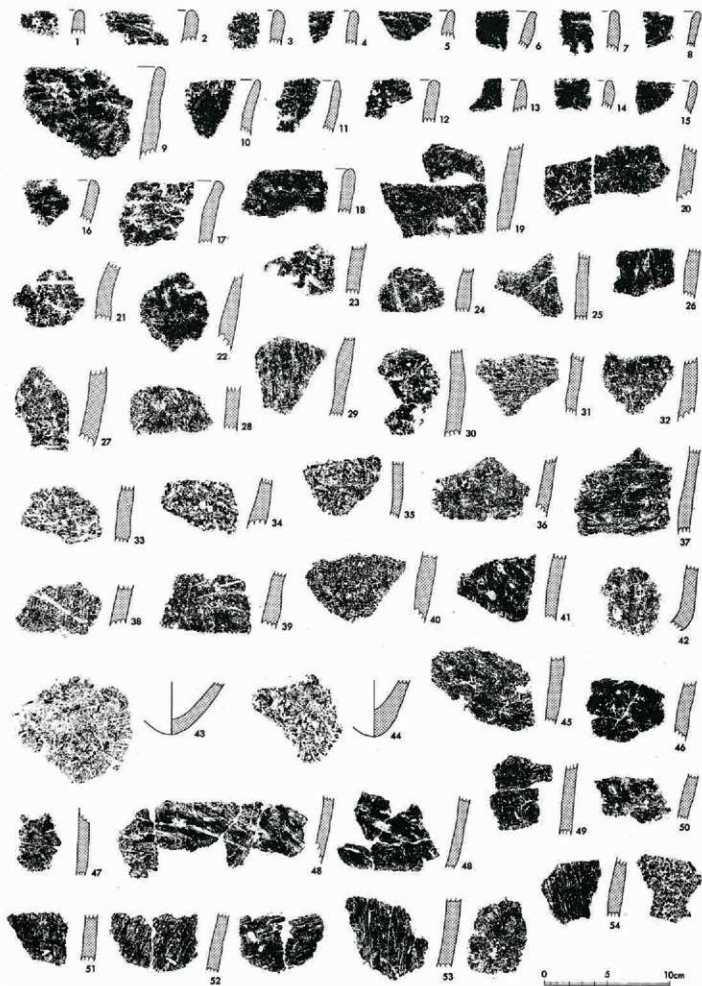


図面39 遺構外出土土器(6) 4群(早期条痕文系) 2類a~4類b

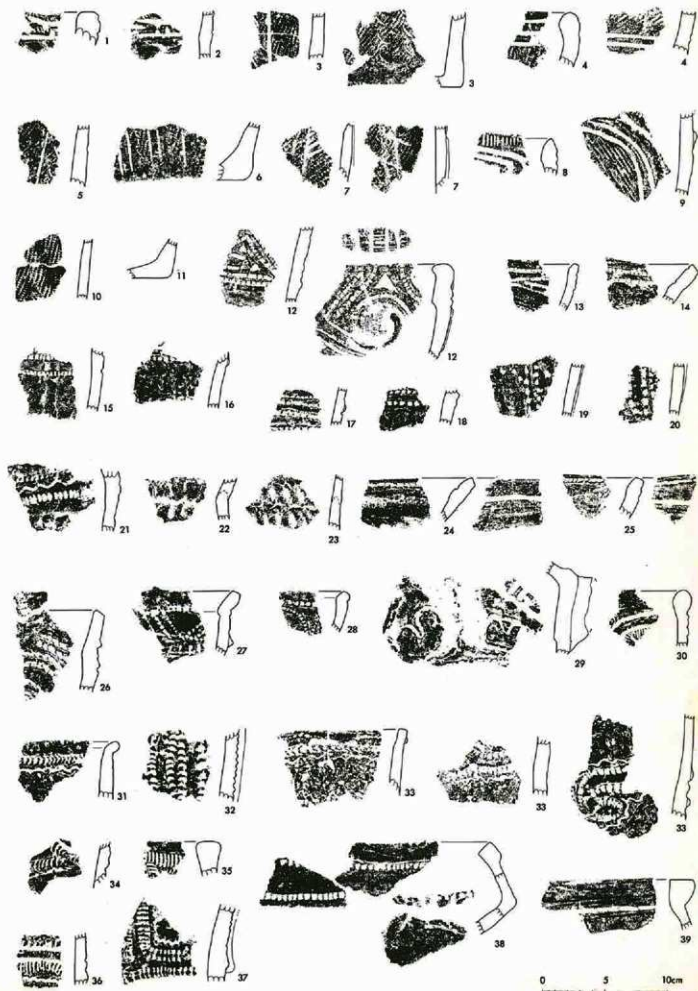


0 5 10cm

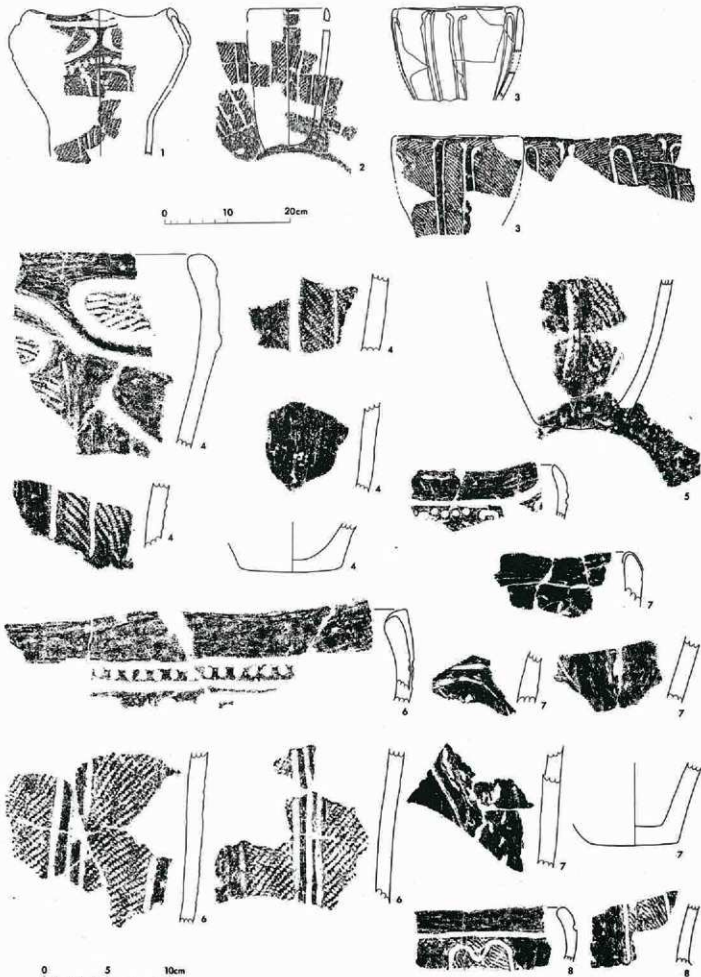
図面40 遺構外出土土器(7) 4群(早期条痕文系)4類b~f



圖面41 遺構外出土土器(8) 5群(中期前半)



図面42 遺構外出土土器(9) 6群(中期後半) 1・2類



図面43 遺構外出土土器(10) 6群(中期後半) 4~8類

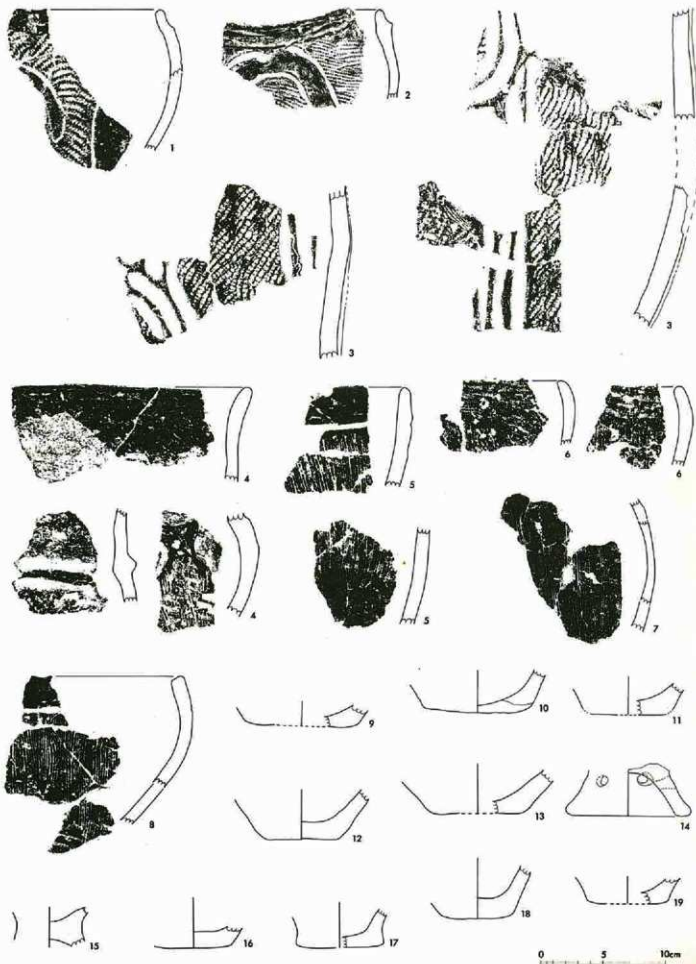
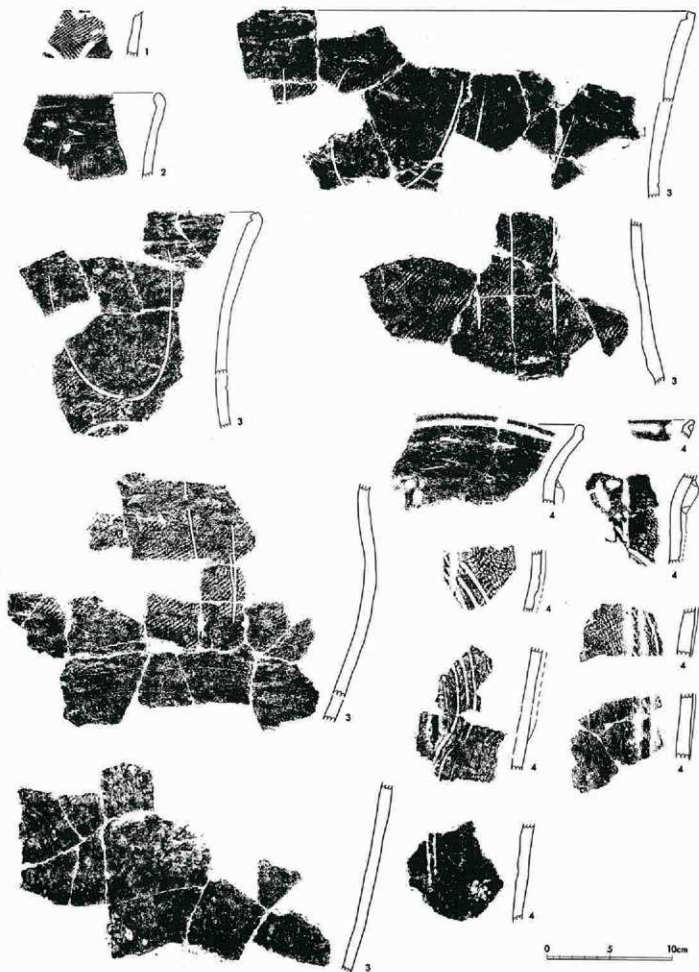


图44 道桥外出土土器(11) 7群(后期) 1型~2型b



図面45 遺構外出土土器(12) 7群(後期) 2類C~4類C, 8群(不明), 土製円板

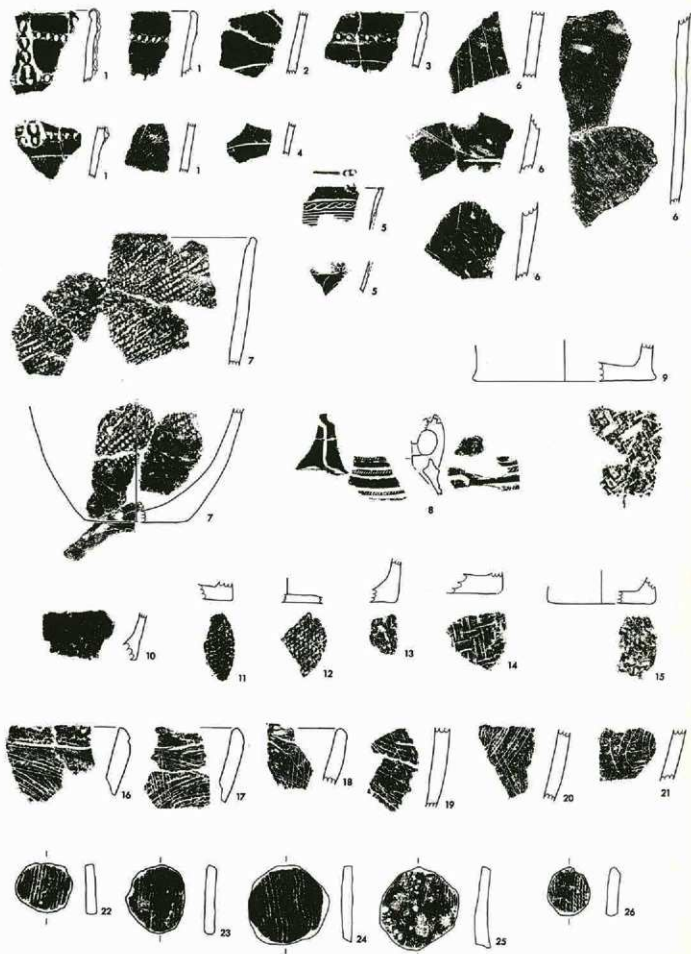
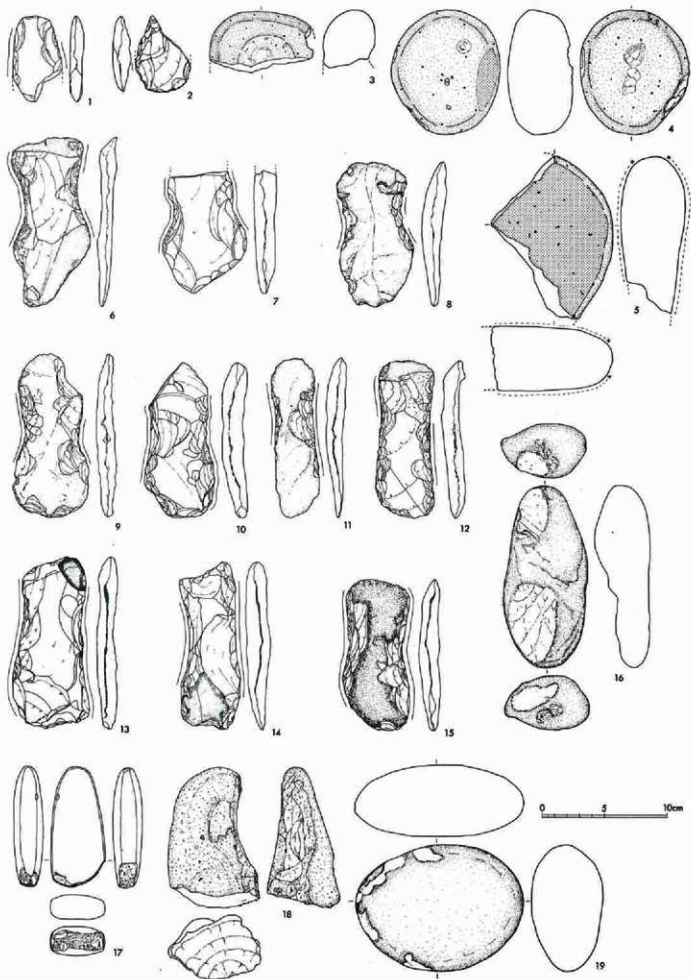
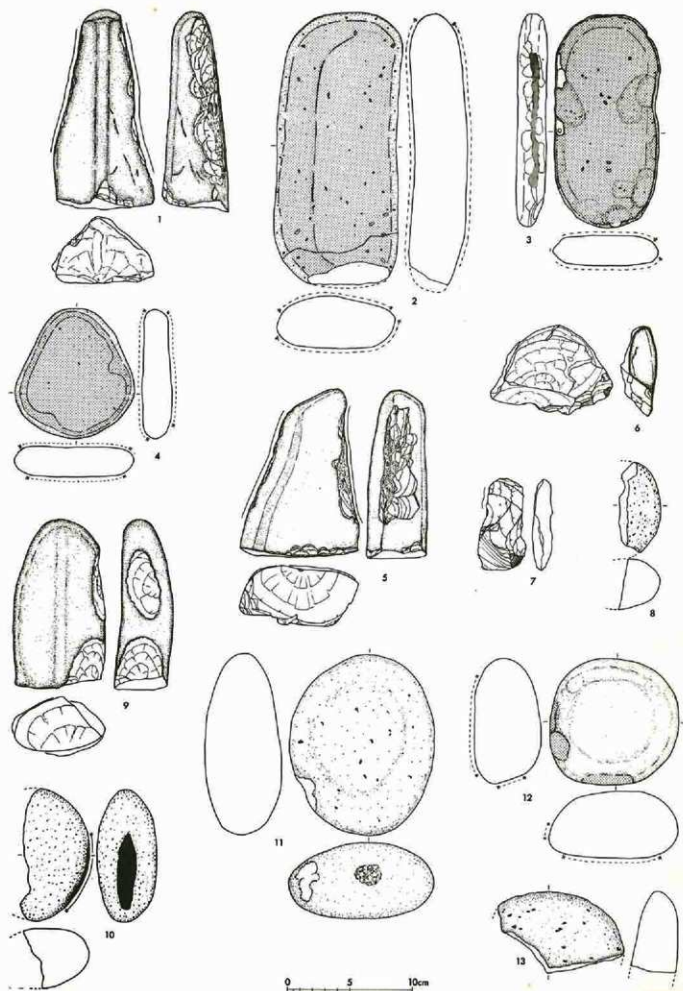


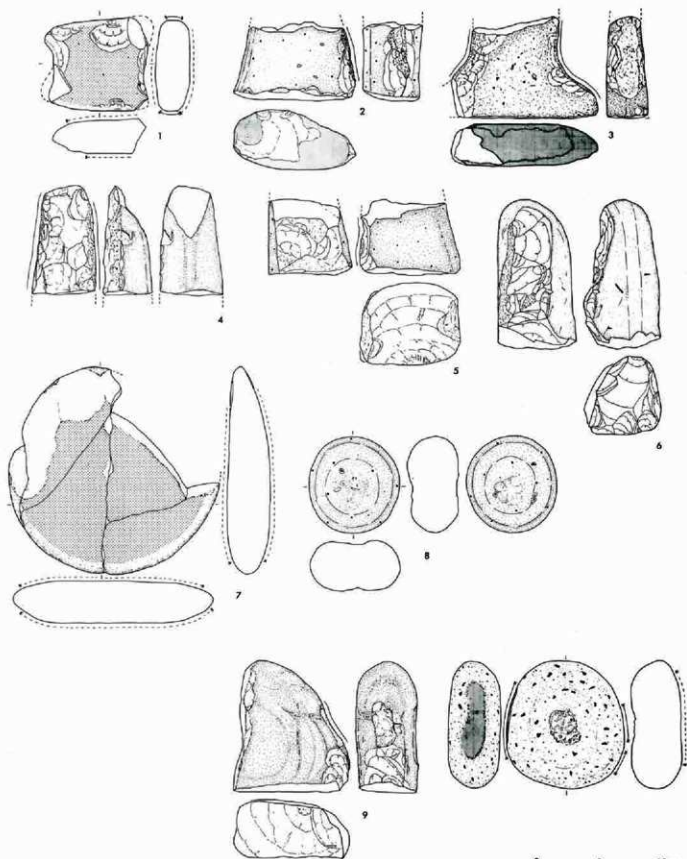
图46 S 1171住居跡, SS 2配石跡出土石器



图版47 SS 2配石砾, SS 6~9·11集石出土石器



图面48 S S 11集石, S K 298 • 300土坑, F O ~ F Q • 68 ~ 70区遺物集中地点出土石器



圖面49 遺構外出土石器(1) 2類(石鏃), 3類(局部磨製石斧, 礮石斧, 打製石斧)

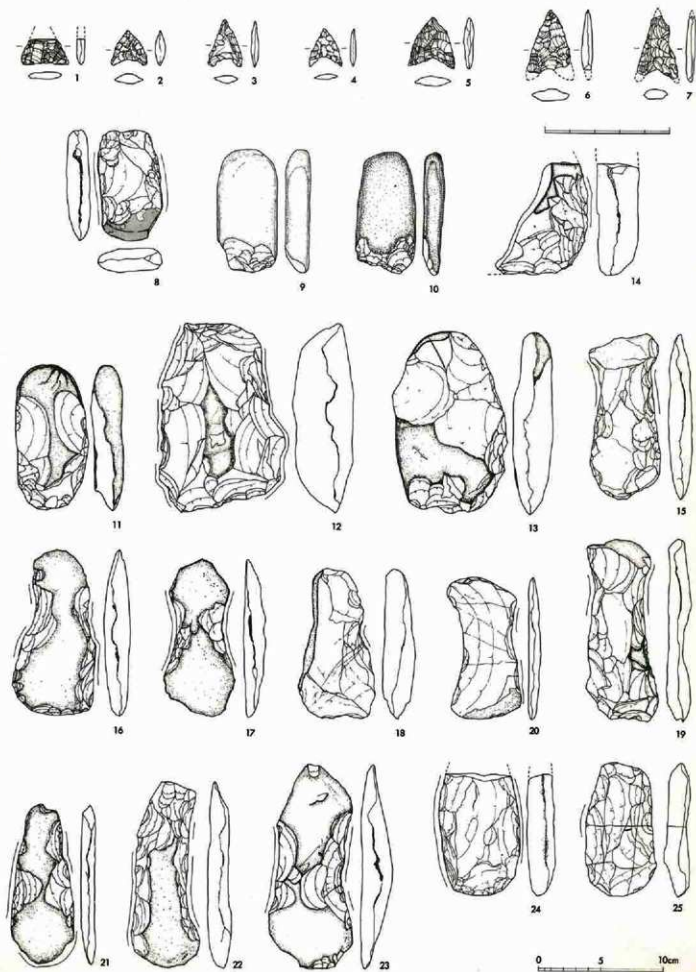
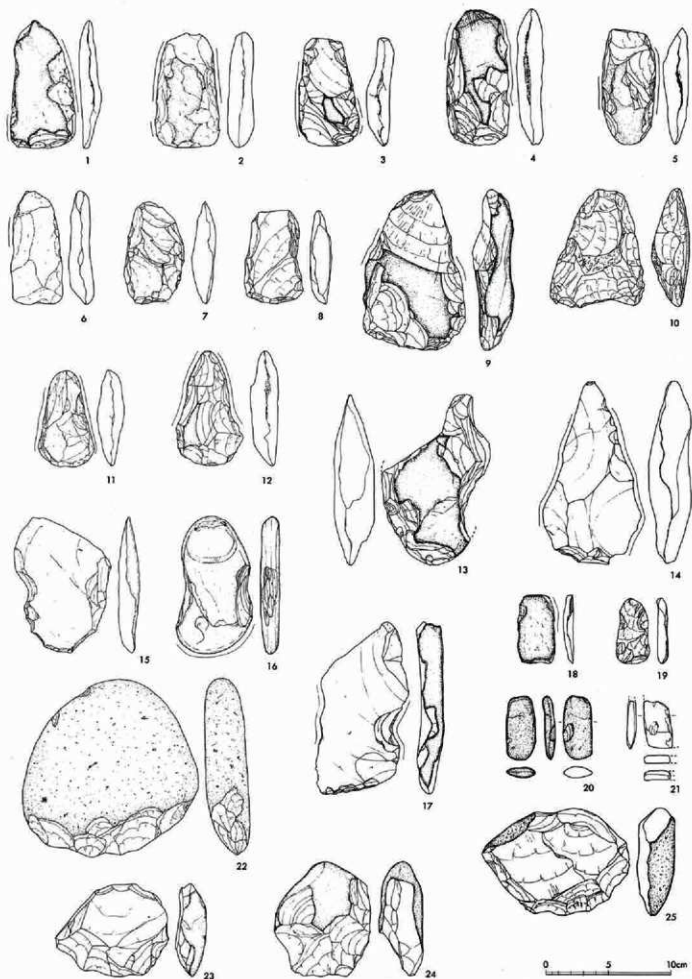
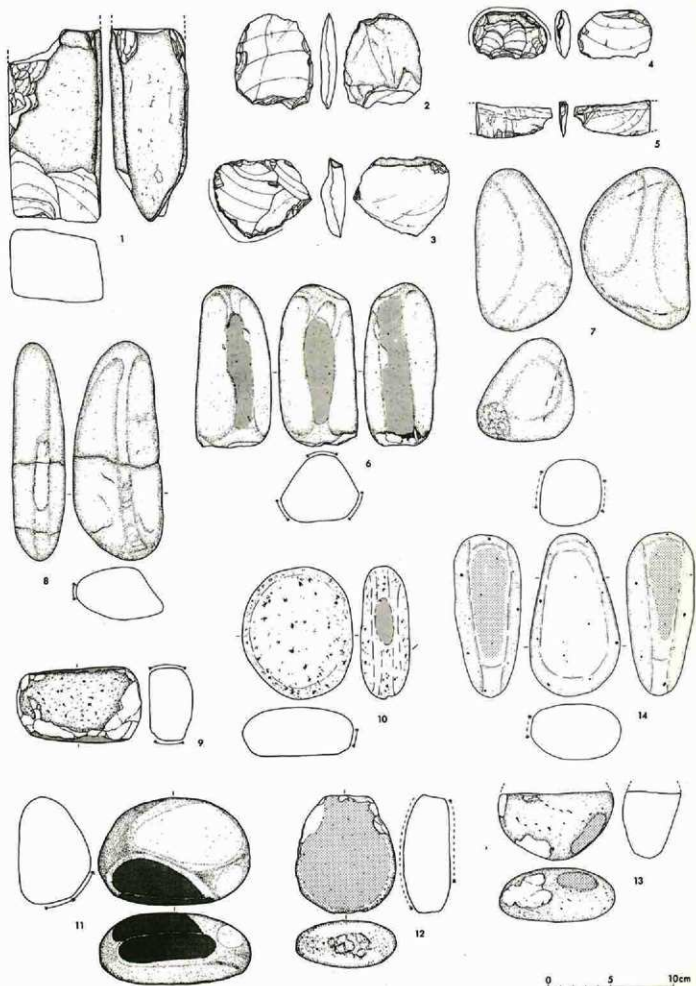


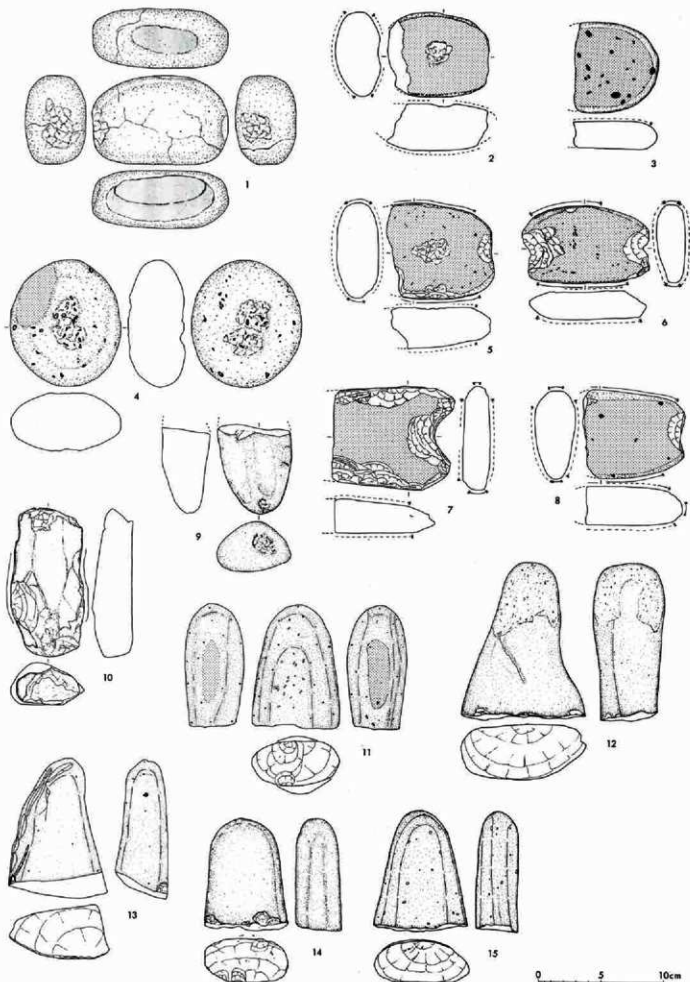
图50 造桥外出土石器(2) 3類(打製石斧), 4類(磨製石斧), 5類(礮器)



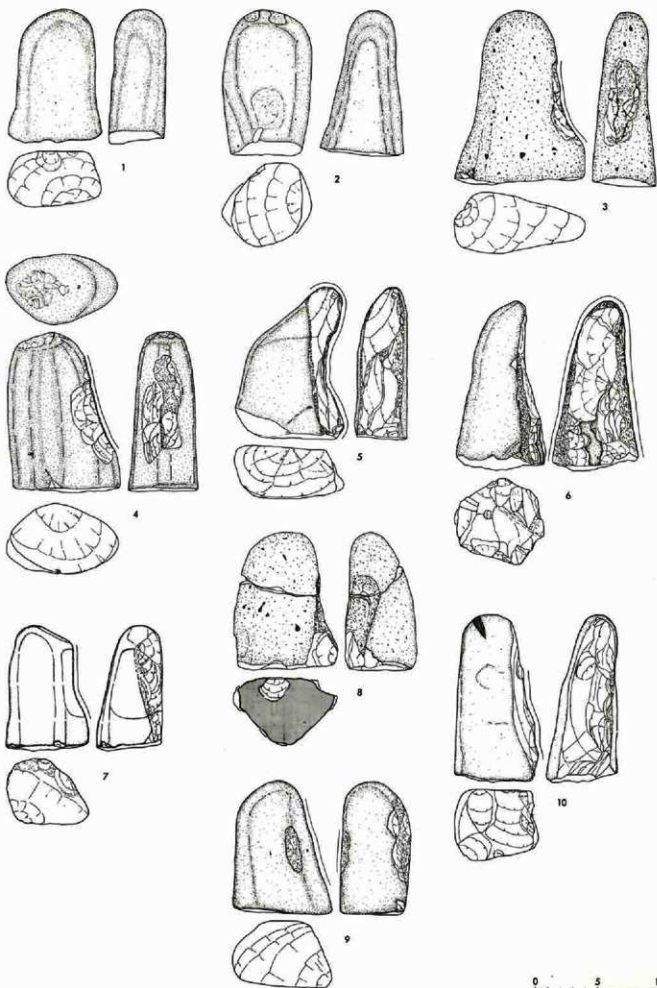
圖面51 遺構外出土石器(3) 5類(礮器), 6類(擡器), 7類(磨石)



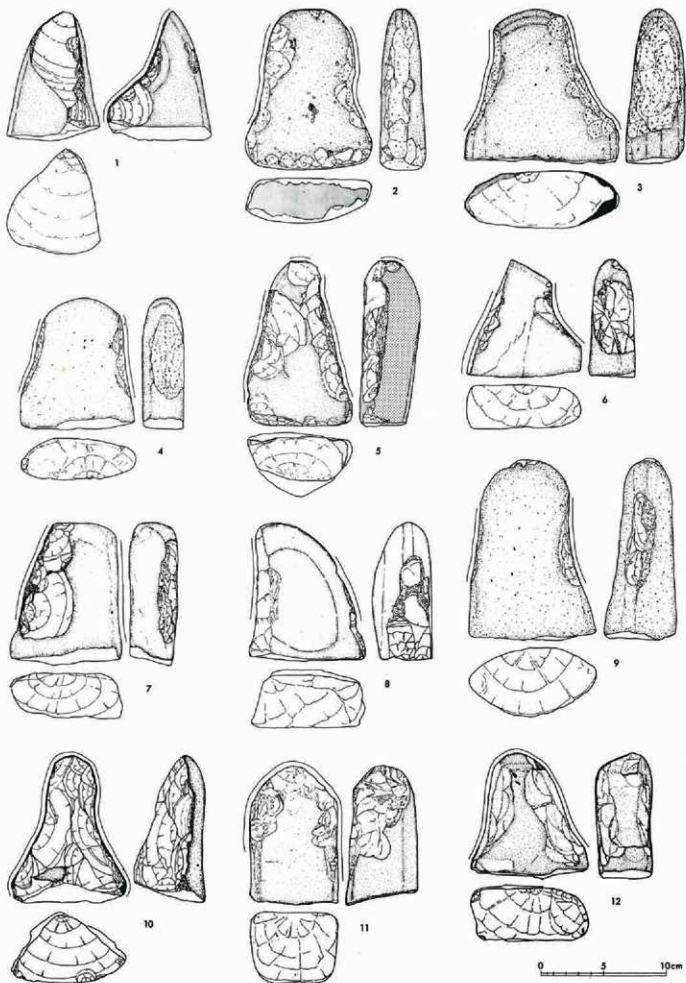
図面52 遺構外出土石器(4) 7類(磨石), 8類(敲石), 9類(スタンプ形石器)



図面53 遺構外出土石器(5) 9類 (スタンプ形石器)



図面54 遺構外出土石器(6) 9類 (スタンプ形石器)



図面55 遺構外出土石器(7) 10類(石皿)

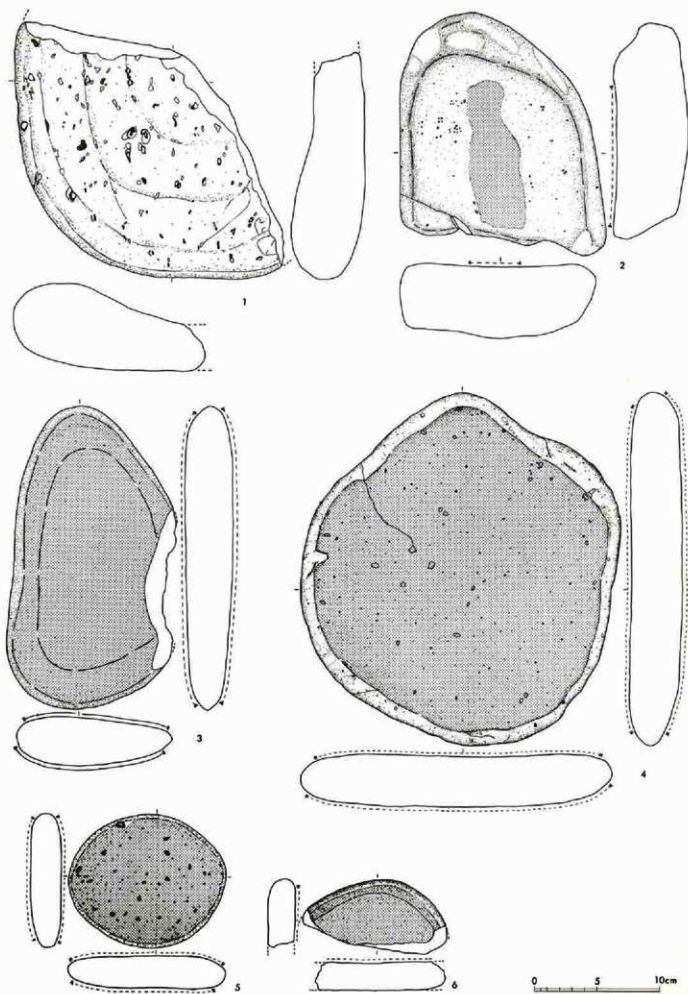
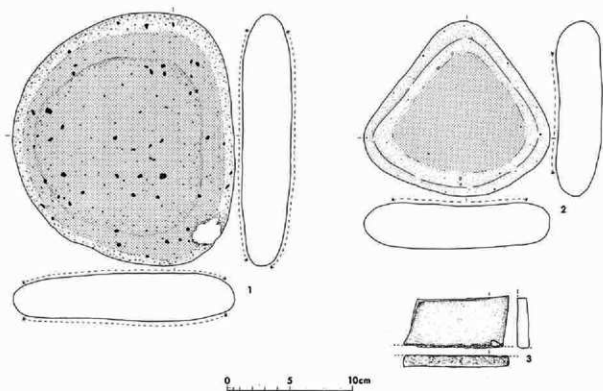
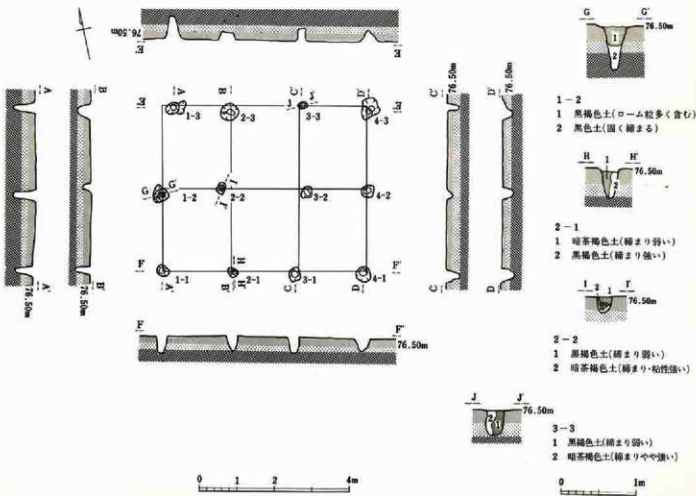
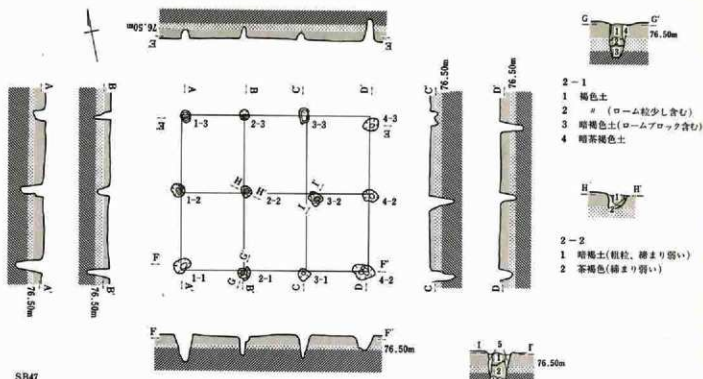


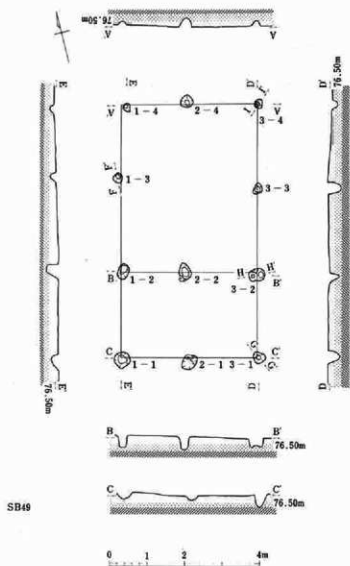
圖56 遺構外出土石器(8) 10類(石皿), 11類a(砥石)



図面57 S B47・48獨立柱建物跡実測図



図面58 S B49・50掘立柱建物跡実測図



SB49



1-3

- 1 暗褐色土
- 2 茶褐色土
- 3 黄茶褐色土



3-1

- 1 黒褐色土(締まり弱い)
- 2 黄褐色土(ロームブロック)
- 3 暗黒褐色土(締まりやや強い)
- 4 暗黄褐色土(締まり強い)



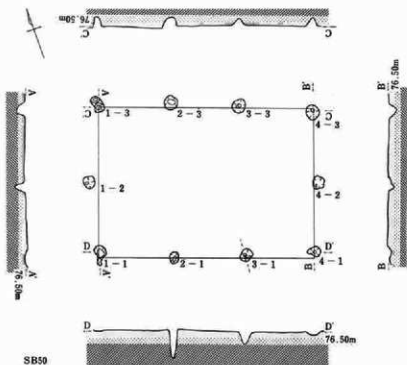
3-2

- 1 黒色土(締まりやや弱い)
- 2 黒褐色土(締まりやや強い)
- 3 瑠璃褐色土(締まりやや強い)



3-4

- 1 黒褐色土(柱痕跡か)
- 2 瑠璃褐色土(締まりやや強い)



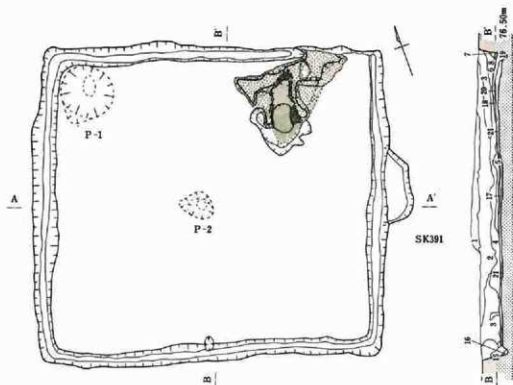
SB50



3-1

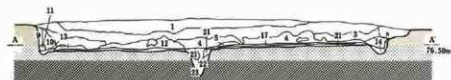
- 1 暗褐色土
- 2 暗茶褐色土(茶褐色土ブロック含む)
- 3 黒色土
- 4 黄茶褐色土





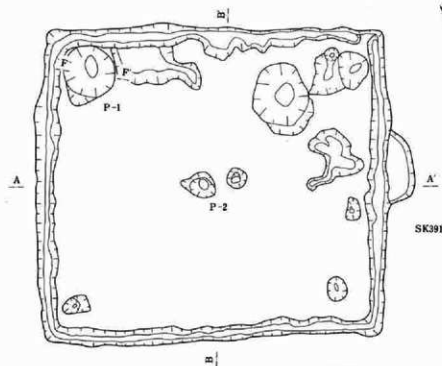
P-1

- 1 黒色土 (ローム粒含む)
- 2 茶褐色土
- 3 暗茶褐色土 (ローム粒を多く含む)
- 4 * (締まり強い)
- 5 黄褐色土 (ロームブロック)



住居跡堆積土

- 1 暗黒褐色土
- 2 * (焼土粒を含む)
- 3 * (やや粗粒, 焼土粒を含む)
- 4 * (粘土, 焼土粒を多く含む, 茶褐色味を帯びる)
- 5 暗茶褐色土 (4層に似て, 粘土, 焼土粒さらに多く含む, 粗粒)
- 6 黒色土 (粘土粒を少し含む)
- 7 暗茶褐色土
- 8 暗黄褐色土
- 9 暗茶褐色土 (黒色土ブロック混入)
- 10 暗黒褐色土 (茶褐色味をやや帯びる)
- 11 暗茶褐色土 (黒色味をやや帯びる, 細粒)
- 12 暗褐色土 (粘土粒を含む)
- 13 暗茶褐色土 (ローム多く含む, 固溝)
- 14 * (ロームブロック含む, 締まり強い, 固溝)
- 15 暗茶褐色土 (固溝)
- 16 暗茶褐色土 (固溝)
- 17 黒色土 (粘束土, 粘土, 焼土粒を含む)
- 18 暗灰褐色土 (粘束土, 粘土粒を多く含む)
- 19 黒褐色土 (粘束土, 細かい粘土粒を少し含む)
- 20 茶褐色土 (粘束土, 粘土ブロックを少し含む)
- 21 茶褐色土 (粘束土)
- 22 茶褐色土 (P-2堆積土)
- 23 黒色土 (*)
- 24 黒褐色土 (* , ハードロームブロックを多く含む)



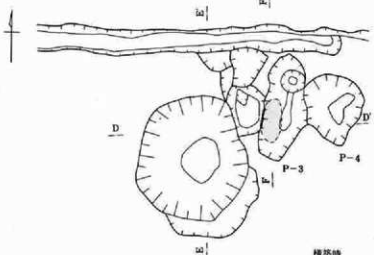
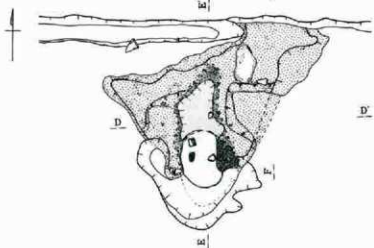
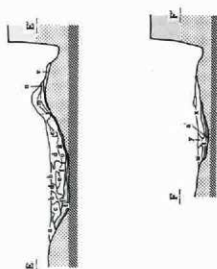
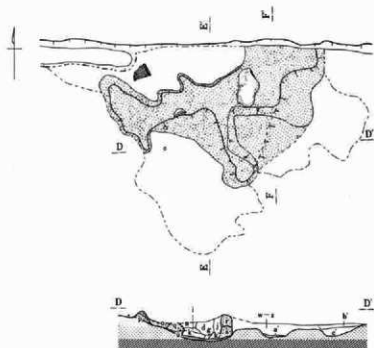
構築時



SK391堆積土

- a 暗黒褐色土 (住居跡堆積土3層に似る)

図面80 S I 147住居跡実測図

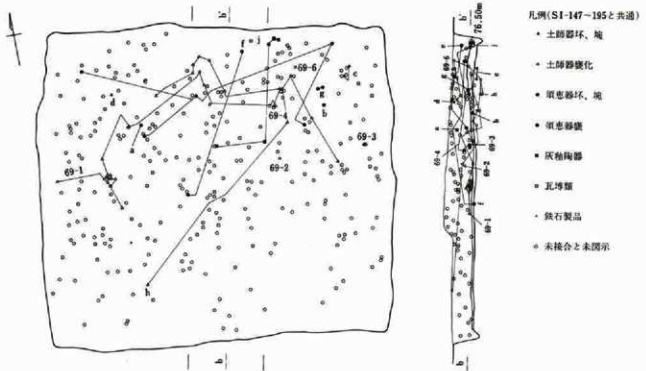


- a 暗黒褐色土(焼土、粘土アロック混入)
- b 灰黒褐色土(焼土、粘土粒を含む)
- c 灰褐色土(粘土粒多い)
- d 暗褐色土(焼土粒、粘土粒を多く含む)
- e 灰黒褐色土(粘土粒を含む)
- f 灰褐色土(粘土アロック)
- g 微褐色土(粘土粒少し含む)
- h 暗褐色土(黒色土粒が多く混入)
- i 微褐色土(粘土が焼けたもの)
- j 黒色土(締まり弱い)
- k 暗黒褐色土(焼土粒含まず、火熱受けていない)
- l 質灰褐色土(粘土、締まりあり、層道構築土の崩壊したもの)
- m 微褐色土(焼けた粘土、締まりあり、柱道構築土の崩壊したもの)
- n 黒褐色土(粗粒、締まりない)
- o 灰褐色土(粘土粒多い、締まりあり、構築土)
- p 黒褐色土(粘土粒少し含む、締まりあり、構築土)
- q 褐色土(赤く焼ける、締まり強い、構築土)
- r 褐色土(q層に同じ、構築土)
- s 灰褐色土(q, r層に限る、構築土)
- t 黒褐色土(粗粒、上部は赤く焼ける部分あり、締まり良好、構築土)
- u 黒褐色土(粗粒、焼土粒を多く含む、構築土)
- v 黒色土(構築土)
- w 微褐色土(焼土粒を多く含む、粗粒、締まり強い、P-3埋積土)
- x 灰黄色土(粘土、締まり強い) P-3埋積土
- y 黒褐色土(粘土、焼土粒を含む、締まり強い、P-3埋積土)
- z 黒褐色土(粗粒、焼土粒を若干含む、P-3埋積土)
- a' 黒褐色土(焼ける、P-3埋積土)
- b' 黒褐色土(焼土、粘土粒を含む、締まりあり、P-4埋積土)
- c' 茶褐色土(粘土粒を含む、締まりあり、P-4埋積土)

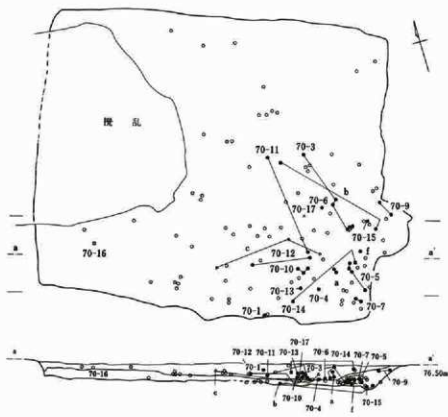
0 50cm

構築時

圖面61 S I 147・148住居跡実測図



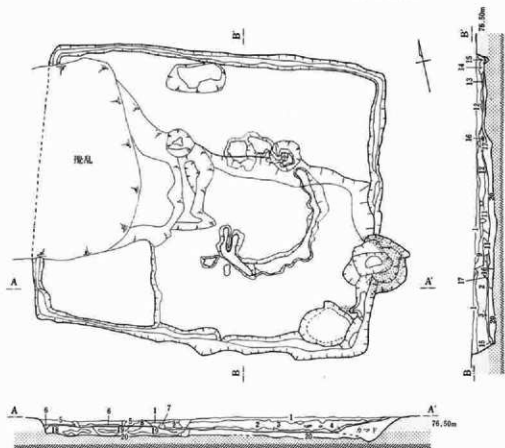
SI147 遺物分布図



SI148 遺物分布図

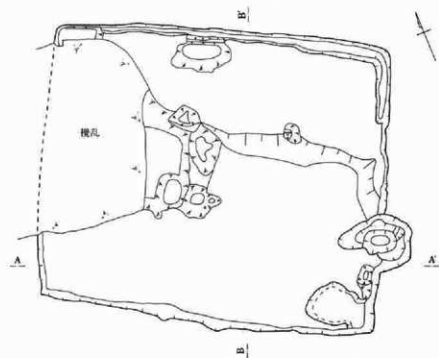


図面62 S 1148住居跡実測図

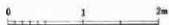


住居跡堆積土

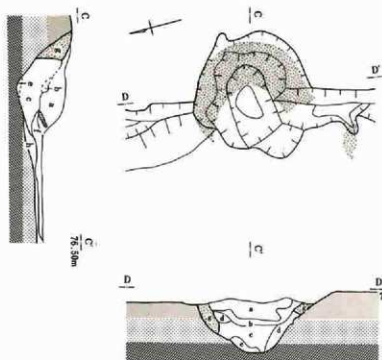
- 1 黒褐色土(ローム粒を少し含む)
- 2 黒褐色土(焼土粒を少し含む、1層より黒色味あり)
- 3 茶褐色土(焼土粒、炭化粒を含む、締まりやや強い)
- 4 黒褐色土(粘土粒、焼土粒を含む)
- 5 黒褐色土(1層に似る)
- 6 茶褐色土(3層にはほぼ同じ)
- 7 黒色土(締まり強い)
- 8 黒褐色土(締まり強い)
- 9 黒色土(焼土粗粒を含む)
- 10 黒色土(焼土粒を多く含む)
- 11 黒褐色土(焼土粒を多く含む)
- 12 黒褐色土(2層にはほぼ同じ)
- 13 茶褐色土(6層に同じ)
- 14 茶褐色土(ローム粒を多く含む)
- 15 茶褐色土(ローム粒を多く含む)
- 16 赤褐色土(焼土、粘性強い)
- 17 黒色土(焼土粒を少量含む)
- 18 暗褐色土(構築土)
- 19 褐色土(Ⅱc層に似る、構築土)
- 20 暗茶褐色土(Ⅱc層に似る、構築土)



構築時



図面63 S I 148・152住居跡測図

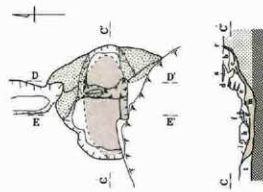
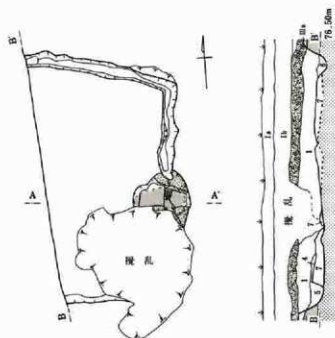


SI148カマド

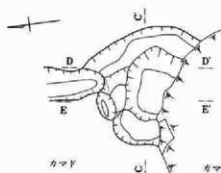
- a 茶褐色土 (粘土・埴土・炭化物粒少量含む)
- b 灰褐色土 (多量の粘土を含む)
- c (粘土・埴土を多く含む)
- d (粘土を主とする構築土)
- e 茶褐色土 (粘土・埴土・炭化物粒少量含む)
- f 灰褐色土 (粘土多く含む、粘まり強い)
- g 灰褐色土 (粘土を主とする構築土、粘まり強い)
- h 暗茶褐色土 (住居跡構築土、=20層)



SI148カマド



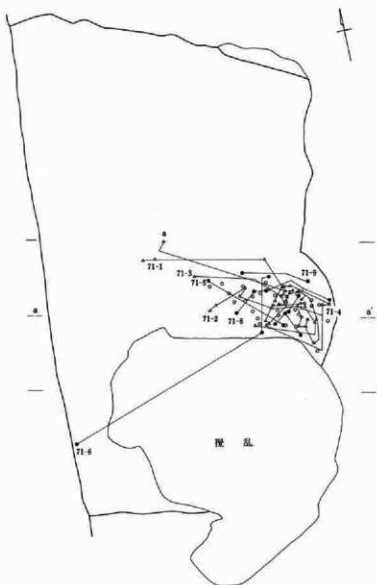
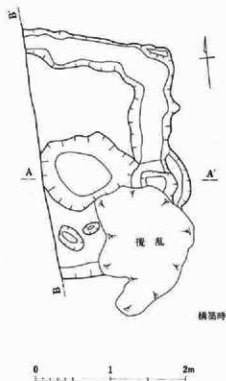
SI152



カマド

カマド構築時

図面64 S I 152住居跡実測図

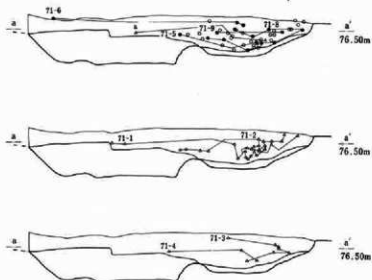


S I 152住居跡堆積土

- 1 黒褐色土 (ローム・焼土細粒を少量含む、締まりあり)
- 2 暗黒褐色土 (締まり良好)
- 3 暗褐色土 (焼土粒を多く含む)
- 4 黒褐色土 (焼土粒をやや多く含む、締まりあり)
- 5 暗褐色土 (周溝内、ローム少量含む)
- 6 * (周溝内、5層に似る)
- 7 暗茶褐色土 (粘床土、締まりあり)
- 8 茶褐色土 (粘床土、ローム多く、締まりあり)
- 9 * (粘床土、8層よりやや明るい)

S I 152カット

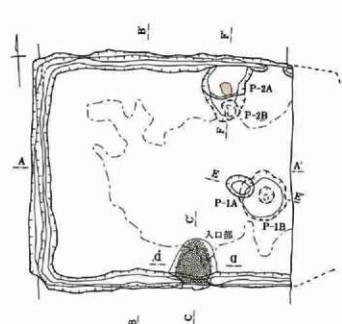
- a 黒色土 (粗粒、締まりあり)
- b 黒褐色土 (粘土粒を少し含む)
- c * (粘土、焼土粒を微量含む)
- d 茶褐色土 (焼土粒多い)
- e * (焼土粒多い)
- f 黒色土 (締まり弱い)
- g 黄褐色土 (粘土粒含む、締まりやや弱い)
- h 茶褐色土 (焼土粒多く含む、締まり良好)
- i 黒褐色土 (焼土粒多く含む)
- j 暗褐色土 (焼土多量に含む)
- k 茶褐色土 (焼土粒多く、赤色味を帯びる)
- l 黒褐色土 (焼土、粘土粒を含む、締まり弱い)
- m 黒褐色土 (構築土、大熱受け、部分的に赤色化)
- n 茶褐色土 (*、粘土多く含む、大熱受ける)
- o 黒褐色土 (*、粗粒、大熱受ける)
- p 暗褐色土 (*、大熱受け、部分的に赤色化)
- q 黒褐色土 (*、やや粗粒、大熱受ける)
- r 黒褐色土 (*、粘土多く含む)
- s 茶褐色土 (*、住居粘床土に似る)
- t 住居粘床土



遺物分布区

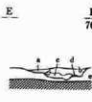
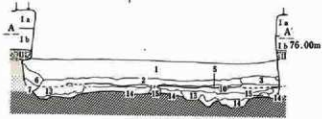
0 50cm

図面65 S I 195住居跡実測図

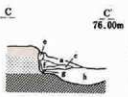


住居跡地積土

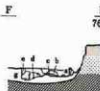
- 1 黒褐色土(ローム、粘土、炭化物細粒を少量含む)
- 2 " (締まり、粘性、黒色味とも1層よりややあり)
- 3 " (純土、粘土粒をやや多く含む)
- 4 " (やや粗粒、締まりやや弱い)
- 5 " (ローム、純土、粘土粒をやや多く含む)
- 6 " (ローム粒をやや多く含む、締まり強い、周溝内)
- 7 暗茶褐色土(ローム、黒色土粒多く、締まり強い、周溝内)
- 8 暗茶褐色土(茶褐色土粒多く、締まり強い、周溝内)
- 9 暗茶褐色土(ローム粒多く、締まり弱い、周溝内)
- 10 黒褐色土(粘床土、ローム、茶褐色土を含み、固く締まる)
- 11 暗茶褐色土(粘床土、ローム細粒多く含む、締まりあり)
- 12 暗茶褐色土(粘床土、ローム粒を多く含む)
- 13 黒褐色土(粘床土、ローム、茶褐色土ブロック含む)
- 14 暗茶褐色土(粘床土、汚れたローム)
- 15 " (粘床土、汚れたローム)



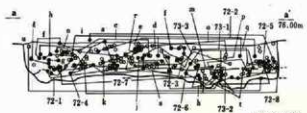
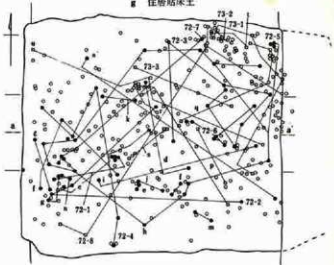
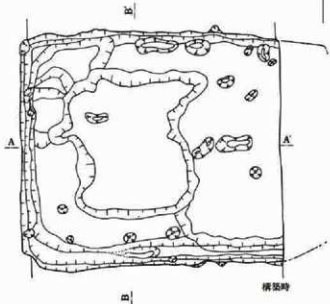
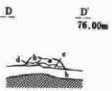
- E P-1A-B地積土
76.00m a 黒褐色土(A, ローム、純土、炭化物粒若干含む)
b " (B, a層に似る、締まりより強い)
c " (B, 粘土粒多く含む)
d 暗茶褐色土(汚れたローム)
e 住居粘床土



- C 入口部構築土
76.00m a 黒褐色土(ローム細粒若干含む、締まりあり)
b 暗茶褐色土
c " (ローム、粘土、純土粒少量含む)
d 黒色土(締まりやや弱い)
e 暗茶褐色土(やや粗粒で締まり若干弱い)
f 黒褐色土(やや粗粒で、締まりa層よりやや弱い)
g " (ローム粒若干含む、締まりやや弱い)
h 住居粘床土

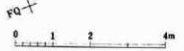
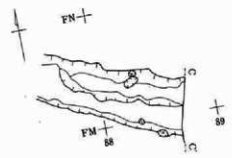
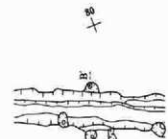
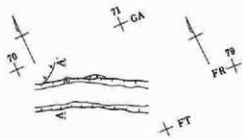


- F P-2A-B地積土
76.00m a 黒色土(A, 純土粒をやや多く含む、締まりやや弱い)
b 赤褐色土(A, 純土多量)
c 暗褐色土(A, 住居粘床土が焼け、赤化したものの)
d 黒色土(B, ローム、純土、粘土粒少量含む)
e 暗茶褐色土(B, ブロック、住居粘床土か)
f 黒褐色土(B, ローム粒やや多い、住居粘床土か)
g 住居粘床土



遺物分布図

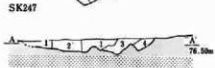
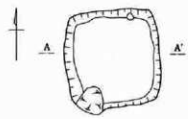
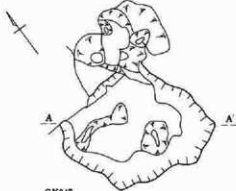
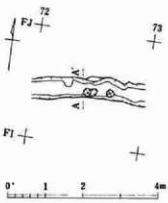
図面66 S D57・58跡跡, S K247~251土坑実測図



- 1 黒褐色土 (ローム細粒少量含み、締まりあり)
- 2 黒色土 (ローム細粒少し含み、締まりあり)
- 3 暗茶褐色土 (1層+茶褐色土)

- 1 黒褐色土 (ローム細粒少量含み、締まりあり)
- 2 暗茶褐色土 (茶褐色土多く、締まりあり)

SD57

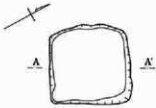
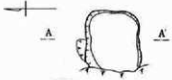
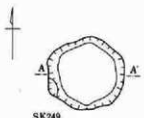


- 1 黒褐色土 (ローム粒多く混入、やや粗粒)
- 2 暗茶褐色土 (粗粒、締まり良好)

- 1 黒色土 (ローム粒微量含み、締まりあり)
- 2 暗茶褐色土 (ローム粒多く、締まりあり)

SD58

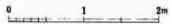
- 1 暗茶褐色土 (粗粒、締まり弱い)
- 2 " (黒色味強い、締まり弱い)
- 3 " (ローム粒多く、締まりあり)
- 4 " (茶褐色土ブロック多い)



- 1 黒褐色土 (ローム、炭化物粒少量含む、やや粗粒、締まりあり)

- 1 黒褐色土 (ローム粒微量含み、締まりあり、粗粒)

- 1 黒褐色土 (粗粒、炭化物粒を少量含む)
- 2 " (1層に比してやや明るい)

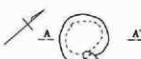




SK252



- 1 黒褐色土
- 2 # (1層に比してやや明るい)
- 3 暗黒褐色土(やや茶色味帯びる)
- 4 暗黄褐色土(ローム多く、締まり弱い)



SK266



- 1 黒褐色土(粘土粒を少量含む)
- 2 # (1層に比してやや暗い)
- 3 # (締まり、粘性強い)



SK269



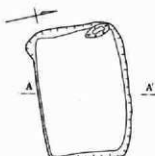
- 1 黒褐色土(粘土粒を多量に含む)
- 2 # (1層に似るも、粘土粒含まず)
- 3 # (2層に似るも、締まりやや弱い)
- 4 茶褐色土(大粒の茶褐色土粒を多く含む、ぼそぼそ)



SK270



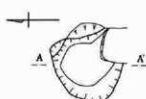
- 1 黒褐色土(ローム粒を少量含む)
- 2 暗褐色土
- 3 # (2層に比してやや暗い)
- 4 茶褐色土(ローム粒多い)
- 5 # (ローム粒多く、ロームブロックを少し含む)



SK271



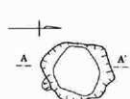
- 1 黒褐色土(ローム粒を少量含む、締まり、粘性強い)



SK272



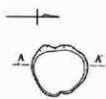
- 1 暗茶褐色土(締まりあり)
- 2 黒褐色土(ローム粒を少量含む)



SK273



- 1 茶褐色土(ローム粒を少量含む)
- 2 暗褐色土(粘土、炭化物を含む)
- 3 # ()
- 4 茶褐色土(2,3層に比して粘土粒少ない)
- 5 # (4層に比してやや暗い、粘土粒含まない)



SK281



- 1 茶褐色土(粗粒、締まり弱い)
- 2 暗茶褐色土(ローム粒多く含む、締まりあり)
- 3 黄茶褐色土(締まり、粘性良好)



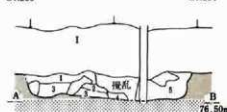
SK282



- 1 褐色土(粗粒、締まり弱い)
- 2 茶褐色土(粗粒、ローム粒少ない)
- 3 暗茶褐色土(粗粒、ローム粒少量含む)
- 4 # (ローム粒を少量含む、締まり強い)
- 5 茶褐色土(ブロック状、締まり強い)
- 6 黄茶褐色土(ローム多く含む、ブロック)
- 7 茶褐色土[P-1, 2層に似る、粘性強い]
- 8 暗茶褐色土()
- 9 暗黄褐色土[P-1, ロームブロック、締まり強い]
- 10 茶褐色土(黒色味やや強い、ローム土塊状に含む)
- 11 暗黄褐色土(# , ロームブロック)
- 12 暗茶褐色土(#)



SK283



SK283増植土

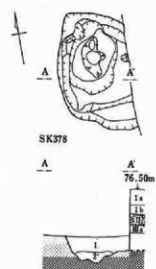
- 1 黒褐色土(ローム、茶褐色土を少量含む)
- 2 # (1層に似る、締まりやや弱い)
- 3 茶褐色土(ローム、茶褐色土を多く含む)

SK284増植土

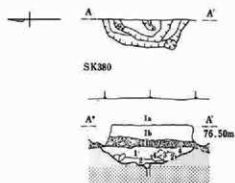
- 4 暗茶褐色土(ローム、茶褐色土を少量含む)
- 5 黒褐色土(黒色味やや強い、ローム粒を少量含む)



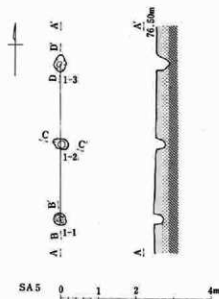
図面68 SK378・380土坑, SA5柱列跡, SX6道路状遺構実測図



- 1 黒褐色土 (ローム粒微量含む, 締まりやや弱い)
- 2 暗茶褐色土 (ローム粒やや多く含む, 締まり1層に比してややあり)



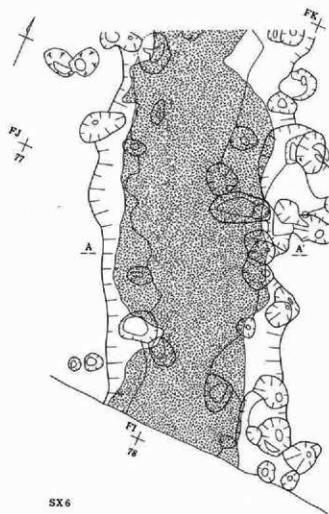
- 1 黒褐色土 (ローム細粒を多く含む, 締まりあり)
- 2 # (ローム細粒を少量含む, 締まりあり)
- 3 暗茶褐色土 (茶褐色土+黒色土)
- 4 黒褐色土 (ローム細粒を1層より多く含む, 締まりあり)



- SA5 0 1 2 4m
-
- 1-1 黒褐色土 (細粒, 締まりあり)
 - 2 黒色土 (固く締まる)
 - 3 茶褐色土 (固く締まる)

-
- 1-2 黒褐色土 (細粒, 締まりあり)
 - 2 # (黒色味, 締まり共1層よりあり)

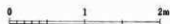
-
- 1-3 黒褐色土 (細粒, 締まりあり)
 - 2 # (細粒, 黒色味あり)
 - 3 # (茶褐色土粒含む, やや褐色味を帯びる)



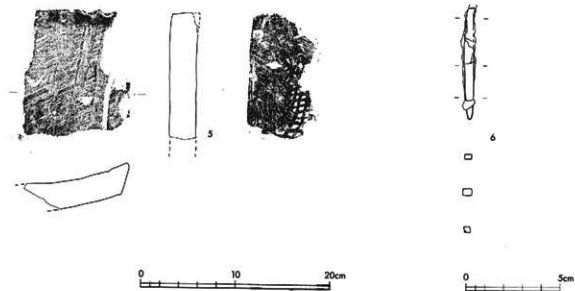
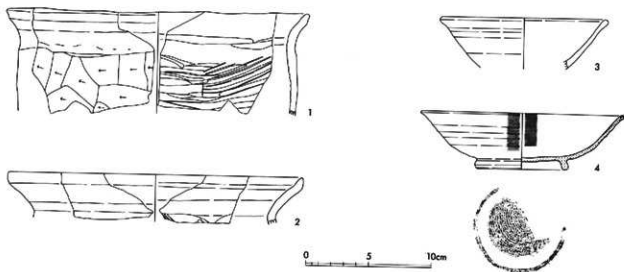
SX6



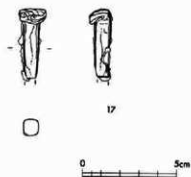
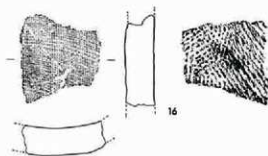
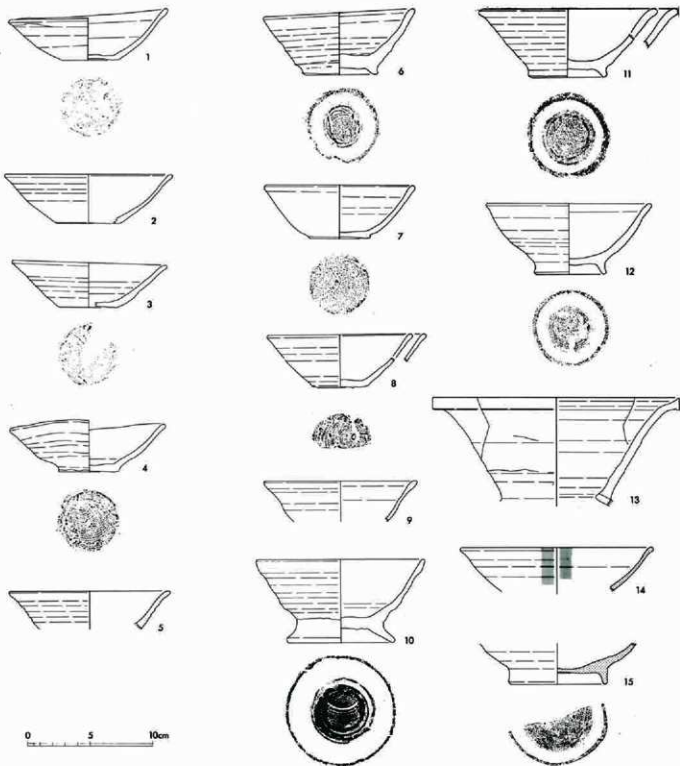
- SX6構築土
- 1 黒褐色土 (やや茶褐色味帯びる, 固く締まる, 乾燥するとぼろぼろになる)
 - 2 茶褐色土 (締まりあるも1層に比して劣る, 粒子緻密)
 - a 遺構下検出の小穴



図面69 S I 147住居跡出土遺物



圖面70 S I 148住居跡出土遺物



圖面71 S I 152住居跡出土遺物

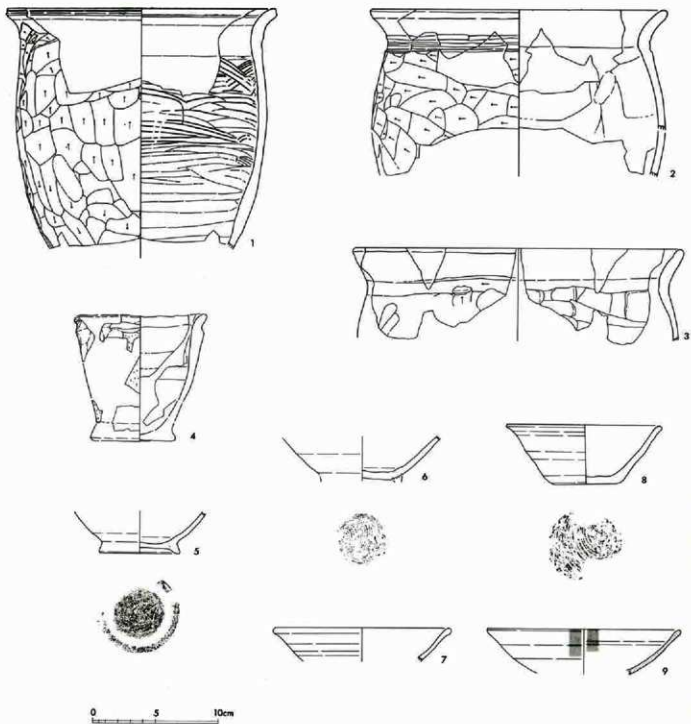
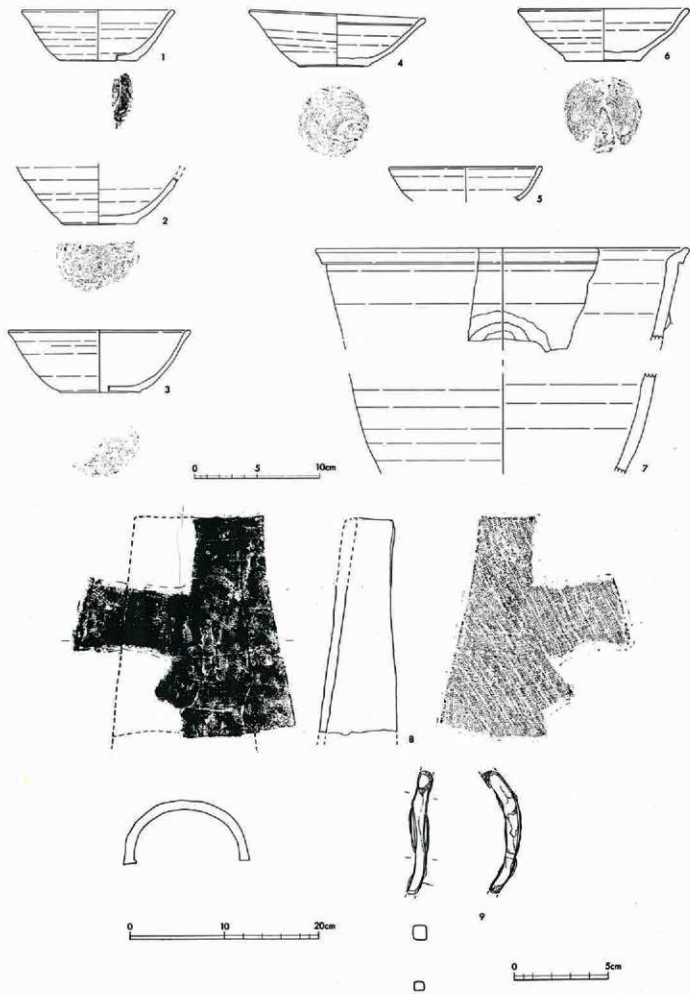


圖72 S I 195住居跡出土遺物



圖面73 S I 195住居跡出土遺物

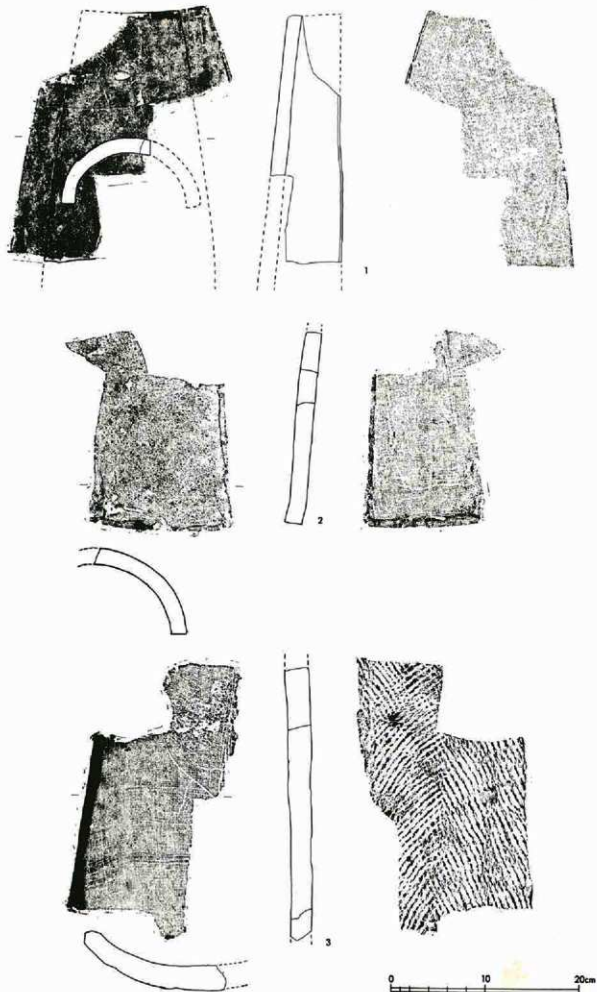
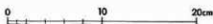
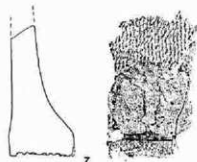
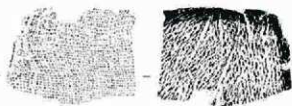


圖74 S D57溝跡, S K251土坑, S X6道路狀遺構,
P-355・403・863出土遺物



圖面75 遺構外出土遺物(1)

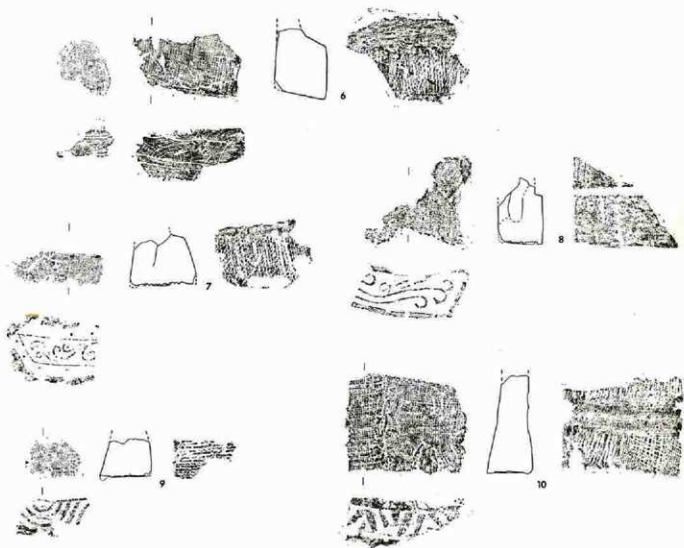
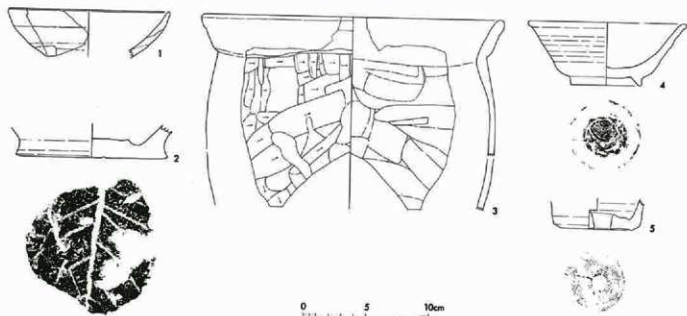


圖78 遺構外出土遺物(2)

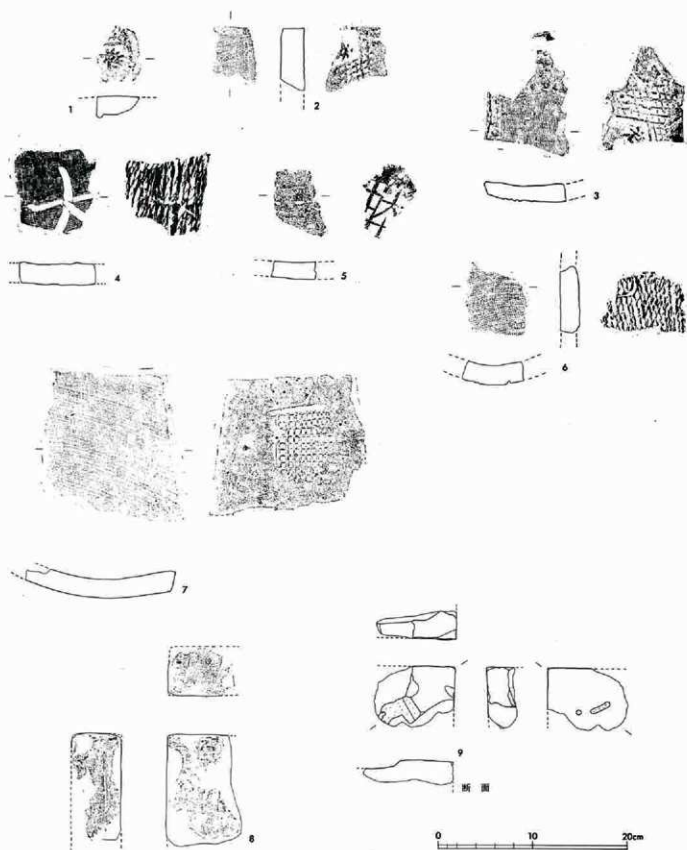


圖 版



1. 調査地区遠景 (西方市立四小屋上から)



2. 発掘着手時状況 (東から)



3. 土層断面 (FT81, 82区北壁, 上より Ia, Ib, II, IIIa, IIIb, IIIc, 層)

図版 2 発掘状況



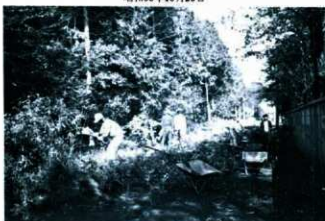
1. 建物部分、表土 排土、遺構検出 (南から)
昭和52年10月20日



5. 建物部分、先土器時代 発掘 (西から)
昭和53年10月26日



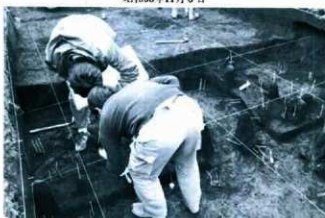
2. 建物部分、歴史時代 住居跡(SII147) 発掘 (北から)
昭和52年11月7日



6. 道路部分、草かり (南から)
昭和53年11月6日



3. 建物部分、縄文遺物 包含層 発掘 (南から)
昭和53年3月31日



7. 道路部分、歴史時代 住居跡遺物実測 (北から)
昭和53年12月14日



4. 建物部分、縄文時代 遺構(SK300)、発掘 (西から)
昭和53年8月30日



8. 浄化槽部分、縄文時代遺物分布層発掘 (北から)
昭和54年5月17日



1. 建物部全景（西から）



2. 浄化槽部分全景（南から）



3. 建物部分，PC区西小区南壁
土層断面（北から）

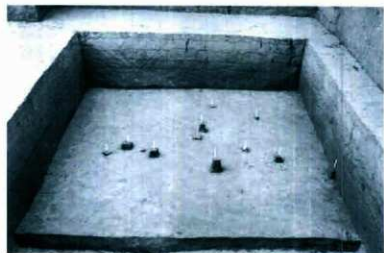
図版4 先土器時代石器集中地点



1. 第1文化層 尖頭器出土状態(北から)



2. 第2文化層 全景(南から)



3. 第3文化層 全景(南から)

図版5 先土器時代，炭化物集中地点



1. PW区C-1 (北から)



2. PC区C-5 (北から)



3. PW区C-9, C-10 (手前) (北から)



4. PW区C-10断面 (南から)

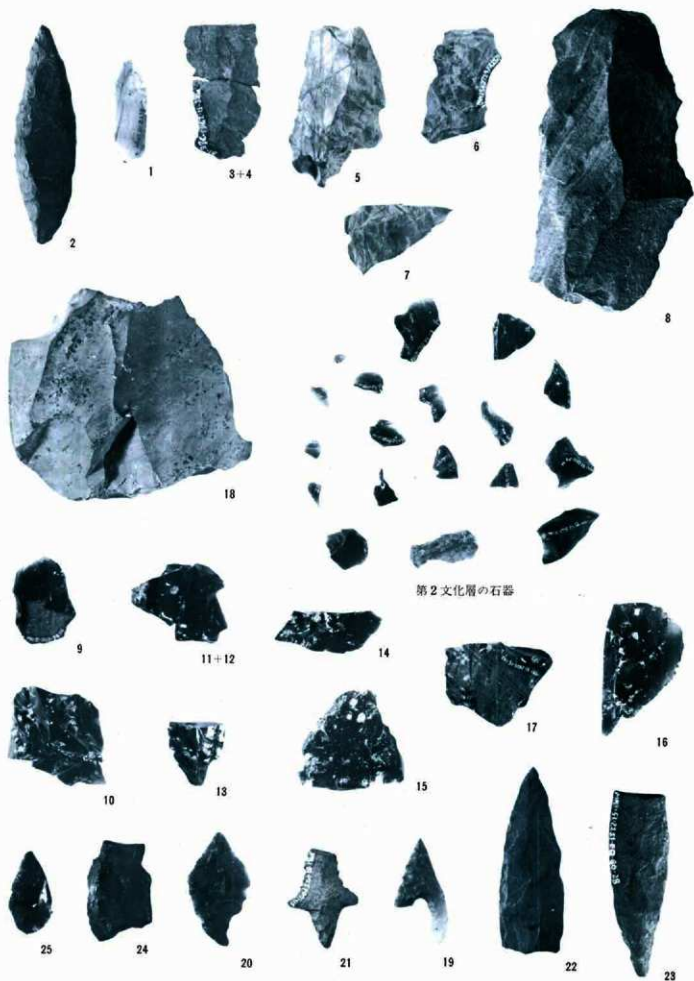


5. PE区C-18 (西から)



6. PS区C-30 (東から)

図版6 先土器時代，縄文時代草創期の石器



図版7 縄文時代、調査区全景 (IV層上面) 建物部分



1. 西側北区 (南から)



2. 中央北区 (南から)



3. 東側北区 (南から)

図版 8 縄文時代，調査区全景（IV層上面）



1. 道路部分（北から）



2. 道路部分（南から）



3. 浄化槽部分（東から）



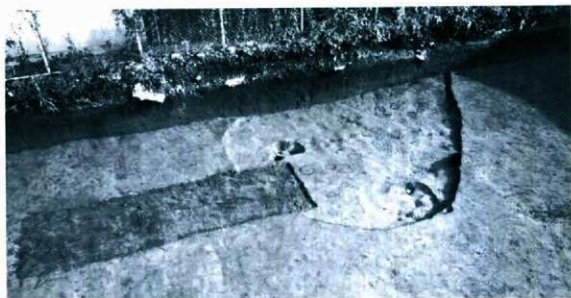
1. FI~FK・69~71区SS8・9周辺(東から)



2. FS・FT, 78~80区(6群土器集中地点)(東から)



3. GA~GI88・89区(道路部分南北)(南から)



1. 全景（北から）



2. 全景（西から）



3. 遺物出土状態（北から）



1. 全景 (西から)



2. 埋裏1全景 (東から)



3. 埋裏1断面



4. 打製・石斧集中部分 (西から)

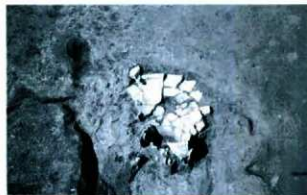


5. 南北部分 (東から)

図版12 埋篋、遺物集中地点



1. 埋篋2 全景 (北から)



2. 埋篋2 全景 (東から)



3. FO-FQ-68~70区, 遺物集中地点 (西から)



4. FO-FQ-68~70区, 遺物集中地点 (北から)

図版18 SS3～5集石



1. SS3～5全景(右から3・4・5)(東から)



2. SS3～5全景(手前から3・4・5)(北から)



3. SS3断面(北から)



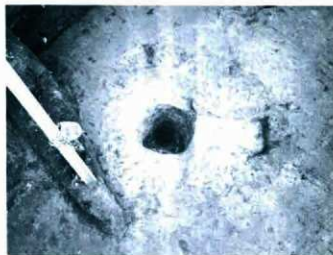
4. SS3下落ち込み(東から)



5. SS4全景(東から)



6. SS4断面(南から)



1. SS4下落ち込み(南から)



2. SS5全景(東から)



3. SS5下落ち込み(東から)



4. SS6全景(西から)



5. SS7全景(北から)



6. SS7断面(東から)



1. SS7下落ち込み (東から)



2. SS8全景 (西から)



3. SS8断面 (東から)



4. SS8下落ち込み



5. SS9全景 (西から)



6. SS9粗大礫配石状態 (東から)



1. SS9断面(西から)



2. SS9下落ち込み(南から)



3. SS10全景断面(東から)



4. SS10断面(東から)



5. SS10下落ち込み(東から)



6. SS11全景(北から)



1. SS11断面 (西から)



2. SS11下落ち込み (西から)



3. SS12全景 (南から串は炭化物粒)



4. SS12全景 (東から)



5. SS12東西土層断面 (南から)



6. SS12集石下土坑 (東から)



1. SK293 全景 (東から)



2. SK293 土層断面 (東から)



3. SK294・296 全景 (北から)



4. SK294・296 土層断面 (北から)



5. SK295 全景 (北から)



6. SK295 土層断面 (北から)



7. SK297・302 全景 (東から手前302)



8. SK297・302 土層断面 (南から)



1. SK323 全景 (南東から)



2. SK323 土層断面 (南西から)



3. SK298 全景 (南から)



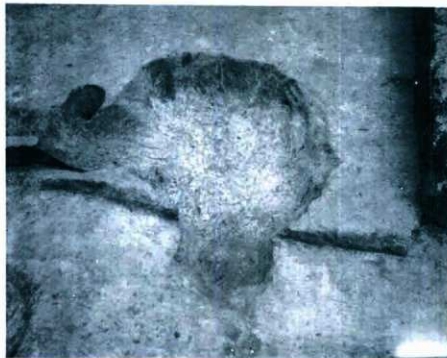
4. SK298 土層断面 (南から)



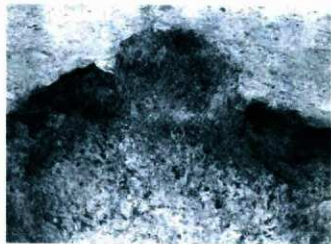
5. SK299 全景 (北から)



6. SK299 土層断面 (東から)



1. 全景 (北から)



2. 北側炉部 全景 (南から)



3. 東側炉部 全景 (西から)



4. 遺物出土状態 (西から)



5. 東西土層断面 (南から)



1. SK301 全景 (南から)



2. SK301 土層断面 (南から)



3. SK324 全景 (北から)



4. SK324 全景 (東から)



5. SK324 土層断面 (南から)



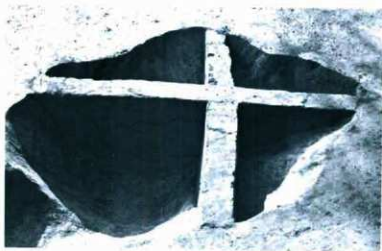
1. SK325 全景 (北から)



2. SK325 土層断面 (西から)



3. SK326 全景 (東から)



4. SK326 土層断面 (東から)



5. SK327 全景 (南から)



6. SK327 土層断面 (西から)



1. SK341 全景 (南から)



2. SK341 土層断面 (東から)



3. SK342 全景 (東から)



4. SK342 土層断面 (西から)



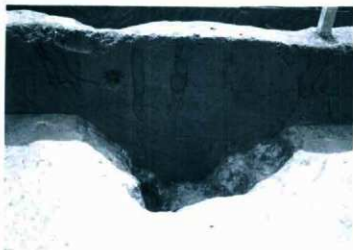
5. SK343 全景 (北から)



6. SK343 土層断面 (西から)



1. SK344 全景 (北から)



2. SK344 土層断面 (北から)



3. SK379 全景 (東から)



4. SK379 土層断面 (東から)

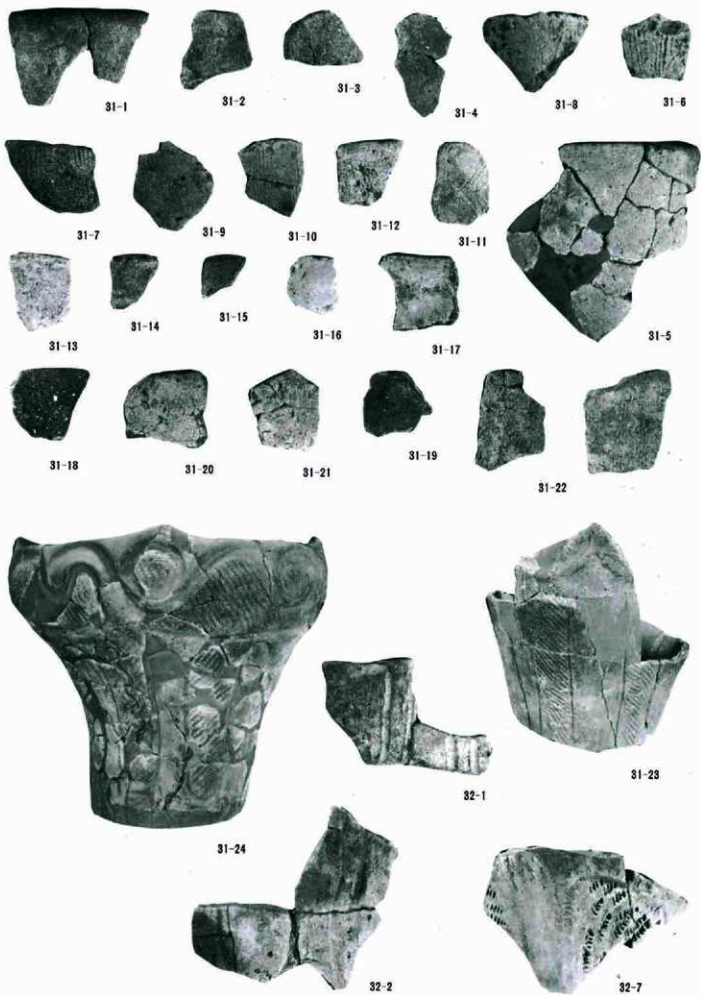


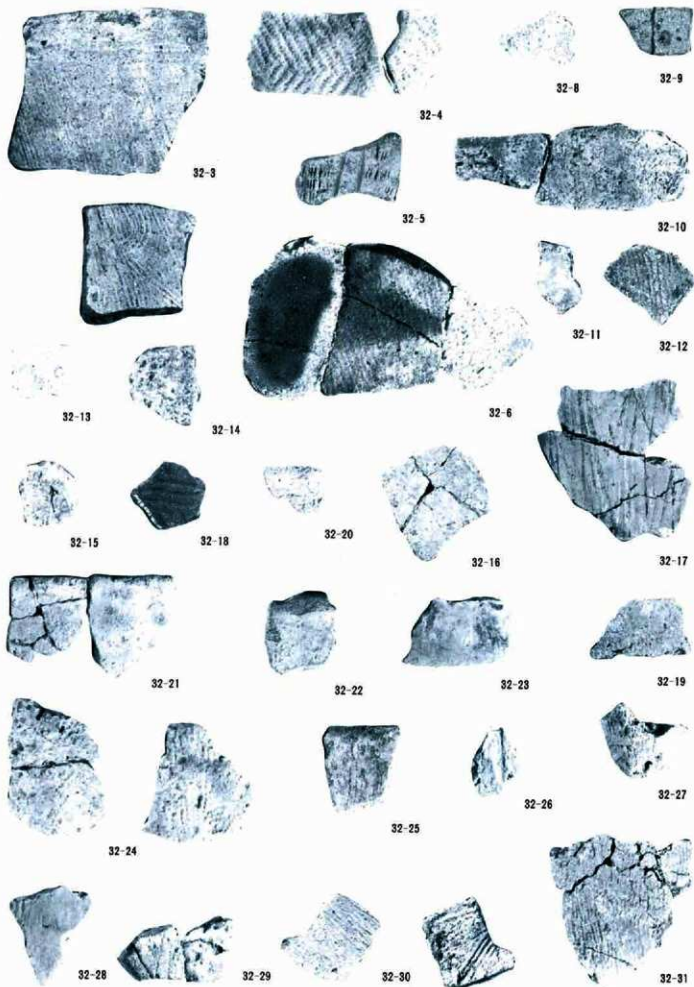
5. PJ-6 土層断面 (東から)



6. PJ-6 炭化物検出状態 (東から)

图版25 S1171 住居跡, SS2配石跡出土土器





图版27 FO~FQ-68~70区遗物集中地点出土土器



33-1



33-2



33-3



33-4



33-8



33-8



33-5



33-8



33-8

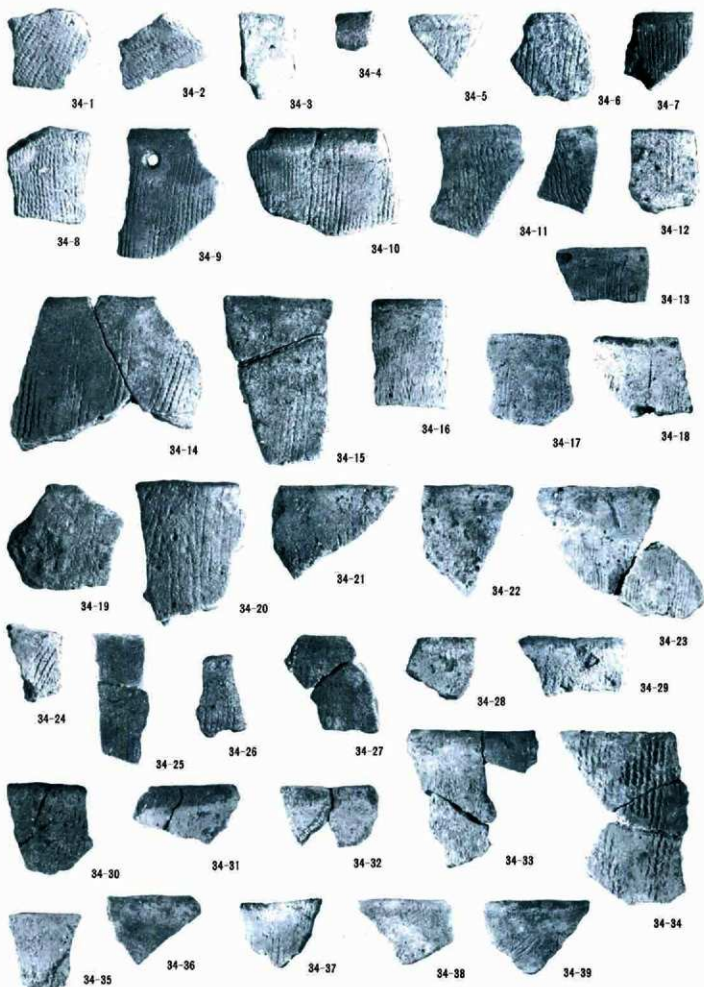


33-6

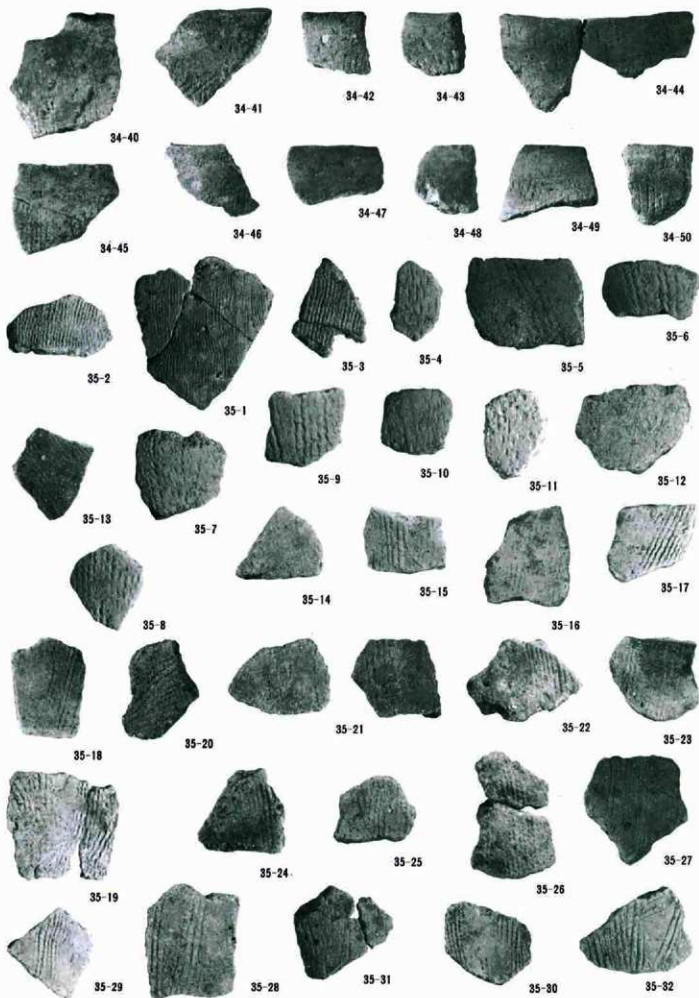


33-7

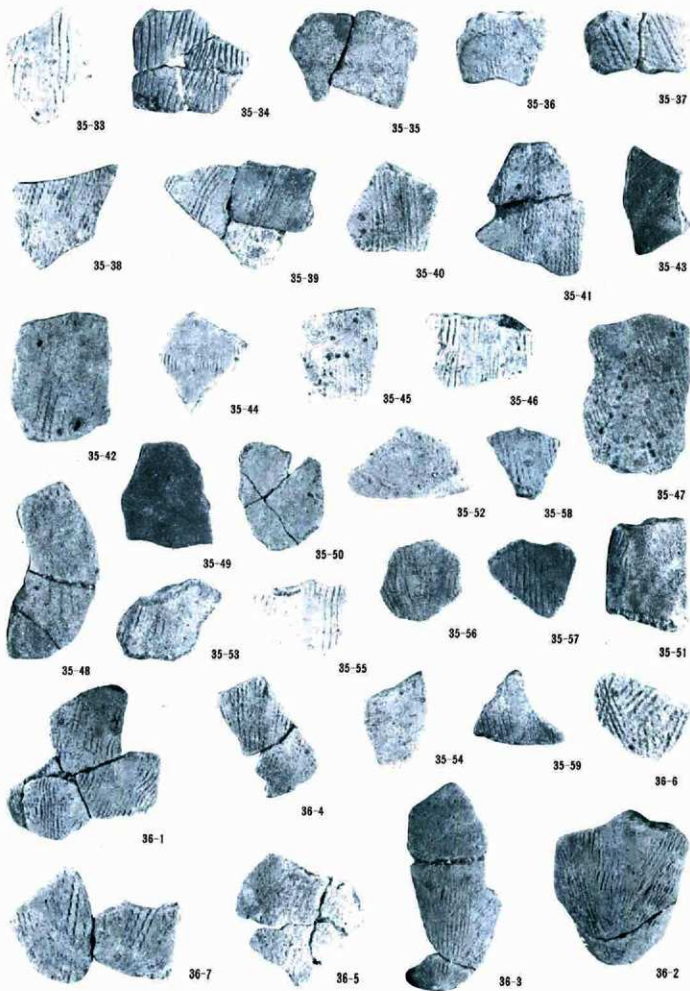
图版28 遼南外出土土器(1) 1群(早期燕系文系)



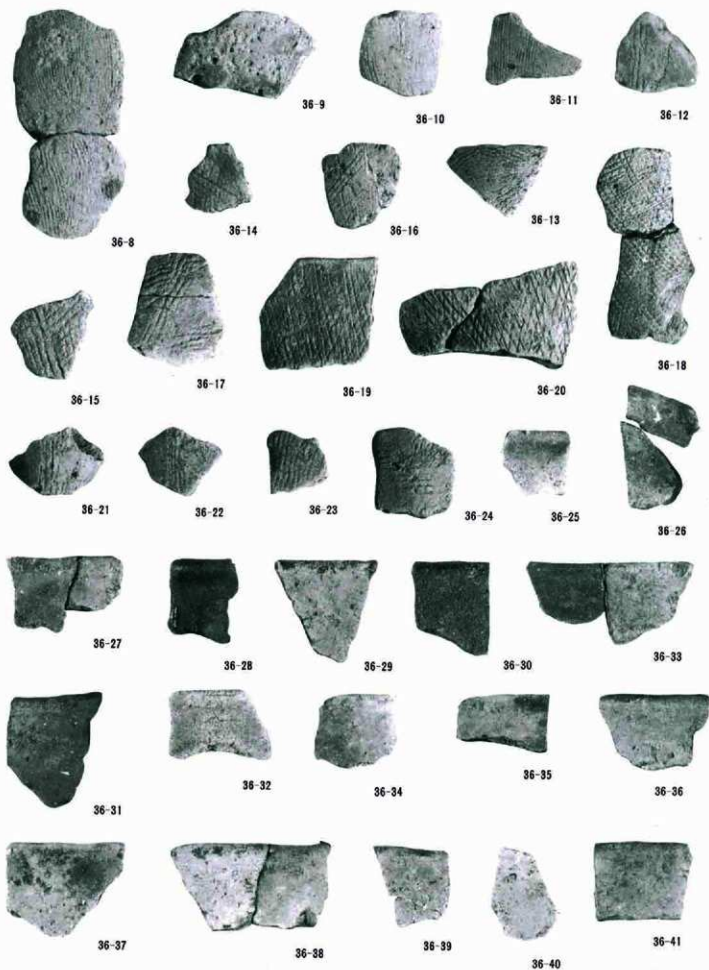
图版29 遼寧外出土土器(2) 1群(早期燕系文系)



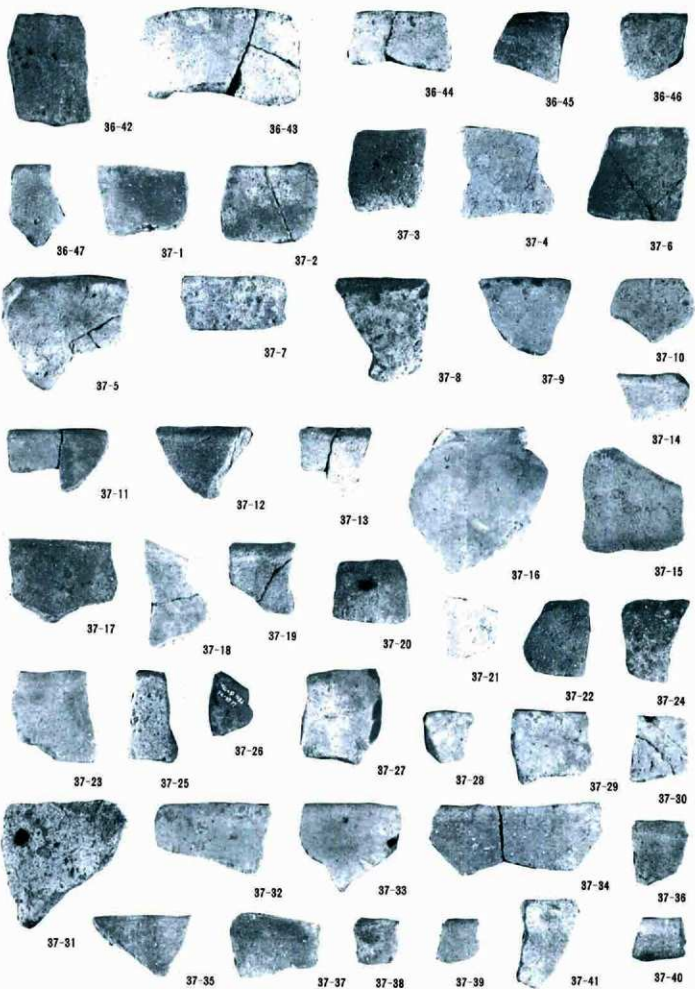
図版30 遺構外出土土器(3) 1群(早期燃糸文系)



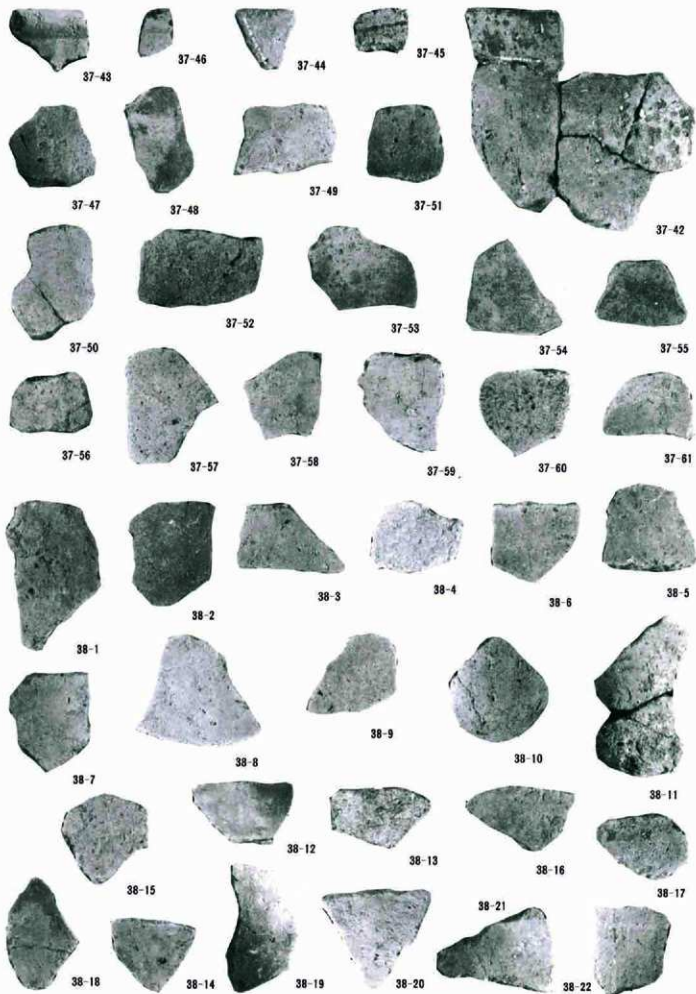
图版31 遗構外出土土器(4) 1群(早期燃糸文系)



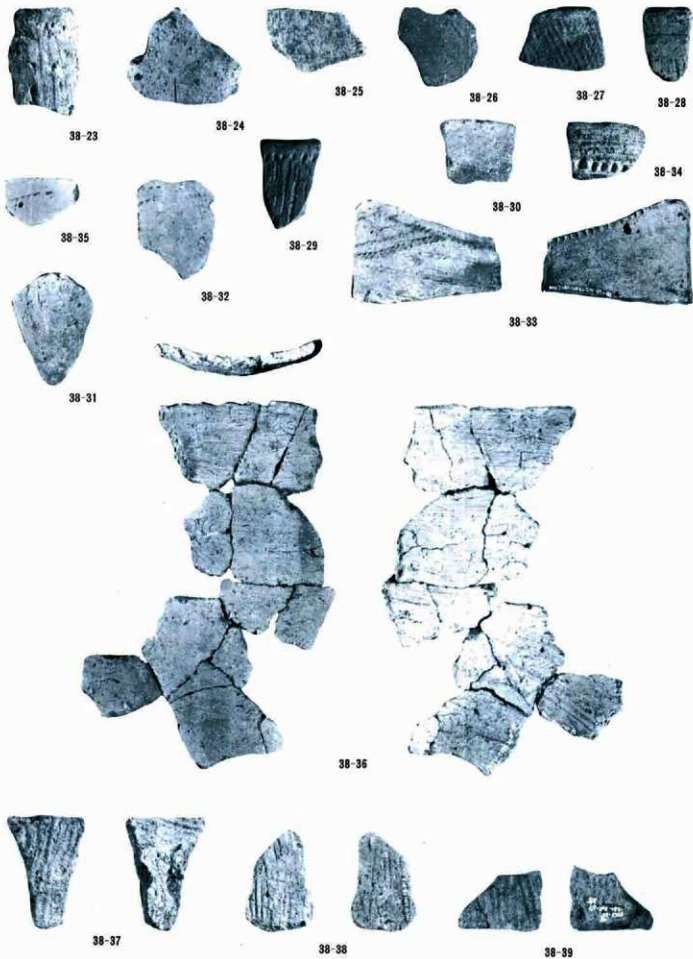
图版32 道沟外出土土器(5) 1群(早期燕文系)



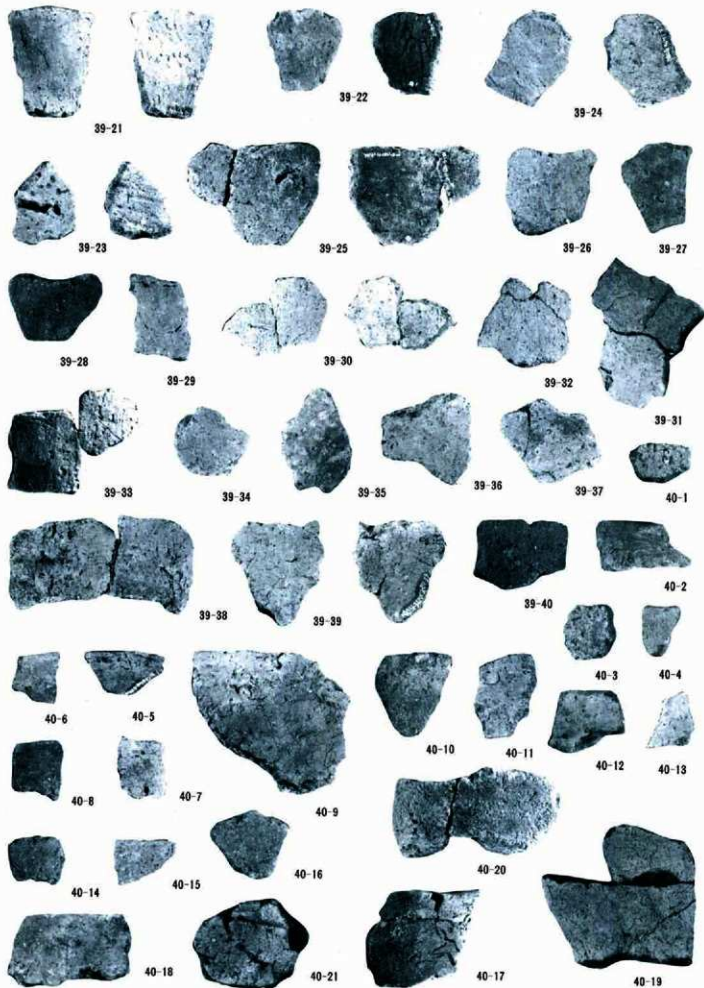
图版33 遗物出土土器(6) I群(早期黑米文系)



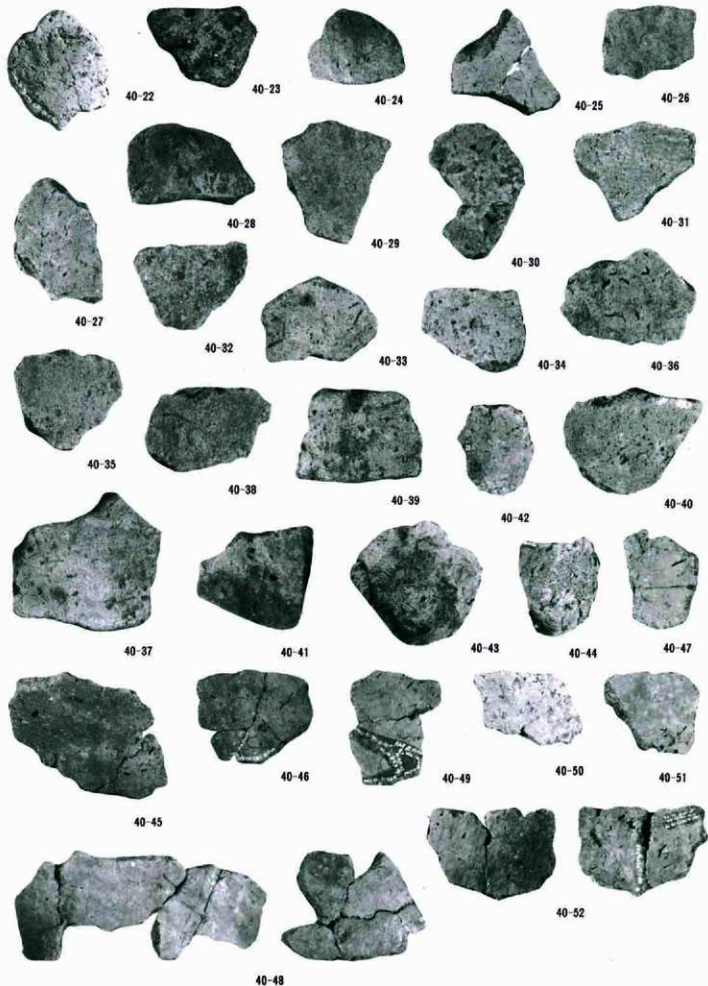
图版34 遗物出土土器 (7) 1群(早期捺糸文系), 2群(同押型文系), 3群(同沈線文系), 4群(同条痕文系)



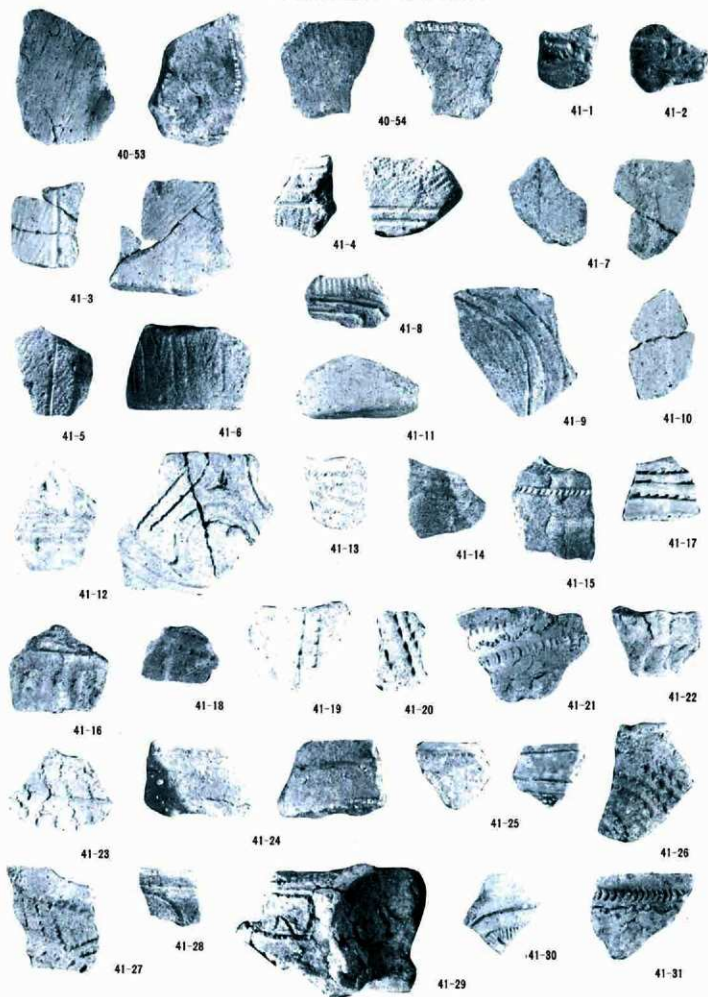
图版36 遗物外出土土器(9) 4群(早期条痕文系)



圖版37 遺構外出土土器 10 4 群 (早期条痕文系)



图版38 遗物出土土器 (1) 4群 (早期条痕文系), 5群 (中期前半)



図版39 遺構外出土土器 (2) 5群 (中期前半), 6群 (同後半)



41-32



41-33



41-33



41-33



41-34



41-35



41-38



41-36



41-37



41-39



42-1



42-2



42-3



42-4



42-4



42-5



42-4



42-4

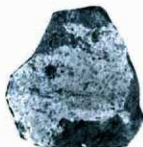


42-5

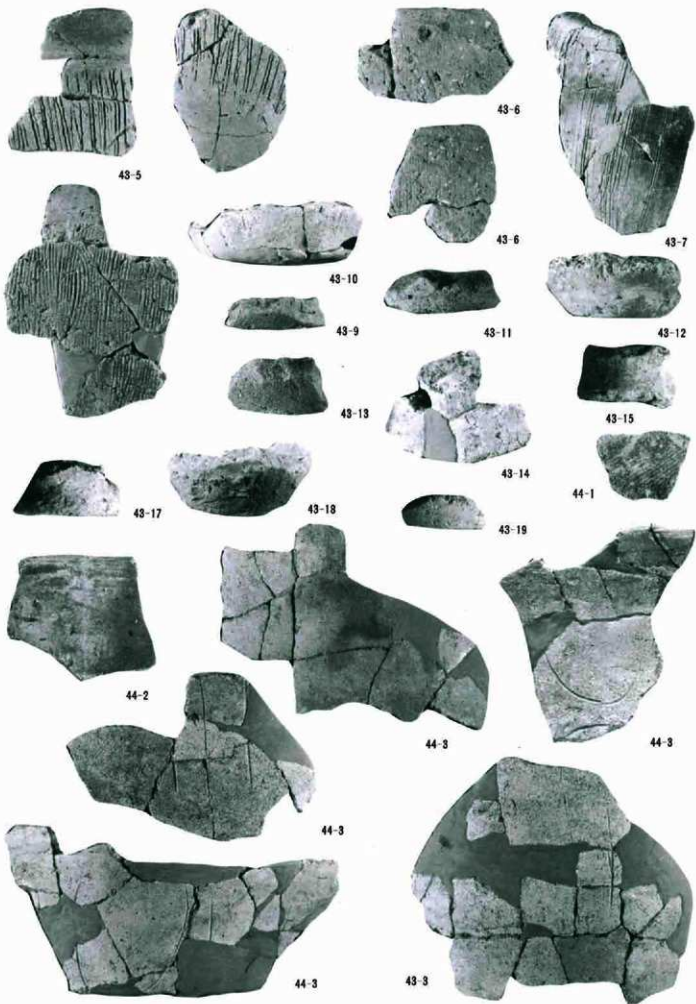


42-4

図版40 遺構外出土土器 ⑬ 6群 (中期後半)



図版41 遺構外出土土器 ④ 6群(中期後半), 7群(後期)



图版43 遺構外出土土器 (6 8群 (不明), 土製円板



45-16



45-17



45-18



45-19



45-20



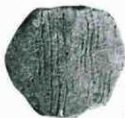
45-28



45-23



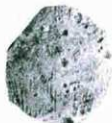
45-22



45-24



45-26



45-25

圖版44 S1171住居跡, SS2配石跡出土石器



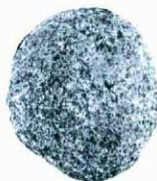
46-1



46-2



46-3



46-4



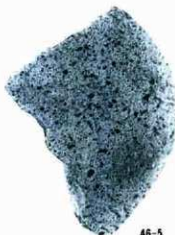
46-6



46-7



46-8



46-5



46-9



46-10



46-11



46-12



46-13



46-14



46-15



46-17



46-19

図版45 SS2配石跡, SS6~9集石出土石器



46-16



46-18



47-1



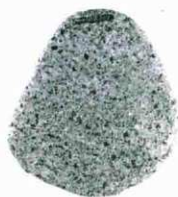
47-5



47-2



47-3



47-4



47-6



47-7



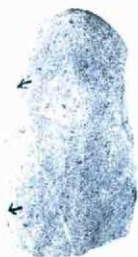
47-8



47-10



47-11



47-9



48-6



48-4



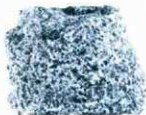
47-12



48-1



48-2



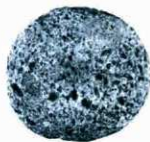
48-5



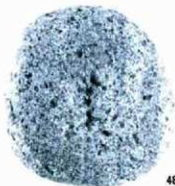
48-3



48-7



48-8



48-10



48-9

图版47 遗構外出土石器 (1) 石鏃, 打製石斧, 局部磨製石斧, 礮器



49-1



49-2



49-3



49-4



49-5



49-6



49-7



49-8



49-9



49-10



49-11



49-14



49-12



49-13



49-15



49-23



49-16



49-17



49-18



49-20



49-19



49-21



49-22



49-25



49-24



50-1



50-2



50-3



50-4



50-5



50-6



50-7



50-8



50-9



50-10



50-11



50-12



50-13



50-14



50-15

図版49 遺構外出土石器(3) 打製石斧, 磨製石斧, 礮器, 攪器, 磨石



50-16



50-17



50-18



50-19



50-20



50-21



50-23



50-24



50-25



51-1



50-22



51-4



51-2



51-6



51-8



51-7

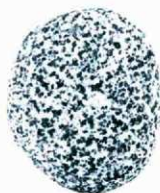


51-3



51-5

图版50 遗物外出土石器(4) 磨石, 凹石, 敲石



51-10



51-11



51-12



51-14



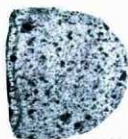
52-1



51-9



51-13



52-3



52-2



52-4



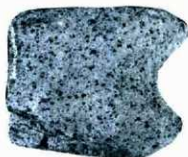
52-8



52-5



52-6



52-7



52-9



52-10

図版51 遺構外出土石器(5) スタンプ形石器



52-12



52-13



52-11



52-14



52-15



53-2



53-1



53-3



53-4



53-5



53-9



53-7



53-6



54-1



53-8



53-10



54-12



54-3



54-2



54-7



54-4



54-5



54-8



54-6



54-9



54-11



54-10



55-2



55-1



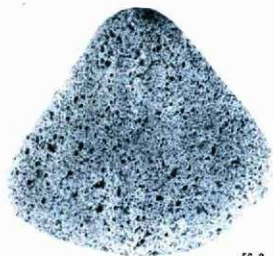
55-3



55-4



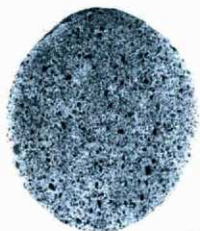
55-6



56-2



56-1



55-5



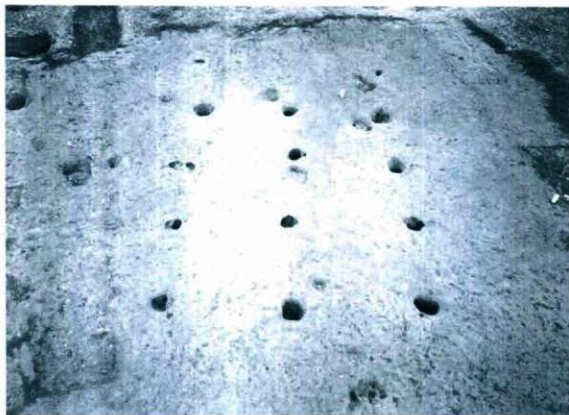
56-3



1. 建物部分（東から）



2. 道路部分（南から）



1. SB47 全景 (西から)



2. SB48 全景 (北から)



1. SB49



2. SB49 1-3柱穴
土層断面(東から)



3. SB50 全景(西から)



1. 全 景 (南から)



2. 構築時全景 (南から)



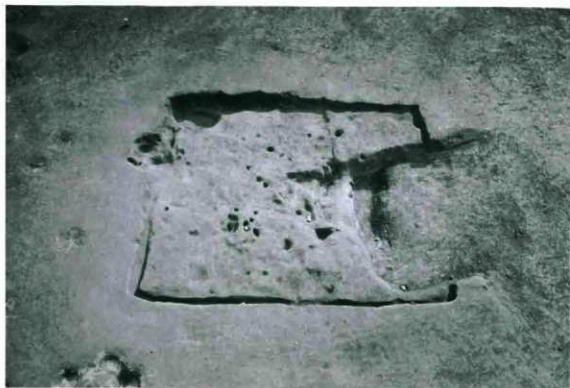
3. 遺物出土状態 (北から)



4. 南北土層断面 (東から)



5. カマド全景 (東から)



1. 全 景 (北から)



2. 全景 (南から、環状焼土帯除去前)



3. 南北土層断面 (東から)



4. カマド全景 (西から)



5. カマド東西土層断面 (北から)



1. 全景（東から）



2. 構築時全景（東から）



3. 南北土層断面（東から）



4. カマド全景（西から）



5. カマド東西土層断面（南から）



1. 全 景 (北から)



2. 構築時全景 (北から)



3. 南北土層断面 (東から)



4. 遺物出土状態 (南から)



5. 入口部, 南北土層断面 (東から)



1. SD57 部分 (東から)



2. SD57 南北土層断面 (東から)



3. SD58 全景 (東から)



4. SD58 南北土層断面 (東から)



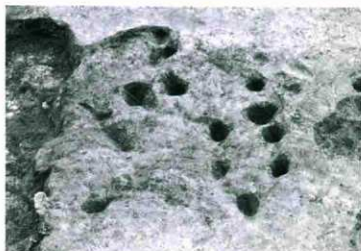
1. SK247 全景 (南から)



2. SK248 全景 (南から)



3. SK249 全景 (南から)



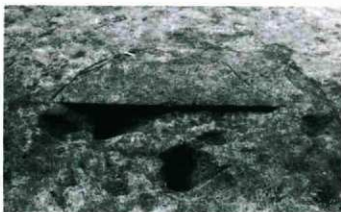
4. SK250 全景 (南から)



5. SK251 南北土層断面 (東から)



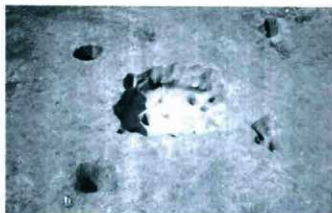
6. SK252 東西土層断面 (北から)



7. SK268 南北土層断面 (東から)



8. SK269 全景 (東から)



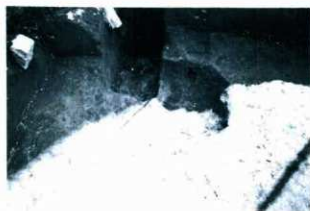
1. SK270 全景 (東から)



2. SK270 南北土層断面 (西から)



3. SK271 全景 (北から)



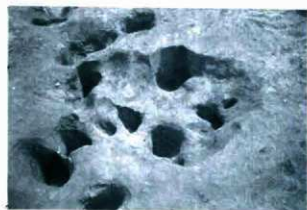
4. SK272 全景 (北から)



5. SK273 全景 (東から)



6. SK281 南北土層断面 (西から)



7. SK282 全景 (北から)



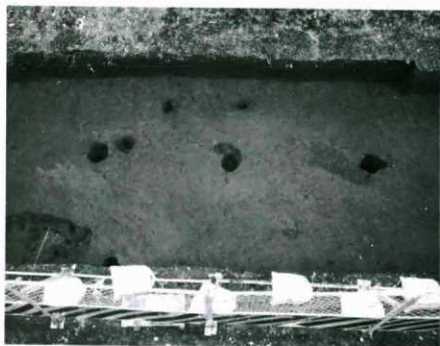
8. SK283, 284, 南北土層断面 (東から)



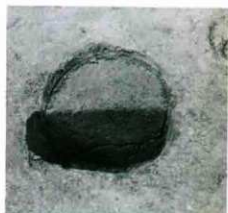
1. SK378 全景 (西から)



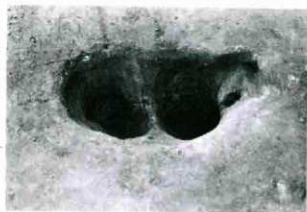
2. SK380 全景 (西から)



3. SA5 全景 (東から)



4. SA5 1-1 柱穴土層断面 (東から)



5. FR79区 P-355 (海蛞蝓殻出土小穴, 東から)



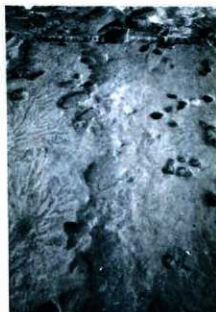
6. GR88区 焼土粒分布範囲 (北から)



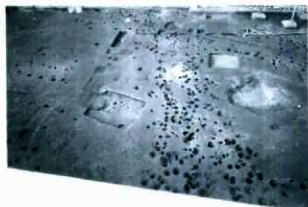
1. SX6 全景 (南から)



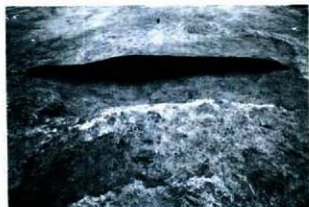
2. SX6 部分 (FP~FR75区, 南から)



3. SX6 構築時部分 (硬質土除去後
FP~FR75区, 南から)



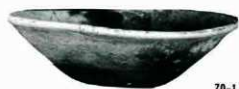
4. SX6 構築時全景 (硬質土除去後, 南から)



5. SX6 東西土層断面 (南から)



69-1



70-1



70-3



70-4



70-6



70-7



69-4



69-5



69-5 押型部分



69-6



70-10



70-11



70-12



70-15



70-16



70-17



71-1



71-6



71-4



71-8



71-2



72-2



72-3



72-4



72-6



72-8



73-1



73-2



73-3



73-9



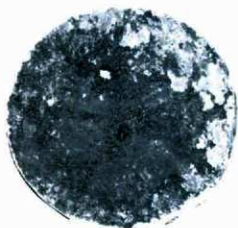
74-1



74-2



74-3



74-5 处理前



74-5 处理后



74-4



74-4 押印部分



74-7



74-6



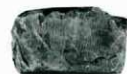
図版71 遺構外出土遺物 (1)



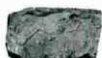
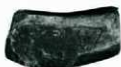
75-4



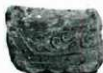
75-5



75-6



75-7



75-8



75-9



75-10



76-1



76-2



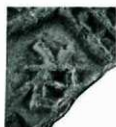
76-3



76-1 押印部分



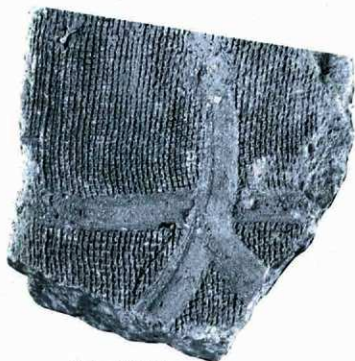
76-2 押印部分



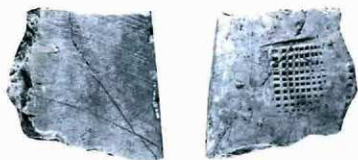
76-3 押印部分



76-4



76-4 ヘラ書き部分



76-7



76-9



76-5



76-5 押型部分



76-6



76-6 ヘラ書き部分

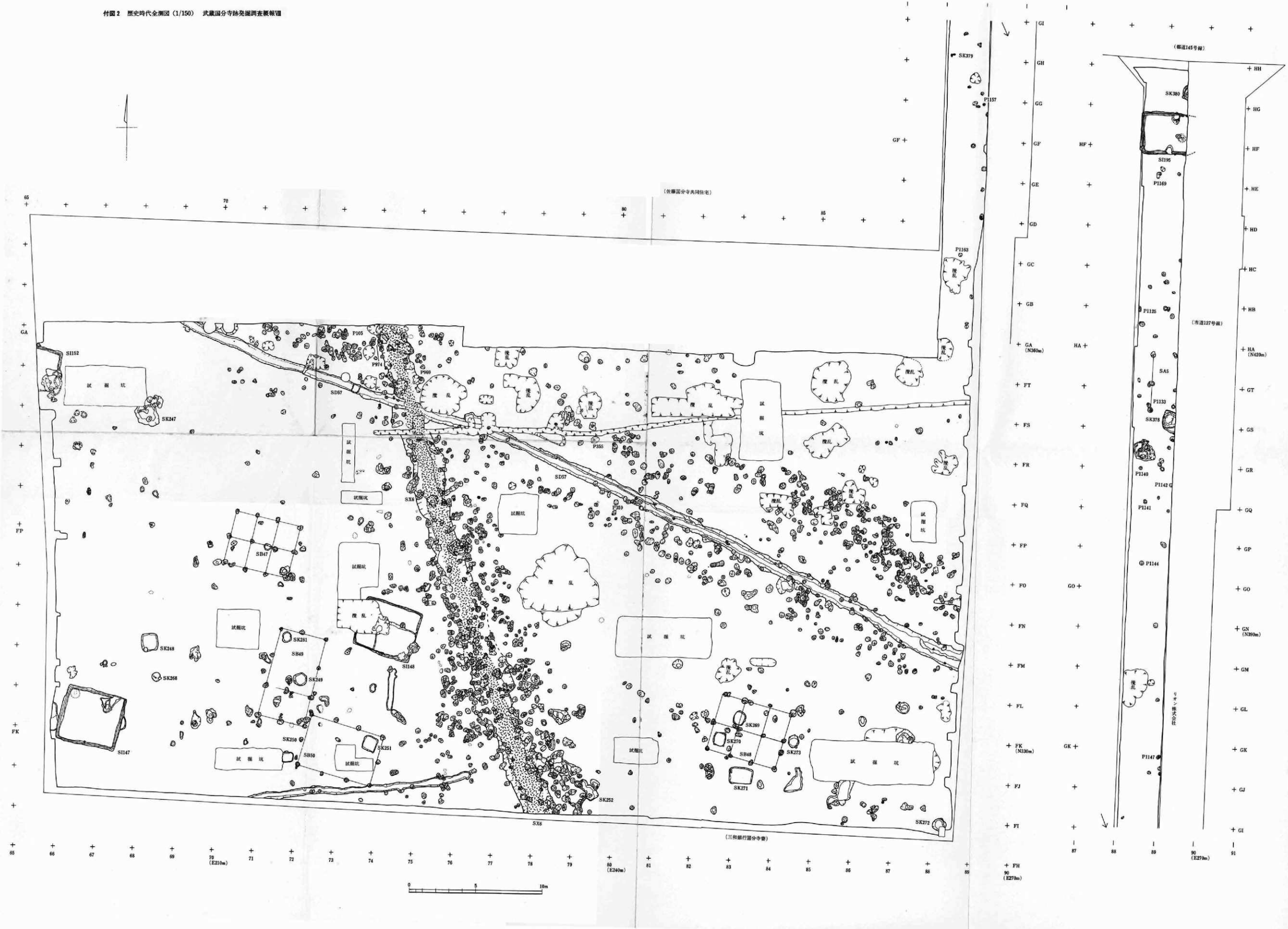


76-8



76-8 ヘラ書き部分

付圖2 歷史時代全圖 (1/150) 武藏國分寺跡發掘調査報告書



武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅷ

北方地区・国際電信電話株式
会社国分寺寮建設に伴う調査

発行日 昭和60年3月31日

編著者 武蔵国分寺遺跡調査団
© (団長 滝口 宏)

発行所 武蔵国分寺遺跡調査会
国分寺市戸倉1-6-1
国分寺市教育委員会内

印刷所 早稲田大学印刷所

令和4年(2022)2月2日 デジタル版作成